
現実発異世界方面行

浅葱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実発異世界方面行

【Nコード】

N7285V

【作者名】

浅葱

【あらすじ】

誤まって乗ってしまったバス。それは異世界へ向かう悪魔のバスだった。

所謂「遊戯王GX」トリップもの。見切り発車、不定期更新、低クオリティの三重苦でお送りします。

プロローグ（前書き）

処女作。亀更新の上に展開がかなり遅いと思われる。

遊戯王GXの時代ではなかったカードを使用するため、気になる方はブラウザバック推奨。

シンクロ、エクシーズは使えますが基本自重。

基本的にOCG準拠ですが、アニメやTFのオリカを使用するかも。TFキャラは出す予定。

また手探り状態での執筆なため、誤字脱字文法ミスはデフォルト、内容にも矛盾が生じるやもしれません。

主人公 一之瀬 彰
いちのせ あきら

主人公の名前なんてどうでもいいから前書きで紹介しときます。

プロローグ

「そのバス！ちょっと待ったあああああああああああああああああ
あああああつー！」

冷たい雨が降りしきる暗い夜道を、その雨音に負けぬよう叫びながら疾走する。

重い荷物を抱え、雨の中を走っているのだ。当然息も切れ切れ、傘も本来の機能をほとんど果たしておらず、体はただ雨にうたれるがままになっている。

僕がそんな状態を捨ておいても走っているのは至極簡単な理由、時間がないのだ。

ようやく目の前に視認できたバスが今にも発車しそうなのだ。

普段の僕は時間というものを大切にし、集合時間に遅れるなどといった失敗はしない。

特に今回などは地元を離れ、憧れである都会の高校へと進学するために一人暮らしを始める、その第一歩目なんだ。僕の人生で間違いなく上位にランクインする出来事に違いない。

事前の準備を怠るわけがないし、今日のタイムスケジュールだって完璧に計画したはずだった。

それなのに遅れた理由は単純。想定外のイレギュラー。

人間は古来より自然の力には敵わない。

随分と大袈裟なことを言ったが、つまりは僕の住んでいる地域周辺に局地的な豪雨が襲い、雷が落ち、我が家で停電が起きただけのこと。

そしてそれがちょうど僕が家を出ようとした時間帯に重なっただけのことだ。

畜生、石原 純めっ！朝の天気予報ではこんな雷雨が降るなんて聞いてないぞ！！

電力の復旧自体はすぐに行われた。それはいい、うん、それはいいんだよ。さすが日本人、仕事が早いね。

問題はそのわずかな時間に起きた悲劇なのだよ。

その時僕は出発前に最後の荷造り確認をしていたんだ。まあ荷造りといっても服やら生活用品は前日に発送済みなので、持っていくのは数日分の服といったお泊りセットの類のわけなんだけどね。

それともうひとつ、持っていないかなきゃならないものがあつたんだ。この話題について引つ張る必要もないからさらりと言うけどカードなんだよね。うん、遊戯王カード。

君たちも少年のころにやった事なかったかい？カードゲーム。

僕も周りの友達の影響で始めたんだけど、その魅力にどっぷり嵌まり、現在までに至るわけだ。

長年やっているということはその年月に比例して所有しているカー

ドも増加していく。

その結果が今日の前に散乱している大量のカード群なわけだが……。

すまない、僕としたことが焦って先走ってしまった。何が起きたか説明しよう。

停電 部屋真つ暗 僕パニック 何か蹴飛ばしたような？ 数分後

電力復旧 部屋が明るくなる 目の前に散らばる大量のカード 今

ココ！

うん、カードケース蹴飛ばしたみたいだ。わかるかい？わかってくれるかい？

例えるなら完成間近のドミノを誤って倒してしまった時のようなこの虚しさと切なさ、そして一抹の寂寥感を……。

「うわあ、やってしまった……」

それでも僕の所有しているカードの一部なのだけど……それでもひどい有様だ。

ほとんどのカードは前日他の荷物と一緒に送ったのだが、送りきれなかったのがこの床に散乱しているカードだ。わざわざ無駄な金払わずともこのくらいなら自分で持っていけると考えた三日前の自分を殴ってやりたい。

後悔後先立たず、覆水盆ケイスイに返らず……いや、この場合は水ではなくカードなのだから盆ケイスイに返せるか……ってこんな馬鹿なことを考

えている場合じゃない。

出発予定時刻までもう時間が無いし、さっさと片付けなきゃ。
なにより停電や豪雨で交通機関になんらかの影響が出ているかもしれない。

~~~~~

今回の引越越しの際、無駄な失費は避けるべきという方針の元に夜行バスを利用するという選択をとってしまったのは失敗だったかもしれない。

バスの停留所まで家から若干と評する以上の距離があるのだ。  
こんなことになるならば金を惜しまず新幹線でも利用すればよかった。

まあ結果論なのだけどね。豪雨やら停電やらが起きてカードばらまいて遅刻なんて予想できるはずもないし。

そんな益体も無いことを考えながら駆けること十分程、停留所手前まで来た僕の目に映ったのは今にも発車しそうなバスの姿。

周りに他の車両も見えないし、おそらくあれが僕の乗る予定のバスだろう。

「そのバス！ちょっと待ったあああああああああああああああああああ  
あああああっ！！」

こんな初めの一步で「僕の満喫一人暮らしライフ」が挫かれるなんて嫌だ。

スタートくらいは心地よくきりたいよ。

「お〜い！待ってくれえええええええええええええええええつ！！」

そんな僕の魂の叫びが聞こえたのか動き出したバスが停車する。

その様子に安堵しながらバスに駆けよると、ブザー音と共にドアが開き、中から赤毛の小柄な少女が出てきた。レディーススーツに洒落た帽子といった外見を見る限り社員さんなのかな？

どこか悪戯めいた猫のような感じのする子だ。

ただその帽子と肩から掛けているバッグに付いている禍々しい髑髏の装飾が気になるよ……。

うん、彼女の印象や雰囲気合っているのは認めるよ？認めるけど、少なくとも仕事着に付けるようなモノじゃないと思うんだよ僕は。

それにしてもこの子……どこかで見たことあるような……

そんなことを考えながら彼女の背を追いバスの中に乗車する。すぐに僕の背後でドアが閉まる合図のブザー音が鳴り、バスが発車した。僕まだ乗車券渡してないんだけど……

「えつとこれ乗車券です……」

とりあえず乗車券を渡そうとするが、彼女はそれを無視してどこぞの不思議な国のチシャ猫のようにニヤニヤ笑いながら僕を席に誘導する。

先ほど雨にうたれながら馬鹿みたいに叫んでいたことを笑われているのだろうか……。



恥ずかしい！！やはり女性に、よりもよって確実にかわいいと分類されるような女性に失態を見られるというのはこの年頃の男としてかなりキツイものがあるよ！！

その羞恥ゆえに僕は顔を俯け、席に座つたと同時に仕切りのカーテンを閉め、さらには茹った顔を隠すために座席に用意されていたブランケットを頭から被り、そのまま寝た。寝てしまった。

それゆえに僕は気が付けなかった。

例えば乗車客が自分以外誰もいないこと。

例えば運転席に誰もいなかったこと。

例えば母から自分の乗るバスは運行中止になったという旨のメールが来ていたこと。

そして行き先表示幕に書かれていたこと。

しっかり確認していればこう表記されていたはずだ

現実発異世界方面行

## プロローグ（後書き）

最初のタイトルは現実発魔界経由異世界方面行でしたが、読みにく  
い上に魔界というワードを上手く絡められずに現在のものに。

誤字や脱字、文法ミスは見つかり次第修正致しますのでご指摘くだ  
さいな。

第1話 おいでませ異世界(前書き)

原作組みとの会合はまだまだ遠い・・・

## 第1話 おいでませ異世界

「ハックションー!!」

くしゃみと共に目が覚める。

車内は空調設備が効いているのか過ごしやすい温度なのだけど、この寒気は……。

やはり昨日濡れた服のまま寝たのはまずかったか。

時刻を見ようと携帯電話を取り出したけど、液晶画面はただ黒く、眠気まなこの僕が映っているだけだ。

電池切れ？充電は昨日ちゃんとした覚えがあるんだけどなあ。

とりあえず起きよう。

仕切りのカーテンを開け、周りを見渡してみても初めて気付いたが僕以外誰もいないじゃないか。バスのエンジン音も聞こえないし振動もしていないということはもう目的地に到着したのだろうか。

道理で静かだと思った。

「とりあえず濡れた服を着替えますか……」

服を着替え終え、窓から外を眺めてみると、そこには特筆すべきこともない街並みが広がっている。まあ僕の地元よりはだいぶ栄えているようだけど。

どうやら駅前のロータリーに停車しているようだが、まだ朝早い時

間帯のためかほとんど人は見えない。せいぜい通勤中であろうスーツを着たサラリーマンがポツポツとみえるくらいだ。

やはり到着してはいるようだ。これはもう勝手に出て行ってよいのだろうか……。

あっ、そういや僕まだ乗車券渡してなかった。誰もいないしとりあえず運転席に置いておこう。事前にお金を払っているのだからいいよね？

荷物をまとめ外に出てみる。ずっと座っていたため背筋が痛い。とりあえず軽く背伸びでもしようかと若干目線を上げる

その時、目の前の駅名が目に入った。

『童実野駅』

………あれ？

いや、落ち着くんだ僕。

もう一度落ち着いて見てみよう。そうすればきっとそこには……

『童実野駅』

変わらない標識がそこにあった

どういふことだろう。

到着先は 駅のはずじゃなかったか。

まだ経路の途中なのではないのか？という考えに対して、僕の乗ったバスは 駅までの直行便だったはずということを思い出し、その可能性をすぐに否定する。

駅前にあった案内地図まで走り、現状把握に努める。

地図を見てもそこには見慣れぬ地名ばかり。分かったことは現在地が童実野町であるということと、とある企業の本社があるということだ。

童実野町なんて聞いたことないよ。いや、聞いたことはあるがそれは漫画の中のことであって現実のことじゃない。

ましてや案内図に表記されていたKC本社っていうのも海馬コーポレーションの略称なわけがないじゃないk・・・

自分の考えに呆れながら天を仰いだ時に見てしまった。

でかかど宣伝されている海馬ランドなるテーマパークの広告板を。

マジですか・・・。

フリーズ

再起動までしばらくお待ちください。

~~~~~

やあただいま、みんな。

混乱の渦中から戻ってきたよ。
いや、まだ混乱しているんだがいかんせん行動しなければ現状は打
開できない。

とりあえずバスだ！バスに戻ろう！

あのバスに乗ってここまで来たのだから、帰ることもできるはずだ。
そう考え、バスが停車している方向に振り返り僕はまた固まってし
まった。

バスがいない

これはいったいどういうことなんだ……。

僕の現在地とバスの停車位置はそれほど離れていない。

せいぜい20メートル程度だったはずだ。

誰かがバスに近づいたならば気配でわかると思うし、なによりエン
ジン音で気づけるはずだ。

しかし現在、どんなに目を見開こうともそこにバスの姿はない。

周囲を見渡してもその影すら見つからない。

オワタ。もう無理です。僕にはなんの解決策も思い浮かびません。
完全に詰みました。

その場で呆然と立ち尽くす。

増えてきた通勤中のサラリーマンらがそんな僕の様子を怪訝な顔で

見ている。

どうすればいい？どうすればいいんだ？

頭がごっちゃになってわけもわからず走り出す。

とにかくその場に居たくなかった。

周りの全てが僕には異物に見えた。

周りの全てが僕を異物だと見ていた。

そんな気がしたんだ。

だから逃げだしたんだ。

何から？

世界から？

逃げられないことなんて理解^{わか}っているのに。

~~~~~

気が付いたら公園のベンチに座っていた。

どうやって僕はここまで来たのだろうか。



どうして僕はここにいるのだろうか。

僕の向かいのベンチにいるおじさんは何故こんな昼間から公園で寝ているのだろうか。

仕事行かなくていいのかな

まさか会社クビになったのを家族に言いだせなくて公園で時間を潰しているとか・・・？

テンプレ乙！

ふう・・・。

いい加減現実逃避はやめよう。今考えるべき事はこれからどうするかということだ。

とは言っても本当にどうしようか。

僅かな可能性を願って公衆電話から自宅にかけて繋がらなかったし、所持金は多いとも言えない。通帳はあるけどこの世界で使えるとも思えないし、この手持ち金が尽きるまでになんとかしなければならぬ。

やっぱり泊まり込みのアルバイトを探すのが利口かな。

雇ってもらえるか微妙なところだが今はこれしかすることがない。とりあえず行動に移そうと重い腰を上げ、公園の出口へ向かう

その時見覚えのある少女が向かい道路の角に消えるのを視界の端に捉えた。

そう、つい昨日見た赤毛の少女だ。

「つつ!? 彼女はまさか!?」

走る。走る。

彼女はあのバスに乗っていたのだからこのわけのわからない状況に  
関して、なんらかの情報を持っている可能性が高い!ここで絶対に  
見逃すわけにはいかない。

「待って! 待ってくれええええええええええええええええええええええ!!」

なんか昨日も似たようなこと叫びながら走ったな・・・ってだから  
こんな馬鹿なこと考えている場合じゃないんだって!!

僕の声が聞こえていないのか赤毛の彼女はすいすいと歩いていく。

おかしい。

彼女は傍から見ると普通に歩いているように見える。僕は全速力で  
走っている。

それなのに全然追いつけない。

僕との距離が近くなる度、彼女は唐突に角を曲がり、僕が彼女に続  
き曲がると彼女の姿はすでに遙か前方に移動している。

ちょうど僕が追跡できるギリギリの距離。無論これはぼくにとって  
幸いなことには違いないけど、まるでどこかに誘導されているよう  
な・・・そんな感覚だ。

そんな奇妙な鬼ごっこ、もとい追跡劇は突然終わりを迎えた。再び角を曲がった彼女を追いかけると、そこには誰もいなかったのだ。

「嘘だろ……。見失ったのか……。!？」

絶望が再び僕に襲いかかる。藁にも縋る思いで辺りを見渡す。

やばい、泣きそうだよ。というかもう半泣きだよ……。

そんな時、突然背後から声を掛けられた。

「おや、アンタが今日からここに越してくるっていうアキラ君かい？お昼前にはここに着くって聞いていたから心配していたんだけどちゃんと来れたようだね。」

振り返るとそこには見るからに快活なおばちゃんがいた。どうやら向かいのアパートから出てきたようだ……。って、え？なんで僕の名前を知っているんです？えっ？あれっ？

「荷物はもう届いているよ。今はおばちゃんの部屋に置いてあるからさっさと持っていくておくれ。ああ、アキラ君の部屋は2階の一番奥だからね。はいこれ鍵さね。なくさないよう気をつけるんだよ。」

「えっ？あの……。えっ？」

状況を把握できない。

流されるままにおばちゃんに連れていかれ、届いたという荷物の前へ。

「なっ、なんで僕の荷物がここにあるんだっ!？」

そこには何故か僕が前日に送った荷物があつた。

「なんでってアンタ、さっき言ったじゃないか。アキラ君の到着より先に荷物が届いたから私の部屋で預かってるって。話聞いてなかったのかい？」

「いや、そういう意味じゃなくてですね・・・え〜っとその・・・」  
どう答えればいいんだ。というか状況が全く理解できない。

「ほらっ、もういいからさっさと持っていっておくれ。うちは部屋が狭いんだから邪魔になるんだよ」

あっという間に部屋から追い出される。

とりあえず自分の部屋とやらに行こう。落ち着いて考えられる場所が必要だ。

カンカンと音を立てながら階段を上り、おばちゃんに言われた2階奥まで移動。

扉を開けて部屋に入り、一息つくこう・・・としてできなかった。

なぜならすでに先客がいたからだ。

「きっ、キミはっ!!」

ぴつちりきまつたレディーススーツに髑髏の装飾が付いた帽子とバッグ。

先ほどまで追跡していた赤毛の少女が薄い笑みを浮かべながらそこに居た。

思いがけないことの連続に焦り、僕は荷物を落としてしまい床に中身が散乱する。

そんな僕の様子を見てさらに笑みを深めた彼女は唐突に指をさす訳も分からず彼女の指した先を目で追ってしまふ。

そこにはたった今ぶちまけてしまった荷物の中身、遊戯王カードが散乱している。

そしてその中で彼女が指しているものを見つけた。何を指しているのか分かった。

彼女の指さす先にあったのは1枚のカード。

《Tour Guide From the Underworld》

彼女が描かれているカードだった。

## 第1話 おいでませ異世界（後書き）

Tour Guide From the Underworld

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1000 / 守 600

このカードが召喚に成功した時、自分の手札またはデッキからレベル3の悪魔族モンスター1体を特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化され、シンクロ素材とする事はできない。

遊戯王カードwikiより引用。

地獄のツアーガイドと訳されることが多いようなので、本作でもこの訳で。

海外先行カードで日本にくるのは来年の9月。待ちきれません

## 第2話 契約（前書き）

まさに超展開。ここ都合主義ここに極まれり。

## 第2話 契約

驚嘆と混乱の連続だった。

今日だけで僕は一生分のカオスを味わった気がするよ

気づいたら遊戯王（と思われる）世界に迷い込んでいて茫然自失。  
混乱の渦中に居る僕に乗ってきたバスの消失という追撃。

なんとか気を持ち直し、行動しようとした矢先に現れた彼女との追走劇。

彼女の向かった先には何故か僕名義で借りられていたアパートと届いた荷物。

ここまででもお腹いっぱいだよ。

極めつけには入った部屋の中には赤毛の彼女が座っており、彼女が遊戯王カードの中に存在するモンスターの一人だと気づかされた。

《Tour Guide From the Underworld》  
《d》

直訳するとさしずめ《地獄のツアーガイド》ってところか。

気を取り直した僕はすぐに彼女問いた。

「おいっ！いったい何がどうなっているんだよ！？全部説明してくれっ！」



怒号と共に彼女に詰め寄る。そんな僕の様子なんてどこ吹く風のよ  
うに彼女の表情にはなんら変化はない。先ほどと同じく薄い笑みを  
浮かべているだけだ。

そんな彼女の態度に僕はキレた。現状の理不尽さや疲れがここで一  
気に噴出した。

(何故僕がこんな目に合わなければならぬっ!!)

彼女の肩を掴もうとしたその瞬間、横からなにか黒い影が突っ込ん  
できた。

完全な不意打ち。格闘経験なんてない僕には避けられるはずがない。  
もしあったとしてもこんな怒り心頭で周りが見えていない状態での  
不意打ちなんて避けられないだろうけど。

「ぐふっ!!」

脇腹からの衝撃で無様に吹き飛ぶ。ゴツンと嫌な音をたてて壁に頭  
を強打してしまった。

「いってえええええええっ!!頭がああああああああっ!!」

頭を押さえてゴロゴロ床を転がる。まさかこんな漫画みたいなリア  
クションをとるとは自分でも馬鹿みたいだと思っけどマジで痛い。  
洒落にならん。

痛みで涙目になりながらも先ほど僕に突っ込んできた塊を確認する。

そこには三つ目の毛むくじやらが立っていた。

「くう……、コイツは……クリッターか？」

正直いきなり目の前に現れたら吃驚して叫んでいただろうが、ここ数時間の出来事で頭が麻痺していたことと、なにより頭に響く痛み  
のせいで目の前の怪物に普段の反応がとれないよ。  
クリッター  
リアクション

ツアーガイドが立ちあがり、クリッターになにかを囁いた。すると  
どうということだろうか、クリッターの姿が闇に消えていく。

この女、まさか悪魔を呼び出すことができるのか……？

正直納得できないが（するつもりもないけど）、痛みのおかげで正  
気を取り戻した僕は再び彼女に問う。

「教えてくれ、いったい俺に何が起きたのかを」

~~~~~

彼女の話を要約すると（彼女の使っている言語は分からなかったか
何故か意味や意図だけは理解できた）彼女は普段あの例のバスに乗
って気の向くまま12個の異世界を渡り巡っているらしいのだが、
世界移動の際に見たこともない次元の狭間を発見したらしい。好奇
心からその狭間に侵入し、辿りついたのが僕の住む世界だったとい
うわけだ。しかしながらその次元の狭間はどうにも不安定で、早め
に戻ろうとした折に僕が乗車。僕を乗せたまま再び狭間に入り、こ
の世界にやってきたとの話。

このアパートや届いた荷物に関しては、本来この世界にはあり得ない僕という異分子がやってきた時に発生した情報の波によって、一瞬世界が揺らぎ、再構成された時に「僕」がこの世界に取り込まれた結果の一部ではないかということだ。

なるほど、全く解らん。

いやいやつまりはまたあのバスに乗ってその次元の狭間に潜れば元の世界に戻るんだな。
なんだ、これで一件落着じゃまいか。

そんなことを考えてた時期が僕にもありました。

彼女の話の端々から嫌な予感がしていたけど、どうやら僕らがこの世界に移動を完了した際、その僕の世界と繋がっていた次元の狭間が消滅したそうなの。

「そんな……、嘘だろ……」

もう元の世界に帰れないかもしれない。まずはそんな絶望感が僕を満たし、次にはこの世界に僕を連れてきた彼女に怒りが沸き、その矛先を向けた。

何故僕を連れてきたのか

そんな僕の問いに帰ってきたのは至極簡単な答え。

僕が彼女を呼び止め、勝手にバスに乗車したから

ただそれだけの事。

それゆえに僕はもう何も言えなかった。
だってこれは僕の完全な自業自得だ。

彼女はなにもしていない。
いや、なにもしなかったという方が正しいけど……。

兎にも角にも元の世界に帰る為には再びその次元の狭間が出現するのを待つしか方法がないらしい。

そこで僕は狭間の確認とその際に僕を元の世界まで連れて行って欲しいと願い出だのだが彼女の反応はいまいち芳しくない。

考えてみれば彼女には僕の頼みを受けてもなんのメリットもない。彼女からしてみれば僕は勝手に付いてきて勝手に帰りがっているだけ。

字面だけ見れば子供のわがままとなんら変わらない

でも僕には彼女しか頼れる人はいないんだ。

「頼む！！何でもするから僕の願いを聞いてほしい。このとおりだ！！」

誠心誠意の土下座をする。頭の低さといい角度といい非の打ちどころのない完璧なフォームのはずだ。芸術点、技術点と共に過去最高

点を叩きだしたことは間違いないだろう。
それ見ろ、この土下座の前では彼女も僕の頼みを聞かざるを得ない
だr.....

ちらりと頭を上げ覗いてみるとそこにはなにやら考え事をして上の
空な彼女の姿。

僕の土下座なんて欠片も見えていない。

世間はさあ、冷てえよなあ・・・

僕がこっそり涙を流していると彼女が思考の海から帰ってきたよう
だ。

僕を見てニヤリと笑う。

良い答えが聞けるといいけど

~~~~~

結論から言おう。

僕の頼みを聞いてくれるようだ。

やったね。

首の皮一枚繋がった思いだ。

ただし条件を付けられた。

一つ、僕の精霊となること。ただし僕の精霊といっても彼女は自由  
に行動する権利を持つ。

一つ、狭間の確認調査は彼女の気が向いた時のみとすること。

一つ、毎日お菓子を献上すること。

何故僕の精霊になりたいのかと問うたところ、なんでも彼女が今現在僕らのいる現実世界に現界できるのは一定時間のみだということだ。しかしとある特定個人の精霊として契約することで、契約者と自身の存在を霊的なパスで繋ぐことにより、契約中は現実世界に現界し続けることが可能となるらしい。一度ゆっくりと現実世界の人々を見物したかったそうだ。見物の前に「悪戯して」というワードが聞こえたのはきつと僕の気のせいだと思う。

2つ目の条件はただ面倒くさいからだそうだ。

無理を言っただけ頼んでいる以上、このことに関して僕は強いことなんて言えるわけがないから了承するしかない。

3つ目に関してはもはや何も言えない。というか突っ込んではいけない気がする。

彼女がバッグから取り出した古びれた洋紙皮に謎の文字が浮かび上がる。

僕は一縷の望みを賭けた真剣な顔で。

彼女は先ほどと変わらぬ笑みで・

そこに互いの名前と血印を。

この日、僕は悪魔と契約を交わした。

## 第2話 契約（後書き）

正直設定がテキスト過ぎて突っ込まれても返答できないレベル。

ただガイドの話に出てきた12個の異世界というのは我らが空気、三沢さんの発言から。因みにガイドさんはアニメで万丈目たちが飛ばされた地獄のような世界がホームグラウンドの設定。

話数修正しました。なぜ間違っただろう



### 第3話 受験まで（前書き）

さらなる「都合主義」。そしてまだ一回もデュエルしていないという展開の遅さ。

### 第3話 受験まで

あの契約の日から一週間ほど経たった。

もとの世界への帰還に関して僕にできることはないのです、これからのことの考えた結果、デュエル・アカデミアに通うことをとりあえずの目標とすることにした。

デュエルモンスターズ。それはペガサス・J・クロフォードにより設立されたインダストリアス・イリュージョン社より発売されているトレーディングカードゲームであり、この世界においてすさまじい影響力を持っている。

信じられるかい？カードゲームによって企業の業績やらが左右されたり、エネルギー問題を解決したり、拳句の果てには地球どころか全宇宙が消滅の危機に瀕したりするんだぜ？

デュエル・アカデミアとはそんな影響力の高いDMのデッキデュエルモンスターズを持つ闘デュエリスト闘者「決闘者」を養成する専門学校なのだ。

帰れないという最悪の事態を想定した場合、この方面である程度の成績を納めておくのは必ず将来の糧となるはずだ。

アカデミアに奨学金制度が充実していてよかった。流石社長だ。

入学試験は間近に迫っており、幸いにも受験申し込みはギリギリ間に合うことができた。その時気付いたのだけど今年の試験は2004年度らしい。

つまりは奇しくも遊戯王GXの主人公の入学と同じ年というわけだ。町の名前とアカデミアの存在からおそらくは遊戯王GXの時代に来たのだろうとあたりを付けていたがまさか同学年になるとは。

いや、原作の主人公たちがいるとは限らないか。並行世界って可能性もあるし。

まあどちらでもいいや。

とりあえずこの世界で生きる上で僕の最大のアドバンテージは所有しているカードの質と量、そしてカードに関する知識だ。

そもそもこの世界ではデュエリスト人口が多すぎて、大多数の人に十分なカードが供給されていない。また、レアカードの絶対数が少なすぎてその存在すら知らない人も多い。

遊戯王が僕の世界で所以資産ゲーと揶揄されていた事実からも分かるように、カードゲームというのは所有しているカードによって勝敗がわかる要素が強い。また、それと同じくらいにカードに対する知識が大切である。

そこまで考えた際に、知識に関しては兎も角、カードに関してはとある問題を抱えていることに気付いた。

「この時代にまだ出てないカードとか使えるのだろうか？」

正直使えない可能性のほうが高いが、この時代にはまだ出ていないであろうツアーガイドの精霊が存在する以上、可能性は無きにしも非ず。

わからないのだから試すしかない。そうやって人類は進歩してきたのだから。

「でゆるるでいすく？あゝ、ちょっと待ってくれ。確かあそこにしたよな……」

アパート管理人のおばちゃんにデュエルディスクの入手法について聞いたところ、おばちゃんの息子が使っていたというデュエルディスクを物置から引っ張り出して来てくれた。もう使うこともないだろうしとのことで譲ってもらった。

ありがとうおばちゃん。良い人やで

誰かに見られるわけにもいかないの、翌日の早朝に人気のない河原へ移動。

周りをざっと見回してみる……。うむ、誰もいないな、デスルークデーモンに跨り、八汰鳥を隣に侍らせここまでついてきたツアーガイド以外は。

「ってなんでだよ!!」

今までは黙っていたけどもう無理だ。

来るなら普通について来てくれよ!

というかお前が効果で呼び出せるのはレベル3の悪魔族モンスター

のみじゃなかったのかよ！八汰烏は特殊召喚できないという制約を無視して呼び出してし・・・

そんな世の中の理不尽に憤慨する僕の様子をなにこの馬鹿な人みたいな目で見ているガイドさん。

もういい、もういいよ！気にしたら負けなんだろ！

僕以外には彼女たちの姿は見えないし触れないようだから、はたから見たら確かに僕の方が変な奴になるのだろう。あつ、十代には見えるのかな。

気を取り直してデュエルディスクをセットする。

まずはこの時代でも存在するカードを使つての確認作業からだ。

「よし！魔導戦士ブレイカ を攻撃表示で召喚！！」

高らかに手を振り上げ、ブレイカ をディスクにセットする。

さながら気分は王様だぜ。

.....

なにも起きない。

あれ？

「何故なんだ？まさか壊れてるのかこのデュエルディスク・・・」  
違いました。ディスクの電源入れるのを忘れてました。

これは恥ずかしい！！召喚！（キリッ　なんてかつこよくポーズまで決めたのに何も起きないなんて。

横でガイドが腹を抱えて爆笑している。  
ちくしょう！ちよつと間違えただけじゃないか！！

二回目の挑戦で見事に成功。

ソリットヴィジョンに関しては素直に科学の力つてすげーと感心したのだが、いかんせん僕の横でまだ笑い転げている悪魔娘がポンポンと悪魔族モンスターを呼び出すからなんというか新鮮味がないな。

さて、本題はここからだ。

まずはまだこの時代に出ていないモンスターからいつてみるか

「よし、手札よりジャンク・シンクロンを召喚！！」

派手なエフェクトと共にジャンク・シンクロンが現れる。よかった、成功した。これで失敗でもしていたらもう恥ずかしくてお嬢にいけないところだったよ。

「おっけ。んじゃさらにボルト・ヘッジホッグを召喚する！」

「そしてレベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル3のジャンク・

シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが光に溶け、3つの輪となり、ボルト・ヘッ  
ジホッグの周りを囲む。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召  
喚！いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

強烈な光と共に特徴的な丸い赤目をしたジャンク・ウォリアーが現  
れる。

「おお、できましたか・・・」

~~~~~

この後もいろいろ試してみた。

エクシーズ召喚もできるとは思わなかったよ。

ただ三幻神とか三幻魔、地縛神なんかは怖くて召喚できなかった。
というか僕これ持ってていいのだろうか。

まあこれで組めるデッキの幅はかなり広がった。

とりあえずは見つかったら厄介そうなカードや、シンクロやエクシ
ーズもなるべく人前では使わない方針でいこうと思う。

さてさて、最大の問題も解決したことだし試験に向けてデッキを調

整するとしますか。

この後デスク調整に夢中になってガイドへの献上品おかしを買い忘れた僕が彼女の折檻を受けたことはまた別のお話。

第3話 受験まで（後書き）

知識に関してはOCG効果とアニメ効果で違いがあるのですが、
本OCG準拠という点で。

第4話 実技試験（前書き）

ようやく原作キャラとの遭遇。

第4話 実技試験

やあ、みんな。

今日はついにアカデミーの実技試験の日なんだ。え？筆記試験はどうしたって？

もちろんちゃんと受けたさ、ほとんど無勉強だったけど。

それでも今日の受験番号は6番だったのだからかなりの良成績じゃなからうか。

いや、流石に試験落ちるわけにはいかなかったし、初めは勉強しっかりしておこうと思っただよ。でも無理だった。捉え違えないでくれ、別に僕が勉強サボったとか集中力が足りなかったとかじゃないんだ。

そう、わかるだろ？原因はそこに気だるそうに突っ立っている性悪ツアーガイドさんさ。

この悪魔娘、僕が真面目に勉強に取り組む姿勢を向ける度に、物理的にも精神的にも邪魔してくるのだよ。

後ろからモノ投げってくるわ、耳元でケタケタ笑うわ、ちよっと目を離した隙に教科書が訳の解らん魔導書にすり替えられるわ。

だが僕だってやられっぱなしだったわけじゃない。

なけなしの反骨精神からとった行動は彼女に渡す菓子類のグレードを下げることであった。

無論その報復を受けた・・・らしい。

うま 棒10本をどや顔で渡した後の記憶がないんだ。

気付いた時に僕の側に落ちてた《バイサー・シヨック》や《記憶破メモリー・クラッシュャー

壊者》のカードはいつたい何だったのだろうか。

不思議だね。

一緒に暮らしてみてもよく分かったが、彼女は実に小悪魔らしい性格をしていると言える。

まあ実際悪魔なのだから当然なのかもしれないけど。

気に入らないことがあるとあからさまに機嫌を悪くし、手当たり次第に悪魔を呼び出し始めるから手に負えない。

クリッターはいいよ、お前はよく出てくるしもう慣れた。

でもふと振り返ったら後ろにアスワンの亡霊が浮いているとか、上からいきなりガーゴイルが降って来るとかはまだ無理だ。心臓に悪すぎる。

そしてこれは僕の気のせいだと思いたいんだけど、最近呼び出す悪魔の数やら質やらが段々上昇していつてる気がするんだ。いや、やっぱりこの話はよそう。主に僕の心の平穩のために・・・。

おっと、話がそれすぎたようだ。

遅刻というものに最近思うところがある僕だから、かなり早めに家を出て試験会場に到着した。まだ受験生は疎らだ。まあまだ試験開始まで40分くらいあるしね。

そうそう、会場に入る時にクロノス教諭を発見した。リアルで見るとすごいインパクトだったとだけ言っておこう。着ているコートもなんか重力を無視していたし。改めてここは遊戯王の世界なんだなと実感したよ。

開始までは受験生らしくデッキ調整でもするべきなんだろうけどそんなことはすでに終わっているなあ。

とりあえず試験開始まで寝るとしますか。

おやすみなさい・・・

ZZZ・・・

~~~~~

目を覚ますともう試験間近みたいだ。周りが騒がしくなってきたけど起きたんだが、横に立っている悪魔娘がいつも以上にニヤニヤ笑いながらこちらを見ているのが非常に気になる。

アイツ俺になんかしたのか・・・？まさか顔に落書きを！？慌てて手鏡で確認するもそこにはいつもと変わらぬ自分の顔。一応身の回りを確認してみるが、寝る前と比べると変化はない・・・はずだ。

『試験番号6番の受験生。至急試験会場までお越しください』

おっと僕の番か。あの悪魔娘の意地の悪い笑みは気になるが今は捨ておくしかない。

今回使うデッキはスタンダードなビートダウンデッキを選択した。

下手に注目浴びるのも嫌だし、なんとというかこの世界ビートダウン至上主義みたいな風潮があつてコントロールデッキとか使いにくいのだよ。まあ一番疎まれるのはバーンだけど。そりゃそうだ、LP 4000とかバーンなら1ターンで簡単に焼き切れる。まずゲームがゲームとして成り立たない。

「私が君の試験官を務める。勝敗が直接試験の合否を分けるわけではないからあまり緊張しなくていいぞ」

「はあ、宜しくお願いしますね。」

目の前にはグラサンをかけた試験官。というか試験官のグラサン率が異常だ。

グラサンかけなきゃならない規則でもあるのだろうか。

いかん、今は試験に集中しよう。

「<sup>デュエル</sup>決闘！！」

「私のターン、ドロー！手札よりブラッド・ヴォルスを召喚！更に装備魔法デーモンの斧を発動しブラッド・ヴォルスの攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

《ブラッド・ヴォルス》 ATK1900 2900

おお、やっぱ相対してみるとすごい迫力だ。  
というかやっぱ先行は言ったもん勝ちだったのか。

「さらに魔法カード、光の護封剣を発動！これによりキミは3ターンの間私に攻撃することはできない！これで私のターンは終了する。さあ君のターンだ」

開幕護封剣とかだるいつすな。

「僕のターン、ドローします」

ソリッド・ウイジョン  
立体映像見せて自分の手札見てなかったよ。どれどれ。

どういうことだってばよ……。僕が用意したデッキと違うわけだが。

まさか……。嫌な予感がしつつもガイドに目を向けると……。あの野郎、腹を抱えてケタケタ笑ってやがる。やはり貴様か！やはり貴様の仕業なのか！！

「どうしたんだ？早く始めなさい」

先生の声で我に返る。

ちくせう、ガイドの所業は気に食わないが今考えるべきことはこのデッキでなんとかしなければならぬということだ。

冷静になったところで（自分の中では）手札を再度確認してみる。

いやいや、このデッキはいろんな意味でダメだろう。確かこの世界では「普通の方法では絶対に入手できないレアカード」って設定じやなかったか？

皆の早くしろよという視線が痛い。仕方ない、なんとかかなると思うしかない。

「手札から召喚僧サモンプリーストを召喚します。モンスター効果により守備表示になり、更に効果発動！1ターンに一度、手札から魔法カードを1枚捨てることで、デッキからレベル4のモンスターを特殊召喚することができます。現れる王立魔法図書館！」

ゴゴゴゴと地面から図書館が湧き上がる。

これモンスターっていうよりフィールドカードに見えるな。

「手札より強欲な壺を発動！デッキからカードを2枚ドロし、この瞬間王立魔法図書館の効果により魔力カウンターが1つ乗ります。さらに魔法カード天使の施しを発動、カードを3枚ドロし、その後手札2枚を墓地へ。王立魔法図書館に魔力カウンターがまた1つ乗ります」

改めて強欲な壺と天使の施しを使うとこれはあれだね。ノーコストでアドバンテージを得るとかまさにインチキ効果もいい加減にしろと言いたくなるよ。流星は元の世界では禁止指定を受けていたカード。

だが使えるモノは使う主義なんだ僕は。



「魔法カード成金ゴブリンを発動！僕はカードを1枚ドロ―し相手はLPを1000ポイント回復します。これで王立魔法図書館にはカウンターが3つとなり効果発動！魔力カウンターを3つ取り除き、デッキからカードを1枚ドロ―します」

試験官 LP 4000 5000

「カードを引くだけではデュエルには勝てないぞ！」

周りの観客も何やってんだこいつみたいな顔をしている。

あからさまな嘲笑を浮かべてるやつもいるよ。むしろそういう奴の方が多いな。

人の視線というものの自体にあまり耐性がない僕にとってこの環境は辛すぎるよ。

でもこのデッキはこういうデッキなんだ！

というよりこの勝ち筋しかないんだから仕方ないだろ！！

文句があるのならばデッキをすり替え、そんな僕の様子を見ながらニタニタ笑っている悪魔娘に言いたまえよ全く。

「テラ・フォーミングを発動！デッキよりフィールド魔法を手札に加えます。僕が選ぶのは魔法都市エンディミオン。そしてエンディミオンを発動！」

.....中略.....

魔法石の採掘によって回収した強欲な壺を発動！カードを2枚ドロ―し、王立魔法図書館の効果によって更にカードを1枚ドロ―！」

つとようやく揃ったか……。どれだけ運がないのだろうか僕は。  
もうデッキほとんど残ってないよ。

デュエルディスクの操作に慣れていない上に、効果処理が膨大な量あるからここまでくるのにめっさ時間かかってしまった。

「おい、いつまでこんなくだらないデュエルを続けるつもりなんだ？」

外野のオベリスクブルーの生徒が野次を飛ばす。

「いえ、もう終わりです。今のドロイーで手札に5枚のエクゾディアパーツが揃いました。僕の勝ちです。ゆけエクゾディア！怒りの業火 エクゾード・フレイム！！」

僕の背後に魔法陣が発生しそこから巨大な魔神が現れる。  
そして彼の者から撃ち出された業火が全てを吹き飛ばした。

うむ、流石に立体映像で見るエクゾディアは迫力があるね。  
ソリッド・ウィジョン

「……なっ、エクゾディアだと！？」「」

あ、みなさんの反応がヤバイ

やっぱりエクゾはまずかったですか、そうですね、そうですね。  
でもグールズの下っ端とか持ってたじゃん、あつ、あれは複製品か。

くそう、どうやってこの衆目から逃げだせばいいんだ。みんなの視

線が痛いよ。

唐突に会場の出入り口から周りの喧騒にも負けない大きな声が上がった。

「すみませ〜ん！遅れました〜！！受験番号110番、遊城十代です！まだセーフですよね？」

僕のデュエルが長すぎたおかげで電車の事故によって遅れた十代が到着したらしい。

原作主人公との初会合に心踊らないわけではないが今はそれどころじゃない。

皆の意識が十代に向かったこの一瞬の間をつきどうにかこの場からの脱出に成功。

ありがとう十代、この恩はきっと忘れない・・・と思うよ、うん多分3日くらい。

今度飯でも奢るわ

明日香 side

「驚いたわ。まさかエクゾディアをこの目で見られる日が来るなんてね」

エクゾディア

それは「封印されし」と名のつく5枚のカードを手札に揃えること

でその決闘に勝利するというデュエルモンスターズの中では大変珍しい特殊勝利を齎すカード。

しかしその条件の困難さゆえに伝説のキングオブ決闘者、武藤遊戯が現れるまで誰一人として揃えることができなかったとされている。

しかしあの受験生はたったワンターンでそのエクゾディアを揃えてみせた。

今の決闘がただのまぐれなのかそれとも彼の實力なのか。

「今日はわざわざ見に来た甲斐があったわね」

「ああ。中々に興味深い内容だった」

隣にいる亮もそう相槌を打つ。

学園中随一のデュエル技能と、その優れた人格から学生間では「デュエル・アカデミアの帝王」「カイザー亮」の異名を持つ彼は普段このようなイベントにはあまり参加しないことが多いのだけど、今日は彼の弟がデュエル・アカデミアを受験するらしく、その弟を守るために足を運んだらしい。

「いけフレイム・ウィングマン！古代の機械巨人に攻撃！スカイス  
クレーパー・シュート！！」

「マンマミーア！我が古代の機械巨人が！！」

そんなことを考えているうちに、遅れてきた受験生がクロノス教諭を破った。

まさかあのクロノス教諭が負けるなんて。

ふふっ、今年の受験生はちょっと面白そうね。

そういえば亮の弟さんってどの人だったのかしら。

#### 第4話 実技試験（後書き）

初めてのデュエルシーンだっていうのに図書館エクゾによるソリテ  
イアゲー。

もうこのデッキは使いませんが、スピード決着が多くなる展開にな  
りそう。

第5話 入寮（前書き）

ぬるりと投稿。 よつやくアカデミア到着。

## 第5話 入寮

先日無事試験合格通知が届き、只今ヘリにて移動中。

今まで飛行機にも乗った事のない僕にとって空を飛ぶなど初めての体験で、正直洒落にならんくらい怖い。

隣にいるツアーガイドさんに抱きついていなければ気を保てなかっただろう。

そんな僕の様子に最初こそ笑って馬鹿にしていた彼女だが、今となつては何が何でも離すまいと必死で抱きつく僕に呆れた表情を見せている。

僕が悪いんじゃないやい！鉄の塊が空を飛ぶほうがおかしいんだい！

だいたい如何なる理由があつて学校を太平洋の孤島なんかに設立したんだよ社長は。

デュエル・アカデミアが見えたのだろうか、皆の歓声が上がる。

やった！これで降りられる！なんか皆と喜んでる理由が若干違うけど。

よかった。無事に再び地上に足をつけられたよお母さん。

世にも奇妙な乗り物ヘリコプターによつて衰弱した僕は校長の話も耳に入らず、寮へ足を運ぶ段階に至つてようやく調子が戻ってきた・・・ような気がする。



ちなみに僕が配属されたのはラー・イエロー。

個人的に制服の色が好きにはなれないが仕方ない。インナーに関してはよほどの柄物じゃない限り自由とのもので、黒いTシャツに制服は基本肩にかけるだけになっている。

寮はおしゃれなペン트ハウス調であり、ゴテゴテしているオベリスク・ブルーの寮より僕の趣味に合っているかな。というかオベリスク・ブルーの寮は遠目から見ても引かざるを得ない外観で、あそこで住めと言われても絶対に落ち着けないだろう。

まあいいや。とにかく早く寮に行ってさっさと休もう。

「おや、キミは確か受験番号6番の」

足早にその場を去ろうとした僕を留めたのはそんな一声。

「おつ、そいつ知り合いなのか2番。強いのか？」

「ちよっ兄貴、あの人は今噂になっているエクゾディアを召喚させた人っすよ！」

うわゝ、なにやらわらわらと来ましたよ。

「おおゝ、お前がエクゾディアの奴か！俺遅刻してきたせいで見られなかったんだ！ということと俺とデュエルしようぜー！！」

どういふことだよ。

「初めまして。僕は一之瀬アキラと言います。」

人前での口調は紳土的、内面思っていることは汚い一之瀬アキラです。みんな宜しく。

「俺は三沢大地。キミと同じラー・イエローだ」

「俺は遊城十代だ。よろしくなアキラ！」

「僕は丸藤翔つす。兄貴と同じオシリスレッドっす」

うん、知ってるよ。

正直彼らと絡むのも面白そうだけど今は勘弁してほしい。疲れているんだよ僕は。

しつこくデュエルをせがむ十代をなんとかスルーし、三沢と一緒に寮へ向かう。

「試験デュエルでは見事だったよ。まさかエクゾディアを見られるとは思わなかった」

「いえ、あれは運が良かったからですよ。」

あの図書館エクゾの初手成功率なんて4割程度だ。この世界では強欲な壺とか天使の施しが投入できるから現実世界よりは成功率上がるんだけどね。

「謙遜する必要はない、運も実力の内さ。正直俺もキミが何を狙っ

ているのか分からなかったしな。」

まあエクゾディア持ってるやつがそもそもほとんどいないし、仕方ないね。

というかもうあのデッキを使う予定ないし気にする必要ないよ。

その後も取留めのない話をしながら寮へ。正直ピケルがどれほどかわいいたとか天使族のほうピケルに似つかわしいとかを熱く語る三沢の様子なんて書く気にもならない。

新入生歓迎会が始まるまで自由行動とのことでこれからお世話になる自室に向かう。

そして扉を開けると、そこは悪魔の巣窟だった。

ボタン

いや、落ち着くんだ。今は扉の開け方が悪かったからに違いない。ほら、こつやつてしっかり開けるとそこには至って普通の部屋がある……

眼前に映るのは先ほどから姿の見えなかったガイドさんが大量の悪魔を呼び出してどんちゃん騒ぎをしている姿。

お前ら人の部屋でなにしくさつとんのや!!

~~~~~

暗い。

あの後自室を占拠されていた僕は、荷物だけ部屋に置いて彼女らの馬鹿騒ぎが終わるまでぶらつくことにし、とある木陰でひと眠り。

そして起きたら周りはすでに真っ暗だったというわけさ。

ここでまたとある問題が発生中。

帰り道が分からない

昼間の明るいうちだったならば簡単に帰ることもできただろうが、来たばかりの土地で目がよく効かぬ夜というこのコンディション。

とりあえず虫のように明かるいほう明るいほうに進んできたのだが、そこで人の声が聞こえた。あの声は十代か。助かった、流石主人公。僕はキミを信じていたよ。

声の方へ向かうとそこには建物の中に入っていく十代と翔の姿。

ああ、そう言えば万丈目に呼び出されるイベントとかあったな。せっかくだし見学していこう。

少しばかり時間をおいてからデュエル・フィールドへ向かう。ちょうど十代がフレーム・ウィングマンを万丈目に取られたシーンだ。

「いけフレーム・ウィングマン！フレーム・シュート！！」

E・HEROクレイマンが破壊され、効果ダメージを受ける。

「うわぁあああああああああああああああ！」

「お前の場にはお前を守るモンスターは一体もない！ヘル・ソルジャー！ヘルアタック！」

地獄の戦士に切り裂かれ蹲る十代。

いまさらだけど何故彼らはダメージを受けた時苦しみながら叫んでいるのだろうか。

リアルにダメージが体にフィードバックしてるの？闇のゲームなの？

まだダメージを受けたことないからわからんな。というか実戦経験があの受験の時しかない。

おっと考え事をしている間に場が様変わりしている。互いにLPは残り僅かだが、万丈目の場にはATK1800のヘルジェネラル・メフィスト、それに対し十代の場には何のカードもない。

まさに絶体絶命。

ただどこかで終わりってわけじゃない。そうだと主人公？

「俺の引きは奇跡を呼ぶぜ！俺のターン、ドロー！！」

その時僕の背後から複数の足音が聞こえた。そうか、ガードマンのことすっかり失念していたよ。彼らの邪魔をするのは忍びないが、

ここまでだな。

「残念ながらそこまでです！ここにもうすぐガードマンが来ます。アンティ・ルールは校則で禁止されている上に、時間外の施設使用。下手をすると校則違反で退学の可能性すらあります。早くこの場から離れたほうが良いですよ」

「アキラ！どうしてここに！？」

「え？アキラ君！？」

突然の僕の登場に驚く皆さま。

「説明は後で。今はこの場を離れることが先決です」

万丈目達もガードマンに見つかると拙いと思ったのか十代に捨てゼリフを吐いてから退散していく。

十代はデュエルの決着がつくまで動かないと馬鹿なことを言い出したが、僕と翔、明日香の3人で無理やり引っ張っていく。ガキかお前は。

とりあえずなんで僕がここにいたか誤魔化さなきゃな。

明日香 side

「万丈目の奴があクロノス教諭を倒したって奴を呼び出したらしいぜ」

「しかもアンティ・ルールでのデュエルだってよ。あゝあ、かわいそうにレッドの野郎」

「ふっ、あいつも新人苛めが好きだなホント」

新入生歓迎会でそんなオベリスク・ブルーの男子生徒らの会話が耳に入った。

昼間見た遊城十代と万丈目君の争いが気になって注意していたけど正解だったようね。

私の忠告なんて聞きそうになかったし、大丈夫かしら。

気になってわざわざデュエル・フィールドまで来てしまい、そこではすでに万丈目君と遊城十代のデュエルが行われていた。

しかし突然のアクシデントで結局そのデュエルは途中放棄でノーゲームに。

ガードマンのことを知らせてくれた彼がいなければ危なかったかもしれないわね。

どうやら彼は中々寝つけず星でも見ようかと外に出た際に、十代たちを発見し、何事かと見に来たらしい。

逃げるのに夢中で気が付かなかったけど、よく見るとこの人は受験の時にエクゾディアを使っていた受験生じゃないかしら。十代と共に私がちよっとした興味を持っている人。名前は一之瀬アキラというらしい。

「どう？オベリスク・ブルーの洗礼を受けた感想は」

「まあまあかな、もう少しやるかと思ってたけどね」

軽口を叩く十代に私は好奇心から意地悪な質問をする。

「そうかしら。邪魔が入っていないければ今頃アンティ・ルールで大事なカードを失うところじゃなかったの？」

「いや、今のデュエル俺の勝ちだぜ」

そう言っただけで彼はニヤリと笑い、最後に引いたカード「死者蘇生」を見せた。

「こいつでフレイム・ウィングマンを蘇生させれば俺の勝ちだ」

ふふっ、やっぱり面白いじゃないこの子。

颯爽と帰って行く彼を見てそんなことを思う。

「まあフレイム・ウィングマンは融合召喚でしか特殊召喚できないんですけどね」

まだこの場に残っていたアキラがそう呟く。

あっ!?!?

「ということはさっきのデュエル、やっぱり万丈目君の勝ちってことかしら?」

「どうでしょうね。クレイマンを蘇生させて相手の攻撃に耐えることができたならば、まだ勝ちの目はあったと思いますよ」

「だったら彼に言ってあげなさいよ。というかどうして黙っていたの?」

「いや、十代の奴があまりにも得意気な顔をしていたものですから指摘するのが可哀そうで……」

「ああ、そう……。」

なんかどつと疲れたわね。さっさと帰ってお風呂に入りたい気分だわ。

「じゃあ私はこれで。あなたも早く自分の寮に帰った方がいいわよ?」

「ああ、そのことなんです……。」

「何?どうかしたの?」

「ラー・イヒーの寮ってどこちですか？」

全く、どうして私が気になる人は揃いも揃ってどこかぬけているの
だろうか。

第5話 入寮（後書き）

次回はちゃんとデュエルする予定。

正直ネタがないです。これぞ見切り発車の落とし穴。

それゆえ出て欲しいTFキャラとか使って欲しいデッキテーマを感想欄に書いて頂けると反映されるかもしれません。

第6話 女子寮での決闘（前書き）

お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます。
おかげでモチベーションがグンと上がりました。

今回はちょっと長めでお送りします。

第6話 女子寮での決闘

はきはきとした淀みのない声が授業中の教室に響く。

授業中とはいえど、今生徒の皆にカードの説明をしているのは先生ではない。

先生からの質問に対して解答中の明日香だ。

よくもまああそこ堂々と答えられるものだ。僕だったら・・・

「それでは、シニョール丸藤！」

「はっ、はい！」

「フィールド魔法の説明をお願いシマスーノ」

「え〜っと、ファイ、フィールド魔法はその、あの、え〜っと・・・」
あんな感じになってると思う。いや、流石にあそこまでひどくはないか。

満足な解答もできず、席に戻される翔に対して教室の大半の生徒が嘲笑を浴びせる。

クロノス教諭も煽ってやるなよ。

隣に座っている三沢もどこか面白くないような顔をしている。

「でも先生。知識と実践は関係ないですよ。だって俺もオシリスレッドの一人ですけど、先生にデュエルで勝っちゃったし！」

こういうことをさらりとと言える人がクラスに一人いるといいよね。
立場が上の人にも臆することなく向かっていける、僕もそんな人になりたかった。

そういう人になれていたなら僕は現在ののような、ガイドさんに自室の大部分を占領され、部屋の隅っこに隔離するようにテープで区切られた空間で暮らすような生活にはならなかったと思うんだ。

いや、諦めるな僕！きつとまだ間に合うはずだよ！

十代を見習うんだ！

僕に必要なのはあと一步の勇氣だけさ！

いくぞおらぁ見てろよあのガイドの野郎め！！

無理でした

もう無理だよアイツふざげんなよ。ハデスは流石に反則だろ。

自室の扉開けたら魔王がいましたとかどんなクソゲーだよ。

だいたい冥界の魔王が観光気分なんかで気軽に現世に降りてくるなよ。

使い魔いっぱい連れてくるしさ。

そんなこんなでまたもや部屋に戻れない僕は再び宛てのない散歩へ。
というかあんな魔界空間にいたくないよ！

友達少ないところという時悲しいよね。頼るところがないってさ。

少ないだけだからね？ぼっちじゃないよ？

ほら今だって僕のPDAが鳴って・・・

『丸藤翔ヲ預カッテイル。返シテ欲シクバ女子寮マデ来ラレタシ』

うん・・・、ぼっちかもしれない。

~~~~~

〈女子寮〉

何故女子寮に向かうためにわざわざ小舟を使わなきゃならないの  
だろうか。

みんなはそんな疑問を抱くかもしれないがその答えは簡単、正面近  
辺は堅牢な要塞の如き正門によって守護されているからだ。門は堅  
い錠前で封鎖されており、その周りはいくらもまた城壁のような高い壁  
が侵入者を阻む。

小舟なんて漕ぐのめんどろだろと思って正面まで回ってきた僕が言  
うのだから確かな情報だ。

ちくしょう、ショートカットくらいさせてくれでもいいじゃないか！

もう面倒くさいし帰りたんだけど、僕には今帰る場所が無い。だから時間潰しと、あわよくば十代の部屋に泊めてもらおうという魂胆でいる。

三沢？あいつの部屋はマジで狂気だよ？一回入ったことあるけど壁一面呪詛のように数式がびっしり書き込まれているとか正気の沙汰じゃないよ。

僕の部屋の魔界空間とタメ張るくらいのヤバさだと個人的には思っている。

実際僕の周りの悪魔達も三沢の部屋には絶対近付かないしな。あいつの部屋は一種の結界空間として確立している。

そんなこんなで船乗り場に到着。十代がちょうど小舟を出そうとしていた。

「今晚は十代。キミも呼び出されたのかい？」

「お、アキラじゃないか。お前もなのか？」

これはラッキー、便乗して船に乗ろう。オールは十代、キミに任せた。

「ねえあなた達、私達とデュエルしない？もし勝ったら風呂場覗きの件は大目にみてあげるわ」

「だから覗いてないって！」



「なんだかよく分からないが、まあいいや。デュエルなら受けて立つぜ！」

突然でよく分からないだろうから僕が解説しよう。

女子寮に着いたらそこには捕えられた翔の姿。彼の側にいた明日香、ジュンコ、ももえの言によると彼は風呂覗きをしたらしい。しかし翔は一貫してそれを否定。どうやら偽のラブレターで呼び出されたとのこと。覗きがバレたら下手すりゃ退学。そして上の会話である。

この何でもデュエルで解決するような流れは、異世界から来た僕には未だ不可思議なことの一つである。

デュエル万能説とでも言えはいいのだろうか。もはや犯罪をもデュエルで解決する勢いだ。

勝負は3本勝負で先に2勝したほうが勝ち。

先鋒は十代と明日香、中堅に翔とももえ、最後の大将に僕とジュンコ。

原因を作ったのは翔なのだから僕の番が来るまでに終わらせてくれ。

というかそれを期待して最後を選んだんだけど。

~~~~~

十代は原作通りサンダーシャイアントの活躍で勝利を飾り、まず1

勝。

しかし翔はももえのロックを突破できずに黒蛇病でLPを削り取られて負け。

これで1勝1敗。

くそう、楽しんでお泊り大作戦が挫かれるとは・・・、翔、キミには
がっかりだよ！

「明日香さん見ていてください！あんな奴すぐにコテンパンにしちゃいますよー！」

ジユンコはやる気満々のようだ。

僕はデュエル自体にはあまり気乗りしないけど、ちょっと試したいことがある。

それはずばり言ったもん勝ちの先攻奪取！

前ははそのこと知らなかったから後塵を拝したけど今回の僕は一味違うのですよ！

ふふっ、そのやる気を削ぐようで悪いですけど先攻は貰いますよ。

「僕のター「アタシのターン！ドロー！」……………」

ええ、嘘だろあの女。

僕が先に言ったのに被せてきやがった。なんて奴なんだ……………！

ジュンコ side

「アタシのターン、ドロー！」

「どうぞ。レディーファーストです」

フンツ、その余裕がどこまで続くものかしら。

相対するのは明日香さんが気にしているという男の一人。

それだけでも面白くないのに、あの胡散臭い紳士ぶった言動もどうも馬鹿にされているように感じるのが気に食わない。

ここでコテンパンに負かしちゃうからね！せいぜい明日香さんの前で無様を晒すといいわ。

「アタシはバード・フェイスを守備表示で召喚！これでターンを終了するわ」

《バード・フェイス》 ATK / 1600 DEF / 1600

「僕のターン、ドローします」

「僕はミステイク・パイパーを召喚。そして効果発動。このカードをリリースすることで自分のデッキからカードを1枚ドローします。そしてドローしたカードを互いに確認し、それがレベル1モンスターだった場合、僕はもう1枚カードをドローすることができません。僕が引いたカードは金華猫^{きんかひょう}、レベル1モンスターのためさらにカードを1枚ドロー！」

「カードを1枚セットしターンを終了します」

彼を守る壁モンスターはいない。伏せカードが唯の1枚だけ。

「自分からモンスターを墓地に送るなんてアンタ馬鹿？それとも女だからってアタシをなめてるの？」

「いえ、そういうわけではないのですけど・・・」

フンツ、すぐにその余裕面を崩してあげるんだからっ！！

「アタシのターン、ドロォ！手札からハ　パイ・レディを召喚！そして手札からハ　パイ・クイーンを捨ててデッキからハ　パイの狩場を手札に加え、発動するわ！狩場の効果によってフィールド上の鳥獣族モンスターの攻撃力・守備力が200ポイントアップ！」

《バード・フェイス》　　ATK / 1600　　　　ATK / 1800

《ハ　パイ・レディ》　　ATK / 1300　　　　ATK / 1500

「さらに手札から万華鏡・華麗なる分身・を発動！フィールド上にハ　パイ・レディが表側表示で存在する時、手札かデッキからハ　パイ・レディ、またはハ　パイ・レディ三姉妹を1体特殊召喚できるわ！来て！ハ　パイ・レディ三姉妹！！」

《ハ　パイ・レディ三姉妹》　　ATK / 1950　　　　ATK / 2

150

これがアタシのエースモンスター！これで勝負は決まったも同然ねっ！

「ハ　パイ・レディ三姉妹が特殊召喚に成功したことでハ　パイの狩場の効果が発動するわよ！ハ　パイ・レディ、またはハ　パイ・レディ三姉妹が召喚、特殊召喚された時、フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を破壊するわ！」

破壊したカードは聖なるバリア・ミラーフォース・

なるほど、アンタの余裕はこのカードが伏せてあったからなのね。でもこれでもうアンタの場はがら空き。

「これでアタシの勝ちよ！3体のモンスターでプレイヤーにダイレクトアタック！」

「アキラッ！！」

「アキラ君っ！？」

バカな男共が騒いでいるけどもうお終い。さあ悔しそうな顔を見せるといいわ。

しかしこの絶体絶命の状況にもかかわらず、あいつは不敵に笑っていた……。

アキラ　side

「これでアタシの勝ちよ！3体のモンスターでダイレクトアタック！！」

バード・フェイス。戦闘で破壊され墓地に送られた時にデッキからハ・パイ・レディを手札に加えることができるモンスター。コイツが出てきた時点で相手のデッキがハ・パイデッキなのは確定事項。

それならば警戒すべきはハ・パイの狩場による魔法、罾の除去と万華鏡やヒステリック・パーティーによるハ・パイの大量展開。

そこまでわかっている僕がまさか割られる可能性の高い伏せカード一枚のみで安心して場を空けるなんてするわけがないだろう。

「手札からバトルフェーダーの効果を発動！相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイスを終了させます」

《バトルフェーダー》 ATK/0 DEF/0

「なっ！ウソ！なにそのカード!?!」

予想外なことに驚きを隠せないジュンコ。
なんだろうね。まあ教えてあげる義理もない。

レディーファーストなんて言ったが先攻を取られた恨みは忘れてないんだ僕は。

「あつぶねえなアキラ！吃驚させるなよな!」

「僕はもうダメだと思ったっすよ。本気で退学を覚悟したっす!」

知らんがな。諦めたらそこで試合終了だと安西先生も言ってただろ。

「フンツ、でも所詮は時間稼ぎにしかならないわよ！アタシの場には3体のモンスター、アンタの場には攻撃力0のモンスターしかないんだから！」

なんかすごい負けフラグっぽいセリフを吐くなこの子。

「僕のターン。金華猫^{きんかひょう}を召喚し、効果発動！このカードが召喚に成功した時、墓地に存在するレベル1のモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚することができます。僕はミスティック・パイパーを特殊召喚し再び効果発動！パイパーをリリースしカードを1枚ドロロー！引いたカードは残念ながら魔法カード《イリュージョンの儀式》です」

「イリュージョンの儀式・・・まさか彼のデッキは！？」

明日香が何か気付いたようだね。まあ関係ないけど。

「手札からイリュージョンの儀式を発動！場^{フィールド}に存在するバトルフェーダーを生贄に捧げることで、サクリファイスを儀式召喚！」

怪しい壺から発生した禍々しい紫煙の中からサクリファイスが降臨する。

自分で召喚しといてなんだけど、これは間近で見ると相当に気持ち悪い。なんかドクドク脈打ってるし。ジュンコとかももえもあからさまに顔を顰めてキヤーキヤーと騒いでいる。

きつしよい言ってるなよ、可哀そうだろ。僕も言ったけど。

「さらに魔法カード、儀式の準備を発動！デッキからレベル7以下

の儀式モンスター、サクリファイスを手札に加え、その後自分墓地より儀式魔法カード、イリユージョンの儀式を回収しますね」

「うえっ！？ちよつとアンタまさか・・・！？」

そのまさかだよ。

「手札よりイリユージョンの儀式を再び発動！手札のミスティック・パイパーを生贄に捧げ、2体目のサクリファイスを降臨！」

2体目のサクリファイス。並べてみるとこりゃひどい光景だ。

僕は後ろ姿を見るだけだからまだマシだけど相對してる方はきつい
だろコレ。

実際ジュンコは嫌悪感を隠そうともしていない。

「サクリファイスの効果発動。1ターンに1度、相手のフィールド上に存在するモンスターを1体選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備することができる。いけ、サクリファイス！ハ　パイ・レディ三姉妹及びバード・フェイスを吸収！ダーク・ホール！！」

サクリファイスの口へとハ　パイ・レディ三姉妹らが吸い込まれていく。

僕の誤算は吸収させたのが人型モンスターだったということだ。

これはかなり視覚的、聴覚的にグロい。正直吐きそうになっているのはここだけの秘密だ。

「ちよつ、ちよつとアンタなんてことするのよっ！！」

思わずジュンコが叫ぶ。

ごめんね。僕もこんなことになるとは思わなかったんだ。
とうかコイツら本当に魔法使い族なのか？どっからどう見ても悪魔だろ。

うちの悪魔娘と趣味合いそっだし間違いないよ。

「サクリファイスはこの効果で吸収したモンスターの元々の攻撃力、守備力となります」

《サクリファイス》	ATK / 0	DEF / 0	ATK / 19
50 DEF / 2100			
《サクリファイス》	ATK / 0	DEF / 0	ATK / 1
600 DEF / 1600			

「バトルフェイズに移行。バード・フェイズを吸収したサクリファイスでハピィ・レディに攻撃！さらにもう1体のサクリファイスでプレイヤーにダイレクトアタック！イリュージョン幻想・トライアングル・X・エクスタシースパーク！！」

「きゃああっ！」

ジュンコ LP4000 1950

「僕はこれでターンを終了。そしてエンドフェイズ時、ぎんかびょう金華猫は自身の効果で手札に戻ります」

「クッ、負けないんだからあっ！アタシのターン！」

「アタシはハンター・アウルを攻撃表示で召喚！このカードの攻撃力は自分のフィールド上に表側表示で存在する風属性モンスター1

体につき、500ポイントアップするわ！さらにハ　ピィの狩場の効果によって200ポイント上昇！」

《ハンター・アウル》　　ATK/1000　　ATK　1700

「カードを1枚セットしてターンエンドするわ」

何か狙っているのかな。まあその罠ごと食い散らかしていきましよう。

「僕のターン。そのままバトルフェイズに入り、ハ　ピィ・レディ三姉妹を吸収したサクリファイスでハンター・アウルに攻撃！」

「もうそんな気持ち悪いモンスターにやられたりしないんだからっ！罠カードトラップ、ゴッドバードアタックを発動よっ！フィールドに存在する鳥獣族、ハンター・アウルを生贄に捧げてフィールド上に存在する2枚のカードを選択して破壊する！アタシが選択するのは2体のサクリファイスよ！」

鳥獣イカロスはその成果の代償に太陽アポロンの業火によってその翼を焼かれたとさ・
・・なんてね。

「ふふっ、どうよ！アンタのその気持ち悪いモンスターなんてアタシにかかればこんなものなんだからっ！」

正直ゴトバなんてガチカード入れているとは思わなかったけど、サクリファイスが破壊されるのは計算の内。

「まあ問題ありません。自分フィールド上のモンスターがカードの効果によって破壊され墓地に送られた時、手札の機皇帝ワイゼルインフニティ

の効果引鉄トリガーが引かれました」

「手札より機皇帝ワイゼルインフイニティを特殊召喚します」

《機皇帝ワイゼル》 ATK/2500 DEF/2500

「すつげえ！攻撃力2500のモンスターを簡単に呼び出すなんて
！」

「兄貴！そんなことよりもあのモンスターめちやくちやくこいい
つすよ！」

翔はやっぱ乗り物ビークロイドデッキ使うだけあつて機械族には良い反応するね。
それともあれか、下フランドつ端もある意味乗り物ビークロイドだしどこか波長があつた
のだろうか。

「バトルフェイズを続行。機皇帝ワイゼルでプレイヤーにダイレ
クトアタック！」

「きゃああああああつ！！！」

ジュンコ LP19500

「こ、こんなの！グーゼンよ！グーゼン！調子に乗らないでよねっ
！」

「やめなさいジュンコ、負けは負けよ。認めなさい」

流石は男前ヒロインと名高い明日香。

「やったー！これで僕は退学にならずに済むっすよ！ありがとうアキラ君！」

「やっぱお前強いな！なあ、俺ともデュエルしてくれよ！」

それに比べてキミらは相変わらずだな。

それと翔、恩を感じているなら宿を貸してくれ。

部屋が狭いというなら僕が三沢の部屋紹介してあげるからさ。

第6話 女子寮での決闘（後書き）

リアルに先行が早い者勝ちになっただら大会とかすごい物議を醸すことになるよなあとか馬鹿なことを考えてた。

追記

金華猫で追撃するの忘れてました。勝敗は変わらないしこのままにしておきます。

第7話 月一試験（前書き）

キャラ崩壊が激しい

きっと主人公もあんな状況にいれば性格が歪むと思うんですよ。

第7話 月一試験

今教室では肅々と月一の筆記試験が行われている。

現実世界では勉強なんてあまりしなかった僕だけど、誰かさんのせいで自室なのにあり得ないほどの肩身の狭さで部屋に戻りたくない僕は、時間潰しのために授業が終わった後も勉強を続けていたためか、すらすらと問題を解けている。

そのため終了時間よりも遙かに早く記述が終わってしまい、手持無沙汰な状態だ。

そんな時十代が遅れて教室にやってきた。
試験中だっというのにそのまま翔と普通に喋ってるけどいいのかし。

とそこで万丈目が一喝。

僕もそれはダメだと思っぜ十代。

~~~~~

午後2時から体育館で実技試験があるとのこと。

そのために本日購買部で発売される新カードでデッキを補強しよう  
と、筆記試験が終わるやいなや、多くの生徒が購買部へと駆ける。

まあ僕はいいや。どうせ持ってるカードだし。

三沢も行かないらしいので実技試験が始まるまで二人でご飯を食べ、そのまま試験会場へ。

実技試験は基本的に実力が拮抗しあう生徒同士の対戦が組まれるらしい。

僕の相手は三沢だった。まあ基本は寮で成績を競うらしいから不思議じゃないか。

ちなみに三沢とは今回が初めての決闘。

どのデッキを使うか迷ったけど、あいついつもメタデッキばかり使っているから偶には逆にメタられる側になってもらうのも一興だろうと思案。

問題は三沢はデッキを複数所持しており、どのデッキを使うのか分からないということ。

しかし今回、こんなこともあるのかと対三沢専用につけてやったこのデッキ。

これなら奴の弱点をピンポイントに突くことが可能なのだ！

フフフ、楽しみにしているといいき。

「一之瀬。キミとの決闘を心待ちにしていたよ」

「さっさと始めましょうか。・・・とその前に」



「何だ？」

「じゃんけんで勝った方が先攻ということだ」

同じ轍は踏みませんよ。

幼い頃はじゃんけんキングと謳われたその力、今とくと御覧じろ！

~~~~~

「「^{デュエル}決闘」」

「俺のターン！俺は手札よりオキシゲドンを攻撃表示で召喚！」

《オキシゲドン》 ATK/1800 DEF/800

「カードを1枚セットし、ターンを終了する。さあ一之瀬、キミのターンだ」

何も言わないでくれ……。そして察してくれ……。

「僕のターン。僕は憑依装着・ヒータを攻撃表示で召喚！」

《憑依装着・ヒータ》 ATK/1850 DEF/1500

ふっ、三沢よ。お前は硬派を気取っているが幼女に弱い事はリサーチ済みなのだよ。

今もヒータのウィンクで顔を赤くしたのを僕は見逃してないぞ。

フフフ、動揺するがいい。それこそ我が術中。

動揺させ相手のミスを誘い、己の有利な方向へと導く。

このデュエル、すでに僕の勝利が見えているな！

おい、そのこの悪魔娘よ。何故僕の事を呆れた目で見てるんだ！
完璧な作戦じゃまいか！！

「憑依装着・ヒータでオキシゲドンに攻撃！」

三沢 LP4000 3950

「これで僕はターンエンドです」

「クッ、おつ俺は相手の外見なんぞに惑わされんぞ！俺のターン！」

「俺はハイドロゲドンを守備表示で召喚しターンを終了する・・・」

《ハイドロゲドン》 ATK/1600 DEF/1000

うん、やはり三沢にいつものキレがない。

これは完璧に僕の術中に嵌まったな！！
だが追撃の手は緩めないよ！

「僕のターン、ドロー。僕は白魔導士ピケルを攻撃表示で召喚しま

す

《白魔導士ピケル》 ATK/1200 DEF/0

「なっ、ピケルだと!？」

ふっ、入学式の時自分から僕に最愛のモンスターを教えたのが運の
尽きさ。

貴様にこのカードは攻撃できまい!

「白魔導士ピケルでハイドロゲドンに攻撃!さらに憑依装着・ヒータでダイレクトアタック!」

三沢 LP3950 2100

「おい三沢!どうしたんだよ、お前らしくないぞ!」

先程試験デュエルで万丈目を倒し、ラー・イエローの昇格を言い渡されたのにも関わらず、その誘いを蹴った十代が三沢に檄を飛ばす。

おいやめろ。

じゃないと・・・

「・・・そうだな。俺らしくもない。俺は俺のデュエルをするだけだ!」

ほら三沢が冷静さを取り戻しちゃったじゃないか!!

「いくぞ！俺のターン！ドローカード！」

「俺は手札よりハイドロゲドンを召喚！さらに魔法カード死者蘇生を発動！蘇れハイドロゲドン！」

何故このタイミングで2体のハイドロゲドンを・・・

「まさか・・・！？」

「ふっ、気づいたようだな。俺は伏せカードリパースオープン！永続罠トラップリビングデッドの呼び声！自分の墓地よりオキシゲドンを攻撃表示で特殊召喚し、さらに魔法カード、ボンディングエイチツーオー-H2Oを発動！自分フィールド上に存在するハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体を生贄に捧げることで、自分のデッキよりウォーター・ドラゴン等特殊召喚する！いでよ！ウォーター・ドラゴン！！」

《ウォーター・ドラゴン》 ATK/2800 DEF/2600

突如として湧き上がった渦巻の中より荒々しい水龍が咆哮と共に現れる。

「ウォーター・ドラゴンの特殊効果を発動！このモンスターが場に居る限り、炎属性、炎族モンスターの攻撃力は0になる！」

《憑依装着 - ヒータ》 ATK/1850 ATK/0

「いけ、ウォーター・ドラゴン！憑依装着 - ヒータに攻撃！アクア・パニツシャ ！！！」

アキラ LP4000 1200

「俺はこれでターンエンドだ！」

ちよつとふざけすぎた。このままじゃ負けそうだな。

「僕のターン、ドロ。スタンバイフェイズ、白魔導士ピケルの効果により自分フィールド上に存在するモンスターの数×400ポイント回復します」

アキラ LP1200 1600

「手札より装備魔法、王女の試練を発動しピケルに装備！このカードは白魔導士ピケル、黒魔導師クランにのみ装備可能なカード。装備モンスターの攻撃力を800ポイントアップします」

《白魔導士ピケル》 ATK/1200 ATK/2000

「しかしウォーター・ドラゴンの攻撃力は2800ポイント！まだ足りないぞ！」

わかつとるって。

「手札よりカードエクスクルーダーを召喚し効果を発動。1ターンに1度相手の墓地に存在するカードを1枚選択し除外します。僕はハイドロゲドンを選択しゲームから除外！」

《カードエクスクルーダー》 ATK/400 DEF/400

ウォーター・ドラゴンは破壊され墓地に送られた時、墓地に存在するハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体、計3体のモンスターを特殊召喚する効果を持っている。

しかしその効果は素材の3体が全部墓地に存在している場合のみの話だ。

エクスクルダの効果によって墓地のハイドロゲドンが除外された今、ウォーター・ドラゴンはその効果を発動することができない。

さあ気にせず殺ろうじゃないか。

「さらに魔法カード、マジシャンズ・クロス！これは自分フィールド上に魔法使い族モンスターが2体以上表側攻撃表示で存在する場合、その内の1体を選択して発動できるカード。選択した魔法使い族モンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで3000ポイントに上昇する！僕はピケルを選択し、2体の魔法使いの魔力を集中！」

《白魔導士ピケル》 ATK/2000 ATK/3800

「攻撃力3800だと!？」

「バトルフェイズ！白魔導士ピケルでウォーター・ドラゴンに攻撃！」

三沢 LP2100 1100

「くつ、ウォーター・ドラゴンが！」

「マジシャンズ・クロスを発動したターン、選択したモンスター以外の魔法使い族モンスターは攻撃することができません。しかし、メインフェイズ2、王女の試練の効果が発動！装備モンスターがレベル5以上のモンスターを戦闘によつて破壊したターン、白魔導士ピケルと王女の試練を生贄に捧げることでデッキから魔法の国の王女・ピケルを特殊召喚！！」

《魔法の国の王女・ピケル》 ATK/2000 DEF/0

厳しい試練を乗り越えた幼女は立派な王女へと成長した。

「魔法の国の王女・ピケル……だと……」

その姿を見て呆然とする三沢。

どうしたんだ？あまりの神々しさに言葉もでないのかな。

「僕のターンはこれで終了します」

「俺の……ターン……。カードを1枚セットし、これで俺のターンは終了だ……」

「僕のターン。さあこれで終わりです。最後はあなたの好きなピケルで勝負をつけましょう」

フハハハハハ。こうもうまくいくと笑いが止まらんね。

あれ？僕今すごい悪役っぽくないか？

「一之瀬・・・お前は一つ勘違いをしている」

え？

「俺は確かにピケルが好きだ。大好きだ。だがしかし！俺が好きなのはあどけなさをその顔に残すピケルであって、そのような成長した姿に興味などないっ！！」

ええ、何コイツ大声でロリコン発言してるんだよ・・・。

ドン引きしたのは勿論僕だけじゃない。

周りの女の子たちも三沢をまるでゴミ虫のように見ている。

「俺はドローフェイズ終了時リバーズカード、破壊輪を発動！フィールド上に存在するモンスター1体を破壊し、互いにその攻撃力分のダメージを受ける。無論対象は魔法の国の王女・ピケルプリンセス！貴様だっ！！」

「ちよつ、え？おま・・・」

僕が何かを言う前に魔法の国の王女・ピケルの首に装着された無骨な首輪が眩い閃光を放ちながら爆発した。

ア キ ラ	三 沢
L P 1 6 0 0 0	L P 1 1 0 0 0

第7話 月一試験（後書き）

うわよう 〴〵 よつよい

書いてて気付いたのですか魔法使い族しか使ってないですね。

次からは他のテーマにも手を出さねば・・・。

追記

遼さんからのご指摘でマジシャンズ・クロスを使った際、ピケルの攻撃力が誤まったものを表記していたので修正致しました。ありがとうございます。

第8話 廃寮にて（前書き）

視点がころころ入れ替わる上に、ダイジェスト風になっているので原作を知らないと分かり難いと思われます。ご了承ください。

第8話 廃寮にて

僕は今自室でクリッターと戯れながらのんびりしている。

本当に久しぶりだ、こんなにはのぼのぼとした気持ちで余暇を過ごせるなんて。

それもこれも今現在、部屋にガイドさんがいないおかげである。

彼女はなにやら島内に面白い場所を見つけたらしく、その散策に向かっていった。

僕も来るかと誘われたが全力で断った。

アイツの言う面白い場所なんていうのは僕にとっては確実に面白くない、むしろ危険に満ちた場所である可能性が極めて高いということとはわかりきっている。

過去から何も学ばないほど僕は愚かじゃないんだ。

以前からもたまにふらりといなくなることはあったが、その時は大抵留守番として（というのは建前で恐らくは僕への嫌がらせのため）呼んだ悪魔を部屋に置いていくので、あまり心休まることはなかった。

しかし、今日の留守番担当悪魔はクリッター。

こいつは案外おとなしい奴で、今のところ僕の言うことも聞いてくれるただ唯一の存在である。

僕の愚痴にも嫌な顔せず付き合ってくれるし（元からあんま表情の変化なんてないけど）、何故こんないい子があの性悪のガイドさん

と仲がいいのか不思議でならないよ。

まあ他人の交友関係にとやかく言う資格なんてないからいいけど、できればもう少し彼女を抑えてほしいなあ、なんて思ったりはするけど。

あゝもうこのまま寝よう。心安らかな今のうちに……。

そんな僕の幸せタイムをブチ壊すかのようにPDAから着信を伝える音楽が流れた。

いや、この言い方では語弊があるな。別に着信に対して邪見に扱ったわけじゃないんだ。

僕が気分を害したのはいつの間やら着信音がデスクメタルな曲に替えられており、さらにはそれが寝転がり寛いでいた僕の枕元にて最大音量で流れ出した為である。その突如の音に吃驚した僕はベットから転げ落ち、強かに頭を打った。

探偵など必要ない。犯人は一人しかいない。

あの悪魔娘が居ないと油断した結果がこれだよ！！

とりあえず五月蠅い音楽を消すために電話に出る。着信は十代からだ。

「おっ、よかった。まだ起きてたか。俺達今から旧校舎の廃寮に探

検しに行くんだけどアキラも一緒に行かないか？幽霊に会えるかもしれないぜ？」

ああ、あの行方不明者が出ているとか闇のゲームの研究を行っているとかそういう噂のあるトコロか。

だが断る。

そんな場所にわざわざ足を運ばんでも似たようなもんが俺の周りにいっぱいいるからな。

僕はもう寝たいんだ。これ以上ガイドの魔の手が迫る前にぐっすり寝るんだ！！

十代 side

「アキラはもう眠いからパスだつてさ。まあいいや、俺達だけでいいか！」

「うう・・・やっぱりやめましょうよ兄貴」

「翔はやっぱり怖がりなんだな、まあ俺も怖いんだけどね」

「でも隼人が来るなんて意外だぜ。いつもは授業に出るのもめんどくさがるのに」

そんな雑談をしていたらあつという間に目的地まで着いていた。

入口の門は鎖で封鎖されている。

その奥に見える特待生の廃寮ってのはいかにも幽霊が出そうって感じな建物でワクワクしてきたぜ！幽霊じゃなくても面白いもんが出てくれれば俺は満足なんだけどな！

どうせならカードの精霊とかがいいなあ。

そんなことを考えていた時、館の窓に人影を見た気がした。

「ん？おい翔、隼人。今あそこの窓に何か見えなかったか？」

「ぼっ、僕は見てないっすけど・・・」

「俺もなんだなあ。多分気のせいだと思っただなあ」

「いや、でも確かにあそこに帽子被った赤い色の髪をした女の子が見えたような・・・」

「ちよっ、ちよっと兄貴ウソですよねっ？こんなところでそんな冗談言っのやめてくださいよ！！」

「まあ、入ってみればわかるさ。いくぞ！」

わからないのなら自分の目で確かめればいいことだしな！

「ちよっ、ちよっぱりやめましょっよ兄貴ィ〜」

「何言っただよ。ここまで来てやめられるかよ」

突然近くからガサリと音が鳴った。

「「でっ、でたあああああああああ！！」」

その物音に絶叫する翔と隼人。

「ちょっとあなた達そこで何してるの」

現れたのは明日香だった。

ここから立ち去れとやけに五月蠅かったけど明日香の去り際にその理由を聞いて納得した。

この廃寮で消えた生徒の中に明日香の兄がいるらしい。

だったら探検のついでに俺も明日香の兄さんの行方の手がかりになるようなモノを見つけてきてやるぜ！

「ほら、いくぞ翔。行かないなら置いていくからな」

「まっ、待ってくれよ！僕もいくよっ！」

その数分後明日香の悲鳴が館内に響いた。

外にいた娘を捕えて、遊城十代を呼び出す餌にするためにわざと悲鳴をあげさせ、私のトリックが仕込まれたフィールドに誘い込む。ここまででは計画通り。

あんな小僧に手間をかけるのも馬鹿らしいが依頼は依頼。あの遊城十代という小僧を打ち倒すのが今回私に依頼された仕事。私はプロだ。ギャラを貰う以上依頼は完璧に遂行する。

「我が名はタイタン。闇の決闘者^{デュエリスト}」

「貴様、明日香に何をした！明日香を返してもらっせ！」

「私に闇のゲームで勝てるならなあ遊城十代」

「望むところだ！」

ククク、小僧。貴様はすでに我が策の中。

どう足掻いても私に勝つことなどできやしないのだよ。

この偽千年パズルによる催眠術を用いてから私は敗北など一度としてないのだからな。

誰も自分の体の一部が消失する幻を見せたら戦意などすぐに喪失する。

「差し詰め地獄の一丁目とでも言っておこうか」

すでに場には万魔殿^{バンディモニウム}・悪魔の巣窟のフィールドカードの発動に成功した。

これで私の勝利は確定したも同然。

しかし、雰囲気を出すために焚いた煙がいつも以上に澱んでいた事
や、発動した万魔殿バンディモニウムの至る所から女の笑い声が聞こえるのはいった
い何故だ……。

~~~~~

十代 side

タイタンから受けたダメージによって体の一部が消失したように見  
え、更には場の息苦しさから奴の千年パズルの力は本物なのかと思  
ってしまったが、それがイカサマだとわかったならこっちのもんだ！

あいつの偽千年パズルを破壊すると消えていた俺の体が元に戻った  
し、奴自身も墓穴を掘り、自分自身がインチキ野郎だと自白した。

「くっ、私の仕掛けが効かない以上、貴様とデュエルを続けること  
など無意味な事！」

奴はそう言つと煙幕を張り、逃げようとしている。ここで逃がすか！

しかし、追おうとして走り出した矢先突然床が光り、突如発生した  
黒い渦に奴共々取り込まれ、気が付いたら辺り一面が暗闇の世界に  
立っていた。

「お前、性懲りもなくまたイカサマを！」

「ちっ、違う！私は何もしていない！……なっ、なんだ!？」

暗闇より現れた大量の小型モンスターが俺たちに向かって襲いかかってきた。

「くっ、来るなあ！助けて……うわあああああああ！」

タイタンがそのモンスターの波に吞まれ、次には俺の足元にも群がってきた。

（クリクリ〜！クリ〜！）

デュエルディスクにセットしたデッキからハネクリボーが実体化し、モンスターを追い払う。

「ハネクリボー？前に聞こえた声もお前だったのか？」

（クリクリ〜！）

俺の質問に同意するかのように頷いた後、再びモンスターを追い払い始めたが、数が多すぎる！ハネクリボーだけじゃ対処できない！

その時、突然暗闇の中から目を開けていられないほどの強烈なフラッシュと、けたたましいエンジン音と共に、漆黒のバスが俺の目の前にいるモンスターの群れを轢き倒していった。

あつぶねえ……あと数歩前に出ていたら確実に俺まで轢かれていたぞこれ……。

バスはなおもモンスターを轢き続け、大方片付いたあたりでようや

く停車した。

中から出てきたのは廃寮に入る前にちらりと見かけた赤毛の女の子。

「お前はさっきの・・・！いったい何者なんだ！？」

そいつは俺の質問を無視して倒れているタイタンをひきずり、バスの中へと引つ張り込んだ。

小さいのに力あるんだな・・・。

「おい、そいつをどうするつもりなんだよ！お前そいつの仲間なのか？」

その女はただニヤリと笑っただけで何も言わず自身もバスに乗り込み、来た時と同じように唐突に去っていった。

いったい何だったんだアイツは・・・。

アキラ side

真夜中過ぎになってガイドが帰ってきた。

数時間前にもう寝ると言っていた僕が何故彼女の帰宅に気付いたのか。

寝てなかったわけじゃないし眠りが浅かったわけでもない。むしろぐっすり熟睡していた。

でもあの悪魔娘、こともあるつかどうせ僕にしか聞こえないのだから遠慮する必要はないと、僕の部屋の前で全力でクラクションを鳴らしゃがったんだ。

その音に吃驚し、再びベットから転げ落ちた僕は先程と同じところを強打した。

あの野郎・・・!!

呼び出しに応じないといつまでも鳴らし続けるだろうし、僕は渋々頭を押さえながらも外に出た。

そしてそこには得意満面の笑みで、気絶している仮面の大男を、自分が捕まえたんだぞと言わんばかりに見せつけてくるガイドの姿があった。

わけがわからないよ。

どこから拉致ってきたんだ・・・ってあれ？よく見るとこの人確か似非闇のデュエリストのタイタンさんじゃないか？

というかこれはいったいどういう状況なのだろうか・・・。

ガイドさんからの説明を聞き終わった。

つまりはこじうことだ。

この島の奥にある廃寮から歪な魔の気配を感じたので探検に出発。同じ廃寮に来ていた十代とタイタンのデュエルに遭遇し、茶々を入れながら見学。

デュエル中、謎の異空間が発生。面白そうだからとの理由で異空間に侵入。

そこに倒れていたタイタンを現実世界の<sup>ペット</sup>下僕第一号とするため拾ってきたらしい。

なんでも悪魔族を使つてたことと何よりも声が気に入ったそうだ。

まあ突っ込みどころは多々あるがまずはこれを言わせてくれ。

「今すぐ拾つたところに返してきなさい」

ぶーたれる彼女の説得にはその晩だけじゃ足りず、次の日の朝までかかった。

第8話 廃寮にて（後書き）

タイタンは飼いたくありません。飼う予定もありません。

第9話 補習と捕囚（前書き）

試しにTFキャラ投入。



## 第9話 補習と捕囚

例の廃寮の件の翌日、立ち入り禁止区域に入り内部を荒らしたとして、十代と翔が泣く子も黙るアカデミア倫理委員会とやらに校長室まで引つ張られ、負ければ退学の制裁デュエルを受けることになったそうだ。

丁度いい機会だし、倫理委員会の方に先日自分がロリコンであると公言した奴がいると進言しておいた方がいいのだろうか。

それにしても十代の誘いを断っておいてよかった。こんなくだらないことで退学なんて洒落にならん。

でもうちのガイドさんも一枚噛んでいるので若干罪悪感を感じないでもないなあ。

できることならば助けになってやりたいが、しかし今僕はそれどころじゃない。

「おい、てめー早くしゃがめ！じゃねーと俺が帰れねえじゃねーか」  
「！」

何故なら今僕はとある不良娘に捕まっているからだ。

「いや、でもこれはキミの補習課題であって僕には関係な」ああ！  
「なんか言ったか？」・・・いえ何でもないです・・・」

どうしてこうなった。

事を説明するのは少しばかり時を遡らなければならない。

その日、デュエルアカデミアでは先日の子一試験の結果が生徒らへ伝えられた。

成績によつてクラス分けがされているこの学校の制度から、生徒の勉強意識を高めるために、成績の順位ははっきりと示される。

今も廊下に張り出された順位表を見て喜ぶ者、悲しむ者、何とも言えない微妙な表情をする者で混雑している。

成績上位者はやはりオベリスクブルーとライイエローで構成されており、オシリスレッドは・・・うん、触れないでやって欲しい。

ちなみに今回の1位は明日香だ。その下に僕と三沢が続いている。筆記の方は良かったんだけど実技で引き分けという結果になったからかな。

まあ十分だろ。この世界に来る前までの僕からは正直想像できない好成绩だし。

そんな成績優秀者たちには関係のない話だが、一部の下位成績者（主にオシリスレッド生徒）にとっては深刻な問題が発生している。

補習だ。

これは基本的に筆記試験の成績が悪かった生徒らが呼び出しを受け、その回のテストから出題された範囲内の問題プリントを山のように渡されて、それが終わるまで帰宅できないという、勉強ができない

者にとつてはまさに悪夢のようなイベントとして恐れられている。

十代も以前呼び出されたらしく、次の日ひどく憔悴したあいつの顔を見て、思わず昼飯を奢ってやったことがあつたっけかな。十代が5品目のランチを注文しようとした時に、その同情は奴の頭と同時に僕のチョップで一刀両断されたんだけど。

まあ頑張ってくれたまえよ補習受講者諸君。

僕はこれからのんびりとお昼寝タイムに入らせてもらおうよ。

おっとその前に十代と翔に制裁デュエルへの激励のメールでも送っておかねば。

別段心配はしていないんだけど、うちの悪魔娘が引つ掻き回したところもあるしね。

え〜と確かここに・・・

ガサゴソ……！なかは ゴミ ばかり！

あれ？僕のPDAがない。鞆に入れておいてはずなんだけど……。さっきまでは持っていたのは間違いない。

一応もう一度確認したが、鞆にもポケットにも入っていない。

あつ、教室の机の中に置きっぱにしたのか。

うわあ〜戻るのダルいっさね。

しかし無くすと面倒だ。早足で最後に授業を受けた小教室に向かう。

教室に入ると僕が座ってた座席には短髪の女生徒が座っていた。

おそらくは補習になったのだろう、机の上の大半は大量のプリントで占拠され、頭を抱えて唸っている。

「すみません。その机の中に僕のPDAを置き忘れたのでちょっとよろしいですか？」

「ああっ!？」

怖ええええええええ。

何この人怖すぎるんですけど。声かけただけでメンチ切られた。補習で苛立ってるのは分かるけどその怒りを関係のない僕にぶつけないでくれよ。

「ちっ、これのことか？」

彼女は舌打ちしながらも机から僕のPDAを取り出してくれた。

「あっ、はいそれです。ありがとうございます」

そう言っつてPDAに手を伸ばした僕だが、それは叶わなかった。彼女は突然何か閃いたようで、僕の天敵である悪魔娘と同種のニヤリとした嫌な笑みを見せ、PDAを僕の手の届かないところに掲げる。

「えっ? ちょっとあの、それ僕の・・・」

「交換条件だ。返して欲しかったらこのプリント手伝え」

ええ、なんぞそれ。

「いや、でもそれは流石にまずいんじ」やんのかやんねーのか、さつさと決めやがれっ！！」・・・はい、やらせて頂きます・・・」

この弱虫野郎！って言わないでくれ。この人めっさ怖いんだよ！

以前の世界でも僕はこういう不良と呼ばれる人種に関わった事ないんだ。というか関わらないように頑張っていたんだ。そんな僕に彼女の圧倒的な威圧感に耐性などあるはずもないだろう！

「じゃあこれがおめーの分な」

そういつてプリントを仕分けていく彼女。

おっかしいなあ。

僕の目が悪くなったんじゃないかなければ、どう見ても僕に九割九分九厘の量がまわってきているんだけど。というか彼女の分は1枚しかないじゃねーか！！

「なんか文句でもあんのか？」

「イエ、ナニモアリマセン・・・」

（数時間後）

「おっ、終わりました・・・」

憔悴した顔で彼女にそう告げる。しかし帰ってきた返事は・・・

「…ZZZ」

てめえこのアマ！人にやらせといて何自分だけ寝てんだよ！！

勿論そんなこと彼女が寝てても言えない。そんな僕はヘタレですが何か？

「ちよつと起きてください！え〜つと・・・」

そついやこの娘の名前知らないや。

とうか女生徒はみんなオベリスクブルー所属なので、ライイエロの僕とはあまり接点がなく、僕には明日香とその取り巻きのジュンコ、ももえくらいしか知り合いがない。よつて名前も知らない人が大半だ。まあこれは男子にも当てはまるんだけど。

プリントの名前欄を見る

『ジャツカル岬』

名前も怖えな。ジャツカルってなんよジャツカルって・・・。  
格闘家とかにいそつだ。

「ジャツカルさん、起きてください！終わりましたよ！」

そつ言つて肩を揺ると、彼女は伸びをしつつか気だるそつに起きた。

「んんつ？おお、終わったのか。やるじゃねーかおめー！」

そういつてゴシゴシ僕の頭を撫でる。

一般的に女性に撫でられるというのは男として嬉し恥ずかしな心境になるのかもしれないが、彼女の撫で方があたかも犬を撫でるそれで、一端の男である僕の心境は複雑である。

「これで帰れるぜ。いつもは補習なんてフケちまうんだが、前回それやって更にめんどくさい目に会ってな。助かったぜ、え〜っと・」

「一之瀬。ラー・イエローの一之瀬彰です」

「アキラか。俺はジャッカル岬ってーんだ。喧嘩百段、デュエル百段なんで夜露死苦頼むぜ」

今のよろしくは筆記体で表せば絶対に『夜露死苦』で表記されていたと思う。

なんといつかアレだな。

明日香も男らしいけど彼女は漢オトコらしいな。  
これが巷で噂の漢オトコの娘って奴なのだろうか。

女番長という言葉がよく合いそうだ。

「手伝わせちゃまった礼にメシでも奢ってやるからよ、ほらいくぞー！」

あれ？実はこの人良い人なのか？

あゝ、いるよね。外見不良だけど中身はいい人とか。なんだそこまで警戒する必要なかったんじゃないか。

しかし、食堂についた後で彼女は財布を忘れてきたことに気づき、結局は僕が清算する羽目になったにも関わらず高いメニューをドンドン頼まれたことで、その考えはもう一度再考する必要があるという結論に至った。



## 第9話 補習と捕囚（後書き）

主人公が受け身な性格なのでジャッカルさんのようなガンガン行動するキャラは相性が良さそう。

## 第10話 番長と舎弟（前書き）

デュエル中のみジャツカル岬さんの一人称はカタカナの「オレ」で表記します。

## 第10話 番長と舎弟

「わりな、俺が奢られる側になっちまってよ」

そう思っているならば少しは自重してくれないかなジャツカルさんや。

今も5品目のラーメンを啜っている彼女に心の中でそう呟く。

見ている実に気持ちのいい食べっぷりだけど、女の子なら少しは体重とか気にしないのだろうか。うちの悪魔娘でさえ最近部屋にある体重計をまるで親の仇かのような目で睨みつけている姿を見かける。要求する菓子類の量が最近めっきり減ったから気付いた事なんだけどね。

女性と二人きりでの会話なんていう高等スキル僕は持ち合わせていないんだけど、彼女の男勝りな性格のせいか、別段問題なく進んでいく。

といってもやはりデュエルアカデミアに通う生徒同士、内容はどうしてもそっち方面に偏るわけで……。

「だからよ。男なら回りくどいことなんかせず、殴り合いだろうが！」

「でもカードゲームには色々な戦術があるわけで、その手の絡め手もありなんじ」  
「ああん！？俺の意見に楯突くつてのかわ？」  
「……スミマセン、ゴメンナサイ……」

ごめん、やっぱり問題あった。彼女はかなりの俺様だ。

そんな性格を素直に反映している彼女のデッキは、門前払いやスキルドレインなどを利用した高攻撃力のデメリットアタッカーによるビートダウンらしい。

まさに小細工無用と言わんばかりでこの世界で好まれそうな男らしいデッキだな。

どこかの図書館エクゾ野郎とは大違いだ。

その後も僕は彼女の言に反論しようとしては脅され、矯正されるということを繰り返し、そろそろ部屋に戻ろうかという運びになった時、それは起こった。

「オシリスレッドの野郎どもはためーらの貧しい寮で侘しいメシでも食ってりゃいいんだよ！さっさとその席を空けやがれ！」

何事かと目を向けてみるとオベリスクブルーの男子生徒がオシリスレッドの男子生徒に絡んでいる。

ここは校舎内にあるどの寮にも属していない公共の食堂なんだけど、そんなことブルーの生徒には知ったことじゃないらしい。

「荒れてんなあ高田の奴。今回の成績散々だったからな」

「くくつ、だつせえな。デュエルは強いが素行も悪くて教師に嫌われてるし、イエローに格下げされるんじゃないか？」

周りのブルー生徒らの陰口が耳に入った。

なるほど、ただの八つ当たりか。実にくだらない。

絡まっているレッド生には申し訳ないが、面倒事は勘弁なんで僕はさっさと退散させてもらいます・・・

「おいてめー、うるせえんだよ！ここはブルーの食堂じゃねーんだ。席が空いてねーならてめーが失せやがれ！」

ええ、ジャツカルさん何してんの？

いや、その言動は素直に格好いいと思うんだけど、地味に僕の手を引つ張っていかないでくれ！

「なんだよお前は。女だからって理由だけでオベリスクブルーに入れた奴が粹がるんじゃないやねえよ！この補習女が！」

「ああん？てめーこそ調子こいてんじゃないやねーぞ！焼き入れられたのか？」

怖ええええええええええ。

そして手を放してくれジャツカルさん！いや、ジャツカルの姐さん！僕にはこの場の空気は無理です、勘弁してください！

「面白え、決闘<sup>デュエル</sup>で決着でもつけようつてか。身の程知らずめ！補習女が俺に勝てるでも思っているのか？それとも横に居るイエローの男が相手するつてか？俺はどっちでも構わないぜ？」

やめて！僕を巻き込まないで！

「はっ、誰が勝負を逃げるかよ！コイツは只の俺の舎弟だ。いっちょおめーとのデュエルで俺の強さを解らせてやろうと思つてな」

あるえ？よく分からんうちに僕舎弟にされてるんだが……。

「決闘は十分後、デュエル・フィールドでだ。逃げるなよ補習女！」

「てめーこそフケるんじゃないぞー！」

はあ……、ため息しか出ねえ。

まあ正直彼女に対する評価は変わったよ。

この娘は不良だけどレッド生を助けてやってた。

根はいい人なのかもしれない。所謂弱きを助け強きを挫くようなタイプ。

本当にアイツが煩かっただけという線も無きにしも非ずだが、その後お礼を言ってきたレッド生を若干恥ずかしそうにあしらっていたところを見ると、その可能性は排除していいだろうと思う。

今は約束のデュエル・フィールドへ向かっている最中。

デュエル百段を自称していた彼女だけど、補習を受けていた事を考えると不安がないでもないな。かと言って代わりに僕がデュエルするといっても彼女は納得しないだろう。

これは彼女の喧嘩なのだから。

まあ十代と同じで勉強はできないけど実践は強いのかも知れん……が念の為。

「ジャツカルさん、ちょっといいですか？」

「なんだよ？」

「これは今からの喧嘩<sup>デュエル</sup>へ向けて、貴方の舎弟（納得していないけど）からの激励です。受け取ってください」

僕が渡したのは一枚のカード。

きっと彼女なら使いこなしてくれる、そう信じて。

「ちっ、しゃーねーな。折角の舎弟からの贈り物だ。貰っておいてやるぜ」

若干表情に変化が見られたな、照れているのかな？  
意外な一面が見られたものだ。ふっ、役得役得。

そこに彼女から鋭い一蹴。

「ぐっ……、なっ、なぜ僕を蹴るんですか!？」

「てめーの顔が気に食わなかったただけだ!」

高田 side

約束の時間の少し前に奴らはやって来た。  
逃げ出さずに来た事だけは褒めてやるよ。

「ふんっ。逃げ出さずに来たようだな補習女」

「誰がテメーみたいな三下から逃げるって？頭わりーのか？」

「減らず口を叩くなよ雑魚が！」

俺を怒らせたことを後悔させてやる。

「<sup>デュエル</sup>決闘」

先攻は俺が貰うぜ。

「俺のターン、ドロー！俺はモンスターをセットしターンを終了する」

「オレのターン！オレは不屈闘士レイレイを攻撃表示で夜露死苦！」

《不屈闘士レイレイ》 ATK / 2300 DEF / 0

ふんっ、あの脳筋っぽい馬鹿女と同じくモンスターもただ攻撃力しか取り柄のない雑魚か。

「喧嘩上等！さあっ伏せモンスターに一発ぶっこめっ！」

「俺の伏せモンスターは魔導雑貨商人だ」

《魔導雑貨商人》 ATK / 200 DEF / 700



「はっ！そんな雑魚に何ができるってんだ！」

補習女には解らんかも知れないがな。

「俺は魔導雑貨商人の効果を発動！自分のデッキをめくり、一番最初に出た魔法、罨カード1枚を手札に加え、それ以外のカードは墓地に送るぜ。1枚目、マスクド・ドラゴン仮面竜！2枚目、軍隊竜！3枚目、巨大ネズミ！……

……中略……

9枚目、手札抹殺！魔法カードだ！よってこのカードを手札に加えて残りのカードは墓地に送らせてもらっぜ」

「テメー自分からモンスターを墓地に送るとか舐めてんのか？まあいい、不屈闘士レイレイは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になるぜ。オレはカードを1枚セット、これでオレのターンはオシマイだ」

「俺のターン！俺は手札より魔法カード、手札抹殺を発動！互いのプレイヤーは手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドロウする。俺は手札6枚を捨て、6枚を新たにドロウ！」

ククツ、良いカードを引いたぜ。後は俺の切り札を手札に加えさせてもらうだけだ。

「俺はクリッターを攻撃表示で召喚。不屈闘士レイレイを攻撃！これでターンを終了するぜ」

《クリッター》 ATK / 1000 DEF / 600

「さっきから弱小モンスターばっか並べやがって。やる気あんのか  
デミー！」

「吠えてる女！今にわかるさ」

「その前にシメてやんよ！オレのターン、ドロー！」

「オレはLP1000を支払い、リバーズカード、スキルドレインを発動するぜ！このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上のモンスターの効果は無効化される」

ジャツカル岬 LP4000 3000

「こいつは強えぞ！オレは手札より神獣王バルバロスを攻撃表示で召喚するぜ！」

《神獣王バルバロス》 ATK / 3000 DEF / 1200

なっ！？攻撃力3000のモンスターを生贄もなしに召喚したただと！？

「神獣王バルバロスはレベル8のモンスターだが、元々の攻撃力を1900にすることで生贄なしで召喚することができるのさ。だが、その攻撃力減少効果はスキルドレインに無効化され攻撃力は3000に戻るぜ！」

「いけつ、神獣王バルバロス！雑魚モンスターを蹴散らせ！トルネード・シェイパー！！！」

高田 LP4000 2000

「ちっ！」

「これでオレのターンは終了だ。さっさと諦めたらどうなんだよ？ ああ？」

「フンツ、馬鹿が。もうお前は俺の策の中にいるんだよ！俺はクリッターが墓地に送られたことで効果発動！クリッターの効果は墓地で発動するため、スキルドレインでは無効化されない！デッキより攻撃力1500以下のモンスター、カオス・ネクロマンサーを手札に加えさせてもらう。」

「そして俺のターン！俺は魔法カード大嵐を発動！フィールド上の魔法、罫カードを全て破壊する！」

「ちっ、スキルドレインが！」

これで邪魔なカードは存在しない。覚悟しやがれ。

「俺は手札より、カオス・ネクロマンサーを召喚！」

《カオス・ネクロマンサー》 ATK/0 DEF/0

怪しい笑い声をあげながら1体の悪魔が現れる。

「はっ！攻撃力0の雑魚に何ができるってんだ！」

「これだから学のない馬鹿な女は困る。カオス・ネクロマンサーの

攻撃力は自分の墓地に存在するモンスターカードの数×300ポイントの数値になる！俺の墓地のモンスターは全部で15体！よって攻撃力は4500ポイントに上昇！」

《カオス・ネクロマンサー》 ATK/0                    ATK/4500

「なっ！？」

「バトルフェイズ！カオス・ネクロマンサーで神獣王バルバロスを攻撃！ネクロ・パペットシヨール！」

ジャッカル岬    LP3000                    1500

「くっ、オレのバルバロスがやられただど…！？」

「ハーツハハハハツ！攻撃力が4500まで上昇したカオス・ネクロマンサーを止めることなどできやしないぞ！俺はカードを1枚セツトしターンを終了する。先程の言葉を返させてもらっぞ！さつさと諦めたらどうなんだ？」

スキルドレインを破壊した今、奴に俺のネクロマンサーを止める手段などないだろう。

馬鹿な女が、補習を受けるような分際で俺に楯突いたことを後悔させてやるっ！！

ジャッカル岬    side

「オレのターン、ドロー！」

まさかバルバロスがやられるとは……。

「オレはゴブリン突撃部隊を守備表示で召喚し、カードを1枚セツト……これでターンを終了するぜ……」

《ゴブリン突撃部隊》 ATK/2300 DEF/0

くそっ、ネクロマンサーを倒す手段がない。今は耐えるしかねえ……。

「ククッ、さっさとサレンダーしたらどうなんだ？今土下座して謝れば許してやらないこともないぜ？」

「うるせえ！テメーなんぞに下げる頭なんて持ってねーんだよ！」

<sup>アキラ</sup> 舎弟も見てるんだ。

兄貴分のオレが無様な姿を晒すわけにはいかねーんだよ！

「はっ、じゃあ更なる絶望をくれてやるよ！俺のターン、ドロー！」

「俺は手札より魔法カード、手札断殺を発動！互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドロー！そら、これによってまた墓地にモンスターが2体増えたぞ！」

《カオス・ネクロマンサー》 ATK/4500 ATK/5100

「さらに今のドローで引いたコイツを再び召喚してやるよ！来い！」

カオス・ネクロマンサー！！」

《カオス・ネクロマンサー》 ATK/0          ATK/5100

DEF/0

「なっ！？攻撃力5100のモンスターが場に2体だと！？」

「終わりにしてやる！バトルフェイズ！1体目のカオス・ネクロマンサーでゴブリン突撃部隊に攻撃！そして2体目のネクロマンサーでプレイヤーにダイレクトアタック！ネクロ・パペットショー！！」

そんな簡単に負けてたまるかよ！

「リバーズカード発動！永続<sup>トラップ</sup>罖血の代償！500ライフポイントを払うこと<sup>ライブ</sup>によってモンスターを1体を通常召喚するぜ！手札より<sup>ライブ</sup>光神機 - 桜火<sup>おし</sup>を守備表示で召喚！このカードは生贄なしで召喚した場合、エンドフェイズに墓地に送られる」

ジャツカル岬          LP1500          1000

《<sup>ライトニングギア</sup>光神機 - <sup>おし</sup>桜火》 ATK/2400          DEF/1400

しかし桜火ではネクロマンサーの攻撃に耐えられねえ。すぐに戦闘破壊される。

「ちっ、耐えやがったか。しかし時間稼ぎにしなければならないぜ？どうせ次のターンでテーマは終わりだ！」

「更に俺はリバーズカード発動！永続<sup>トラップ</sup>罖グラヴィティ・バインド - 超重力の網 - ！これによってフィールド上に存在する全てのレベル

4以上のモンスターは攻撃をする事ができなくなる！カオス・ネクロマンサーのレベルは1！グラヴィティ・バインドの影響を受けない！これでテメーお得意のモンスターによる攻撃も封じられたぜ？」

畜生、もう打つ手がねえ……。

舎弟の手前格好良いところみせてやろうと大口たたいたのにこの様かよ……。

アイツも今のオレを見て失望してるのかな……。

ふとアイツを見る。

アイツはオレのこんな様を見た今も尚、真剣な目で決闘を見守っていた。デュエル

まるでまだオレの勝利の可能性を信じているかのよう。

はっ、舎弟が諦めてねえのにこのオレが諦めちゃうわけにはいかねえよな？

「オレのターン！ドロー！！」

……つつ、このカードは！？

「オレは魔法カード、死者蘇生を発動！墓地より蘇れ！神獣王バルバロス！！」

《神獣王バルバロス》 ATK/3000 DEF/1200

「ハッ、いまさらバルバロスを召喚したところですでにカオス・ネクロマンサーの攻撃力は5100！バルバロス程度では手も足もでないどころか、そもそもグラヴィティ・バインドによって攻撃することもできないんだぞ！」

んなこたあわかってんだよっ！

「オレはカードを1枚セットし、ターンを終了するぜ」

「ククツ、結局は何もできず仕舞いじゃないか！さあもういい加減こんなくだらん決闘デュエルを終わらせてやるよ！いけ、カオス・ネクロマンサー！神獣王バルバロスに攻撃！ネクロ・パペットショー！！！」

ふっ、残念だがオレは諦めたわけじゃないぜ？

オレの場にはアイツから受け取ったカードが伏せてあるんだからな！

「今だ！リバーズカード、オープン！速攻魔法、禁じられた聖杯！フィールド上に表側表示で存在するモンスター、カオス・ネクロマンサーを対象に選択して発動する！選択したモンスターの攻撃力は400ポイントアップする代わりに、そのモンスターの効果は無効化されるぜ！！！」

彼の聖杯に口をつけた者は、その力の代償に己が能力を失うという。

「なっ！？ネクロマンサーの効果は無効化するだっ！？」

《カオス・ネクロマンサー》 ATK/5100                      ATK/400

「カオス・ネクロマンサーは効果が無効化されれば只の攻撃力0の弱小モンスター！ぶち込め、神獣王バルバロス！反撃のトルネード・



シエイパー!!」

百獣の王が放つその紅き神槍が容易く悪魔を貫く。

「ぐわああああああっ!!」

高田 LP2000 0

「ばっ、馬鹿な!?!この俺が補習を受けるような女に負けるだなんて……。あり得ない!何かの間違いだ!!」

はっ、安いプライドにしがみつき負けたことも認められねえ屑にも興味なんぞない。

俺は屑に背を向けてデュエル・フィールドを後にし、出口の前で生意気にも笑って俺を待っている舎弟のところへ向かう

「どつよ?かるく、ぶちのめしてやったぜ!」

アイツはそれを苦笑で受け止め、俺は再び足蹴りを食らわせた。た。

第10話 番長と舎弟（後書き）

もうジャッカルさんが主人公でいいんじゃないかな。主人公より主人公してる。

ちなみに

高田純二郎 T F 3まで登場してたデツキ総量60枚のリクル使いさん。

まあ今回はリクルーター出しませんでしたけど。

第11話 寮昇格デュエル（前書き）

サブタイトルが毎回テキストだなと思う今日この頃。

## 第11話 寮昇格デュエル

只今ライイエローVSオシリスレッドの野球対決が行なわれている。

バッターボックスに入りバットを構える僕に相對するのは、先日負ければ退学の制裁タッグデュエルを見事な勝利で収めた十代だ。ちなみにその相方の翔はキャッチャーとしてデュエルの時と同じく十代を支えている。

野球のセンスなどない僕は十代の速球に成す術もなく3振。

というか十代の球を打てる奴がそもそも少ないのだから仕方ないだろう。

同じチームの野球経験者でも打てないとか、正直十代は野球選手を目指した方がいいと思う。分裂魔球なんてものをリアルに見られるとは思わなかったよ。

ぶんっ ぶんっ

出番を終えた僕はベンチで休憩していた生徒と交代し、体育場の外れでだらだらと試合を眺めている。丁度三沢の打順が回って来たようだ。アイツは運動神経もいいからな。うちのチームで十代にスポーツで立ち向かえるのはキミしかいない・・・頑張ってくれ。

ぶんっ ぶんっ

そして今まであえて無視していたがお前は何をしているんだガイドさんよ。

野球に興味を抱いたのか横で素振りを始めたようだが、お前は参加できないからな？

身体が小さいせいでバットに振り回され、フラフラして見ているこっちが怖い。

一端の悪魔だけに力だけはそれなりにあるからバットがすっぽ抜けたりでもしたら惨事になりかねん……

スポーン！

「いくぞ〜2番！食らえ！俺がヒーローだっ！！」

「来い一番！すでに貴様を倒す方程式は出来上がっている！！」

カキーン！

一本のバットと一つの打球。

それはほぼ同時同方向にすっ飛んでいき、体育場の横を丁度通りかかったクロノス教諭にまずはバットが腹に、そして追撃として打球が顔面に直撃した。

うわぁ〜、アレ大丈夫なのか？

ってかどうすんだよガイドさんよ。お前のせいだから……

ガイドの姿が消えている。

僕の周りには誰もおらず、空飛ぶバットの発射先を追ってきたらしいみんなの視線が僕に突き刺さっている。

あの野郎……逃げやがったな……。

ねえこれ僕が責任取んなきゃいけないのかい？

この世の中というものはなんて理不尽なのだろうか・・・そうは思わないかい？

溜息をつきつつ僕も十代らと共に先生に駆け寄っていく。

「すみませ〜ん、大丈夫ですか〜！って、げえっ!？」

「あ〜っ！またおまえ〜！ドロップアウトボーイ〜ナノネ!!」

「すみません！打ったのは俺なんです」

十代に遅れて駆けてきた三沢がそう説明する。

「バットは僕のせいではないのですが間接的に僕の監督不行届とも言えなくもないです」

言い訳じみた事を言いながら僕も駆け寄る。まあ本当のことなんだけどな。

「シニョール三沢にシニョール一之瀬・・・彼らは抜群に成績優秀な生徒ナノ〜ネ。万丈目達の代わりとして使えるカモ〜ネ！」

「治療費は俺ら持ちですか？」

マジかよ。唯でさえ金がない僕に高い治療費など払えないぞ。

というか直接的原因は僕じゃないんだよ！請求先は彼女の地元である地獄にお願いします。

「ノン！ノンノンノン！ノン！成績優秀者には寛容なのがこの学

園デース。その代わり・・・」

うわゝ、なんかメンドイことに巻き込まれそうだ。  
まあ治療費請求されるよりは良いけど。

僕らがクロノス教諭に要求されたことはずばりオベリスクブルーへの寮入れ替えのデュエルを受けるということだ。

三沢は万丈目、僕は先日ジャツカルの姐さんに敗れた高田純二郎という生徒が相手らしい。高田君とやらは前回のテスト成績も悪かったらしいし、素行も悪く、おまけに補習受けてた姐さんに負けたつてのを先生に知られたのがまずかったのかね。まあ仕方ないね、それがこの学園が声高に掲げる実力主義つてもものさ。

寮入れ替えデュエル当日

なにやら三沢のデッキが海に捨てられたとかなんとかで十代が騒いでいるが、僕はそのことを気にしていられる精神状態ではない。顔はやつれて目には隈を作り、ふらふらした状態で今にも倒れそうである。

興味ないと思うけど聞いて欲しい。痛みを分かち合っただけで欲しいんだ。昨夜、寮の入れ替えのことをどこからか聞いてきたらしいジャツカルの姐さんが、自分の舎弟なら受かって当然だろうとわけのわからない理論を唱えつつ、わざわざイエローの寮まで一足早い寮昇格祝いの言葉をかけに来てくれた。

それはいい。うん、そこまではいいんだ。

問題はその時僕は対高田用に、トーチ・ゴーレムとヘル・テンペストのコンボで奴の大量のモンスターが投入された総数60枚にも及ぶデッキを根こそぎ破壊し尽くしてやるうと所謂【トーチ・テンペスト】を鋭意作成中であり、それがビートダウン上等が信条である姐さんに見つかり、彼女の逆鱗に触れたことだ。

それから姐さんの説教という名の暴力でボロボロにされ、途中から帰って来たうちの悪魔娘も喜々としてそれに加わり、ガイドが見えないジャッカルさんは僕がガイドに対して吐いた暴言を自分に対してのものだと勘違いをして、さらにエスカレートしていった・・・その結果が今の僕なのさ。

正直早朝まで説教されるとは思わなかったよ・・・。  
そして解放されるための条件として彼女に言われた事が一つ。

ド派手なのを一発ぶち込んでこい

うん・・・どうすればいいんだろうかこれは。

彼女はバルバロスがお気に入りみたいだし、その手の獣や獣戦士で機嫌でも取ってみるのがいいのかな。

獣というか何気に動物好きだということがつい最近発覚したんだ。  
彼女は気付かれていないと思ってているみたいだけど、PDAに装着している小動物ストラップがバッグからはみ出していたのを僕は目撃している。

その時はそのストラップを見たのかと怒号と共に詰め寄る彼女に対



して、殴られそうだったし見ていないって嘘をつき、見事に殴られる未来を回避したんだ。

うん、殴られはしなかったんだ。

蹴りが飛んできただけで。

ちくしょう！どっちにしるダメなんじゃねーか！！

「何故この俺が補習女の腰巾着相手に寮入れ替えのデュエルをしなければならんだ！」

まだクロノス教諭に食いかかっている高田クンよ。キミの元気を僕に少し分けておくれよ。そしてその質問の答えは自分の胸に聞いてみるといい。偶々今回の相手が僕だったというだけの話さ。

「くそっ！もういい！こいつを倒して俺こそがオベリスクブルーに相応しい事を証明してやるっ！早くフィールドへ上がれイエロー！」

キミがぐずってたから待ってたんだけどなあ・・・なんて言ったらまたギャーギャー騒ぎそうだし、素直に彼に従いデュエルフィールドに上る。

反対側のデュエル・フィールドで三沢と万丈目がデュエルを開始したようだ。

じゃあ僕らも行きますか！

「決闘<sup>デュエル</sup>!!!」

「俺が先攻だ！俺は巨大ネズミを攻撃表示で召喚！さらに永続魔法、暗黒の扉を発動！このカードが存在する限り互いのプレイヤーはバトルフェイズにモンスター1体でしか攻撃できなくなるぜ。カードを1枚セットしターンを終了する」

《巨大ネズミ》 ATK/1400 DEF/1450

何かもう後攻がデフォになりつつあるな。それに疑問を抱かなくなってきた。

いかん、これは悪い傾向だぞ。

「僕のターン、ドロ！僕はレベル8の最上級モンスター、神獣王バルバロスを通常召喚します。この場合バルバロスの攻撃力は1900ポイントとなりますがね」

《神獣王バルバロス》 ATK/1900 DEF/1200

「バルバロス・・・！お前もそいつを使うのか忌々しい！」

ふふっ、キミの敗北の記憶の象徴であろうこのモンスターを使ってあげよう。

そして姐さんへのご機嫌取りのために申し訳ないけど犠牲になってもらう！

決して憂さ晴らしのための嫌がらせじゃないんだよ？

「バトルフェイズ！神獣王バルバロスで巨大ネズミに攻撃！トルネ

ード・シエイパー!!!」

「リバースカードオープン！永続罠<sup>トラップ</sup>、スピリットバリア！自分フィールド上にモンスターが存在する限り、俺は戦闘ダメージを受けない！さらに破壊された巨大ネズミの効果により、デッキより攻撃力1500以下の地属性モンスター、共鳴虫<sup>ハウリング・インセクト</sup>を攻撃表示で特殊召喚する！」

《共鳴虫》<sup>ハウリング・インセクト</sup> ATK/1200 DEF/1300

「ハハハッ！これでお前は俺にダメージを与えることなどできないぞ！」

あゝ、こりやだるい。<sup>ハウリング・インセクト</sup>共鳴虫も戦闘破壊された時、デッキよりモンスターを特殊召喚する効果を持っている。つまりは戦闘以外の方法でモンスターを破壊するか、スピリットバリアそのものを破壊しない限り奴にダメージは与えられない。

なんとかかせんといけんですね。

「メインフェイズ2に移行し魔法カード、強欲で謙虚な壺を発動！デッキトップより3枚のカードをめくり、そのうちの1枚を手札に加えます。1枚目、死皇帝の陵墓！2枚目、素早いモモンガ！3枚目、光のピラミッド！僕は光のピラミッドを選択し残りをデッキに戻します」

「僕はカードを2枚セットしてターンを終了です」

「俺のターン！ククッ、良いカードを引かせてもらったぜ。俺は手札よりUFOタートルを攻撃表示で召喚し、更に魔法カード強制転

移を発動！互いに自分フィールドのモンスター1体を選択し、そのモンスターのコントロールを入れ替える！お前の場にはモンスターが1体のみ！さあそのバルバロスを寄こすがいい！」

《UFOタートル》 ATK/1400 DEF/1200

ああやっぱ入っていたか。リクルーターに強制転移は最高の相性だしね。  
でもそれはやらせないよ。

「お断りします。<sup>トラップ</sup>畏発動！無力の証明！これは自分フィールド上にレベル7以上のモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動できるカード。相手フィールド上に表側表示で存在するレベル5以下のモンスターを全て破壊します」

フハハハハッ！さあ自身の無力を味わうがいい。  
雑魚では強者に敵わないことを教えてやろう。  
うん、完全に悪役のセリフだこれ。

「くそっ！共鳴虫にUFOタートルが破壊された！」  
ハウリング・インセクト

「強制転移は互いに1体以上モンスターがいなければ効果は不発に終わりますよ」

「ちっ、これで俺のターンは終了だ・・・」

相手の場はがら空き。スピリットバリアの効果も発動できない今がチャンス。

「僕のターン。僕は永続畏光のピラミッドを発動！そして光のピラ

ミッドが場にある時、500ライフポイントを払う事で手札よりア  
ンドロ・スフィックス、そしてスフィックス・テレーリアは特殊召  
喚することができます！」

アキラ LP4000 3000

《アンドロ・スフィックス》 ATK/3000 DEF/2500

《スフィックス・テレーリア》 ATK/2500 DEF/3000

2頭の対を成すスフィックス。

それは片や獅子の顔を、片や女性の顔を持つ裁きの神獣。

「なっ！上級モンスターを一瞬にして2体も召喚するだっ!?!」

「しかしアンドロ・スフィックスもスフィックス・テレーリアも召  
喚、特殊召喚したターンには攻撃できず、更には光のピラミッドが  
破壊された時、2体とも破壊しゲームから除外しなければなりません  
がね」

強力なモンスターにはそれなりの代償があるのは仕方ないね。

この世は等価交換なのさ。

まあ禁止カード指定されてる奴らなんかはその摂理を捻じ曲げてる  
んだだけ。

「そして手札より魔法カードサイクロンを発動します！」

「くっ、しかし暗黒の扉を破壊したところでアンドロ・スフィンク  
ス、スフィックス・テレーリアは自身の効果で攻撃することができ  
ず、スピリットバリアを破壊されても、暗黒の扉がある事によって  
いくら貴様がモンスターを並べようと攻撃は耐えられる！」

「何を勘違いしているのかは知りませんが僕が破壊するのはそれらのカードではありませんよ。僕が選択するカードは光のピラミッドです」

光のピラミッドがその輝きを失い、半透明のガラスの破片となって崩れ落ちる。その守護すべきピラミッドの崩壊と共に2対のスフィンクスも粒子となり崩れていく。

「はっ？馬鹿なのかお前は！折角出した上級モンスターを自ら破壊しようというのか？」

「自分フィールド上のアンドロ・スフィンクス及びスフィンクス・テレーリアが同時に破壊された時、500ライフポイントを払うことによつて、デッキよりスフィンクス・アンドロジュネスを場に特殊召喚します。いでよ最強のしもべにして神に仕えし獣の長よ！」

アキラ LP3000 2500

《スフィンクス・アンドロジュネス》 ATK/3500 DEF/3000

呼び出されしは獅子の顔、背後に女性の顔、2頭の神獣の顔を併せ持つ神獣の長。

その咆哮によりデュエルフィールド全域が震え立つ。

「くっ、攻撃力3500のモンスターだと？しかしまだだ！俺のライフは4000ポイント！まだ耐えることができる！次のターンで奴をつ！」

甘いね。次のターンがあると思ってるなんてうちのガイドさんお気に入りチョコ菓子より甘いよ。

「スフィックス・アンドロジュネスの効果発動！このカードが特殊召喚に成功した時、500ライフポイントを払う事によってエンドフェイズ終了時までこのカードの攻撃力を3000ポイントアップさせます」

アキラ LP2500 2000

《スフィックス・アンドロジュネス》 ATK/3500 AT  
K/6500

そして最後はド派手にですよね、姐さんよ。

「さらに手札より魔法カード、野性解放を発動！フィールド上に表側表示で存在する獣族・獣戦士族モンスター、スフィックス・アンドロジュネスの攻撃力を自身の守備力の数値分だけアップさせます。スフィックス・アンドロジュネスの守備力は3000！よって攻撃力が3000ポイントアップ！！」

《スフィックス・アンドロジュネス》 ATK/6500 95  
00

「なっ！？攻撃力9500だとっ！？」

暗黒の扉の効果により1体でしか攻撃できないのならばその一回の攻撃で相手を叩きつぶせばいいだけの話。

「いけ！スフィックス・アンドロジュネスでプレイヤーにダイレクトアタック！試練の問いかけ！スフィックスの咆哮！！」

「嘘だ、この俺がイエローに格下げだなんっ・・・うわあああああ

あああああつー！」

高田 LP4000 0

丁度三沢の方も彼の勝利で終わったようだな。

明日香の証言によると三沢のカードを捨てた犯人は万丈目らしい。  
三沢のカードである証拠に捨てられたカードには彼の数式が書かれていたようだ。

「万丈目！カードを大切にできない者はデュエリストとして失格だぞー！」

三沢の発言に万丈目が崩れ落ちる。

なんかめでたしめでたしな雰囲気になってるけど、空気を読まずに言わせて欲しい

カードに落書きをしているお前が言うなど。

その後結局三沢はオベリスクブルーへの参入を辞退したらしい。  
なんでもブルーに上がるのはこの学園で一番になってからとのことだ。

うん、中々立派な信念をお持ちのようだな。ロリコンだけど。

僕？僕は貰えるもんは貰う主義なのでブルーに昇格しましたが何か？



ハツハツハ！ガイドよ！貴様にはそのイエロー寮の部屋はくれてやるう！

僕は豪華絢爛なブルー寮に移らせてもらう。正直あの派手さは性に合わないけど、悪魔達と同居よりは遙かにマシなことは分かりきっていることさ！

そう、この時僕は知らなかったんだ……。  
夢を見ていたんだ、一時の夢を……。

すでにブルー寮までも悪魔<sup>ガイド</sup>らの勢力が及んでいるなどは露知らず。

## 第11話 寮昇格デュエル（後書き）

小学校のころ振ってたバットがすっぽ抜けて大きなガラス窓を粉砕した思い出があったりなかったり。

無力の証明はお気に入り。そこにロマンがあります。

## 閑話 クリスマス（前書き）

主人公と周りの人との関係がいまいち描写しきれないまま20話後半まで至ってしまったため、閑話という形でその点を補っていきたいと思います。後付みたくなってしまいましたがどうぞご理解、ご了承ください。

## 閑話 クリスマス

休暇・・・なんて甘美な響きなのだろうか。

その麻薬の様な中毒性を持ったモノに長期間浸かっていると、生活リズムが崩れるのは仕方のないことだと思わないかい？

恐れずと言うならば、理由もなく夜遅くまで起きていたり、朝は日が高く昇るまで布団の中で過ごすのは一学生として正しい姿だと言えるのではないか。

僕もその例に漏れず、冬休みに入ってからはっきりとだらけきつた不健康生活を送っている。好きな時間に起き、好きな時間に食べ、そして好きな時間に寝る。

素晴らしい。

これこそ僕が求めていた樂園エデンだったんだ！

しかし今朝はその例外だ。

現在時刻午前6時10分也。

別段生活態度を改めようとか、何か朝早くから用事があって起きたのではない。

僕がこんな時間帯に起きてしまった理由は本当に単純で、外部からの物理的衝撃によって叩き起こされただけのことである。

僕の部屋にはブルー寮だけあって、結構上質のベッドが設置されている。されているのだが僕がそのベッドを使用した事は一度もないのだ。これはイエロー寮に在籍していた時も同じなのだけど、僕の部屋のベッドはガイドさんに占領されている。よって僕は仕方なしにそのベッドの横に寝る事が習慣化されていた。

その事が今回僕が害を被る要因になった。

寝ぼけたガイドさんがベッドから転がり落ちてきて僕の腹に肘鉄と頭突きを食らわしてくれたのさ。

やられた時はこんちくしょうと悪態を吐いたんだけど、その罵倒対象のガイドさんが寝ぼけ眼で明らかにこちらの話を聞いていないことが分かると、とりあえず彼女の首根っこ掴んでベッドに投げ捨てる。

くそう、まだ全然寝ていたい時間だけど今の衝撃で完全に目が覚めてしまった……。

妙に外が明るいなと疑問を抱き、カーテンをひよいと除けて見ると外には雪が積もっている。真っ白な雪に光が乱反射してここまでの光量になっているようだ。

そんな光景を見てとある事を思い出した。

「そういえばもう明日はクリスマスじゃないか……」

僕の家では毎年イヴの夜には家族全員で食卓を囲み、最後にクリスマスケーキで絞めるのが恒例となっていたっけな……。

普段はあまり意識しないよう心掛けているんだけど、こういう家族なんか絡んでくるイベントの時はどうしても故郷の哀愁を感じてしまう。

父さん、母さんは元気にしているだろうか。

ボスッ

後頭部に衝撃。

なんだと思い振り返ってみるとどうやらガイドさん専用のクリボー枕を投げられたようだ。

なんじゃこの野郎！人がセンチメンタルな気分には浸っている時に！

えっクリスマスとはなんだって？

なんだ知らないのか。

「アレだ・・・イエス・キリストの降誕を祝うキリスト教の記念日の事さ」

僕の説明を聞いてもよくわからないといった御様子。彼女ら精霊には誕生日という概念がそもそもないようなのでわからないのも無理ないか。

「まあ僕の国ではただの娯楽としての意味合いが強かったけどね。毎年その頃になると街中はクリスマスツリーやイルミネーションが飾り付けられたり、店内ではクリスマスソングが流れることが恒例

だったな。家族とのんびり過ごしたり、恋人とデートしたり友人同士で馬鹿騒ぎしたりと色々さ。まあ普段より豪華な食事を食べて、クリスマスケーキで締めるのは多くの国共通だったけどな」

びくっ・・・

「子供にとってはクリスマスの前の夜には良い子のもとへプレゼントを持って訪れるサンタクロースが来てくれる嬉しい日と認識しているけどな。寝る前に枕元に靴下を置いとくと寝ている間にサンタがその中にプレゼントを入れてくれるってね」

びくびくっ・・・

こいつ・・・豪華な食事とケーキ、プレゼントのところだけ反応しやがったな・・・。

「ちゃんと聞こえなかったようだからもう一度言っけどサンタは良い子のところにしか来ないからな」

がばっと起き上った後、それなら自分は大丈夫じゃないかと得意気に大して起伏のない胸を張るガイドさん。

おまえ良い子じゃねーから！

お前で良い子と言えるレベルならこの世は聖人だらけになるぞ。こんなに争いに塗れた世界になっているはずがないだろう。

なんでそんな自信満々で自分の事を良い子だと思えるのだろうか不思議でならない。もはや価値観がどうかといったレベルではなく、

脳の回路が僕らと全く異なったものなんじゃないかな。

昨日だってブルー寮の男子大浴場に大量のモリンフエンを放ったせいで未曾有のバイオハザードになったのを忘れたとは言わせないぞ。髪を洗い終えた僕がいざ風呂に浸かろうと振り返った時、どれだけ吃驚したと思っっているんだ。思わず足を滑らせてお尻を強打したせいで今も痛いんだからな！

「プレゼントはアレだけど今日の夕食メニューはそれなりに豪華だつてコックさんも言ってたし、ケーキもちゃんと出るらしいからそれで我慢しなさい！」

なんだねその反抗的な目は。じゃあ今日一日大人しくできるっていののか？

僕のそんな挑発に彼女はそれくらい余裕といった表情で答える。

いいだろう。今日は僕がお前の行動を監視するからな。

問題行動を起こさなければとりあえず「今日は」良い子であったと認めようじゃないか。

僕とガイドの視線が互いの中でバチバチと火花を散らす。

こうしてイヴの聖戦は幕を開けた。



ここまでのガイドの素行評価結果。

パジャマを脱ぎ散らかす - 1

朝食でニンジンを残す - 1

そのニンジンをこっそりと僕の皿へ移す - 1

クロノス教諭の紅茶にタバスコ投入 - 1

二度寝する - 1

ベッドの上で菓子を食い散らす - 1

雪だるまを室内に持ち込む - 1

雪合戦にて雪玉の中に石を混入 - 1

クロノス教諭の服の中に雪投入 - 1

悪魔を呼び出し賭博開始 - 1

僕の読みかけの本の朶を移動させる - 1

クロノス教諭の移動先にバナナの皮設置 - 1

大広間に絵画に潜む者を取り付ける - 1

クロノス教諭の秘蔵ワインセットを盗む - 1

うん……。

普段の行動と大差ないとか、お前本当に自信があつたのかよ！

昼食の締めにはプリンを舌で転がしているガイドさんに心の中で突っ込みを入れる。

ちなみにこのプリンは僕が最後に味わって食べようと思って取っておいたやつだ。

アイツの分は疾うの昔に彼女の腹の中に収まっている。

もうコイツの行動を監視する必要があるか甚だ疑問になってきたのは自然な発想だとは思わないかい？

ここまで好き勝手やらかしておいて、良い子評価を貰おうと思ってるのならば、残りの時間で魔王を討伐して世界を救うくらいインパクトがないと僕の評価は覆りそうにないよ。

満足気にお腹をポンポンと撫でた後、駆け足で外に飛び出していった彼女をすぐに追わなかったのはそういう理由からだ。

「はあ……」

しかし監視するといった手前、あの悪魔娘をこのまま放置して周りの人に被害が及ぶのは僕の望むところではない。重い足を引きずりながら彼女の跡を追う。

追跡の手が一步遅れてしまったため、あの悪魔娘の姿を見失ってしまったようだ。目を離すとあつという間にどこかに行ってしまうその性質は、まるで飽くなき冒険心と好奇心を持った僕の親戚のまだ幼い少年を彷彿とさせる。その少年もそうだったが、ガイドさんも確実にデパートとかで迷子なるタイプだという根拠のない自信が僕の中にある。僕の親戚の子と違うであろうことは、うちの悪魔娘の場合、勝手にいなくなったあげく、迷子の放送で僕の名を流すことだろうといった点だ。全くもって性質が悪い。

僕の視界には一面の雪景色と、雪の積もる坂道をトメさんが台車を押しながら歩いているのが見える。

雪道に台車なんて危ないなあなんて思っていたら、案の定車輪が脱輪し、今にも坂道を転げ落ちそうになっている。

「あららららららら、待っておくれえ〜！」

これはまずいと僕も全速力で現場に急行。

「大丈夫ですか？手伝います」

「ぼうや、ありがとね・・・！」

「どういたしまして・・・というか全然止まらない・・・！」

路面が氷結しているようで二人がかりでも台車が止まらない！

力を入れた時、氷に足を掬われた。

ヤバイ！このままだと一気に転げ落ちてしまう！

もう駄目だと思ったその時、突如台車の動きが停止した。

事態が理解できずとも危機は回避できたことに安堵し、息を吐く。

背後を振り返ると、ジャイアント・オークが台車を抑えており、オークの肩に座っている悪魔娘がこちらを見ながらニヤニヤ笑っている。

なんかその顔はムカつくけど助かったことには変わらない。礼は言っとくよ。

「危なかったわねえ、ぼうやが来てくれて助かったよ。そいじゃ悪いけど坂の上までお願いできるかしら」

「了解です……。ていうか結構重い……。！」

よくこれを一人で運んでいたもんだな。トメさんもある意味超人の一人なのかもしれない。

この後何故かそのままの流れでトメさんの仕事を手伝うこととなり、折角のクリスマススイブを労働に費やすという実に日本人らしい行動をしてしまい、涙を流したのは詳しくは話さないよ。ていうか話したくないよ！

夕食はかなり豪勢なモノだった。

ローストポークに鶏のロール焼き、サーモンのマリネにじゃがいものチャウダー、ベルギー風ビーフシチューに野菜と白身魚のテリーヌなどなんでもござれだ。無論デザートもムースケーキやスフレ、クリスマスケーキもきちんと用意されている。この時ばかりは素直にブルー寮で良かったなあと思う現金な僕がいる。

料理を適当に自室に持って帰ると涎を垂らしたガイドさんが右手にナイフ、左手にフォークを握りしめて今か今かと待ち構えていた。

動物への餌付けを趣味にしている人ってこういう気持なのだろうか。

「夕食終了」

満腹になったガイドさんはそのまま就寝にはいるようだ。

僕は疲れを癒すためにお風呂へ行き、身体と共に心の洗濯をする。

その帰りに何故かブルー寮に訪れていたトメさんに呼びかけられた。

「ああ、ぼつや良かった。ちょっとこつちおいで」

なんだなんだと近づく。

「どうしたんですか？ブルー寮になにか御用でも？」

「黄金の卵パンって知っているわよね？」

「ああ、はい」

黄金の卵パン。

ドローパンと呼ばれるコロッケ、焼きそば、ピザなどのパンが外からは見えない袋に隠されている購買部の名物パンの中で、デュエルアカデミアで飼われている黄金の鶏、それが一日に一度しか生まないという黄金の卵を具に使った卵パンのことだ。

かなりの美味であることが知られているが、何分一日に一つのみしか存在せず、更には運任せでしか手に入らないため、あのクールビューティーで知られる明日香でさえこのパンを手に入れた時は快哉を叫びながら飛び跳ねるというレアな現場を目撃したことがある。

十代なんかは十数回連続で引き当てていたけどな。

「学校がお休みだからね。その黄金の卵パンを作る必要がないから、余ったこの黄金の卵で毎年プリンを作っているのよ。今日のお礼に

特別サービス！このプリンをあげちゃうよお！」

黄金の卵で作った黄金の卵プリン。

見た目からまさに黄金であり、表面もぷるんぷるんで凄く美味しそうだ。

じゅるり……。

昼間に僕のプリンはガイドに食べられたしなあ……どうしようかなあ……。でもトメさんを助けたのは結局アイツだしなあ……。

「有難うございます。あの……できたらこれ包んで貰えますか？」

自室に戻るとどうやらガイドさんは既に夢の中のようだ。

彼女の枕元には朱い靴がその口を大きく広げて置いてある。もしかしてこの靴型の悪魔は靴下の代わりなのか？どう考えてもこいつにプレゼント入れるとそのまま胃袋の中直行なんだけど、そこらへんはどうなのだろうか。

更に床には輪っか状に配置した縄の中心にバナナを置き、バナナを取ると縄が絞まるという、漫画でしか見た事のない馬鹿なトラップを設置している。

コイツはサンタを一体何だと思っているのだろうか。というか捕獲してどーすんだよ……！！

呆れながらもとりあえず彼女の枕元にプレゼントを置く。

全く寝顔だけは可愛いんだけどなあ……。

乱れた掛け布団を直しつつ、良い夢を見てるためか口元がにやけた彼女に囁く。

「メリー・クリスマス」

その翌朝、またしても朝早くに叩き起こされた僕が目にしたものは、自分の考えは間違っていないなかっただろうという自慢げな顔をしたガイドさんが、お一口一杯にプリンを頬張っている姿だった。

ああよかったね。

とりあえず彼女の頭をポンポン撫でて僕はまた眠りについた。

## 閑話 クリスマス（後書き）

閑話をいつ入れようと迷った挙句に今日まで至った経緯。

気になって調べてみたら家にはモリンフェンのカードが18枚ほどありました。

12話の後に入れようとしたら間違えた・・・だと・・・。  
まあいいか。



第12話 精霊との決闘（前書き）

やっとシンクロエクシーズを使う機会が到来です。

## 第12話 精霊との決闘

数日前アカデミアは冬休みに入った。

入学式が秋からだだったので、始めに来る大きな休みというのが冬休みというのは日本で学生をしていた僕にとってはなんだが新鮮な気分だ。

生徒の大半は自宅へ帰省しており、極一部の生徒のみが残っている状況なので、アカデミアが存在するこの島の人口は現在限りなく少ない。

無論帰る場所などない僕は居残り組で、先日越してきたオベリスクブルー寮で寂しい休暇を送っている。

いや、寂しいといっても部屋の中には僕一人だけじゃなく、僕より先に引越しを済ませていたガイドさん一派がいるから密度は高いんだ。

部屋が広がった分僕の居住スペースも広くなると浮かっていたんだが、そんなことはなかった。

広がったならもつと仲間を呼び出せるじゃないとガイドさんが良くない方向にハッスルしたせいだ。引越し祝いを兼ねていたようでいつも以上に悪魔達を呼び出し、どこからかくすねてきたのかその手には酒瓶をいくつか抱えている。

お前酒飲めるのか？

「無理無理無理！もう嫌だ降ろして！誰か助けて！」

何故僕がこんな事を悲痛に叫んでいるのか。

それは悪酔いしたガイドさんが呼び出したディスクライダーのバイクを搔つ払い、僕を乗せて盗んだバイクで走りだしたせいだ。

やめて！こいつ絶対大型二輪の運転免許なんてもってない！

というかまず足がボードに全く届いていない時点で致命的な気がする。

お前には自前のバスがあるだろ！そっちに乗れよいや乗ってくださいお願いします！

僕のそんな叫びはお構いなしに彼女のテンションは駄々上がりなように、ケタケタと笑い声をあげながら夜道を爆走する。

カードの精霊が見えない人が今の僕の様子を見たら、空気椅子で透明な何かに抱きつきながら高速移動している馬鹿に見えるのだろうか。想像してみたらすごいシールドだ。いや、一種のホラーか。

冗談抜きで学園の七不思議に認定されそうだから嫌だ。すでに以前からイエロー寮は悪魔の館に繋がっているとか、アカデミア内で幾多の異形のモノを率いる百鬼夜行の主を見たとか、若干心当たりがないでもない噂が流れているんだからやめてくれ！

ていうか噂流したの誰だよ！精霊が見える奴がいるにしては曖昧な

情報しか流れてないから、中途半端に精霊の存在を感じれる人がいるのだから。そう言えば十代の同室のコアラ君は精霊の声が聞こえるんだっけか。

「ってホントにこんな事考えている場合じゃない！おい前見る前！」

僕らの進行方向先に黒い影が通るのを目撃したんだ。

しかしガイドの奴はこちらを見ながら笑い声をあげるだけでハンドルを切る様子すらない。

ちよまつ！

死にたくない僕はなんとかハンドルに手を伸ばし、ブレーキをかけながら、影にぶつかる前にハンドルを切る事に成功した。

「なっ、なんだ！？うわああああああっ！」

その影はオベリスクブルーの男子生徒だった。

えっと確かキミは佐藤・・・いや高橋君？最近ブルーに入ったばかりだからほとんどの人の名前覚えてないや。まあ元から自分に関わる人以外は覚える気もないんだけど。

「だっ、大丈夫ですか？えっと高橋君だっけ・・・」

「キミはブルーの生徒か？たっ、助けてくれ！サイコショッカが、サイコショッカ が追って来るんだ！」

キミは一体何を言っているんだ。

その後彼（高寺君というらしい）の説明によると、冬休みに入る前に彼率いる高寺オカルトブラザーズというデュエルの起源とも言われているカードの精霊を研究する3人のグループが、それまでの研究成果を確認するためにウイジャ盤を使い、サイコシヨツカの精霊を呼び出そうとしたそうだ。

精霊との交信には成功したものの、『3体の生贄を捧げる さすれば我は蘇る』という言葉をカードの生贄のことだと思い承諾。しかし後日になって団員の姿が一人ずつ消えていき、それに恐怖した彼はフェリーによって脱出を試みたものの、先回りしていたサイコシヨツカの姿をフェリーの中に発見。慌ててアカデミアまで引き返して今まで逃げ回っていたらしい。

何故彼らは数多に存在するモンスターの中でサイコシヨツカというモンスターをチョイスしたのであるうか。シヨツカの精霊に会いたいなんて奇特な奴は中々いないと思うんだけど。

それに、ただカードの精霊が見ただけなら僕の部屋に来ればよかったのにな。

あいつらなら生贄なんて要求しないぞ。その分精神力がガリガリ削られていくけど。

ていうかこの件お前が一枚噛んでるんじゃないだろうな悪魔娘よ。そんな僕の疑いの眼差しに対して憤慨したように睨み返ってくるガイドさん。

どうやら関係ないようだ。

まあシヨツカーは悪魔族じゃないし彼女の専門外なのかね。

バタリ

そんなやり取りをしていた時、何の前触れもなく高寺君が倒れた。突然のことに驚き顔を上げると、そこには黒いコートとつばの深い帽子をかぶったサイコシヨッカの精霊が立っていた。

「ほう、もしやキミの横にいる彼女はカードの精霊かね？これは興味深い。3体目の生贄としてはこの男よりキミの方が良さそうだ」

ええ、、どうということだよ。

というかレベル6の分際で生贄3体とか何様のつもりなんだろうか。確かに効果は凶悪だと思っけどせめてもう少しの攻撃力が、神の名を冠してくるくらいしないと生贄3体も要求してはいけないと思うんだよ僕は。

173

場所は現在島全体に電気を送る送電施設に移動している。

あの場から逃げるといふ手もあつたんだけど、ついて来いと言われてノコノコついて来てしまった、ノーとは言えない日本人代表の僕。いや、流石に人質を取られているから迂闊な行動ができなかつただけなんだ……。

ホントだよ？

「くくくつ、私が勝つたらキミを我が復活の贄にさせてもらうぞ」

「じゃあ僕が勝つたらあなたに拉致された人返してください」

一応関わっちゃったしね。このまま見捨てるのは流石に寝覚めが悪そうだ。

それに今回は観客もいないし、相手が相手だ。普段自重しているカード達を使ってやるいい機会だろう。誰にも追求なんてされないしね。

「デュエル  
決闘」

「私のターン！私は怨念のキラードールを攻撃表示で召喚！さらに永続魔法エクトプラズマーを発動！」

《怨念のキラードール》 ATK / 1600 DEF / 1700

「私はカードを1枚セットしターンエンド。エンドフェイズ時エクトプラズマーの効果発動！各プレイヤーはエンドフェイズ時に1度、自分フィールド上の表側表示モンスターを1体を生贄に捧げ、その元々の攻撃力の半分のダメージを相手に与える！私は怨念のキラードールを生贄に捧げ、その攻撃力の半分を相手に与える！」

アキラ LP4000 3200

「そしてキミが受けたダメージが私の復活への力となる！」

うおっ、僕の腕が透け始めた。これが闇のゲームってやつ？

今更ながらばくけっこうヤバい状況なんじゃないか？

正直泣きながら土下座でもすれば助けてくれるんじゃないかという僕の目論見は脆くも崩れ去ったわけか……。

「僕のターン、ドロー！」

今回は本気で行かせてもらおうからキミも力を貸してくれ。

「僕は地獄のツアーガイドを通常召喚します」

《地獄のツアーガイド》 ATK/1000 DEF/600

やあガイドさんよ。こうしてデュエル・フィールドで会うのは初めてだな。

ただその手にぶら下げているとっくりとおちよこは置いてから出てきて欲しかった。

「地獄のツアーガイドが召喚に成功した時、僕はデッキよりレベル3の悪魔族モンスターをデッキより特殊召喚することができます。まあこの効果で呼び出したモンスターの効果は無効化されますがね、おいでクリッター」

ガイドが一杯酒を仰いでから面倒くさそうに指をパチンと鳴らす。彼女の後方の空間が歪み、そこから飛び出してきたバスからクリッターが降車する。

《クリッター》 ATK/1000 DEF/600

「さらに手札のA・ジェネクス・バードマン<sup>アリー</sup>の効果を起こ動。自分フィールド上に存在するモンスター1体を手札に戻すことによってこのカードを特殊召喚できます。僕はクリッターを手札に戻し、チューナーモンスター、A・ジェネクス・バードマン<sup>アリー</sup>を特殊召喚！この効果で特殊召喚された場合、このカードがフィールドから離れたと



きにゲームから除外されます」

《<sup>アリュール</sup>A・ジエネクス・バードマン》 ATK/1400 DEF/400

「チューナーモンスター・・・何なのだそれは・・・」

「それは今からご覧あれ。僕はレベル3の地獄のツアーガイドにレベル3、チューナーモンスター<sup>アリュール</sup>A・ジエネクス・バードマンをチューニング！」

バードマンが光に溶け、三つの輪となりガイドを囲む。合計レベルは6。

「見やがれ、これが権力だ！シンクロ召喚！であえゴヨウ・ガーディアン！」

《ゴヨウ・ガーディアン》 ATK/2800 DEF/2000

久しぶり、禁止入りして以来だね。

現れた歌舞伎役者のように見得を切るモンスターに心の中で呟く。

まあお前は色々おかしかったからな、ステータスとか効果とか。

「なっ！？何が起こったのだ！？」

「シンクロ召喚とは、自分フィールド上に存在するチューナーとチューナー以外の1体以上のモンスターのレベルを合計し、そのレベルと等しいモンスターを融合デッキより特殊召喚することです。さながらフィールドにモンスターを揃える必要がありますが、融合のカードを必要としない融合召喚とでも言えば解り易いのでしょうかね」

説明フェイズは疲れるよ。

「バトルフェイズに移行。ゴヨウ・ガーディアンでプレイヤーにダイレクトアタック！ゴヨウ・ラリアット！」

サイコ・シヨッカー    LP 4000            1200

「僕はこれでターンエンド。自分で発動した魔法でやられるなんてざまあないですけど勝負は非情なのですよ。エクトプラズマーの効果によつてゴヨウ・ガーディアンを生贄に捧げ、相手に1400ポイントのダメージを与えます」

生贄なんて真つ平御免なのさ。

自分の保身がかかっている以上、本気で行かせてもらいますぜ。

「そうはさせん！私はエクトプラズマーの効果発動前に速攻魔法非常食を発動！エクトプラズマーを墓地に送ることで1000ライフポイント回復する」

サイコ・シヨッカー    LP 1200            2200

わお、案外しぶといね。流石にエクトプラズマーの除去手段は持っていたか。

だけどそれによつてフィールドにはゴヨウ・ガーディアンが健在だ。

「私のターン、ドロー！」

「フハハハッ！ついに来たようだな！我が復活の儀式が始まる！私は怨念のキラードールの効果を発動！このカードが永続魔法の効果

によってフィールドから墓地に送られた場合、次の自分のスタンバイフェイズに墓地から特殊召喚する！」

《怨念のキラードール》 ATK/1600 DEF/1700

「そして私は怨念のキラードールを生贄に人造人間・サイコ・シヨツカ を攻撃表示で召喚！」

相対していたサイコシヨカ の姿が消え、送電塔の電気が暴走し始める。

暴走した電気エネルギーがフィールドを穿ち、先程よりも存在感が増したサイコシヨツカ が姿を現した。

《人造人間・サイコ・シヨツカ》 ATK/2400 DEF/1500

「もう少しだ！あとはキミを倒すことで我が復活は完了する！私は永続魔法強者の苦痛を発動！相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力はレベル×100ポイントダウンする！」

《ゴヨウ・ガーディアン》 ATK/2800 DEF/2200

「バトルフェイズ！私自身でゴヨウ・ガーディアンに攻撃！サイバー電脳エナジーシヨック！！」

アキラ LP3200 HP3000

自分で攻撃ってアンタ……。

「これで私はターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー」

サイコシヨツカ が場に存在する以上、互いに罠カードは発動できない。

その上に強者の苦痛ね。また厄介なカードを持ちだしてくれたものだよ。

「僕は手札より魔法カード、闇の誘惑を発動！自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後手札より闇属性モンスターを1体選択して除外します。カードを2枚ドローし、先程手札に戻したクリッターをゲームから除外」

ごめんよクリッター。でもおかげでいいカードが引けた。

「さらに魔法カード、ダーク・バーストを発動！自分の墓地に存在する攻撃力1500以下のモンスター、地獄のツアーガイドを手札に回収します」

すみませんがもう一度働いてくださいガイドさん。  
いつも食っちゃ寝イタズラしかしてないんだから。

「僕は地獄のツアーガイドを召喚し、効果を発動！デッキよりチューナーモンスター、ダーク・リゾネーターを特殊召喚します」

《地獄のツアーガイド》 ATK/1000 DEF/600

《ダーク・リゾネーター》 ATK/1300 DEF/300

「チューナーモンスター……。再びシンクロ召喚とやらを行うっ

もりなのか!」

「いえいえ。ツアーガイドの効果で特殊召喚したモンスターはシンクロ召喚の素材として用いる事ができないという制約があるのですよ。しかし、シンクロ召喚ができないならば他の召喚方法で新たなモンスターを呼び出すだけです」

今こそかっつとビングだぜ!っていうところなのだろうか。  
いや、やっぱやめよう。恥ずかしすぎるだろアレ。

「僕はレベル3の地獄のツアーガイドとダーク・リゾネーターをオーバーレイ!2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!エクシーズ召喚!現れるNo.17 リバイス・ドラゴン!」

《ナンバーズNo.17 リバイス・ドラゴン》 ATK/2000 DEF/0

「また私の知らない召喚方法だ!?!」

「エクシーズ召喚とはエクシーズモンスターに素材として記載されているモンスターを表側表示でフィールドに揃えた場合に融合デッキからモンスターを特殊召喚することですよ。シンクロ召喚と酷似していますがこちらにはチューナーモンスターという縛りは必要なく、同レベルのモンスターを複数場に揃えることが召喚の鍵となっているのです」

「くっ、未知の召喚方法・・・しかし恐れることはない!私の攻撃力は2400!キミのモンスターでは攻撃力が足りず、永続魔法強者の苦痛によってさらに攻撃力が低下するぞ!」

まあそう思うよね。

「エクシーズモンスターの特徴として彼らにはレベルの概念が存在せず、ランクで表記されます。つまりは強者の苦痛の効果対象外です。またエクシーズ召喚の素材となったモンスターは墓地へはいかずオーバーレイユニットとしてエクシーズモンスターをサポートしてくれるんですよ」

今もツアーガイドとダーク・リゾネーターが光の球体となりリバイス・ドラゴンの周りを旋回している。

「リバイス・ドラゴンの効果発動！1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で攻撃力を500ポイント上昇させます」

《リバイス N O ・ 1 7 リバイス・ドラゴン》 ATK / 2 0 0 0 2 5  
0 0

「攻撃力2500！私の攻撃力を上回ったと!？」

「正直生贄なんて勘弁なのでここで終わらせてもらいますよ。魔法カード死者蘇生を発動しゴヨウ・ガーディアンを墓地より特殊召喚します」

《ゴヨウ・ガーディアン》 ATK / 2 8 0 0 DEF / 2 0 0 0  
ATK / 2 2 0 0

「バトルフェイズ。リバイス・ドラゴンで人造人間 - サイコ・シヨツカ に攻撃！リバイス・ストリーム!!」

サイコシヨツカ LP 2 2 0 0 2 1 0 0

「さらにゴヨウ・ガーディアンでプレイヤーにダイレクトアタック  
!ゴヨウ・ラリアット!!」

「こんなところで・・・私の復活g・・・」

サイコ・シヨッカー LP2100 0

送電塔から発せられた強力なスパークと共にサイコシヨッカは消滅し、生贄にされていたと思われる、たか・・・えつとなんだっけ？高松？高ナントカブラザーズの面々が地面に投げ出されている。いびきをかいてるし大丈夫そうだね。

おいやめるそのこの悪魔娘<sup>ソウル・コンウオイ</sup>霊魂の護送船を呼ぶな彼らはまだ生きてい  
るぞ。

後日談。

冬休みが明け、アカデミアに帰って来た生徒の中で<sup>ゴースト・ライダー</sup>幽霊走者の噂が  
実しやかに囁かれた。

なんでもそいつは目に見えない馬に跨り、暗闇の中を雄叫びをあげながら疾走するらしい。一説によればそいつが目撃された日に送電塔で強烈なスパーク現象が起き、アカデミア内で大停電が起きたそうだ。そのスパーク現象に<sup>ゴースト・ライダー</sup>幽霊走者が関わっているのではないかと日々論争が繰り広げられているとかなんとか。

## 第12話 精霊との決闘（後書き）

ガイドがついにデュエルで活躍してくれました。

海外ではエクシーズ素材をフィールド上のカードとして扱うのでクリッターとのコンボが鬼畜なことになってるそうなの。

追記

「エクストラデッキ」の呼称を「融合デッキ」に修正致しました。



第13話 病弱少女と熱血男（前書き）

TFから新たにキャラ投入。

### 第13話 病弱少女と熱血男

アカデミアでは新学期が開始した。

しかし冬休み明けの始めの授業が体育ってどうなんだろうね。

今テニスコートではオベリスクブルーとオシリスレッドの合同授業が行われている。

何気に女生徒と合同の体育は初めてだな。

今まではサッカーとか野球とか野郎がやるようなスポーツばかりだったから仕方ないことなんだろうけどね。

コートの数によってプレイできる人数が限られてくるのは当然のことであり、僕は元より精力的に体育に取り組むタイプの人間ではないので、テニスコートの端にあるベンチに座って一休み中である。

隣には体育の授業中なのに、制服を着込んだオベリスクブルーの女生徒が座っている。

穏やかな顔立ちに、黒髪のショートボブ。なんとなく大和撫子という言葉を思い浮かべるような外見。

あれ？こんな人クラスに居たっけかな。

まあ僕もブルーに入ったばかりであり、更には長期の休みを挟んでいるため、クラスの全員を覚えているわけでもないんだけどね。

だからただ単に僕が知らなかっただけという線も考えられなくはない。

というかこっちの線の方が可能性としては濃厚だ。

そんな僕の視線に気付いたのか、彼女は不思議そうな顔をしながら

話しかけてきた。

「あのくわたくしめに何か御用で御座いましょうか？」

「ああ、すみません。授業を見学しているようなので具合でも悪いのではないかと気になったのですよ」

とりあえず差し障りのない言葉で誤魔化そう。

「ああ、お心遣いありがとうございます。わたくしは幼少の頃より身体が弱く、体育の授業には一度も参加したことがないのです」

なる。意外に重い内容が帰って来たな。

「1学期は療養のために学園を休学していたのです。身体の調子が良くなってきたとお医者様から通学の許可を頂けたので、こうして復学した次第で御座います。とは言っても体育の授業は未だに参加はできず、僭越ながらこうして休憩中の一之瀬様と肩を並べて授業を見学しているのです」

ああ、道理で見たことないはずだ。

ってあれ？なんで僕の名前を知っているんだ？

「ふふふつ、一之瀬様の事は予てから岬様よりめえるでお聞きしておりますゆえ。ああ、申し遅れました、わたくしは<sup>しむせかり</sup>紬紫と申します。以後お見知りおきを」

そう言って丁寧に頭を下げる紬さん。

岬様って・・・ああジャツカルの姐さんか。

「岬様・・・御本人は呼び捨てで呼んで欲しいと仰っているのですが、どうも不躰な気がしてしまい、未だにこの呼称なのです」

というかこのお嬢様キャラな紬さんと不良のジャツカルの姐さんの結びつきがようわからんな。どう考えても相性が良いようには見えないんだが・・・。

「わたくしはこの病弱な身体ゆえ授業にも満足に出る事が出来ず、長期療養のために中等部の頃に一度留年しているのです。くらすめいとの皆様はそんなわたくしの境遇に配慮してか、どこか余所余所しく、わたくしにはあまり干渉してこなくなりました。しかしその中でも岬様だけは以前と変わらぬ態度で接してくれたのです」

姐さんならそんなこと気にせんだろうね。

なんも考えてなかったというだけかもしれないけど。

「皆様方は普段の岬様の言動で勘違いをなされる方が多く、あの方の優しさに気付いていないだけです。本当はとても優しいお方なのですよ。わたくしは何度もあの方に助けられているのですから」

そうかもしれないね。彼女は外聞など気にせずただその人本人を評価する。相手がどこぞの社長令嬢だろうが、孤児院出身の者だろうが、そんなもの彼女が人を評価する上でなんの意味もなさない。自分が気に入るか気に入らないか、ただそれだけ。だがそれゆえに分かり易く、そんな彼女の態度に救われる人もいるのだろう。

まあ今も「死ねやおらあ！」とか「おんどりやああ！」とか叫びながら対戦相手をボコボコにしている彼女からは想像できないかもし

れないけどな。

その後の他愛のない会話で気付いたのだけど、彼女外来語に対しての知識がひどく疎い。カードのことを札と呼んだり、彼女が知っている数少ない外来語を言葉にしたとしてもどこかイントネーションがおかしかったりする。モンスター名とか口にする時大変なんだろうな。

そんなこんなでわりと盛り上がっていたのだが、突如コートを切り裂くような鋭い声で中断せざるを得ない状況になった。

「やべえ！よけてくれ！」

どうやら十代のミスショットがこちらに向かって来るようだ。

まずい、このままだと紬さんに直撃コースだ。

痛いのは嫌だけど僕はこれでも男の子なんでね。急いで彼女の前に出る。

「はあっ！」

その時僕らの前に割り込んできた何かが、飛んできたボールを打ち返した。

打ち返したボールはまるで狙ったかのように審判をしているクロノス教諭の顔面に直撃した。

「大丈夫？怪我しなかったかい？」

割り込んできたのは笑顔が爽やかなイケメン男で、僕らにキラリとした歯を見せながらそう訪ねてきた。

「大丈夫です。ありがとうございます」

「あっ、ありがとうございます。おかげさまで怪我もなく……。それと一之瀬様もありがとうございます。御身を犠牲にしてもわたくしを守ろうとしてくれたお姿、感服の至りで御座います」

そういつて深々と僕にも頭を下げる紬さん。

「いえ、僕は大事な事はしていないのですから紬さんもそこまでしなくても……」

なんとというかこういうタイプと付き合いがなかったせいで、どういう反応をしたらいいのか困るな。僕の知り合いの女性というのはみんな勝気な子だし参考にならん。

「紬……、キミはもしかして老舗呉服問屋、紬屋の娘さんかい？僕を覚えてないかな？以前海馬コーポレーションが企画したパーティで一度顔を合わせているんだが……」

助けてくれた爽やか君が紬さんの名に思うところがあったのかそう尋ねる。

「申し訳ありません……。そのような社交場に出た記憶はあるのですが、その時身体の調子を崩してしまい、すぐに退席してしまっただためあまり覚えていないのです」

「ははっ・・・まあそれなら仕方がないよ。それに結構昔の事だし顔を合わせたといってもほんの数分だったしね。改めて自己紹介しよう。僕は綾小路ミツル、綾小路モーターズ社長の息子だよ。それとアカデミアのテニス部部长も務めている」

乾いた笑いを出した後、それを誤魔化すように自己紹介をする部長さん。

ドンマイ、覚えられていなくてもこれから覚えて貰えばいいと思うよ。

とそこで授業の終了を告げるチャイムが鳴る。

「あの、一之瀬様。申し訳ありませんがお手をお借りしてもよろしいでしょうか？少々眩暈がしますゆえ、御迷惑でなければ保健室までお付き合い願いたいのですが・・・」

この体育の時間はクロノス教諭と保健医でもある鮎川先生が監督していたんだけど、クロノス教諭の治療のため、今は二人ともいない。

「ああ、別に構わないですよ」

「絀君！僕が！この僕、綾小路ミツルがエスコートいたしますよー！」

「いえ、心遣いは大変嬉しいのですが、一之瀬様が付き添ってくださるので大丈夫です。御心配してくださり、ありがとうございます」

そしてぐぬぬと僕を睨みつける部長。

なんだよ、なんで僕を睨むんだ。なに？もしかして絀さんに気があるの？

「では参りましょうか」

ガシッ

そういつてがっちり腕を組む紬さん。

いや、かわいい女の子と腕を組むのは無論健全な男の子である僕としては大変嬉しいのだけれど、部長の目が怖いくらいに嫉妬の炎で燃えているのがわかるので非常に気まずい。

というかすでに眼だけじゃなくて全身から燃え盛っているなアレ。

僕は紬さんを連れてなるべく彼を目に入れぬようにそそくさとその場を離れたが、彼の突き刺すような視線はコートから目の届かぬ場所まで追ってきていることには気付かずにはいられなかった……。

「おらーっ！もう一本行くぞ」

「くそ、クロノス教諭にボール当てたのは俺じゃないのに」

「それを言ったら僕なんて全く関係がありませんよ」

「喋っている暇があるなら足を動かせっ！今頑張らないでどうするんだ！今日という日は今日しかないんだぞ！」

何故僕が十代と一緒にテニス部部长である綾小路にテニスで扱かれ



ているのだろうか……。

いや、十代はまだ分かるんだ。彼はクロノス教諭にボールをぶつけた原因として、1日テニス部に体験入部するという罰を与えられているからここにいます。

僕の場合は紬さんを保健室に送り終えた帰りに、今や今かと外で待ち構えていた綾小路部長に捕まり、有無を言わずここまで連れて来られたんだ。なんでも軟弱な精神を鍛え上げてやるとかわけのわからん暑苦しい言葉を吐きつつ、気が付いたらこの現状さ。

「そして明日というのは明るい日と書くのだ。さあ明日のためにあと50球！」

マジかよ。もう限界なんだけど。

そんなときにテニスコートに駆け寄る人影。あれは紬さんか？

「やあ紬君！嬉しいなあ、もしかして僕に会いにk「一之瀬様、先程はご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。お陰様で少しばかり楽になりました」……」

ドンマイ部長。彼女の用があつたのは僕の方だったか。しかし律儀な人だな。さつき何度もお礼言ってきたのに。

「いえ、気になさらなくて結構です。ただ病み上がりなのだし無理をしないように気を付けてください」

「そうですね……油断して体調を崩さぬようにしたいと思います。御忠告痛み入ります」

「ぐう・・・細君が一之瀬君と仲良さ気に語らっているとは！今僕は猛烈に嫉妬している！」

なんかブツブツ呟いていた部長さんがこちらに向かってズンズン歩み寄って来た。

「離れたまえ細君！あまりこういうことは言いたくないが、細君。格式高い家柄を持つキミに、どの馬の骨だか分からない成り上がりブルーの一之瀬君は似合わない！」

ああ、さつき保健室に行く時聞いたんだけど、由緒正しい老舗の呉服問屋の跡取り娘らしいね彼女。言葉遣いからなんとなくそうなんじゃないかなと思っていたけど本当にお嬢様だったのか。細嬢と呼ばせてもらおう。

「細君！キミにはこの僕のような男こそふさわしい。さあ悪い事は言わない、早く一之瀬君の側から離れたまえ！」

「似合わないもなにも僕は彼女と今日初めて会っただけなのですが・・・」

「初対面なのに腕を組んでイチャイチャしていたというのか！尚更許せん！」

ええ、どうすりゃいいんだよ。

「一之瀬君、僕と決闘だ！<sup>デュエル</sup>キミもデュエリストならここは潔くデュエルで決着をつけようじゃないか」

決着で……。なにを決着するんだい？

「ずばり勝った方が細君のフィアンセになるのだ……！」

何を言ってるんだろうかこの人は。

ほら、細さんも話に付いて行けずにキョトンとしてるじゃないか。

とそこで彼女の方を振り向いた時、僕は危険が迫っていることに気付いた。

「お断りします。細さん側の事情をなんら考慮していないそんな話には乗りませんよ」

いいこと言っているようだけど実はこれは建前なんだ。

僕がこの話を蹴り、早めにこの場から離脱しようとした本音は今間近に迫って来ている。具体的にはテニスコートに向こう側にだ。

「ということで僕は逃げさせてもらいます！悪い事は言いません、命が惜しいのならば部長も早急にこの場から逃げたほうが良いですよ」

そう言った後に即行でダッシュ！逃げるんだ！僕はまだこんなところで死にたくない！

「おい、テメーらっ！紫<sup>ゆかり</sup>巻き込んでなにくだらねえことやってやがるんだっ……！」

僕が場を去ろうと足を踏み出した時、コートに災厄<sup>ジャッカル</sup>が現れた。

ああ、いきなりの登場と共に部長が彼女の重い一撃を受けコートに

沈んでいった。

くっ、部長よ。キミはあまり好きにはなれないタイプの人間だったけど、僕の逃走への時間稼ぎになってくれた事だけは感謝しているよ。安らかに眠ってくれ……。

フハハハッ！だがしかし！発見のタイミングが早かったおかげで僕は無事にこの場から逃げられ……

「テメーも逃げてんじゃねーぞ！おらあああああつ！！」

姐さんの投擲したラケットが寸分狂わず僕の後頭部に直撃した。

「何が勝った方がフィアンセだ？俺の前でナメたことを抜かしてんじゃねーぞ！」

「あら岬様、御機嫌よう」

絢さん……今それ言うタイミングじゃないです……。

そして十代！てめえ自分は関係ないとばかりにさり気無く距離取ってんじゃねーぞ！

お前も止めなかったんだから同罪だ！

「紫！オメーもだぞ！大人しい奴だとは知ってるが、ここは大声張り上げてでも止めやがれ！勝手にお前のフィアンセとか巫山戯たこと言ってるんだぞコイツら」

いえ、僕は言っていないです姐さん……。というか断ったじゃないですか！！

そこで絢さんが小首をこくりと傾げて一言。

「あの、ふいあんせとはどういった意味なのでしょうか？」

ああ、そんなことたるうとは思ったよ……。

薄れゆく意識の中で僕はそう言わざるを得なかった。

### 第13話 病弱少女と熱血男（後書き）

特定の時間帯にしか現れないレアモブの紫嬢の登場。

TF6ではジャッカルさんと同じく専用グラフィックが出て欲しい一人。

使用デッキは除去ガジェットなのですが、GXの世界でも除去カードバンバン撃つてくるとかだったら、かなりの鬼畜キャラクターとして認識されてそう。

## 第14話 本物と偽物（前書き）

今回アニメのオリカが出てきます。アニメとOCGでテキストが違うカードは基本OCG準拠ですが、今回はOCGの方があまりにも残念効果なのでアニメ効果を使用しています。ご了承ください。

## 第14話 本物と偽物

デュエルアカデミアの生徒の間では今とある話題で持ちきりである。

それはデュエルアカデミアにて初代決闘王者<sup>デュエルキング</sup>、武藤遊戯のデッキを特別展示されるというイベントが間近に迫っているからだ。

この世界ではレアカードの絶対数が限りなく少ないため、現物を自身の目で拝める機会というのは滅多にない。その上、デュエルキングと名高い武藤遊戯のデッキには流石に神のカードは抜いているらしいが、それでも多くのレアカードが投入されているのだから話題にならないほうがおかしいだろう。

今もその展示会の整理券をもらおうとする人々が長蛇の列を作っており、僕もその中の一人だったりする。

別段僕は遊戯さんのデッキに興味はなかったし、わざわざ整理券など貰わずとも最後の方なんかで空いてきた時にちよっこり覗きにく程度で構わなかったんだ。

しかし、ジャッカルのお姉さんやお嬢と一緒に見に行かないかと誘われたことで状況が変わった。

考えてもみてくれ。

人が空くまで待つだなんて高尚なことジャッカルのお姉さんができるわけがないだろう。

無理やりにも人混みを押しつけて突入するに違いない。



おまけにあの人はわざわざ会場に入るための整理券を貰うために並ぶなんて面倒くさいことをするはずもない。病弱な姉さんの場合は長時間並ぶということがそもそも無理なことだから仕方ない。

そこで僕が彼女らのパシリとしてここまで出向いてきたわけだ。

あれ・・・なんだか説明していて悲しくなってきた。

中学の頃まではこんなキャラじゃなかったのに・・・。

というかジャツカルの姐さんがこのイベントに興味を示すこと自体が僕には意外だったんだが、なんでも彼女が考案した『デュエルに強い奴はイカした髪型の奴が多い』説の検証に向かうらしい。冗談で言っているのだろうと思った僕もそのノリに合わせて『デュエルに強い人は胸が大きい人が多い』説を述べたところ、比較的胸が慎まやかな彼女にボコボコにされたことは言うまでもないだろう。

まさか真面目にそんなこと言ってるとは思わなかったんだよ！

無事に整理券を確保できたその夜 十代から電話がかかってきた。

「夜更けに悪い、けど緊急事態なんだ！明日展示される遊戯さんのデッキが何者かによって盗まれたんだ！今も翔と隼人と一緒に犯人を捜索中なんだけど「俺もいるぞ！」人手が足りねえ。だからアキラも手伝ってくれ！」

むう・・・正直遊戯さんのデッキがどうなったところで僕にはなんの被害もないのだから勝手にどうぞという話なんだが、明日いきなりデッキ展示が中止になりましたとか言われた時の姐さんの反応

が怖すぎる。八つ当たりの対象として僕に被害が及ぶやもしれない。

「了解しました。こちらはブルー寮からイエロー寮付近の搜索を試みます」

ほら、聞いてただるガイドさんよ。

おまえさんも手伝ってくれ・・・ないよね。うん、わかったた。

ネイルアートに勤んでいるガイドさんの邪魔をするなど言わんばかりの視線が僕に突き刺さった時、僕はそう悟ったのさ。

まあ闇雲に探したところで見つかるわけもないだろうし、ゆっくり探して十代達が問題を解決するのを待つのが賢い選択だろう。僕の心の安寧のために頑張ってくれたまえみんな。

「すごい・・・こんな伝説のカードが俺の手に！」

どうしようか・・・。

現在場所は海岸付近。

十代らに任せて僕はふらふらしてようと思った矢先にめっさ怪しい人を見つけてしまったんだ。というかコイツだる絶対。

後ろ向いているから顔はわからないけど本物のブラック・マジシャンがどうかか呟いているし、ここまで分かり易い犯人も珍しい。もはや現行犯逮捕レベルの怪しさと言っても過言ではないと思う。

とりあえず十代に連絡を入れようとした時、犯人が僕の存在に気付いた。

「お前か一之瀬・・・ちようどいい。俺は今このデッキを試したくなつたところなんだ！」

そう言つてデュエルディスクを僕に放り投げてきた。

突然目の前にモノを放り投げられたので吃驚して反射的に避ける。

ガシャーン

ボチャーン

岩に叩きつけられたデュエルディスクが嫌な音を立てて落ちた後、海の底に沈んでいった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんだよ。文句があるならいきなりディスクを投げつけてきた彼に言いたまえ。

向き合つて気付いたがこいつラー・イエローの時同じクラスだった神楽坂だ。

確かいつも他人のコピーデッキばかり作る奴で、僕や三沢のデッキも真似ようとしたけど僕らは毎回デッキをこころこころ変えるために結局諦めたという話を三沢から聞いたことがある。

「それで神楽坂君はそのデッキを盗んでどうするつもりなんです？まさか見つからずにこのまま自分のモノにできるだなんて馬鹿なこと

「と考えていないですよね」

「俺は今まで名だたるデュエリストのデッキを全て研究し、対戦記録も全部暗記した。それなのに俺はデュエルに勝てない……。彼らと俺、何が違うのか確かめたいだけだ！」

ああ、だたレアカードが欲しいだけの馬鹿だったら情け容赦なく即行で先生らに突き出して終わりだったんだけど、彼の言葉の端々から彼の苦悩が見て取れる。情状酌量の余地はありそうだ。

仕方ない、少しばかり付き合ってくださいかね。

「分かりました。では1戦だけお付き合いしましょう。その代わりにそれが終わったら自分からそのデッキを返してきてくださいよ」

「……分かった。俺はそれを確かめられたらそれでいい……」

暗い海原を背景に向かい合う二人。

「俺が先攻だ！俺は幻獣王ガゼルとバフオメットを手札融合！いでよ！有翼幻獣キマイラ！！」

《有翼幻獣キマイラ》 ATK/2100 DEF/1800

「これで俺のターンは終了だ」

そろそろ後攻ばかりの自分に渾名でもつけようかと思うんだけど、

どんなのがいいのだろうか。今度みんなに聞いてみよう。

「僕のターン、ドロー。僕は手札より魔法カード、召喚師のスキルを発動！デッキよりレベル5以上の通常モンスターを1枚選択して手札に加えます。僕が手札に加えるのは真紅眼の黒竜！」  
レッドアイズ・ブラックドラゴン

「なっ！？そのカードはデュエルキング武藤遊戯の親友であり、ペガサスが認めた5人のデュエリストの1人、城之内克也の切り札か！」

説明臭いセリフをありがとう。

武藤遊戯のデッキに相對するには相応しいカードだろ？

まあ僕としては青眼の白龍ブルーアイズ・ホワイトドラゴンで粉碎玉砕大喝采をしたいところではあるんだけど、色々と面倒事がありそうだからね。

「僕は手札より黒竜の雛を通常召喚！」

《黒竜の雛》 ATK / 800 DEF / 500

「そして黒竜の雛の効果を発動！自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地に送る事によって、自分の手札から真紅眼の黒竜1体を特殊召喚します」

《真紅眼の黒竜》レッドアイズ・ブラックドラゴン ATK / 2400 DEF / 2000

現れしは光輝く白き龍と対をなす闇を纏いし黒き龍。

「バトルフェイズに移行します。真紅眼の黒竜レッドアイズ・ブラックドラゴンで有翼幻獣キマイラに攻撃！ダーク・メガ・フレア！」

神楽坂 LP4000 3700

「くっ、だが有翼幻獣キマイラが破壊された時、墓地にあるバフオメットかガゼルを特殊召喚できる！バフオメットを守備表示で特殊召喚！！」

《バフオメット》 ATK/1400 DEF/1800

「これで僕のターンは終了します」

「俺のターン、ドロー！俺はカードを1枚セットし、手札より魔法カード死者転生を発動！このカードは手札を1枚捨て、墓地のモンスター1体を手札に加える。墓地より幻獣王ガゼルを手札に加え召喚！」

《幻獣王ガゼル》 ATK/1500 DEF/1200

「さらに魔法カード、光の護封剣を発動！これで貴様のモンスターは3ターンの間攻撃できない！ターンエンドだ」

「僕のターン。僕は手札より真紅眼の飛竜レッドアイズ・ワイバーンを攻撃表示で召喚！」

《真紅眼の飛竜レッドアイズ・ワイバーン》 ATK/1800 DEF/1600

「ふふっ、お前が新たなモンスターを召喚するのを待っていたぜ。俺はこの瞬間罨カード、黒魔族復活の棺を発動！このカードは相手がモンスターを召喚した時、そのモンスターと自分のモンスター1体を生贄に墓地にある魔法使い族を1体復活させる！」

ああ、死者転生の時に捨てたのか。

「俺はガゼルと真紅眼レッドアイズ・ウイパーンの飛竜を生贄にいでよ！ブラック・マジシャン！」

フィールドに現れた棺から黒い霧が溢れ、ブラック・マジシャンが棺の中より復活する。

《ブラック・マジシャン》 ATK/2500 DEF/2100

おおこれが遊戯さんの生ブラック・マジシャンか。  
ここは一つ握手でもしたいところなんだけど彼は立体映像ソリッド・ヴィジョンなんだつたな。

「僕は魔法カード、スタンピング・クラッシュを発動！このカードは自分フィールド上にドラゴン族モンスターが表側表示で存在する場合にのみ発動可能。フィールド上に存在する魔法・罠カードを1枚破壊し、そのコントローラーに500ポイントのダメージを与える！僕が選択するのは光の護封剣！」

神楽坂 LP3700 3200

「くつ、だが光の護封剣が破壊されたとしても、ブラック・マジシヤンの攻撃力は2500！レッドアイズでは敵わないぞ」

「バトルフェイズ。僕は真紅眼レッドアイズ・ブラックドラゴンの黒竜でバフォメットに攻撃！」

とりあえず相手の場のモンスターを削る。というかそれしかやることがない。

「僕はこれでターンエンドです」

「俺のターン。俺は魔法カード千本ナイフを発動！このカードは自分の場にブラック・マジシャンが存在する時、相手モンスター1体を破壊する！真紅眼の黒竜を破壊しろ！」

レッドアイズが千本のナイフにより串刺しにされ破壊される。

「これで貴様の場にモンスターはいなくなった。ブラック・マジシャン！プレイヤーにダイレクトアタック！ブラック・マジック！」

アキラ LP4000 1500

ぐう、結構でかいの食らってしまった・・・。

「僕のターン、ドロー！僕はカードを1枚セットし、ターンエンド。そして通常召喚を行っていないターンのエンドフェイズ時、墓地に存在する真紅眼の飛竜をゲームから除外することによって、自分の墓地に存在するレッドアイズと名のついたモンスターを1体特殊召喚します。蘇れ真紅眼の黒竜！！」

《真紅眼の黒竜》レッドアイズ・ブラックドラゴン ATK/2400 DEF/2000

「どつやら手も足も出ないようだな。俺のターン！ブラック・マジシャン、再び真紅眼の黒竜を破壊しろ！ブラック・マジック！！」

「この瞬間、畏カード、メタル化・魔法反射装甲を発動！発動後このカードは攻撃力・守備力300ポイントアップの装備カードとなり、モンスター1体に装備します。装備対象は無論真紅眼の黒竜！」



レッドアイズ・ブラックドラゴン

《真紅眼の黒竜》 ATK / 2400

ATK / 2700

「いけ、レッドアイズ！反撃のダーク・メガ・フレア！」

「甘いぞ！俺は手札より速攻魔法光と闇の洗礼を発動！このカードは自分の場のブラック・マジシャンを生贄に、自分の手札、墓地、デッキの中から混沌の黒魔術師を召喚する！」

《混沌の黒魔術師》 ATK / 2800 DEF / 2600

む、混沌の黒魔術師か……。これは正直彼を甘く見ていたな

「混沌の黒魔術師が召喚に成功した時、墓地から魔法カードを1枚、手札に加える。俺は死者転生を手札に。そして混沌の黒魔術師の攻撃力は2800ポイント！いけ、混沌の黒魔術師でレッドアイズに攻撃！滅びの呪文！！」

アキラ LP1500 1400

「混沌の黒魔術師が戦闘によって破壊したモンスターは墓地へはいかず、ゲームから除外される！これで俺のターンは終了だ」

これはマズイね。

レッドアイズの強さの一つは墓地からの蘇生手段の豊富さが挙げられる。

しかしそんな強みも墓地より除外されてしまえば意味をなさない。

というか僕のロマンの一つであるレッドアイズ・ブラックメタルドラゴンの召喚を邪魔するとは許せぬ……。許せぬぞ！

「僕のターン、ドロー！僕は手札より仮面竜を召喚します」

《仮面竜》マスクド・ドラゴン ATK/1400 DEF/1100

「そしてフィールド上に表側表示で存在するドラゴン族モンスター1体、仮面竜をゲームから除外することでこのカードは手札より特殊召喚できます。現れよ！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！」

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》 ATK/2800  
DEF/2400

「混沌の黒魔術師と互角の攻撃力だと・・・！」

「更にレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果を発動！1ターンに1度、手札または墓地よりレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン以外のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚できます。マテリアルドラゴンを手札より特殊召喚！」

《マテリアルドラゴン》 ATK/2400 DEF/2000

「バトルフェイズに移行します。レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンで混沌の黒魔術師を攻撃！ダークネス・メタル・フレア！」

「くっ、迎撃しろ！滅びの呪文！」

互いの攻撃により相殺。

混沌の黒魔術師は相打ちでもモンスターを除外されるのは痛いが仕方ない。

「まだ追撃が残っていますよ！マテリアルドラゴンでダイレクトアタック！」

神楽坂 LP3200 800

「くそ！俺のターン！俺は手札より天よりの宝札を発動！互いのプレイヤーは手札が6枚になるようカードを引く」

改めて思うがすごいチートカードだな。

初手にガン伏せされた後に発動されたら勝てる気がしないよ。まあそんなカードをこの局面で引く彼もある意味すごいのだろうね。

「俺はワタポンを特殊召喚。このカードは魔法、罫、モンスター効果でデッキから手札に加わった時、場に特殊召喚できる！」

《ワタポン》 ATK/200 DEF/300

「そしてワタポンを生贄にブラック・マジシャン・ガールを守備表示で召喚！ブラック・マジシャン・ガールの攻撃力は墓地のブラック・マジシャン、マジシャン・オブ・ブラックカオス1体につき、300ポイントアップ！」

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK/2000 DEF/1700 ATK/2300

「これで俺のターンは終了だ」

「僕のターン。僕は手札よりアックス・ドラゴニユートを通常召喚します」

《アックス・ドラゴニユート》 ATK / 2000 DEF / 1200

案外苦戦したけどここまでかな。相手の場にはモンスターが1体のみ。

「バトルフェイズ。アックス・ドラゴニユートでブラック・マジシヤン・ガールに攻撃！更にマテリアルドラゴンでプレイヤーにダイレクトアタック！！」

「俺はこのモンスター効果を発動する！クリボー！」

なっ！？

「クリボーは手札から捨てることで戦闘ダメージを一度だけ0にする事ができる効果がある。さっきの天よりの宝札で引いていたのさ」

クリボーか。正直その存在をすっかり失念していた。

「ありがとう、クリボー。流石俺が数千枚の中から選んだモンスターだけ。お前にはこれまで何度も助けてもらったな・・・」

あえて突っ込まないぞ僕は。

「アックス・ドラゴニユートは攻撃したダメージステップ終了時に守備表示になります。これで僕のターンは終了です」

「クリボー。お前がくれたチャンス、無駄にはしないぜ。俺のターン！」

やっば突っ込ませてくれ。おまえは一体誰なんだよ。

「行くぜ！お前はこのターン、このデッキの本当の力を思い知ることになるぜ！俺は墓地より闇属性と光属性のモンスター、クリボーとワタポンを取り除き、いでよカオス・ソルジャー - 開闢の使者 -  
！！」

《カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -》 ATK/3000 DEF  
/2500

「受けてみるがいい、デュエルモンスターズ界最強の戦士の攻撃をいけ！カオス・ソルジャー！マテリアルドラゴンに攻撃！開闢双破斬！！」

アキラ LP1400 800

「まだまだ！これからがこのカードの真の力だ。カオス・ソルジャーの特殊能力発動！このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、もう1度続けて攻撃を行う事が出来る。アックス・ドラゴニュートに攻撃！時空突刃・開闢双破斬！！」

くっ、1ターンでフィールドを空にさせられたか。

「俺はこれでターンを終了する」

まさかここにきて開闢の御登場とはね。ていうか召喚条件緩すぎだろお前！

「僕のターン、ドロー！！」

しかし伝説の戦士を倒す術はすでにこの手の中に。

「僕は手札を1枚捨てることによって魔法カード、一D・D・R《  
ディファレント・ディメンション・リバイバル》を発動！ゲームか  
ら除外されている自分のモンスター、レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜を攻撃表示で特  
殊召喚し、このカードを装備します」

レッドアイズ・ブラックドラゴン  
《真紅眼の黒竜》 ATK / 2400 DEF / 2000

「ふつ、今更レッドアイズを召喚したところで俺のカオス・ソルジ  
ヤーには勝てやしないぞ！」

今のままではね。見せてあげよう、レッドアイズの可能性を。

「レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜を生贄にレッドアイズ・ダークネスドラゴン真紅眼の闇竜を特殊召喚！」

レッドアイズ・ダークネスドラゴン  
《真紅眼の闇竜》 ATK / 2400 DEF / 2000

更なる深い闇を纏いし真紅眼の黒竜は己が勝利のために咆哮をあげ  
る。

「ドラゴン達の地底からの叫びは、ダークネスドラゴンの血となり  
肉となります。レッドアイズ・ダークネスドラゴン真紅眼の闇竜の攻撃力は自分の墓地に存在するドラ  
ゴン族モンスター1体につき300ポイントアップ。僕の墓地には  
先程D・D・Rのコストで捨てたモンスターを合わせ5体のドラゴ  
ンが存在します。よって攻撃力は1500ポイント上昇！」

レッドアイズ・ダークネスドラゴン  
《真紅眼の闇竜》 ATK / 2400 ATK / 3900

「馬鹿なっ！カオス・ソルジャーの攻撃力を上回ったと!?!」

レッドアイズ・ダークネスドラゴン  
「真紅眼の闇竜でカオス・ソルジャー - 開闢の使者 - に攻撃！ダー  
クネス・ギガ・フレイム！！」

「うわあああああああつ！」

神楽坂 LP800 0

「この俺が負けた……。俺はこんな強いデッキを使っても勝てないのか……。俺にはやはり才能がまるでないんだ！」

「いいや、そうでもないさ」

現れたのはデュエル・アカデミアの帝王カイザーこと丸藤亮と明日香。

何故彼らがこんなところに……。

「俺達も一足早くデッキを見たくてね」

例えば悪いけど遠足前の小学生かキミらは。

「会場に行ってみたらケースが壊れててデッキは消えていた。それで辺りを探してみたらあなた達を見つけたわけ」

「止めようと思ったが、止めるにはあまりにも惜しいデュエルだったからな」

ああ、さいですか。

「それにどうやら見ていたのは俺達だけじゃないようだ」

え？

その言葉に周りを見渡してみると寮を問わず、多数の生徒がこちらを覗いている。

「確かに他人のデッキを勝手に持ち出した事は許されない行為だ。しかし、その武藤遊戯のデッキが闘い、力を発揮する姿をみんなが見たがっていたことも事実だ。みんなもここは大目に見るだろう」

見てくれよみんな。

これが窃盗という犯罪を犯してもデュエルで解決した瞬間だ。

じゃあ今のデュエルを見ていない人は許さないんじゃないかなという突っ込みをも許さぬ空気さ。神楽坂の健闘を称えている人もいるしね。

「けど俺は負けたんだ・・・どうして・・・」

「それは簡単なことさ。お前にはなくてアキラにはあるものの違いだけ」

あつ十代いたんだ。というか僕にあるもの？

「俺にないもの・・・?」

「それはデッキを信じる気持さ。確かにそのデッキは強い、けど所



詮お前のアイディアがつまったデツキじゃない。それじゃあデュエルには勝てないんだ。」

「自分が時間と労力をかけたからこそデツキを心の底から信じる事が出来る。そしてその信念がデュエリストに気迫を与え、ギリギリの戦いでは勝敗を左右する。あのデツキの本当の力を引き出すのは武藤遊戯にしか出来ないことだ」

十代がまとめきれない言葉をカイザーが補う。

「そう！俺が言いたかったのはそういうことだ。アキラがこのデュエルで伝えたかったのもこの事なんだろう？」

なんか事件の犯人を捕えたのは僕なのに、メを全部みんなに持つて行かれた気がするけど最後はばっちり僕が決めますよ！

「おっ、おっ・・・せやな・・・」

ごめん、正直キミらが何を言っているのか僕にはイマイチ理解できなかつたんだ・・・。

## 第14話 本物と偽物（後書き）

制限復帰した開闢さんのご登場。

相手にするのは嫌ですが、イラストは好きな1枚。

ちなみに主人公も完全にスルーしてますが十代の電話に割り込んできたのは我らが三沢さんです。念のため。

第15話 恋する乙女（前書き）

命短し恋せよ乙女

## 第15話 恋する乙女

デュエルアカデミアの2学期はイベントが多い。

先日初代決闘王者<sup>デュエルキング</sup>である武藤遊戯のデツキ展覧会が開かれたと思っ  
たら、今度は毎年恒例らしい北にある姉妹校『デュエルアカデミア  
ノース校』との友好デュエルが近付いている。我が校にはノース校  
以外にもアークティック校、ウエスト校、サウス校、イースト校等  
の姉妹校が存在するのだが、今回の企画は他校の参加はない。なん  
でも本校とノース校の校長のとある都合で開催されているという噂  
もあるがその真偽は定かではない。

ちなみに昨年は翔のお兄さんであるデュエルアカデミアの帝王<sup>カイザー</sup>、丸  
藤亮が見事にノース校の代表生を打ち負かし、我が校の面目躍如と  
なったそうだ。

この情報は今も目の前で長々とありがたいお話とやらをしている鮫  
島校長からの受け売りだ。どこの世界でも校長の話と言うのは冗長  
で退屈であるという法則は当てはまるらしい。まあ画面映像で校長  
の話を済ますというのは向こうの世界ではなかったことだけだね。

生徒をわざわざ一カ所に集めるなら、校長もその場に立って話して  
欲しいものだと僕は思うのだけれど、校長も校長で色々忙しいのか  
もしれない。とは言っても校長はいつも生徒のデュエルをワクワク  
と少年のような顔で見学していて、働いている姿をあまり見かけな  
いのは果たして僕の思い過ごしなのだろうか……。

デュエルのことならどんな話題でも盛り上がる奴らばかりが集まっ

たのがこの学校の生徒なので、校長の話が終わった途端、今回の友好デュエルでは誰が本校の代表に選ばれるのかという会話が飛び交っている現状になる。

みんなの予想ではやはり前回も選ばれた丸藤先輩がその筆頭であるようだ。

万丈目が今現在ここに居たのならば自分こそがと主張しただろうけど、彼は先日デュエルアカデミアを自発的に抜け出し、現在行方が分からなくなっているからな。

オシリスレッドの生徒が固まっている方では十代が代表目指して頑張る発言をしている。

相変わらず元気がいいね。その元気の源はどこにある事やら。

ん？

翔と隼人はいつも通りだが、今日は十代の横にもう一人、小柄なレツド生が立っている。

なにやら丸藤先輩に熱っぽい視線を浴びせているが、視線の先の本人はまるで気が付いていない。

ああ、そう言えばレイが憧れの丸藤先輩を追っかけてアカデミアに来るのはこの頃なのか。

時間が経つごとにどんどん原作知識が薄れていつている気がする。流れ大筋を追ったメモは用意してあるのだが、細部の情報が欠如しているのであまり役には立ちそうにないかな。まあ元から無暗やたらと引つ掻き回すつもりはないけど。

それに僕と言う異分子を孕んでいる以上、完全に同じ流れになるこ

とはないだろうし、そもそもこの世界の人々はただのアニメの世界の住人なんかではなく、僕の目の前で確かに生きている命だと認識すべきだ。彼らを劇の役みたいな見方するのはそろそろやめた方がいいだろう。

なんというかこの考え方自体がこの世界に馴染んできてしまっている証拠なのだろうか。

ヤバいな、そのことに対して恐怖や焦りをあまり感じない自分に危機感を持ったほうがいいのかもれない。

普段はおちゃらけているガイドさんも何気にちよくちよく僕の帰路について調べてくれていているらしいのだけど、進展がないのだからせめて気だけでもしっかり保っておこう。

まあ僕の覚悟なんてジャツカルの姐さんのパンチ一発で吹き飛ばぶよ  
うなものなただけだ。

集会を終え各々好きに行動を開始したが、基本引きこもり体質の僕はさっさとブルー寮の自室に戻る。

今日はもう授業もないし、一日中睡眠に費やす気満々であらかじめ干しておいたふかふかの枕を脇に抱え、意気揚々と自分の部屋の扉を開けた。

「なにっ？なんなのこれ！？動けない・・・！」

そこにはバイサー・ショックに拘束されているレイの姿とそれを不

機嫌そうに眺めているガイドさんの姿があった。

何でこんな状況になっているのだろうか？誰か僕に三行で教えてくれ。

どうやらレイにはガイドさんらの姿が見えていないようだが、流石にバイサー・シヨックはマズイって！

とりあえずまずは現状把握だ。

「僕の部屋に何か御用ですか？」

「えっ？ここは亮様の部屋じゃないの？ていうかなんで動けないのよぉ〜！」

ああ、忍び込む部屋を間違えたということか……。オーケー、理解した。

よりもよって僕の部屋に入って来るとは運のない。

僕の部屋はガイドさんがやたらめったらに悪魔を呼ぶから、外の空間と比べて異質に変化しており、普段精霊を感じる力が弱い人でも精霊側から異常に干渉されやすくなってしまっているようなのだ。

以前にも翔が丸藤先輩に用があったらしく、ブルー寮に来た帰りに僕の部屋に寄ったのだが、姿が見られないのいいことにガイドさんが悪ノリして、翔の肩に呼び出した悪魔を積み始め、さながらトームボールのような有様になったところで翔が押し潰されるといふ事案が発生している。

その時は金縛りじゃないかとテキストな嘘をついて誤魔化した為、その手の霊現象を苦手としている翔は僕の部屋に近寄らなくなった。まあそれはすごく正しい選択だと思う。

大方そんな危険な部屋に誤まって侵入し、うちのガイドさんの昼寝の邪魔でもしてしまっただろう。今も目をごしごし擦りながら不機嫌な表情を隠そうともしていない。

いや、だから流石に拷問系のモンスターはマズイから放してやってくれよ。

僕のそんなアイコンタクトに気付いたのか、納得してなさそうな顔だがレイの拘束をやめさせ、欠伸をしながら部屋から姿を消していた。

そしてガイドと入れ違いにレイを追ってきたのか十代が窓から侵入してきた。

「というか玄関から入ってこいよお前ら！そして靴を脱げ！」

「何やってんだよお前！ブルー寮に侵入するなんてノース校のスパイだと勘違いされちゃうぜ！ってなんでアキラがここにいるんだよ！？」

「なんでと言われても、それはここが僕の部屋だからですよ。まあ彼女も丸藤先輩の部屋と勘違いしたらしいですけどね」

「そうなのか・・・って彼女？」

先程ガイドさんに捕まった時にレイが被っていた帽子と髪留めが外



れ、彼女の美しく長い黒髪が露わになっていた。

「えっ？・・・あっ！？」

「レっ、レイ！お前女だったのか！？」

正体がばれたレイは帽子を素早く掴み、悔しそうな顔で窓から飛び出していった。

ここは3階なのにどうするのだろうかと思ったのだが、彼女は器用にも側に生えている木を利用してすると降りていったようだ。

すげえな、入る時もそうやって来たのか？

「おいっ！待てよレイ！」

十代もレイに続けとばかりに窓から飛び出ようとするが、僕が十代の首根っこを捕まえて阻止する。

「なにすんだよアキラ！早くレイを追わないと！」

「急いでいるのは分かりますが、出入り口というものがあるのですからそちらから出ていってくださいよ。そして靴を脱げ」

猿じゃあるまいし木登りで出入りしないでくれ。

外から見ている人が居たら僕が変人扱いされかねないだろうが。

「分かったよ・・・。あと頼みがあるんだがいいか？」

面倒くさいことではなければね。

「レイが女だってことはまだ誰にも言わないでくれないか？俺がアイツから事情を聞いてみるからさ」

「別に構いませんがいつまでも捨ておける問題でもありませんよ？」

「まあそれは話を聞いてから考えるさ。頼んだぜ！」

そついつて部屋から飛び出していく十代。結局最後まで靴脱がなかったなアイツ……。

全くほら、こんなに汚れちゃったじゃないか！

溜息を尽きつつ、箒を取りだしてきて清掃を始める……とそこで床に落ちている髪留めを見つけた。レイが忘れていったものだろうか。

どうしようかこれ。

彼女が気付いて取りに戻ってくるのを待ってもいいんだけど、わざわざ丸藤先輩を追ってこんな場所まできた熱意は素直に尊敬に値するしな。理解はできないけど。

お節介かもしれないが、ここは一つ応援でもしてやりますか。

翌日朝早くに、僕の部屋に一人の来訪者が現れた。

今日のフェリーで帰る事になったレイだ。

どうやら昨夜十代とのお話（と言う名のデュエル）の決着のあと、無事レイは丸藤先輩にその思いを告げることができたらしい。残念ながら結果はついてこなかったようだけど。

というかむしろ丸藤先輩が彼女の返事に対してOKなどと答えていたら、僕は丸藤先輩の評価を一新しなければならなかったんだがね。信じられるかい？彼女まだ小学5年生らしいんだぜ？

17、8歳にもなつてそのお年頃の少女に興味を抱くとかそれはもうアレだよな。

どう言い繕つても三沢ロコソの称号を得るに相応しいと思うんだよ僕は。

そんなこんなでもそもそデュエルアカデミアにすら入れない年齢であつた彼女は、丸藤先輩に諭され小学校を卒業してからアカデミアの中等部に行くことに決めたらしい。

果たしてデュエルアカデミアの中等部とやらが義務教育をきちんと行っているのかどうかという事は甚だ疑問ではあるけど、小学校を途中で抜けるよりかは遙かにマシだろう。

まあ彼女が入学する頃には憧れの丸藤先輩はもう卒業しているんだけどな。

そのの所を一応彼女にも突っ込んでおいたんだけど、どうやら彼女、丸藤先輩を諦めて次は十代にアタックを開始するらしい。

こんな周りを海で囲われた孤島まで追っかけてくるほど好きな男性

をあっさり諦めて次の恋に向かうのはどうなのだろうかとも思わなくもないけど、下手に執着しすぎて残念な結果になるよりはいいのかもしれない。

しかしそのフットワークの軽さと心変わりの早さはやはり小学生と言えばいいのだろうか。

僕には真似できないよ。というか行動力の部分で圧倒的に劣っているしね。

「一之瀬さん、本当にありがとうございました！亮様に髪留めをボクに直接返すように頼んでくれたって聞きました。おかげで亮様にも会えて無事思いを告げることができました。結局ダメだったんですけどね・・・」

「ああ、その事なら気になさらなくて結構です。正直お節介なことをしてしまったのではないかと思っていましたしね」

ぶっちゃけると自分からレッド寮の方まで歩いて行くのがだるかったということも、丸藤先輩に髪留めを託した理由に多分に入っている。だがそんなこと僕が言わねば誰にもわからないのだよ！

「いえ、おかげで新しい恋を見つけることができました！この恋こそは絶対に成就させてみせます！見ていてくださいなっ！」

おめでとう十代。次のターゲットはキミになったようだぜ。

ロリコンの噂が立つかもしれないが大丈夫だ、安心してくれ。

僕がその道の先達である三沢さんにアドバイスを聞いてきてやるか  
らな。

## 第15話 恋する乙女（後書き）

主人公の部屋は正直闇のゲームより危険性が高いことになってるかもしれないです。

## 第16話 学園代表戦（前書き）

今回も一部アニメ効果のカードが出てきます。ご了承ください。

## 第16話 学園代表戦

レイが嵐のように現れ去っていったから数日後。

デュエルアカデミアノース校との友好デュエルが開催される日が着々と迫っているのにも関わらず、デュエルアカデミアでは学園代表生徒の選出に少しばかり問題を抱えており、未だに決定していない。

僕はてっきり昨年と同じく丸藤先輩が学園の代表になるのだろうと信じて疑わなかったんだけど、なんでもノース校の代表が1年生らしく、それならば我が校からの代表も1年生にしようじゃないかという事になったそうだ。

その会議に同席していた丸藤先輩は十代を推薦したらしい。

十代なら確かに肝が据わっているし、学園代表として恥じないデュエルをしてくれるだろう。僕としても問題ないと思うし、むしろ適切な人選だと思う。

この話だけだったのならば他人事で済ませられたのに、とある人物の介入により話はややこしい方へと転がってしまった。

オベリスクブルー至上主義でオシリスレッドのドロップアウトボーイが学園代表など認めないクロノス教諭がそれを阻止すべく、対抗馬として一応成績優秀で通っている僕を推薦したのだ。二人を戦わせて勝った方が代表になるということで議論は終着いたらしい。

そのことをクロノス教諭から直接聞いた時、だったら三沢でもいいじゃないかという僕の意見は物の見事に無視された。彼はどうして



も自分の監督するオベリスクブルーから代表生を輩出したいらしい。クロノス教諭が僕をオベリスクブルーに昇格させたのもこういう時に使える便利な駒を得るためだったのか。

くそう、欲にかられてあまり考えもせずに行動した結果がこれだよ！  
というか僕は間違いなく学校代表なんて柄じゃないんだけど、選ばれたらどうするんだよ。

小心者の僕には全校生徒の前でデュエルなんてできやしないぞ。

明日香に代わってもらおうという代案を思いつきさっそく実行に移したんだけど、彼女は学校の代表になるより僕と十代のデュエルのほうに興味をひかれているようだ。

じゃあ明日香の前で十代とデュエルするから代表候補生変わってくれという願いも苦笑とともに却下され、どうしようかと悩んでいるうちにあれよあれよという間に学園代表デュエルの日になってしまったのだ。

「お前とデュエルできる日を楽しみにしてたぜ！」

いつも元気だねキミは。

まあ僕も十代とのデュエルは初めてなのでワクワクしていないこともない。

実は先程代表問題も解決の兆しを見たところだしね。

ここに来る前に校長室に向かい鮫島校長に頭を下げて、勝敗に関わらず十代が学園の代表足りえる力を示せば、彼が代表生徒として選ばれる事を約束してもらったのさ。

正直僕より十代の方が強いと思うけど、代表になる可能性は下げておくに越したことはない。

これで僕はただ十代とのデュエルを楽しめばいいだけ。

会場に入る前に、負けたら承知しねーからなというジャツカルさんの声なんて聞こえなかった。そう、聞こえなかったんだよ！そういうメージするんだ！

きっと彼女は負けたらしょーがねーからなと言っただよ。

そっくだよね、負けたら仕方ないよね。

学園代表を決めるデュエルであるために観客がいつも以上に多い。

ヤバい、緊張してなにか失敗する前にさっさとデュエルを始めてそちらに集中しよう。

「僕のターン、ドロー！」

ふふっ、聞いて驚くといい。なんと今回は僕が先攻なのだよ。

まあ僕にかかれば先攻を取るなんて造作もない事で、今まではあえ

て後攻を選んでいただけだということがこれで証明されただろう。

言っておくが決して事前に十代に頭を下げてまで先攻を譲ってもらったわけじゃないぞ。

半泣きでこれまでの事を語って憐憫の目で見られ、了解を得たわけじゃないからな！

だから今も相對している十代が僕の浮かれた様子を見て苦笑しているなんてことも気のせいなのだ。

「僕はモンスターをセットしターンを終了します」

「いくぜ、俺のターン、ドロー！俺は手札からE・HEROスパークマンを攻撃表示で召喚！」

《E・HEROスパークマン》エレメンタルヒーロー ATK/1600 DEF1400

「スパークマンでセットモンスターに攻撃！スパークフラッシュ！」

「僕のセットモンスターはジェムタートル。守備力は2000ポイント！よって反射ダメージを受けてもらいますよ」

《ジェムタートル》 ATK/0 DEF/2000

十代LP4000 3600

「くっ……」

「さらにジェムタートルのリバース効果を発動！自分のデッキから

ジェムナイト・フュージョンを手札に加えさせてもらいます」

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「僕のターン。融合はなにも十代だけの専売特許ではないことを覚えてあげます。僕は手札より魔法カード、ジェムナイト・フュージョンを発動！手札、自分の場より融合モンスターによって決められた融合素材を墓地へ送り、ジェムナイトと名のついたモンスターを融合召喚します。僕は手札のジェムナイト・クリスタとジェムナイト・ガネットを融合！ジェムナイト・マディラを融合召喚！」

《ジェムナイト・マディラ》 ATK/2200 DEF/1950

紅蓮に燃え盛る大剣と大きなマントを翻し宝石の騎士が降り立つ。

「すげえっ！初めて見るモンスターだ！俺のヒーローには及ばないけどかつこいいぜ！」

そういう少年のような心を僕はいつ失くしたんだろうか。

いや、案外その辺を探せば落ちているかもしれないな。

誰か拾ったら僕の方まで連絡をくれたまえよ。

「バトルフェイズに移行。ジェムナイト・マディラでスパークマンに攻撃！」

「ふっ、甘いぜアキラ！俺はリバーズカードを「発動できませんよ」・・・なんだって!？」

「ジェムナイト・マディラは戦闘を行う際、相手はダメージステッ

ブ終了時まで魔法・罨・モンスター効果を発動できないという効果を持っているのです。よってバトルフェイズを続行。スパークマンを破壊します」

「くっ、スパークマン！」

十代LP3600                    3000

これで十代の伏せているカードは攻撃反応型の罨の可能性が濃厚であると判明したね。

え、汚ないって？

何を言っているんだい、知らないカードが出てきた時にそのカードの効果を知らないままデュエルを続行するなんて馬鹿のすることさ。聞かれていたら僕だってちゃんと答えていたよ。

「僕はカードを1枚セットしターンを終了します。さあ、キミのヒーローと僕のジェムナイト、どちらが強いか一勝負しましょうか」

「おもしれえ！その勝負受けて立つぜ！俺のターン、ドロー！」

「俺は手札より戦士の生還を発動！墓地に存在する戦士族モンスター、スパークマンを手札に加え、更に融合を発動！手札のスパークマンとクレイマンを手札融合！来い！サンダー・ジャイアント！」

エレメンタルヒーロー

《E・HEROサンダー・ジャイアント》ATK/2400 DE  
F/1500

「融合勝負だったら負けないぜ！サンダー・ジャイアントの効果を

発動！1ターンに1度、手札を1枚捨てることで、フィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力がこのカードよりも低いモンスター1体を破壊することができる！俺はジェムナイト・マディラを破壊する！いけ、サンダー・ジャイアント！ヴェイパー・スパーク！

「そう易々と破壊はさせません。畏<sup>トラシク</sup>発動、ジェム・エンハンス！このカードは自分フィールド上に存在するジェムナイトと名のついたモンスターを生贄に捧げ、自分の墓地に存在するジェムナイトと名のついたモンスターを復活させます。僕はジェムナイト・マディラを生贄に捧げ、墓地よりジェムナイト・クリスタを攻撃表示で特殊召喚！」

《ジェムナイト・クリスタ》 ATK/2450 DEF/1950

これぞサクリフェイスエスケープ。一度やってみただけなんだ。

「サンダー・ジャイアントの効果は対象を失い不発になった上、ジェムナイト・クリスタの攻撃力はサンダー・ジャイアントを上回る2450ポイント。さあどうしますか」

「くっ、俺はサンダー・ジャイアントでジェムタートルに攻撃！ポルティック・サンダー！」

亀に電気、効果は抜群だ！あっ、この亀は水属性じゃなくて地属性岩石族だったか……。

「俺はこれでターンエンドだ……」

「僕のターン、ドローします。そしてそのままバトルフェイズに移行。ジェムナイト・クリスタでサンダー・ジャイアントに攻撃！」

「俺だつてそう簡単に倒させやしないぜ！<sup>トランプ</sup>畏発動！ヒーローバリア！自分フィールド上<sup>エレメンタルヒーロー</sup>にE・HEROと名のついたモンスターが表側表示で存在する時、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にできる！」

ああやっぱり攻撃反応型の畏だつたか。

「メインフェイズ2、僕は墓地に存在するジェムナイト・フュージョンの効果を発動。このカードが墓地に存在する時、自分の墓地のジェムナイトと名のついたモンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを手札に戻すことができます。僕はジェムナイト・マデイラをゲームより除外し、ジェムナイト・フュージョンを手札に回収」

「また融合するのか!?!」

「僕はジェムナイト・フュージョンを発動!場のジェムナイト・クリスタと手札のジェムナイト・アンバーを融合!現れる、ジェムナイト・プリズムオーラ！」

《ジェムナイト・プリズムオーラ》 ATK/2450 DEF/1400

白き甲冑と紅きマントをはためかせ現れたのは研磨されし宝石の騎士が一体。

「墓地に存在するジェムナイト・フュージョンの効果を再び発動。墓地のジェムナイト・クリスタをゲームから除外し手札にジェムナイト・フュージョンを回収。そしてジェムナイト・プリズムオーラの効果を発動！1ターンに1度、手札からジェムナイトと名のついたカードを墓地に1枚送ることによって、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊します。僕は回収したジェムナイト・フュージョンを墓地に送り、サンダー・ジャイアントを破壊！」

「げっ、俺のサンダー・ジャイアントが!?!」

「僕はこれでターン終了です」

「勝負はまだまだこれからだぜ！俺のターン、ドロー！」

「俺は手札よりE・HEROバブルマンを攻撃表示で召喚！バブルマンの効果で自分フィールド上に他のカードがない場合、デッキからカードを2枚ドローできる！」

《E・HEROバブルマン》 ATK/800 DEF/1200

これが噂の強欲なバブルマンのカードか。  
現実だったらヒーローデッキ以外で悪用されそうだね。

「さらに魔法カード、バブル・シャッフルを発動！自分フィールド上にバブルマンがいる時、バブルマンと相手フィールド上の表側表示のモンスター1体を守備表示にする。そして守備表示になったバブルマンを生贄に捧げることで、E・HEROと名のつくモンスター1体を手札から特殊召喚できる！来い！E・HEROエッジマン



「！」

《E・HEROエッジマン》 ATK/2600 DEF/1800

「バトル！俺はエッジマンでジェムナイト・プリズムオーラに攻撃！パワー・エッジ・アタック！」

プリズムオーラの守備力はたったの1400ポイント。

「さらにエッジマンの効果！このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフにダメージを与える！」

アキラ LP4000 2800

「どうだ！これでライフポイントは逆転したぜ？ターンエンドだ！」

「流石にやりますね。僕のターン、ドローします」

あの手札枚数からよくもまああそこまでポンポン専用カードを用いたコンボが出せるね。

もはや積み込みレベルだろあれ。

「僕は再び墓地のジェムナイト・フュージョンの効果を発動。ジェムナイト・プリズムオーラをゲームから除外し、ジェムナイト・フュージョンを手札に回収」

「またかよ！」

これぞジェムナイトの戦い方なのだよ。途切れぬ融合召喚こそジェムナイトの真骨頂。

「僕はジェムナイト・フュージョンを発動。手札のジェムナイト・サファイアとジェムナイト・アイオーラを手札融合！ジェムナイ・アクアマリナを守備表示で融合召喚！」

《ジェムナイト・アクアマリナ》 ATK/1400 DEF/2600

蒼き鎧と巨大な盾。我を守護せし宝石の騎士よ。

「これで僕のターンは終了です」

「俺のターン！俺は手札より永続魔法悪夢の屋気楼を発動！相手のスタンバイフェイズに自分の手札が4枚になるようカードをドロースする。エッジマンの攻撃力とジェムナイト・アクアマリナの守備力は互角・・・戦闘は無意味。カードを1枚セットしターンを終了するぜ」

「僕のターン、ドロースします」

「この瞬間俺は悪夢の屋気楼の効果によってカードを4枚ドロースして速攻魔法、非常食を発動！自分フィールド上の魔法、罫を任意の枚数墓地に送り、送ったカード1枚につき1000ライフポイント回復する！俺は悪夢の屋気楼を墓地へ送る」

十代 LP3000 4000

なるほど。悪夢の屋気楼は効果を発動した次の自分のスタンバイフェイズ時に、効果によってドロートした枚数分だけ手札を捨てなければならぬ。しかし非常食によって悪夢の屋気楼をフィールドから離してしまえば、そのデメリットは帳消しにできる。おまけにライフポイント回復ってか・・・やってられんねホント・・・。

「僕は手札より強欲な壺を発動！デッキよりカードを2枚ドロートし、その後強欲な壺を破壊します」

「更に墓地に存在するジェムナイト・アイオーラをゲームから除外し、ジェムナイト・フュージョンを回収し発動！手札のジェムナイト・ルマリンと場のジェムナイト・アクアマリナを融合！ジェムナイト・パーズを融合召喚します」

《ジェムナイト・パーズ》 ATK/1800 DEF/1800

「そしてジェムナイト・アクアマリナの効果を発動！このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択し、持ち主の手札に戻します。エッジマンを手札に戻してもらいましょうか」

「なんだって!?!」

「これで十代、キミの場はがら空きです。ジェムナイト・パーズでダイレクトアタック！」

十代 LP4000 2200

「くっ、まだまだ!」

「まだ終わりではありませんよ。ジェムナイト・パースは1度のバトルフェイズ中に2度攻撃することができます。追撃しろ！ジェムナイト・パース！」

「うわああああああっ！」

十代 LP2200 400

「僕はカードを1枚セットしてターンを終了します」

「フフツ、アーツハツハハハ！やっぱりデュエルはこうじゃなきやな！今俺はすげー燃えてるぜ！俺のターン！ドロー！」

「お前の騎士も強えけど・・・なら俺も見せてやるぜ！これがヒーローの力だ！俺は手札より融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合し、現れる！E・HEROフレイム・ウィングマン！」

《E・HEROフレイム・ウィングマン》 ATK/2100 DE  
F/1200

来たか十代の切り札モンスター。

「いけ！フレイム・ウィングマン！ジェムナイト・パースに攻撃！フレイム・シユート！！！」

くっ、パースでは攻撃力が足りないか。

アキラLP2800 2500

「まだ終わりじゃないぜ？フレイム・ウィングマンは戦闘によって相手モンスターを破壊し、墓地に送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフにも与える！」

アキラ LP2500 700

「更に俺はハネクリボーを守備表示で召喚し、カードを1枚セットしてターンエンドだ！さあそろそろ勝負をつけようぜ？」

《ハネクリボー》 ATK300 DEF200

流石に強い・・・だけどそう簡単には勝たせないよ。

僕はこれでも男の子なんでね。意地があるのだよ。

「僕のターン。僕は手札より魔法カード、闇の量産工場を発動！自分の墓地に存在する通常モンスター2体を選択し、手札に回収します。僕はジェムナイト・ガネットとジェムナイト・ルマリンを手札に回収」

「さらに墓地に存在するジェムナイト・アクアマリナをゲームから除外し、ジェムナイト・フュージョンを回収します」

最後の勝負といきますか。

「僕は手札よりジェムナイト・フュージョンを発動！手札のジェムナイト・ガネットとジェムナイト・ルマリンを手札融合！来い！ジェムナイト・ルビーズ！」

《ジェムナイト・ルビーズ》 ATK / 2500 DEF / 1300

紅き甲冑を身に纏い降臨するは我が最強の宝石の騎士。

「さらにリバースカードオープン！異次元からの帰還！僕はライフポイントを半分支払う事によって、ゲームから除外されている自分のモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚します。舞い戻れ宝石の騎士たちよ！ジェムナイト・マディラ！ジェムナイト・プリズムオーラ！ジェムナイト・クリスタ！ジェムナイト・アクアマリナよ！」

アキラ LP700 350

《ジェムナイト・マディラ》 ATK / 2200 DEF / 1950

《ジェムナイト・プリズムオーラ》 ATK / 2450 DEF / 1400

《ジェムナイト・クリスタ》 ATK / 2450 DEF / 1950

《ジェムナイト・アクアマリナ》 ATK / 1400 DEF / 2600

今ここに5体の騎士が集結した。

さあ英雄と一戦交えようじゃないか、我が宝石の騎士たちよ。

「手札からジェムナイト・フュージョンを捨てることでプリズムオーラの効果を発動！フレイム・ウィングマンを破壊します！」

「フレイム・ウィングマン！くっ、・・・」

「まだ終わりませんよ。僕はジェムナイト・ルビーズの効果を発動

！1ターンに1度、自分フィールド上に存在するジェムと名のついたモンスター1体を生贄に捧げることで、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力を生贄に捧げたモンスターの攻撃力分アップさせます。僕はジェムナイト・アクアマリナを生贄に捧げルビーズの攻撃力を1400ポイントアップ！」

《ジェムナイト・ルビーズ》 ATK/2500      ATK/3900

「さらにジェムナイト・アクアマリナが墓地へ送られたことで効果を発動！ハネクリボーを手札に戻してもらいますよ」

「俺は畏カード、サンダー・ブレイクを発動！手札1枚を捨て、フィールド上に存在するカード1枚を破壊する！対象はハネクリボーだ！」

くっ、ハネクリボーが破壊されたターン、相手の受ける戦闘ダメージは全て0になる。

「僕は墓地のジェムナイト・フュージョンの効果を発動！ジェムナイト・ガネットをゲームから除外し回収。そして発動！場のジェムナイト・クリスタとジェムナイト・プリズムオーラを融合し、ジェムナイト・プリズムオーラを融合召喚！」

「……バトルフェイズは行いません。これで僕のターンは終了します。エンドフェイズ時、異次元からの帰還によって特殊召喚されたモンスターは再びゲームより除外されます」

ここで勝負を付けられないのは辛いけど、次の僕のターンで終わりだ。ルビーズとプリズムオーラ、2体の騎士の攻撃を耐えきることは難

しい。

十代の手札は現在0枚。

次のたつた1枚のドロウでこの状況をひっくり返すことなんてできやしないだろう。

あれ？これめっちゃフラグ立ってないか？

「ありがとうハネクリボー。お前の稼いでくれた時間は無駄にはしない・・・このドロウに賭けるぜ！俺のターン、ドロウ！」

「きたっ！俺は魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！自分のフィールド上、または墓地から融合モンスターによって決められたモンスターをゲームから除外し、エレメンタルヒーローE・HEROという名のついた融合モンスターを特殊召喚する！俺は墓地に存在するフレイム・ウイングマンとスパークマンを融合！エレメンタルヒーローE・HEROシャイニング・フレア・ウイングマンを召喚する！」

《E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン》ATK/2500 DEF/2100

まさに奇跡の融合。眩い光を放ちながら天より舞い降りたるヒーローか・・・。

「シャイニング・フレア・ウイングマンは俺の墓地のエレメンタルヒーローE・HEROと名のついたカード1枚につき攻撃力を300ポイントアップする！俺の墓地には6体のヒーローが存在するため攻撃力は1800ポイントアップ！」

《E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン》ATK/2



500 4300

「シャイニング・フレア・ウィングマン！ジェムナイト・ルビーズに攻撃！いけ究極の輝きを放て！シャイニング・シユート！！」

もはやここまでだね・・・。

アキラ LP350 0

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「まあ僕も久しぶりに熱いデュエルができましたよ」

負けるのはやっぱり悔しいね。いつか借りを返しに行くとしましょうか。

でもこれで十代が代表に決まり、僕の平穩は確保されたという事実。面倒事がなくなったため、ウキウキとした気分でその場を去る。

そんな僕とは対照的にその場にへたり込むクロノス教諭。すまんな期待に添えなくて。でも嫌なものは嫌なのだよ。

出入口で僕が戻るのを待っているジャツカルの姐さんを発見した。

良かった、流石にあれだけの良い勝負だったためか、負けても納得してくれたのだろう。

怒っているようには見えない。

そそくさと彼女のところに向かう。

「いやあ、負けちゃいましたね。でも仕方ないですよねアレは」

「おい、俺は負けたら承知しねーといったよな？」

え？

「負けたくせにヘラヘラと笑ってるオメーには一度漢やまとってのは何足るかをその身に教えてやる必要があるそうだな」

しまった、面倒事から逃れられたことに浮かれ過ぎて、それが顔に出ていたのか！

いかん、これは早めに逃走するに限る。

「すっ、すみません。あの、僕はこれから少しばかり所用がありません。……これにて御免！！」

振り返っては駄目だ！一目散に逃走あるのみ！

ガシッ

「どこへ行くんだ？今からお前には楽しいお話をしなきゃならないんだがな……」。

逃走阻止のために掴まれた肩がみしみし嫌な音を立てている。

はい、無理ですよ。分かっていますよ。

というかせてその目が笑っていない笑顔だけはやめてくれませんか

かね。

あっ、やめてくれないですか、そうですよね。

襟首を掴まれ猫のように引きずられていった僕のその後を知る者は  
いなかった。

## 第16話 学園代表戦（後書き）

ヒーローとジエムナイトの融合対決がしたかったただけの回。

夏も終わりにリアルが忙しくなってくるため、更新速度が遅くなってきました。申し訳ありません。

第17話 分岐点(前書き)

若干シリアス回。

## 第17話 分岐点

デュエルアカデミアノース校との友好デュエル当日。

僕は三沢に誘われノース校代表団のお出迎えに港まで足を運んでいく。

友好を目的としているのだから全校生徒で出迎えたほうが良いのではないかと思うのだけれど、皆はそんなことどうでもいいのか港に集まった生徒は疎らである。いや、流石に校長先生を筆頭とした教職人は集まっていたけどね。

しかしまさか潜水艦で来るとは予想していなかった。

てつきりフェリーかなんかで来ると思っていたから、水平線にいつまでも見えない船舶の姿を探していた僕らは、突然目の前に浮上してきた潜水艦に大いに驚かされた。翔に至ってはサブマリノイドが襲って来たんだとわけのわからない事を口走りつつ、横の十代に抱きついて怯えている。

そこで潜水艦のハッチが開き、中から鉢巻を巻いたおっさんが出てきて鮫島校長の元までやってくる。

「おお、よくぞいらっしやいましたな市之瀬校長」

「暫しうちの悪道楽がお世話をかけますが宜しくお願いしますよ」

うわ、僕と名前が被ってる。いや、漢字は違うのかもしれないが、

なんというかこんなおっさんと同じ名前というのは少しばかり思うところがあるな。どうせならかわいい女の子と同名とかだったりすれば、奥手の僕でも話題が作れるって言うのに。

「校長先生！挨拶はその辺にしてさ、早く俺の相手紹介してよ！」

十代が鮫島校長先生を急かす。

何というかアレだ。おもちゃ屋の前で母親におもちゃをねだっている子供の姿を思い浮かべるのは僕だけではないはずだ。隣の明日香も溜息ついているし、三沢も若干呆れた顔をしている。

信じられるかい？十代はすでに15歳を超えているんだぜ？

その年になってまであのような無邪気な少年心を持ち合わせているのはある意味尊敬に値するかもしれない。リアルワールドでは確実にうざがられること請け合いだ。悪気がない分、故意にやっているより手に負えないからな。

「で、誰なのさ、俺と戦う相手ってのは？」

「俺だ」

お前か。

って誰だよ。俺だけじゃわかんないよ。

その答えを教えるように潜水艦から万丈目が姿を現す。

お前かよ！

「え？それじゃあ俺のデュエルの相手って万丈目かあっ！？」

そつらしいね。いったい彼に何があつたんだろうか。

アカデミアを抜け出し、他校の代表にまでなつて戻つて来たその根性は素直にすごいと思うけど。

その時バタバタと大きい音を立てながら2機のヘリコプターが港近くのヘリポートに降りたつた。機体には万丈目グループを示す「万」の文字がでかかど描かれており、中から万丈目の兄貴達が万丈目に対し激励を飛ばしている。

もう1機からはカメラを携えたもの達が出てきて、おそらくは撮影の機材を運び出している。聞いたところによると、なんでも万丈目グループが金にモノを言わせ、今回のデュエルアカデミアとノー schoolsの友好デュエルを全国中継するらしい。

マジで代表に選ばれなくて良かった……。

全国中継ってなんだよ。いきなり規模が跳ね上がりすぎだろ！

まあすでに僕には関係のない話さ。

友好試合が始まるまでまだ時間はある。予定もないし自室でだらだらしていようと思つた僕はその場を離れ、オベリスク寮までの近道である人気のあまりない小道に入る。

とそこで不意に背後から声が聞こえた。

「面倒だ。少しばかり気を失っていてもらおうか」



え？

その言葉の後、僕は振り返る間もなく首に衝撃を受け意識を手放した。

~~~~~

暗い。

ここはどこなんだ。

気が付き起きたらなにやら見慣れぬ空間。

周りには怪しい研究施設を思わせるような機材とコードが所狭しと設置されているのが確認できる。

その中でもライトグリーンの光に照らされた何らかの液体が満たされている大きなガラス管などを見ていると、言いようのない不安に駆られる。

とりあえず身体に何か異常はないか調べてみよう。

どこぞの探偵みたく気が付いたら身体が小さくなっていったとかだつたら洒落にならん。

すでに異世界トリップという不思議体験をしているのに、追い打ちをかけるようにバーロー状態になるなんて御免だ。

僕が身の回りを確認し立ちあがった時、奥の方より扉の開く音が聞こえ、仮面を被った長髪の男がこちらに向かってきた。

コイツは・・・ダークネスか？

明日香の兄であり現在行方不明とされている天上院吹雪その人。今はダークネスという闇の魂に身体を乗っ取られているためか威圧感が凄い。

「ついて来い。主がお呼びだ」

この声、先程気絶する前に聞いた声と同じだ。

ちくしょうテメーか！ダークネス！

正気に戻ったら覚悟してやがれ！明日香に言いつけてやるからなっ！

彼について行く事少しばかり、長い廊下を経た先にある一際大きな扉。

ダークネスは扉を開けると中に入るように顎で示す。

びくびくと中に入ると背後ではすぐに扉を閉める音。彼の案内はあそこまでと言うことか。

気を取り直し、前を見る。

そこには生命維持装置のようなタンクの中に呼吸器を付け浮いている白髪の老人がいた。

「ようこそ一之瀬よ。私は影丸、デュエルアカデミアの理事長を勤めている」

影丸……。原作では三幻魔復活を企んでいた所謂ボスの一人。

「理事長……。僕は何故ここに連れて来られたのでしょうか？」

僕を呼んだ目的が解らぬ以上、対話をもつてして彼の真意を確かめる必要がある。

「アカデミアの冬休み期間中、学園内でカードの精霊と思しき存在に生徒が巻き込まれるといった事案が発生した。彼奴は生徒を生贄に自身の存在を現世に現界させようとしたらしいな」

ああ、あのサイコ・シヨツカーの件のことか。

正直またガイドさんが何かやらかしたのかと内心ひやひやしていたところだ。

しかし、この話は存外マズイかもしれない……。

「彼奴の復活を阻止したのはお前で間違いないな？」

「いえ、僕じゃありません」「本題はその時お前が用いた未知のモンスター、そして未知の召喚方法についてなのだ」……」

くっ、誰も見ていないと高を括って調子に乗ったのは失敗だったか……！

あんな人気のないところまで影丸理事長の目が届いていようとは……。

「これでも私はデュエルアカデミアの理事長という肩書を持つものでな。このデュエルモンスター界の情報というのはこの世界に住

む者の中でも最高峰に属しているのだ。しかし・・・お前のモンスター、そしてあの召喚方法は今まで欠片も聞いた事のないもの。デュエルモンスターズ生みの親、ペガサス・J・クロフォードでさえもだ」

「・・・・・・・・・・」

これは本格的にまずい状況だ。完全に僕が異質であると彼は認識している。

「貴様は一体何者なのだ・・・？」

「・・・僕は・・・」この世界の人間ではないか？「・・・・・・・・っつ！？」

「ふっ、その反応まさかとは思ったがやはりそうか。何、デュエルモンスターの住む精霊界、そして闇のゲームにおける闇の世界、このような存在によりこの世界がただ唯一のものではないことは自明の事柄。ならばこの世界と似たデュエルモンスターズが存在する世界があっても何ら不思議ではあるまいて」

このままだとずるずる彼のペースに巻き込まれる・・・。
とりあえずこちらに流れを取り戻さなくては。

「・・・色々と御高説を披露してもらいましたがすべては憶測の事。そんな異世界人（仮）と認定されている僕をわざわざ招いて理事長は一体何の御用があるのでしょうか？」

「お前は元の世界に帰りたくはないのか？」

なっ!?

「くくくつ、反応が解り易過ぎて楽で敵わんな。貴様のことを調べて見たが書類上にはこれまでの経歴が残されているが、その経過に至るまで誰もがお前の事を知らないという不可思議な現象が起こっていた。しかし、お前がこのアカデミアに来てからのことは認識している人物が存在している。この事からお前はアカデミアに入る少し前にこの世界に来た可能性が高い」

それは正解。というか僕の経歴書類上はあるのかよ。

ガイドが言っていた僕がこの世界に取り込まれた結果と言うやつなのか？

「この世界に来たのもなんらかの目的があり、それによってデュエルアカデミアに侵入した線も考えたのだが、今までのお前の暮らしぶりを見る限りにおいてその線も考えにくい。すでにこれだけの時間が経過したのにも関わらず、お前は自分からは何のアクションも起こさずにいる。事件にはよく巻き込まれるらしいがお前の本意ではなさそうだ。面倒事に対して自発的に動く人間とも思えんしな」

僕は受動人間だからね基本。

「これまでの憶測を統合するとお前はこの世界に何らかの事故で飛ばされた可能性が高い。常人の思考ならば元の世界に戻りたいと思うのが普通なのではないかと推測しただけだ」

「・・・貴方ならばそれが可能だとも？」

「今の私には無理だ。だがお前の協力があればその可能性はある。それはデュエルアカデミアの地下深くの遺跡に封印されている三幻魔のカード。この世界での世界間の干渉は主にデュエルモンスターズが大きく関わるのだ。三幻魔、これらはデュエルモンスターズの中でも屈指の力を誇る三幻神にすら匹敵する。その力を持つてすれば他世界への干渉も可能やもしれぬ。お前が元の世界へと帰るための助けになるうことは間違いないはずだ」

まさかここで三幻魔の話題が出でくるとは……。

三幻魔のカードが地上に放たれるとき、世界は魔に包まれ混沌が全てを覆い、人々に巣くう闇が解放され……やがて世界は破滅し、無へと帰すと言い伝えられているほどの力を秘めたカード。

まさか僕も持つていたとは言えない……。

というか僕のはすでに地上に放たれているし、僕の持つている三幻魔のカードとこの世界に封印されている三幻魔のカードとは全くの別物なのだろうと考えるべきか。

「私の目的も三幻魔のカードだ。私はこの三幻魔のカードを手に入れるべく、長い歳月を費やし準備してきたのだ。後少し、後少しで私の望みは叶う！しかし、そのためには三幻魔を封印している七星門と呼ばれる7つの巨大な石柱をどうにかせねばならないのだ。その7つの石柱は7つの鍵によって開かれる……」

彼の望みね……。

三幻魔なんて物騒なカードを手に入れて何をしようというのか。

「……それでその鍵とやらはどこに？」

「私が所有していたが、今は鮫島に預けておる。七星門の鍵によって三幻魔の封印を解くにはデュエルによってその鍵を手に入れる必要があるのだ。これは古よりこの島に伝わる約束事。すでに鮫島にもこの鍵を狙う輩がいると吹聴しておいた。奴は私が三幻魔のカードを狙っておるなどとは知らぬからな、私の助言を信じて学園内で実力の高いデュエリストにその鍵を守るよう鍵を託すだろう・・・」

「つまり貴方が僕に協力してほしいということは、その七星門の鍵を託されたデュエリストからデュエルによってその七星門の鍵を奪取すること・・・」

僕の答えに理事長は答えず、ただニヤリと笑う。

「しかしそれだけなら僕を勧誘せずとも他者で代用できる事。何故僕を選んだのです？」

「ふっ、なにこれまで長年の歳月をかけ計画をここまで漕ぎ着けたのだ。今更になって予想外のイレギュラーな存在に場を掻き回されでもしたらたまったものではない。お前は何もせずとも面倒事に巻き込まれるようだしな。それならば私の目の届く範囲に置いていた方が良いと判断したまだよ」

ああ、さいですか。

「それでどうするー一之瀬よ・・・私と手を組むか・・・否か・・・」
これは正直詰んでないか？

仲間になる可能性が高いと判断しこの話を持ちかけたのだろうか、

ここまでの情報を話した時点で僕を無条件で帰すなんてことは考えられない。

最悪明日香の兄の天上院吹雪と同じように操ればいいしな。

ここで僕が選択されているのは自ら進んで協力するのか、はたまた無理やり協力させられるのかの二択……。

一応元の世界に戻れるかもしれないという餌を用意している以上、進んで協力するほうを望んでいるのだらう。僕としても元の世界に帰れるかもしれない可能性は高ければ高いほどいいことは肯定するしかない。

答えは決まっているか……。

「いいでしょう。貴方の提案を受け入れます」

後の事は後で考えればいい……。

例えその結果、この世界と対立する運命になっただとしても……。

第17話 分岐点（後書き）

ノース校の校長も市ノ瀬という名前であることは今まで気付かなかった事実。

漢字が違ったからまだ良かったです。

第18話 決断（前書き）

主に心理フェイズ。

幻魔に関する設定は曖昧なのであまり深く考えず読んでもらえると幸いです。

第18話 決断

昨日は流石に疲れた。

まさか原作のボスの1人に会うことになるうとはね。なんとというか相手から放たれる威圧感プレッシャーが凄過ぎて、小心者の僕には辛くて仕方ない。正直意識しないと体が震えてしまうレベルだったよ。

おかげで傍から見ると分には面白そうないイベントを見逃してしまった。友好デュエルの方は十代が万丈目に対して見事に勝利を納め、デュエルアカデミア本校という体面を守れたそうだ。万丈目の勝利を疑わなかった万丈目の兄貴らと、彼らに扇動されたテレビ局の人々は予想外の出来事に混乱し、全国中継されていた放送は途中で中止という大失態を演じたとのこと。

一方祭り上げられていた万丈目本人の方はというと、負けたとはいえ彼の健闘振りを学園中の皆が称え、結局彼はこのデュエルアカデミア本校のほうに戻ることを選択したらしい。まあ自ら無断で学校を飛び出した拳句、数カ月間の授業欠席により進級単位が足らず、否応なくその制限が大らかなオシリスレッド寮に所属することになってしまったそうだが……。

本人にとっては不本意だろうが、彼はもう少し余裕を持って生きてほうが良いと思う。

この結果は彼にとっていい方向に軌道修正されたのかもしれないな。

まあ僕は今他人の事を気遣っている余裕などないわけだが……。

あの会合の後、影丸理事長からの指示としては、僕は基本的に待機状態とのこと。

七星門の鍵に関しては、理事長が以前から秘密裏に召集していたセブンスターズという7人の闇のデュエリストが主に担当し、僕はバックアップとして彼らが失敗した時にそれを補佐する立場にあたるようだ。

僕の扱いがぞんざい過ぎやしないかと思っただが、影丸理事長としては完全なイレギュラー存在である僕が不用意に動くことを望んでおらず、むしろ僕を仲間に引き込んだことだって、僕が想定外の行動を取らぬよう監視するためといった要素の方が強いように見える。

現に昨夜も理事長の手の者が放ったと思われる監視蝙蝠が僕の部屋の近くにとまっていたしな。犯人は恐らくセブンスターズが一人、吸血鬼一族の末裔であるカミューラだろう。

まあ周りをうるちよろされて怒り心頭になったガイドさんが追い払っていたけど。

やはり口約束程度の契約など向こうは信じちゃいないか。理事長は何のために三幻魔を手に入れようとしているのかといった理由については話さなかったし、三幻魔の封印を解いた時の弊害といった大切な情報も全くといっていいほど触れられなかった。

僕の方もガイドさんのことやら隠していることはあるし、そもそも理事長をまるで信用などしていないことも明白だろうから当然のことかもしれない。

そもそも相手方が僕に協力を要請してきた七星門とそれを解く鍵の争奪の件は、三幻魔の封印を解く上で重要なファクターではなかったはずだ。それは関係者らの目を真実から欺くためのダミーに過ぎない。

三幻魔復活に必要なのはデュエリストの闘志に満ちた空間。

それさえあれば七星門と鍵は自然に引かれ合い、自動的に封印は解除されるって寸法さ。

彼はそのためだけにこの島にデュエルアカデミアを設立するよう差し向け、三幻魔の復活に見合うデュエリストを育てていたというわけだ。

つまりはこの学園が設立され、順調に運営されている時点で三幻魔の復活は遅かれ早かれやって来る。鍵をどうこうしたところでそれは無駄骨に終わる。

来るべくしてやって来た。

ただそれだけの事。

重要なのはこれから僕がどのように行動するかといったことだ。

従属するか離反するか。

影丸理事長の側についてした場合、世界を敵に回すといっても過言ではないだろう。しかし、三幻魔の力が伝承通りならば、彼は幻魔の力を持ってして世界中のデュエルモンスターズの精霊の生気を吸収し、

不老不死の存在となった上でこの世界の覇権を手にも考えられる。カードの精霊を食らう幻魔はこのデュエルモンスターズが中心となって動いているこの世界に対してのまさにジョーカー的な存在だ。

そうなった場合理事長側に属している人間は世界に対して圧倒的なアドバンテージを得ることになるだろう。つまりは元の世界に帰るといふ僕の最終目標へのアプローチ手段が格段に増加し、それ以前に三幻魔の力によって本当に帰れることができるかもしれない。無論影丸理事長が僕との約束を反故しない限りにおいてだが……。

いっそ現状精霊の力がない彼に取って代わり、最後の最後で僕が三幻魔の力をかっぱらう方法も取ることができるか……。一応僕には精霊が見えるしな。彼よりは幻魔に適性があるだろうと思われる。

ただこちら側につくと決して避けられぬ三幻魔復活によって世界に及ぼされる被害。

完全に復活すれば地球全土のデュエルモンスターズの生気を吸い取り続け、やがてデュエルモンスターズは消滅するとさえ言われている。

その中には無論うちのガイドさんや悪魔達も含まれるわけか……。

それだけではない。デュエルモンスターズの消失はまさに世界規模の大打撃となり、それを中心として動いているこの社会が大混乱に陥ること請け合いだ。

まさに社会の変革といって差し支えない。

特にデュエルモンスターズに関わる事業は倒産に追い込まれるとこ

るもあるだろう。

僕らが通うこのデュエルアカデミアも……。

十代やこの世界で出会った人達。

そしてガイドやその仲間の精霊達。

彼らを見捨て、僕には関係のない世界のことと割り切ることができ
るのか否か……。

彼らを犠牲にしてまでも元の世界に戻る可能性に賭ける覚悟が僕に
あるか否か……。

「……之・様！……聞・て……ますか？」

ん？

「一之瀬様、大丈夫ですか？」

「あつ、すみません。少しばかり考え事をしていました」

くうつ、ぬかった！

今は僕は食堂で珍しく紬さんと2人で食事中だったんだ。

彼女は普段お弁当のだけれど今日は違う。身体の弱い彼女は特別
に生活の補助としてお付きの侍女さんと一緒に暮らしており、いつ
もその侍女さんが作った色彩豊かな和風お弁当を携えてくる。し
かし侍女さんが諸事情により3日ほどこの島を出ているらしく、普
段から食堂を利用して僕についてくることになったのだ。

「申し訳ありません。やはりわたくしなどと食を共にしても楽しくありませんよね・・・」

悲しそうに顔を伏せる彼女に僕は慌てて弁解を始める。

「いえ、違ってます！最近忙しくてですね、あまり休む暇がなかったものですから、このようにのんびりと紬さんと食事するのは心地良くて心が空っぽになってしまっただけなのですよ。決して楽しくないとかそんなことは微塵も思っていないので・・・相手がジャツカルの姐さんの時と比べたらまるで雲泥の差で非常に心が楽というかむしろ比べるのがおこがましいと言いますか、何が言いたいのかというと「俺が何だって?」・・・ひいっ!」

何者かに背後から頭を掴まれた。

いや、何者かなんてことはわかってるぞ。

ただ認めたくないだけで。

ギギギギと首を後ろに捻ってみるとそこにはニヤリと笑う修羅が・

「随分面白そうな話をしてんじゃねーかよ、ああんっ!?言いたい事があるならコソコソしねえで俺に直接言いやがれっ!哺乳類ネズミ目の動物かおめーは!」

「コレハ・・・チガウンデス・・・文句ナンテ欠片モアリマセン・・・」

「あら、これは岬様。御機嫌よう」

紬さん・・・だからそれ今言うタイミングじゃないです・・・。

「ふんっ、まあいい。俺はさっさとメシを食いてえんだ。さっさと隣の席を空けやがれ」

姐さんの命令に機敏に動き、すぐさまテーブルと椅子の支度を整える。

見上げたパシリ根性だと自分でも思う。

彼女の機嫌をこれ以上損ねぬよう、ビクビクしながらランチを食べる僕に、突如その彼女から声が掛かった。

「・・・でおめーは一体何を悩んでいるんだ？」

え？

「はっ、気付かねえとも思ってたのか？朝からずーっとシケた面してたじゃねーか。言いたくねーなら別にいいけどよ」

シケた面って・・・。というか顔に出たたのか。

こういう事は他者から言われんとわからんものだね。

「何悩んでんのかしんねーが、一人で解決できねえようなら俺に言え。力を貸してやつからよ」

明後日の方向を向き恥ずかしがりながらもそれを悟られぬようそっけなく言い放つ彼女。

そんな彼女の不器用な優しさに

僕は

不覚にも感動してしまった。

「・・・ありがとうございます。やっぱり姐さんは優しい人ですね」

「じゃにおう!?!」

「はい。岬様は本当に優しいお方です。だからわたくしは岬様のことを他者にも自信を持って誇ることのできる大切な友人だと思っているのです」

「おっ、お前らうるせえぞ！俺はそんな奴じゃねえ！かつ、勝手な事ばっか言っとなっ！」

照れるでない、照れるでないよ。

「フフフツ、照れる岬様というのも新鮮で可愛らしいものですね。普段の凛々しいお姿と違った印象を受けて」

「うっさいぞ紫！かつ、可愛いとか凛々しいとか言うなっ！そしておめーも笑ってんじゃねーぞコラ！」

「ぐふっ・・・いきなりの腹パンチはやめてくだしあ・・・」

「ふんっ、俺がそんな事知るかっつてんだ！メシ食い終わったら次はデュエルで揉んでやるからな、覚悟しとけよ」

怒りながらもデュエルという単語を出す時、彼女の目はいつもキラキラとしている。

本当にデュエルモンスターズが好きなのだろうなと感じさせる、そんな目だ。

彼女の性格なら本来デュエルなんて回りくどい事せずにリアルファイトで相手ぶちのめしそっだもんな。

そして今も紬さんと楽しそうにデュエルモンスターズについて語っているジャツカルの姐さんの顔は、普段常にムスツとした表情をしている彼女からは想像がつかない。

ふんっ、全くそんな顔見せられちゃ、僕だっつて柄にもなくその笑顔を守りたいと思っつてしまっつじゃないか。

最初から迷っつ必要なんてなかつたんだ。

いつもイタズラばかりしているガイドも、その仲間の悪魔達も、僕は随分と悩まされていたけれど、彼らが居たことで僕はこの世界で独りぼっつちじゃなかつた。

寂しさを感じさせぬほど賑やかな日々だつた。

そこに僕の居場所があつた。

僕の大切な仲間なんだ。

それら全てを犠牲にしてまで不確かな帰還の可能性を追い求めるだなんて、そんな巫山戯た覚悟なんぞ溝にでも捨ててしまえばいい。

この状況まで進行した彼の計画を今から阻止するのは、すでに彼の監視下におかれている僕には難しいが、計画の成就間際というのは比較的油断し易いのは人の常。

理事長本人には精霊を操る力はなく、それを得るために幻魔を復活させた直後、精霊の力を持つ者を闇のゲームによって下し、その力を吸収しようとするその時こそ最大の好機。

三幻魔のコントロールを完全には制御できない初期段階に置いて、僕が幻魔ごと叩き潰してやるよ。

覚悟するといいい影丸理事長。

その時貴方は僕が本当の異分子イレギュラーなんだと実感できるだろう。

第18話 決断（後書き）

あれ？主人公ってこんなキャラだったけど自分でも書いていて思ってしまった回。

ただ個人的にはジャッカルさんの方が主人公っぽいと思わざるを得ないです。

第19話 七星襲来（前書き）

物語は進展しますが、主人公は陰から地味に行動する予定。

第19話 七星襲来

錬金術と聞いてキミたちは何を思い浮かべるだろうか？

物質変成、黄金、賢者の石、エリクシル、霊薬、不老不死、ホムンクルス。

錬金術と聞くとどこかの豆粒兄と鎧弟を思い出してしまう現代の漫画文化に侵された僕とは違い、皆なら格好良く象徴であるウロボロスなどを思い浮かべたのかね。

今は大徳寺先生が受け持つ錬金術の授業中。

呪文やらなんやらの下りは僕には到底理解不能なオカルト的領域なのだが、それ以外の部分は主に世界史と化学、さらに哲学を複合したような内容となっていて意外とためになることは多い。

そんな真面目に授業を聞いている僕とは違い、前に座っている十代はグースカ居眠りをしている。以前まではまぶたの裏にマジックで目を書いて誤魔化すのが主流だったようだが、今週からはお面作戦を取り入れている。

言っておくがバレバレだからな。大徳寺先生は静かにしていれば授業を聞いていなくともあまり五月蠅いことを言わないので平気だが、クロノス教諭は絶対に怒るぞ。

先週までのマジックのやつだって結局は彼にはばれて課題を山ほど出され、僕や三沢に泣きついてきたのを忘れたのかお前は。

僕みたいな玄人になれば傍から見れば真面目に授業を聞いているよ
うだけど、実は意識はどこかに飛んでいるという高度な技を使いこ
なせるんだが、十代はまだそのレベルには達していないな。

全く修行が足りないぞ。

僕なんてそれだけのために中学校の授業時間を全て費やしてきたと
いうのに。

そんなこんなを考えているうちに授業終了のチャイムが鳴り、お昼
の時間がやって来た。

「いよっしゃああああ！昼飯だあ！今日はトメさんお手製の弁当だ
ぜ！」

「ああ、遊城十代君お昼はちょっと待つのだにや〜。私と校長室に
いくのだにや〜」

また十代が問題を起こしたのかと騒然となる教室。
どれだけ信用がないのだろうかと考えさせる光景だ。

まあ今までの素行を鑑みれば彼らの気持ちも分からなくはない。そ
もそも学校生活において校長室なんて全く縁のない場所である者が
大半を占めるからなあ。

「万丈目君、貴方も来てください。それから三沢君、一之瀬君、明
日香さんも」

みんな突然校長室に呼び出されたことで驚いているようだが、僕は
ああ、ようやく来たのかといった心境である。僕も呼ばれるとは思
わなかったけどね。

校長室手前でクロノス教諭と丸藤先輩と合流し、教諭と十代がまたつまらない言い争いを終えた後で中に入る。お前ら本当は仲いいだろ絶対。」

「三幻魔のカード？」

校長から突然振られた話題に対してみんなの疑問を代弁するかのように十代が問う。

「そうです。この島に封印されている古より伝わる3枚のカード。そもそもこの学園はそのカードが封印された場所の上に建っているのです」

なっ、なんだってー。

ごめん。知っている話だから退屈だったんだ。

「学園の地下深くにその三幻魔のカードは眠っています。島の伝説によるとそのカードが地上に放たれる時、世界は魔に包まれ、混沌が全てを覆い、人々に巣くう闇が解放され、やがて世界は破滅し無へと帰する。それほどの力を秘めたカードだと伝えられています」

「何だが良く分かんないけどすごそうなカードだな！」

「黙って聞いているノ〜ネ！」

「そのカードの封印を解こうと挑戦しに来た者が現れたのです」

「一体誰が・・・？」

「七星王、セブンスターズと呼ばれる7人のデュエリストです。全くの謎に包まれた7人ですが、もうすでにその一人はこの島に・・・」

「何ですって？」

「でもどうやって封印を解こうと・・・」

鮫島校長からの情報に驚き、三沢と明日香がそう口にする。

「三幻魔のカードはこの島の地下の遺跡に封印され、七星門と呼ばれる七つの巨大な石柱がそのカードを守っています。その七つの石柱は七つの鍵によって開かれる。これがその七つの鍵です」

「じゃあセブンスターズはこの鍵を奪いに・・・」

「そこで貴方達にこの七つの鍵を守って頂きたい」

「守るといっても一体どうやって」

万丈目の疑問は至極最もなこと。

僕も意味がないと知ってはいても、金庫にでもしまっているよと言いたくなる。

「勿論デュエルです。七星門の鍵を奪うにはデュエルによって勝たねばならない。これも古よりこの島に伝わる約束事。だからこそ学園内でも屈指のデュエリストである貴方がたに集まってもらったの

です。ゴホン、まあ数合わせと保険も兼ねてもいますが・・・」

校長はそう言つてクロノス教諭と大徳寺先生を見やる。

保険ね。だからこの場には8人もいるのか。

「この七つの鍵を持つデュエリストに彼らは挑んできます。貴方がたにセブンスターズと戦う覚悟を持って頂けるのならば、どうかこの鍵を受け取って欲しい」

「へへっ、おもしれえ！やっつてやるぜ！」

間髪いれず十代が率先して七星門の鍵を手にする。それに丸藤先輩や三沢、万丈目、明日香らが続き、クロノス教諭も茶々を入れながらも鍵を取る。

最後に余った一つの鍵・・・。

「僕は静観の方向で。ここは目上である大徳寺先生にお願いします」
鍵を持っているとこの事案に関わっていくことが容易となるが、その分行動が拘束され、いざという時に動きづらい。なるだけ身軽にしておきたいんだ僕は。

「じゃあ私がにゃ〜」

「ありがとうございます。この瞬間から戦いは始まっています。どうかいつでもデュエルのスタンバイをしておいてください。そして必ずや三幻魔のカードを。七星門の鍵を守りきってください」

その日の晩さつそく第一の刺客が行動を開始した。

ガイドさん曰く、島内にある火山付近に以前廃寮で感じたという闇の気配を感じるとのことだ。影丸理事長の予定通り、ダークネスが闇のゲームを始めたらしい。

僕もなんとなく気付いていた。

別に突然右手が疼くような能力に目覚めたわけでもなく、その手の気配に敏感になったわけでもない。ただ単にブルー寮の近くにカミユーラの放った間諜蝙蝠コウモリの数が若干増えていたからだ。

理事長自ら僕を仲間に取り込んでおきながら、それでもなお警戒を忘れないか。流石にそこら辺は年の功と言ったところ、そのくらい狡猾でないとそもそもここまで長年の歳月をかけた計画なんて遂行できやしないよね。

恐らく彼の計画が最終段階に入り、それが目に見えて分かり易い印となつて現れたセブンスター襲来という出来事に対して、僕がどのように反応、もしくはは行動するかを探ろうとしているのだろう。

ただどその任務にカミユーラを選択したのは間違いだつたようだね。確かに彼女の能力は間諜に優れたものだけど、その媒介の蝙蝠コウモリがそこまで頭が良いわけではないため、その存在を前知識として知っている者に対してはバレバレである。

というか光源に満ちている部屋を普通に覗いてくる蝙蝠なんているわけがないだろう。

あそこまで露骨にやられると、かえって見張っているということに僕に認識させようとしているのではないかと思っただけだ。僕が窓に目を向けると視線から逃れようと飛び立ったり、コソコソ隠れる様子を見せるので、その線はないと判断させてもらったのだが。

まあ相手がカミューラではなくとも同じ事になっていたんだけどね。

以前にレイが僕の部屋に侵入してきた日以来、僕の部屋というか主にオベリスク寮付近はガイドさんの呼びだした悪魔らが巡回しているのだ。そこまでして彼女の眠りを妨げるかもしれない要因を摘む必要があるかは甚だ疑問が残るが、領内で何か異変が起きるとヘル・セキュリティとヘルウェイ・パトロールの2体からすぐに連絡が入り、そこらの警備会社顔負けの警備システムを構築している。

その証拠（被害者と言った方が正しいのかもしれない）として学園代表選抜デュエルの日の事なんだが、廃寮で生徒が行方不明になっているという案件をスクープ記事にしようと学園内に潜り込んできた外部記者がいたのだけれど、ブルー寮に侵入した際に本人の気付かぬうちに僕の部屋付近まで誘導され、捕縛されるということがあった。

僕が部屋に戻った時にはすでに彼は見えない何か拘束される恐怖によって錯乱状態に陥っており、仕方なしに記憶破壊者の手^{メモリー・クラッシャー}を借りることで事無きを得た。

すまんなあの時の記者のおっさんよ。

翔やレイの件の時に僕がガイドさんによく言っておくべきだった。

だけど学園に侵入するのは犯罪なんだぜ？

しかしその時はどうなのかと思ったこの警備が今回活躍することになるうとはね。人生何があるか分からんよ。

問題としては相手側の出方が分かったとしても僕が見張られており、動きづらいことには変わりはないことだ。

初めから派手に動き回ることもなんて考えていないのだけど、監視されているというのは精神的に宜しくない。

僕としては早めにカミューラが脱落してくれることを願うばかりだけど、そろそろ蝙蝠のしつこさに痲癩を起し始めたガイドさんを抑えるのはもう無理かもしれないよ。

ガイドさんの機嫌を取りつつ、カミューラを排除する方法を模索すべきなのか。

コンコン

そんな物騒なことを考えている時、僕の部屋へと来訪者を告げるノックが鳴る。

こんな時間に一体誰かと疑問を抱きつつドアを開けるとそこには丸藤先輩が立っていた。

「夜分遅くに済まない、だが緊急事態かもしれないんだ。先程から七星門の鍵が振動している。他の鍵の所有者に何かあったのかもし

れない。鍵は持っていないが一応関係者のキミにも同行してほしい」
まあ構わないか。僕も彼らの安否は気にしていたところだ。

丸藤先輩と共に他の鍵の所有者にPDAで連絡をとってみたのだが、十代と明日香からの応答がない。クロノス教諭もでなかったけど彼は単に寝ているだけだろうと放置したのは良かったのかな先輩よ。

一応彼らの搜索を万丈目らにも頼み、搜索再開。僕としては彼らが居るのは火山近辺であると分かっているのだが、まさかそのまま言い出す事もできないので、それとなく丸藤先輩を誘導しようとした矢先に火山の頂上で大きな光が放たれた。

「あの光はなんだ・・・!？」

「とりあえず行ってみましょう」

これ幸いとばかりに火山へ向かうことを進言。

頂上付近まで登るとそこには倒れた十代とそれを介護している翔と隼人、そしてダークネス、いや、天上院吹雪を抱き寄せる明日香の姿。

ダークネスの闇の力の根源である仮面が外れている。

良かった、十代は勝ったか。

翔や隼人に聞くとところによると、彼らが人質に取られ、十代が敗者

は己の魂をカードに封印されるという闇のゲームを行ったそうだ。
改めて聞くと洒落にやらんよな魂を封印で。

つまりは足元に落ちているこの仮面が描かれたカードは、ダークネスの魂が封印された結果というわけか。これで吹雪さんの本来の意識が戻ればいいのだが……。

そのカードをひょいと拾い上げ鞆に入れるガイドさん。

お前もついて来てたのか。

というか拾ってどうするんだよ！まさかそれ悪用する気じゃないだろうな。

そんな僕の疑惑の眼差しに対して彼女はただ薄く笑うだけ。

しっ、信じてるからな……。

いや、やっぱり駄目だ。とても信じられん、それをこちらに寄りこしなさい。

ウケケケと笑い声をあげながら逃走するガイドさん。

すまない、誰かは分からないが未来の犠牲者よ。

僕に彼女を捕えることは無理だ。

せめてあまり被害を被らないよう祈ることしかできない。

山頂からの日の出を見ながら僕は静かに溜息をついた。

第19話 七星襲来（後書き）

ダークネスの魂が宿ったカードは有効利用させてもらいます。

世界共通語「MOTTAINAI」の精神を大事に。

第20話 吸血鬼(前書き)

今回OCGと違うアニメ効果の採用により、OCGでは再現できないコンボがあるのですがご了承ください。

第20話 吸血鬼

校長から三幻魔に纏わる話を聞き、ダークネスが襲来してから早三日。

闇のゲームによって大きなダメージを負った十代は未だ満足に動く事ができず、意識が戻らない吹雪さんと一緒に学園内の保健室で日々を過ごしている。

前回の件で完全に闘志に火がついた十代はセブンスターズを全部倒してやると意気込んでいるので大丈夫だと思うが、問題は全く意識が戻らない吹雪さんのほうだ。

まあ吹雪さんの意識が戻ったら戻ったで、ダークネスによって操られている時の記憶が残っている場合、僕が結構マズイ立場に陥る事は予想できるので複雑な心境ではある。

勿論十代が負傷しているからといって相手は待ってなごくれやしな
い。

その証拠に最近生徒内で吸血鬼を見たという噂が絶えない。

話によると湖の上にすごい美人が立っており、気になって眺めていると口元に牙があったことに気付いたそうだ。

どうやらカメラが動き出したようだね。

校長の方にもその噂は耳に入っていたらしく、その件で七星門の鍵

の守護者は校長先生に召集され、油断しないよう嚴重注意をされていた。

関係者一同は怪しい奴がいるならばこちらから出迎えてやればいいという実に雄々しい意見で固まったようで、その晩には吸血鬼討伐隊が生まれ、それが目撃されたという湖に繰り出していったのだが、待ち構えていたセブンスターズが一人吸血鬼カミューラによってクロノス教諭が敗北。闇のゲームの敗者となった彼は罰として人形にされてしまったそうだ。

僕は明日香に一応吹雪さんの様子を見てほしいと頼まれていたため現場にはおらず、全ては後から聞いた話なのだけれどね。

初めて味方から闇のゲームによる被害者が出て、皆闇のゲームの存在を認めたようだ。というより目の前で人形に魂を封じられるところなんて見せられたら認めざるを得ないだろう。

闇のゲームの恐怖に怯える僕や大徳寺先生とは違い、十代らはクロノス先生を救うべく打倒カミューラに燃えている。

いつもは冷静な丸藤先輩ですら静かに憤怒しているのが印象的だった。

その瞳には決意が込められているように感じるのは僕の気のせいかな。そんな彼の様子を弟の翔が心配そうに見つめている。彼らの話ではカミューラは丸藤先輩をいたく気に入っているらしいし、家族や友達がこんな危険な目にあうかもしれないのだから当然のこと。

僕だって今まで十代達ならきつと大丈夫だと楽観的に考えていたが、自分の知っている人が犠牲になったと実感すると、言いようのない

不安感に駆られ、鍵を校長に返せばいいと進言したくなる。

犠牲が出てしまった今、そんなことを言っても彼らは止まらないだろうけど。

そうなら僕には見守ることしかできない。

僕は理事長の謀りを知っていながらもそれをみんなに話さず、機会を伺うことを選択した。つまりはそれまでの犠牲をあまり勘定に入れず、その目的を達成することのみに焦点を当て、それ以外は切り捨てたものと同義であると言われるても反論できない。

今回のクロノス教諭の件は僕が前もって進言しておけば防げていたかもしれないこと。

ゆえに目を背けてはならない。

彼らを見守り続けなければならない。

少なくとも監視役のカミューラが脱落するまでは、僕は彼らに対して大っぴらに手助けすることすらできない。

なんとかできぬもんかね……。

その次の晩、七星門の鍵の所有者のところには大量の蝙蝠が押し寄せ、まるで誘つかのように湖へと飛び立っていった。

間違いなくカミューラからの誘いだらう。

今回は僕もついて行くべく同じ寮の丸藤先輩と共に現場へ向かうと、すでに万丈目に三沢、明日香に大徳寺先生、更には翔と隼人に背負われた十代の姿があった。

全くお前はまだ安静にしていると云われたろうに……。

僕らの眼前に映る湖には水面に赤い道が作られ、その先には先日には間違いなくなかったいかにも怪しい雰囲気を放った古城が立ちはだかっている。

それが闇のゲームの力によるものなのか、ヴァンパイアの力によるものかは定かではないが、その力の強大さだけは解る。

中に入ると燃え盛る松明が城内を照らし、僕らの進むべき方向を示すように並び立っている。

そしてその先にある大きな扉を通り抜けると、そこには上階まで天井が吹き抜け構造になっている巨大な部屋に繋がっていた。

「ようこそ皆さん！歓迎しますわ」

「俺が相手だ！ヴァンパイアカミューラ！」

十代がさっそく熱り立つ。それに続けとばかりに万丈目や三沢も進み出る。

しかし……。

「坊やと女の子には用はないわ。あ・な・た」

そう言つて指差すはやはり丸藤先輩。

「いいだろう・・・」

雷鳴が轟き薄暗い城内を一瞬だけ照らす。

それによつて向こうの柱の陰にすぐ見覚えのある赤毛の少女がちらりと見えてしまい、僕の不安感を更に煽る。頼むからこんなところで巫山戯て問題起こさないでくれよ？

「ルールはおわかりね。勝者は次なる道へ、敗者はその魂をこの愛しき人形に封印される」

「「^{デュエル}決闘」」

「私の先攻、ドロー！ヴァンパイア・レディを守備表示で召喚」

《ヴァンパイア・レディ》 ATK / 1550 DEF / 1550

「カードを1枚場に伏せてターン終了」

「俺のターン、ドロー！手札から魔法カードパワーボンドを発動！手札の3体のサイバードラゴンを融合！いでよサイバーエンドドラゴンー！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》 ATK / 4000 DEF / 2800

初っ端から飛ばすなあ。というかサイドラ手札に3枚で。

「でもパワーボンドには大きなリスクが伴うはずよ。そんなに粋がつて大丈夫なのかしら」

その通り。パワーボンドによつて融合召喚されたモンスターがエンドフェイス時にフィールド上に存在する場合、発動したプレイヤーは特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを負ってしまう。無論それだけのリスクを負うだけの効果があるのだけどね。強力な効果にはそれに見合う代償が必要というのは、この世知辛い世の中では当たり前のように蔓延っている常識というもの。

「パワーボンドの特殊効果でサイバーエンドドラゴンの攻撃力は2倍になる！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》 ATK / 4000 ATK /
8000

「攻撃力8000!?!」

「お前にエンドフェイスを心配される謂れはない。ヴァンパイア・レディに攻撃！エターナル・エヴォリュ ション・バースト!!」

「畏カード発動！妖かしの紅月^{レムネーション}。このカードは手札のアンデット族モンスター1体を捨てる事で、貴方の攻撃モンスターの攻撃力分を私のライフポイントにし、バトルフェイスを終了させる」

「手札から速攻魔法融合解除発動！フィールドの融合モンスターの融合を解除する」

《サイバー・ドラゴン》 ATK/2100 DEF/1600 x3

「なに!？」

対象を失ったレッドムーンのライフ回復効果は不発となり無効。更に融合解除によりパワーボンドのデメリットを回避。バトルフェイズは終了させられたが、全く初手からどんな引きをしているのだろうかあの人は。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「ウフフツ、ぞくぞくするわ。一番タイプだと思っただけの事はあるわ」

「悪いが俺にも好みがある」

「まあ、冷たい方。でもね、それでこそ手に入れがいがあるというものですわ。私のターン、ドロー!」

「私はヴァンパイア・レディを生贄にヴァンパイア・ロードを召喚」

《ヴァンパイア・ロード》 ATK/2000 DEF/1500

「召喚したヴァンパイア・ロードをゲームから除外!特殊召喚!ヴァンパイアジェネシス!」

《ヴァンパイアジェネシス》 ATK/3000 DEF/2100

「カイザー亮。融合解除を使ったタクティクス、褒めてあげてもいいわ。でもそんなことは計算の内、貴方が切り札を失った事に変わ

「りはない」

「ふっ」

「気に入らないわね！ヴァンパイアジェネシスで攻撃！ヘルビシャス・ブラッド！！」

「なめられたものだ。俺のデッキがサイバーエンドだけだと思われていたとはな。畏カード、アタック・リフレクタ ・ユニット発動！このカードはサイバードラゴンをサイバーバリアドラゴンに進化させる」

《サイバー・バリア・ドラゴン》 ATK/800 DEF/2800

「サイバーバリアドラゴンが攻撃表示の時、1ターンに1度だけ相手モンスターの攻撃を無効にすることができる。モンスター効果によりヴァンパイアジェネシスの攻撃を無効化」

「可愛くない・・・！」

「俺のターン、強欲な壺を発動！デッキからカードを2枚ドロ。更に速攻魔法、フォトン・ジェネレーター・ユニットを発動！サイバードラゴン2体を生贖にサイバーレーザードラゴンを特殊召喚」

《サイバー・レーザー・ドラゴン》 ATK/2400 DEF/1800

「サイバーレーザードラゴンは1ターンに1度このカードの攻撃力以上の攻撃力か守備力を持つモンスター1体を破壊することができる」

る」

「自分より強いモンスターを破壊できるってこと？ヴァンパイアジエネシスの攻撃力は3000。サイバーレーザードラゴンの攻撃力を上回っている……！」

「破壊光線、フォトン・エクスターミネーション！」

光子の一撃によりヴァンパイアジエネシスが蒸発する。

「サイバーレーザードラゴンでダイレクトアタック！エヴォリユション・レーザー・ショット！」

「きゃあああああぁあぁっ！」

カミューラ LP4000 1600

「更にサイバーバリアドラゴンのダイレクトアタック！エヴォリユション・バリア・ショット！」

カミューラ LP1600 800

「俺はカードを1枚セットしターンエンドだ」

「憎たらしい……可愛さ余って憎さ百倍だわ！私のターン！お仕置き……」

カミューラ様子が変わった。というか顔や声にも変化が見られる。口が裂け、見難い容貌を晒しながら耳障りな声を出す彼女はまさに

人外の者だと他の者に否応なく理解させる。

「手札より魔法カード幻魔の扉発動！」

「幻魔の扉・・・？」

「なんだ？あんなカード見たことも聞いたこともないぞ」

丸藤先輩も知らないようだ。彼が知らないカードを十代が知っているはずもない。

「幻魔の扉、これはまず相手のフィールドのモンスターを全て破壊することができる！」

「どのサンダーボルトだよ！」

こちららサンダーボルトで我慢せにやらん時代に生きていたのに。

「もっといい事を教えて差し上げますわ。このカードはデュエル中に使用したモンスターを条件なしに特殊召喚することができるの」

「なに？」

「そう、融合解除したとはいえ、貴方が1度でも使用したサイバーエンドドラゴンでもね」

「ばっ、馬鹿なっ！？モンスター全滅に加え、無条件でモンスターを召喚できるカードだと！？」

インチキ効果も大概にしゃがれっ！

「勿論、その代償は高いわよ。このカードの発動条件、それは私自身の魂！ゲームに負けたら私の魂は幻魔のもの」

「命がけのインチキカードってわけか」

万丈目は彼女の払う代償に納得したようだけど、このカードを発動してなお負ける状況が想像しにくいな。確実にゲームエンドまで持つていける状況で使えばいいだけのことだ。

「なんだけどお、折角の闇のカードなんだからもつと闇のゲームらしく使わせてももらいますわ。そうねえ、例えば貴方の弟に私の身代わりを頼むとしたら？」

「はっ！？逃げろおっ！翔おおおおっ！」

「遅い！」

カミューラが僕らが行動を起こすよりも早く翔の前に現れ、彼を連れ去って行く。

「翔！」

「おっ、お兄さん……」

「この子の魂を生贄にサイバーエンドドラゴンを召喚してあげましょうか？ウフフツ、アハハハハハハッ！」

「卑怯だぞカミューラ！何故正々堂々と勝負しない！」

「やだあ、正々堂々なんて言葉、虫唾が走るわ」

カミューラの卑劣な行動に激怒した十代が吠えるが、彼女はどこ吹く風。

見事なまでの悪人振りだ。

(おい、ガイドさんや)

皆に気付かれぬように小声で彼女の名を呼ぶと、先程見かけた通りどこかで隠れて見ていたのである。ガイドさんが意地悪そうな微笑を浮かべながら僕の背後に姿を現す。

(お前がこの前拾ったアレ、ここで使わせてもらえるか？あの鬱陶しい蝙蝠とそれをけしかけた奴を排除できるぞ)

ガイドは少し考えた素振りを見せた後、バツクに手を突っ込みとあるものを取りだし僕に手渡す。

さんきゅ。

「明日香、これをあの幻魔の扉に投げ込めるか？傲慢じゃないけど僕はノーコンなんだ」

「何よこんな時に！ってこれ、何でアナタが持つてるのよ!？」

ええ、いーじゃん僕が持ってたって。一応現場にいたんだぜ？

「さっさと選ぶ事ね。弟の魂を犠牲にするか、自らの敗北を受け入れるか」

「くっ……」

その時、空を切り裂くように飛来するは1枚のカード。それは狙い
違わず幻魔の扉に吸い込まれていく。

するとフィールド上にサーバーエンドドラゴンが姿を現し、カード
を取り込んだ幻魔の扉が不気味な音を立てながら閉じていく。

「なっ!?!これは一体どういうことっ!?!何故幻魔の扉が閉じるの
よ!?!」

「驚いたかしら?私が今投げたカードは先日闇のゲームで十代に敗
北したダークネスの魂が取り込まれたカード。幻魔の扉に魂の生贄
が必要ならばこちらから都合のいい魂を先に捧げればいいだけのこ
とよ」

「まさかっ!?!貴様!何て事を!」

ダークネスは犠牲になったのだ……。犠牲の……。犠牲にな……。

「散々卑怯な真似をしてくれた貴方にだけは言われたくない言葉ね。
これで翔君の魂を生贄になんてできないわ!亮!さっさとやっつけ
てしまいなさい」

「明日香……。ふっ、当然だ」

「くっ、どちらにせよこれで終わりよ!サイバーエンドドラゴンで
プレイヤーにダイレクトアタック!」

「俺はリバースカード、リビングデットの呼び声を発動！墓地に存在するサイバーバリアドラゴンを蘇らせ、サイバーエンドドラゴンの攻撃を無効にする！」

「防がれたか……。しかし戦況はこちらが有利よ！貴方が自ら負けを認めなくとも、同じ結果になるわ」

「それはどうかな。俺のターン、ドロロー！」

「俺は魔法カード、天よりの宝札を発動。互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードを引く」

「そして死者蘇生を発動！蘇れサイバードラゴン！」

《サイバー・ドラゴン》 ATK/2100 DEF/1600

「更に魔法カードエヴォリユ ション・バーストを発動！このカードは自分フィールド上にサイバー・ドラゴンが表側表示で存在する場合のみ発動する事のできるカード。相手フィールド上のカード1枚を破壊する！無論対象はサイバーエンドドラゴン！」

「なんですすつてっ!？」

「エヴォリユ ション・バーストを発動したターン、サイバードラゴンは攻撃することができない。しかし俺の場にはもう一体サイバーバリアドラゴンが存在する。いけ！プレイヤーにダイレクトアタック！エヴォリユ ション・バリア・ショット!!」

「そんな……。私が……。馬鹿な……。きゃあああああああ

あああつ！！」

カミューラLP800 0

「ううあああああああつ！」

カミューラは悲痛な叫びをあげつつ、己が設定した闇のゲームのルールに従って人形に魂を封印される。

元は藁人形だったそれは、今やカミューラの容姿を象った形に変化している。その横にはカミューラが付けていた闇のアイテムである首輪が鈍い瘴気を放ちながら床に落ちた。

ダークネスは仮面。カミューラは首輪を媒介にして闇の力を引き出していたということが。

万丈目が持っていたクロノス教諭の魂が封印されていた人形が妖しく光り、本来の彼の姿に戻って行く……。

しかしそれと同時に、カミューラを倒したせいか主を失った古城が音を立てて崩れ始めた。

「城が崩れるわ！みんな早く脱出するのよ！」

明日香が素早く皆に避難するよう指示を出す。

明日香の言に従い、皆が慌てて出口へ走り出した。

やべえ、僕もさっさと逃げるに限るね。

しかしガイドさんは出口と逆の方向にすたこら歩いて行く

おい、お前どこ行くんだよ！

彼女は先程カミューラが立っていた場所までひよいひよいと登って行き、落ちている人形と闇のゲームを引き起こしていたと思われる首輪を拾い上げ、満足そうな笑みを見せた後バッグにしまう。

なんだ、キミは闇のアイテムを集めるのが趣味にでもなったのかい？

いい趣味とは言えないから僕としてはお勧めしないぜ。

あつ、余計なお世話ですかそうですか。

ただなるたけ被害者を出さないようお願いしますよ。

崩壊していく城内でそんな馬鹿な事に時間を費やしてしまった僕は、出口にて倒壊に巻き込まれ、皆に救出されたなんて黒歴史はあまり詳しくは記さないでおく。

第20話 吸血鬼（後書き）

アニメだとパワーボンドの効果が微妙に違うんですね。

そしてダークネスの魂は幻魔がおいしく頂きました。

第21話 アマソネス(前書き)

いるかどうか分かりませんが硬派な三沢ファンの皆様には先に謝罪をしておきます。

第21話 アマソネス

最近校内の生徒の数が減っている気がする。

いや、曖昧な表現はやめてこう言い直そう。

確実に減っていると。

教室の席が人目を引くくらいの割合で空席なのだ。

加えてその時間の授業を受け持つはずのクロノス教諭まで姿を現さない始末。

中学校の頃インフルエンザが流行った時だってここまでの欠席率ではなかった。

僕の学校恒例秋のマラソン大会の日だってもう少し参加していた気がするよ。

消えた生徒（一人は教師も含まれるが）の共通点。

それは至極簡単で全て男だという点だ。

しかし何事にも例外というものはあるわけで……。

「ジャツカルの姐さんの姿も見えなかったのは何故なんだ……」

そう、消えた生徒の中でただ紅一点。彼女も姿の見えない者の一人。

連絡しても出ないし、何かあったのではないかと細さんにも連絡してみたが、彼女は彼女で現在体調を崩して自室で休養しており、特に情報は持っていないかった。

まあ姐さんなら男に見られても仕方ないと思ったりしなくもないが、無論そんなことを本人の前で言えるわけもないし、本人の前でなくとも感の鋭い彼女は「なんとなく馬鹿にされた気がする」程度で行動に移ることが多いため、迂闊に考えることすらできない。

「独り言なんて寂しい子ね。お姉さんが慰めてあげましょうか？」

突如耳に入る悩ましい女性の声。

ちなみに現在僕がいるのは自室であり、僕以外の人間は誰一人としていないし、珍しくガイドさんら悪魔達もいない。

ではこの声の主は一体誰なのか。

「人形になった奴に寂しいなんて言われるとは……。というかそれ以前に数百年棺桶の中で眠ってた吸血鬼の方が寂しいだろ」

そう、何を隠そう先日丸藤先輩に闇のゲームで敗北し、魂を人形に封じられたカミューラその人である。いや、人ではなく吸血鬼……。これも違うか。今は人形なんだし。

人形になっても意思があるとは驚きだが、そう言えばクロノス教諭も呪い人形みたくカタコトで喋ってたし、彼女が喋っても不思議ではないのかもしれないな。

「貴様、我が吸血鬼一族を愚弄するの catt! 元は貴様ら人間のせい

でそのような憂き目に会ったのだぞ！それに私が先日負けたのは貴様があの女に下らぬ入れ知恵をしたせいなのであるうがっ！やはり主が警戒していたように貴様は我らの裏切り者だったのね・・・」

正直人形だから表情が変わらなくてイマイチ解らないけど、言葉端に捕えるとどうやら僕を侮蔑の目で見ているのかな。

「何滑稽な事を言っているんだ。信じてもらえなければ裏切ることなんてできやしないさ。言うなれば僕は君達が思っていた通り、裏切るという形で君達の信頼に応えただけさ」

「戯言を・・・ふんっ、もういいわ。どうせ今の私はお前に抗うことなどできないし、あのムカつく赤毛女に振り回されるくらいならお前の相手をしていた方が遥かにマシよ」

どういう事かというときミューラは不幸にもガイドさんのお遊び人形のポジションに当てられてしまい、昨日まで彼女の破天荒な行動に無理やり付き合わされ、帰って来た時には見るからにボロボロになっていた。

一体何がどうなってそこまでになったのか不思議でならなかったのだが、カミューラ曰く、遊びと称した闇のアイテムを使った実験のようなことをしていたらしく、その哀れな被験者が彼女だったという話だ。

「アイツ何やってんだよ！と憤った気持ち半分と、被験者が僕じゃなかったという安心感、それに少しだけカミューラへの同情と感謝。」

なんにせよあの悪魔娘に振り回される人が増えることは、僕に被害がやってくる事の減少にも繋がるので内心嬉しかったりする。

嫌な奴だよ全く。でも人間なんてそんなもんさ。

そもそもその手の問題の根源はいつもあの悪魔娘にあるわけで、僕は常に被害者という立場なのは揺ぎ無い事実であろうし、自分の身を犠牲にしてまで他人を助ける必要があるかと言われれば、そこには疑問を抱かざるを得ないよね。つまり何が言いたいかというと汚い人間でごめんなさい。

「なに一人で黄昏れてるのよ・・・」

「いや、人の業について少々・・・」

そんな気まずい空気を裂くように僕のPDAにメールの着信を知らせる音が鳴り響く。

どうやら明日香からの着信のようで、内容には三沢がセブンスターズの一人に敗北し、そいつに連れ去られたという旨が書かれていた。

やはり今回の行方不明者続出の件はセブンスターズが関わっていたらしい。

行方不明者達に被害はないので安心してほしいとも書いてあったが、ジャッカルのお姉さんが気がかりだな。とりあえず様子を見に行ってみよう。

三沢？

ああ彼のことは気にするなと明日香から連絡を受けている。
若干文面にもトゲが見られたが一体何があったんだろうか・・・。

メールに記された情報通りに大地を駆け森を抜ける。するとそこには古代ローマの円形闘技場を模した建造物が姿を現した。

なんじゃこりゃ。

格闘なんてモノに興味がない僕でも若干テンションが上がらないでもないこの荘厳な雰囲気は素直に賞賛に価するよ。

その闘技場の入り口の付近には十代達の姿が見える。

「おゝい、これは一体何なんですか？」

「おっ、アキラか。これはセブンスターのタニヤって女がアカデミアの生徒を集めて作らせたコロシウムらしいぜ。姿が見えなかった奴らはここで働かされていたんだ」

僕の姿に気付いた十代がそう答える。

なるほど。消えていた人たちはここに。

じゃあジャツカルの姐さんもここに居るのか？

「それで三沢は？」

「わからないっす。三沢君は負けたら婿入りさせられるって条件で負けちゃったんです。今入口は厳重に占められちゃってますし、近づいたら巨大な虎が襲ってくるっす！」

虎ってアンタ……。

ワシントン条約大丈夫かよ。

あつ、この世界には関係ないか。

「デュエルに負けた三沢君は鼻の下を伸ばしながら相手側に行っただ大丈夫でしょうよ」

そこに明日香から冷ややかな一言。

なるほど。だから彼女の機嫌は悪いのか。

明日香も大概堅物だからね。女の色香にやられた三沢が情けないということか。

明日香の纏う不機嫌オーラに気圧される立場の低い男子組。

そんな居づらい空気を破ったのは敵方であるコロシアムの方からの物音であった。

ありがとう。敵ながら良くやってくれたと言いたい。

皆の視線がコロシアムの入り口に注がれる。すると中から巨大な虎がのっしのっしとこちらに歩んでくる。向かって来たのは虎だけではない。

巨大な虎に跨って門から現れたのは筋肉隆々な褐色肌の女性とその後ろに乗っかっているジャツカルの姐さん。そして犬のように地べたを這い蹲らされている三沢だった。

何やってんすか姐さんや。

そして三沢。お前は何故その状態そんな恍惚とした表情を浮かべているんだ。

「おや、新顔がいるね。一応自己紹介しておこう。私はタニヤ。偉大なるアマゾネス一族の末裔にして長。そしてセブンスターズの人」

アマゾネス。

ギリシア神話にでてくる女性だけで構成されている部族。狩猟の女神アルテミスを信仰しており、馬を飼い慣らし弓術を得意とする狩猟民族か。

というか僕の事知らないのかな。

まあ以前顔を合わせたのは影丸理事長とダークネス、カミューラだけだったけどさ。

「三沢！大丈夫か！」

いや、あの顔はある意味大丈夫じゃないと思うぞ十代。若干ヘヴン状態になってる。

「三沢っちはもう知らない。こいつ如きが婿ではこの私は満たされない」

「そんなっ！？タニヤっち・・・」

そのいらぬ発言を聞き、目から光が失われ、絶望の色に染まる三沢。

「それでジャツカルの姐さんはどうしてそこにいるんです？」

とりあえず三沢は放置だ、というか今は関わり合いたくない。

「偶然ここを通りかかった時にいい感じに強そうな奴がいたんで殴り合いを挑んだだけさ。しかし喧嘩百段の俺でもタニヤっちには勝てねえな。俺より喧嘩強え奴は初めて会ったぜ」

「私の顔に一発入れるなんて岬っちはかなりの逸材だよ。ここまで根性の入った奴が外界にもいるなんて思いもしなんだ。先程も言ったが我らアマゾネスの部族に入らないか？」

というかガチの戦闘民族であるアマゾネス相手に素手スチロ喧嘩で挑んだのかよ姐さんは……。

拳を交わして仲良くなるとかどこの少年漫画がモデルなんだよ。

「誘いは嬉しいが俺にも俺の生き方ってもんがあるからな。それはそうとタニヤっち。こいつがさっき話した俺の舎弟だ」

「ああ、お前が岬っちの言ってたアキラっちか。」

「一之瀬、貴様！俺だってまだ名字でしか呼ばれたことがないというのに！タニヤっち！俺も下の名前で大地と呼んでくれ！いや、むしろ犬と！犬と呼んでくれ！」

うわあ、なんだコイツ。本当にあのロリコンの三沢か？

それとも褐色フェチとか筋肉フェチでもあったのかもしれないな。

そしてドMであると。

侮れないな流石三沢あなどれない。

しかしそんな彼を見る明日香の目はすでに氷点下を思わせるほどに冷たくなっているからそろそろ自重したほうがいいぞ。

まあすでに手遅れなんだが。

「岬つちから最近腑抜けてるお前に一発気合い入れてやってくれと言われているのでな。ほらついて来い」

ちよっ、姐さん何しくさつとんのや！

「ちよつと待て。お前はセブンスターズの一人でこの七星門の鍵を狙っているんだろ？なら俺と勝負だ！」

十代、お前って奴はなんていい奴なんだ！いや、ここは尊敬の念を込めて十代さんと呼ばせてくれ！頑張ってくれ十代さん！

「ほう、面構えはいい。ちよつとお馬鹿そうだが」

「お馬鹿は余計だろ」

「ふふっ、熱い奴のようだ。いいだろうお前が相手だ」

「俺は遊城十代。遊城つちって呼んでくれ」

「最低……」

明日香の眩きがその場に虚しく響いた。

今僕の眼前には十代とタニヤが空中で殴り合っているという摩訶不思議な図が出来上がっている。

おい、デュエルしろよ。

そう突っ込みを入れたくなるが、実は彼らはデュエル中なのだ。

フィールド魔法アマゾネスの死闘場。今やコロシアムの中央リングには厳つい鉄格子の檻で覆われており、何人たりとも侵入できず、脱出することもできない。

そしてタニヤ曰く、アマゾネスの死闘場はモンスターとの絆を自らの魂を賭けて証明する神聖な場。そしてその効果はモンスター同士の戦闘の後、ライフを100支払うことで相手プレイヤーに100ポイントのダメージを与えることができるというもの。

「つまり俺とアンタ、拳を合わせるってことか」

「モンスターだけに闘わせちゃ悪いからねえ。最もやるやらないはお前の自由だ」

「俺は乗るぜ！」

十代自身の立体映像（3D映像）とタニヤ自身の立体映像（3D映像）がフィールドに現れ、どこのバトル漫画だと突っ込まざるを得ないほどの熱い殴り合いが

行われている。

信じられるかい？これ相手のライフを1000削るために殴り合ってるんだぜ？

「いいねえ、流石タニヤっち。喧嘩つてもんをよく理解^{わか}ってるぜ！」

僕の横で観戦しているジャツカルさんはこのデュエル内容にご満悦なようで、所々やれそこだ、ほらそこだど野次を飛ばしながら楽しんでる。

こんなとんでも展開になっているがこれは闇のゲームではないので、僕も安心して見ていられるんだがね。

タニヤは正々堂々真正面から敵を叩き潰すことを信条にしているようで、以前のダークネスやカミューラとは違い、闇のゲームなどには頼らない。

そんな男らしいところが姐さんや三沢が気に入ったところなんだろうかね。

「最後の最後までデュエルに諦めは許されない。情けも許されない」
気付けばもはやデュエルは終盤。タニヤのライフは1000ポイントで十代は200ポイント。

十代の場には何もいないが、相手の場には攻撃力1500のアマズネスの剣士が立ちはだかる。

こいつは自身の戦闘によるダメージを全て相手に与えるという厄介な効果を持ったカード。

下手なモンスターを出したらその時点で即十代の敗北が決まるような状況。

「俺のターン、ドロー！」

しかし引きにかかれば十代の右に出る者などいない。

「俺はワイルドマンを召喚！」

ワイルドマンの攻撃力はアマゾネスの剣士と同じ1500。相打ちにより戦闘破壊し、アマゾネスの死闘場の効果を発動させれば十代の勝利だ。勝敗はこの時点で既に決定した。

「行くぜタニヤ！」

「来い！」

これで最後。アマゾネスの死闘場の効果による互いのプレイヤーの殴り合い。

しかしタニヤの闘志は揺るがない。

「どうして？タニヤの負けは決まっているのに！？」

その光景を見てつい明日香がそう口にする。その疑問に答えたのは三沢だ。

「タニヤは言っていた。デュエルに諦めは許されない。そして情けも。これこそ拳に生きる真の戦士の生き様だ」

「「うおおおおおおおっ！だあああああああつ！
！」「」

互いの拳が顔面に入り、両者膝をつく。

「体中痛え。けど不思議といい気分だぜ」

「私もだ。今日まで私は一族に見合う強い男を探していたが、最後の最後に出会えたようだ。最高のデュエリストに・・・」

タニヤのライフポイントが尽き、コロシラムを覆っていた檻が消えていく。

それと共にタニヤの姿にも変化が現れ、気付くとそこには白く雄々しい虎が在った。

その虎の足元には人間の手の形をした闇のアイテムが転げ落ちる。あれで人間の姿をとっていたのであるうか。

(良いデュエルをありがとう)

そういつて彼女はその後にした。

言っておくが皆の視線がそちらに向いた瞬間、どこから見ていたガイドさんが闇のアイテムをこっそり回収したのを僕は見逃してな

いからな。後で没収するからなそれ。

タニヤの真実の姿を知った姐さんの反応が気になったが「正体が虎だろうと俺のダチには変わりない」と格好良いセリフを残して一足先に学園へ戻っていった。

問題は……。

「俺は……虎に惚れたのか……」

流石の三沢もこの展開は堪えたのか、さぞかし葛藤している様子を見せている。

「だがそれもいい……」

「「「「「!?!?」「」「」

第21話 アマソネス（後書き）

果たして三沢はどこに行こうか……。
そしてカミューラはどう扱っていかうか……。

混乱を極める心境となっております。

第22話 対話(前書き)

早くデュエルパートまで進めたい・・・。

第22話 対話

今まで七星門の鍵の守護者とセブンスターズにばかり焦点をあてていたが、一般生徒の視点からは今回の出来事はどのように捕えられているのだろうか。

分からないなら調べてみようの精神で少しばかり話を聞いて回ってみた。

まず分かった事は、此度の七星門の鍵をめぐるセブンスターズとの抗争について、デュエルアカデミアの生徒の大半はとあるイベント程度にしか認識していないという事だ。まあ三幻魔とか闇のゲームの話是一般生徒に話すわけにもいかないだろうし、実際に説明していないんだから彼らの反応は当然の事なのかもしれない。

鮫島校長はこの件についてほんの上辺だけのことを生徒らに話しており、彼らに伝わっている事はセブンスターズというデュエリストが学園に挑んできており、それに対して学園から選ばれたデュエリストが闘っているということのみである。

このような中途半端で不透明な事柄には様々な噂が立つことが世の常というものであり、ただの道場破りの類だろうか、いや闇の組織が学園を乗っ取るうとしている計画だとか好き勝手な憶測が飛び交っている。

よって生徒らの興味の対象であるセブンスターズの話は、瞬く間に生徒間に伝達されていくのも不思議ではないだろう。

現在進行形で万丈目が学園に潜入していた盗人を持ち前の素晴らし

い推理力で追い詰めたとか、十代が古代エジプトで無敗を誇ったデュエルの王、アドビス3世とデュエルし勝利したとか嘘か真か良く解らない噂が広がっているしな。

ちなみにこの噂はほとんどが事実である。

確かに先日万丈目が学園内に以前から潜伏していたセブンスターズの首領・ザルীগ率いる黒蠍盗掘団を見事打倒しているし、十代も夜間突如として襲ってきたゾンビ軍団を率いていたセブンスターズの一人であるアドビス3世を下し、それぞれ七星門の鍵を守る事に成功している。

しかし流れている噂が嫌に具体的であることが気にかかる。

傍から見ていただけでは知りえない情報までもが噂に含まれていたしな。

一応噂の根元を辿ってみると犯人は翔であることが判明した。セブンスターズと闘っているデュエリストの一人である十代に最も近い者として皆が話を聞きにくるものだから、普段注目を浴びる事が少ない彼は舞い上がってしまい、余計なことまでベラベラと喋ってしまっただけらしい。

全くお前って奴は……。

まあ吹雪さんのことを皆に吹聴しなかったことだけは評価するよ。

行方不明になる前の吹雪さんはこの学園のアイドル的な存在であったために、現在においても彼のファンの子が大勢いる。もしも吹雪さんの情報が流れてしまえば、彼女らは見舞いに託けて大人数で押しかけて来ることが容易に想像できてしまう。そうなれば最近になってようやく意識が戻り始め、快方に向かっている吹雪さんの容態

が悪化してしまうことも考えられた。

良くなってきているといっても、まだしっかりと喋ることもできず、一日の大半寝ているような状態だしあまり負担になるようなことは避けるべきだろう。

ダークネスに体に乗っ取られていた時の記憶は混濁しており、ほとんど覚えていないようだ。全く顔合わせの時内心びくびくしていた僕が馬鹿みたいじゃないか。

まあ早く良くなる事を願うばかりだ。

じゃないとダークネスの時に気絶させられた恨みを晴らせないしね。

とある晩、鮫島校長から新たなセブンスターのメンバーが島に襲来し、行動を開始しているらしいとの情報が関係者らに伝えられた。

最近この手の事があると保健室に集合することが定例となりつつある。

明日香が吹雪さんの看病のために入り浸っていたり、最近まで十代も収容されていたから集まり易かったというだけで特に深い意味はないんだけどね。

保健室前で関係者ら全員と合流する。いや、明日香と大徳寺先生はいないか。

まあ先生は置いといて明日香なら保健室に居る確率が高いので皆に続いて保健室に入る。

するとそこには床にぐったりと倒れている吹雪さんの姿があった。

「「「吹雪(さん)!!!」」」

丸藤先輩がすぐさま駆け寄り、吹雪さんを抱き起こす。

「吹雪何があった？明日香はどうした？」

「タ……イ……タ……ン」

吹雪さんは掠れた声で言葉を紡ぐ。

「タイタンってあのタイタンか？」

十代が驚いた声をあげる。

明日香とタイタン、この二人の組み合わせで思い浮かぶ場所など一つしかない。

十代もどうやら同じ場所を思い至ったらしく、僕の呟きと彼の発言が重なった。

「「「廃寮(だ)」」」

十代 side

倒れている吹雪さんを放っておくわけにもいかない。
彼自身も俺達といくことを希望しており、一緒に連れていく事になった。

吹雪さんを背負いながら廃寮まで辿り着くとすでに明日香とタイタンのデュエルが始まってしまっていた。

「くそっ、間に合わなかったか……。明日香気をつける！そいつは闇のデュエリストかもしれない」

一目で理解^{わか}った。以前のアイツとは明らかに違つと。

この距離からでもアイツから発せられる嫌な気配が伝わってくるぜ。

戦況は明日香が優勢に進んでいたが、タイタンの顔には未だ余裕が見える。

「今までの闘いは闇のデュエルではない。これからが本当の闇のデュエルだ。闇の闘技場ダークアリーナを発動するう！」

フィールドが漆黒の闇に包まれていき、明日香の姿はおろか何一つ見えなくなった。

入ったら最後、奈落の底まで引きずり込まれそうな深い闇。背筋が寒くなるような光景だ。

「十代、お前は奴と闘ったことがあるんだろ？アイツはこんな技も使えるのか？」

サンダーの疑問も当然だ。こんな不気味な闇は到底人が創り出すものとは思えない。

「いや、俺と闘った時のタイタンは恰好だけのイカサママジシャンだった。でも今のアイツは本物だ……！」

以前アイツと闘った時、急にアイツの様子がおかしくなったことと何か関係があるのか？

「どうしたんだ吹雪さん」

突然吹雪さんが崩れ落ちるような足取りで前に出る。

「闇の力は未知数だ。触れるとお前の命に関わるかもしれないぞ」

カイザーも吹雪さんに警告する。

「吹雪さん、明日香に呼び掛けてくれ。アンタの声ならきくと明日香に届く。吹雪さんの声が聞こえれば明日香は何が何でも勝ってくれる」

明日香は吹雪さんがきつと帰って来るって信じていた。

行方不明だった時も、意識がなかった時も、吹雪さんが戻って来ると信じていた。

だったらその吹雪さんが呼びかければ明日香は絶対に戻って来る。

「明……日香。明……日香。……明日香！」

吹雪さんの呼びかけに呼応するかのように、闇の中より一筋の眩い光が差し、それが深き闇を切り裂き全てを晴らした。

俺達が次に見たものは明日香の切り札、サイバーブレイダーがタイタンのモンスターを破壊し、その一撃がタイタンのライフポイント

を狩り取る瞬間だった。

闇のゲームの敗者に送られるのは、死よりも辛い罰ゲーム。

「嫌だ、嫌だあ！闇の世界に戻りたくない！助けてくれええええええええええつー！」

どろどろとした不気味な黒い粘膜のような物体がタイタンに襲いかかり、それらが消えた後に残っていたのはアイツの仮面だけだった。

いや、違う。仮面だけじゃない。

先程までタイタンが立っていた場所にはいつの間にかはわからないが、赤毛の少女の姿が在った。以前もこの廃寮で見かけたあの少女。そいつは仮面を拾い上げると満足そうにバッグにしまい込む。

「お前いつの間にそこに！まさかお前もセブンスターズの一人なのか！？」

「兄貴は何を言ってるんすか？誰もいないじゃないですか」

「おいらにも見えないんだな」

「翔、隼人ほらあそこだよ！」

見えないはずがないだろうとアイツを指しながら叫ぶ。

「だからどこっすか？誰もいませんけど」

もう一度彼女が立っていた場所を見るとそこには誰もいなかった。

「あれっ！？さっきまで確かにいたんだよ！」

「ちよっ、兄貴こんなところで怖いこと言わないでくださいよ！僕が幽霊嫌いだって知ってるじゃないっすか！」

「だからホントにいたんだってば！」

「十代お前も見たのか」

「サンダー、お前も見たのか。アイツは以前タイタンと闘った時にも現れた奴だ。タイタンを連れてどっかに消えちまったんだけど、やはりセブンスターズと無関係じゃなさそうだな」

「ああ。先日黒蠍盗掘団の野郎と闘った時にも見かけた気がする。その時だけじゃない。十代、お前がアドビス3世とデュエルした時にも近くにいたはずだ」

くっ、折角セブンスターズは残すところ後一人になったつてのに厄介そうなのがまだいるなんて。

「あれ？そういえば一之瀬君はどこにいったんすか？」

「来る時までには一緒にいたと思うんだなあ」

あれ？そう言えば彰はどこにいったんだ？

十代達と共に廃寮に向かう途中の事だ。

僕は最後尾を走っていたのだけど、背後から突然口を塞がれ森の中へと引き摺り込まれていった。

口を塞がれていたため叫ぶ事も出来ず、相手の剛力によって振り払うこともできない。

ちくしょう、僕がさらわれた事誰一人気付いてくれなかった……。

まあ緊急事態でもあったし急いでいるのはわかるけど、誰か一人くらい僕が消えたことに気付いて探しに来てくれないんじゃないかなと思ったりしなくもないわけですよ。

数分荷物のように運ばれ、森の開けた湖のほとりで拘束は解かれ、自分の足で立つ。

振りかえるとそこには漆黒の外套と仮面を被ったいかにも怪しい奴が立っていた。

「単刀直入に問おう。お前は我らセブンスターの敵か、味方か」

え、なに？

この人もセブンスターなの？

くっ、とりあえず惚けよう。やり過ぎせるかもしれない……。

「こいつは裏切り者よ！私をこの姿になった原因だってこいつだわ！」

その時僕が肩からかけているバッグから声上がる。

ちよっ、カミューラてめえ！

てつきりガイドさんに連れて行かれていたかと思っていたがいつの間
に僕のバッグの中に紛れ込んでいたんだよ！

「ククツ、フハハハハハッ！」

なんだなんだ！？突然笑い始めた男に警戒を強める。

「良かった。君が本気で理事長側についていたならば私は躊躇なく
君を排除していた」

「なっ！？アムナエル！貴様も裏切るといつのかっ！？」

ちよっと待て。アムナエルって確か……。

黒い外套の男が仮面を取る

やはり。

仮面の素顔は僕も良く知っている顔。

大徳寺先生の顔があった。

「私は元々錬金術師として世界を旅していた。賢者の石を探すために」

賢者の石。錬金術師が求める伝説の宝石。全ての金属を金へと変え不老不死の秘薬さえ創り出すという。故に歴史上多くの権力者たちは賢者の石を求め、錬金術を発展させてきた。

「むむむーっ！&#??; ; \$?！」

おい五月蠅いぞカミューラ。

いちいち口を挟まれたら面倒だから大徳寺先生の羽織っていた黒い外套でグルグル巻きにしてぞんざいにその辺りに放っておいたんだけど、もうすこし工夫する必要があったかな。

「私も理事長の命を受け、その研究をしていた。そしてかつてペガスがデュエルモンスターズに行き着いたように私の研究もまたデュエルモンスターズに辿りついた」

すげえなデュエルモンスターズ。どれだけこの世界と結びついていくんだろう。

個人的にはこの世界の人間のルーツはデュエルモンスターズなんじゃないかとさえ思うようになってきたよ。

「そこまで辿り着いたは良かったのだが、私の体は長年の長旅の無理が祟り、不治の病に侵されていた。そこで私は錬金術が生み出す人造生命体ホームクルスに魂を託したのだ」

「だが所詮この体は仮の肉体。朽ち始め、もうすぐ私は寿命を迎えようとしている。しかし強大な力を手に入れんとし、その心をいつの間にか曇らせてしまった影丸理事長をこのまま放っておくわけにはいかない。いずれこの島には三幻魔復活という災いが起きる。私にできるのはその災いに対抗できる力を育てる事だけ・・・」

「遊城十代・・・ですか？」

「御名答だ。彼の得意とする融合と錬金術は非常に近い。同じといても過言ではない。融合を使いこなす彼は錬金術師として素晴らしい才能をその身に秘めている」

凡庸な攻撃力のモンスターをより強く強化させる融合と、貴金属を宝石に変える錬金術。

どことなく似ていると言えば似ているのかもしれないが僕にはイマイチピンと来ないな。

きっと偉い人にしかわからないのだろう。

「彼ならばいずれ来る災いに対抗し得る力となるだろう。だが現状では無理だ。彼は錬金術と融合、どちらにも共通している大切なことに気が付いていない。私の残り僅かな時間で彼にそれを気付かせなければならぬ。その準備のために私はこれから姿を消し、セブンスターズとして彼の前に現れ、身を持って教え込ませる」

「それで大徳寺先生は何故それを僕に話すのですか？」

「私が姿を消している間、十代を支えてやって欲しい。自惚れかもしれないが、私の存在は彼の中である程度大きなものだと思うている。そんな人が突然消えたら誰だって不安になったりするものさ。誰かに頼まずとも翔君や隼人君が十代を支えてくれると思うが、事

情を知っている君だからこそできる対応もあるだろう」

「頼まれずとも僕にできることはするつもりですよ。友達ですからね」

「ふふっ、全く私はいいい生徒に恵まれたにゃ〜。安心して後を託すことができるにゃ〜」

普段の口調に戻る大徳寺先生。話はこれで終わりということだろう。

（頼みましたよ）

彼は最後にそれだけを言うと森の中に消えていった。

その後ろ姿はもうすぐ命尽きようとしている男だとはとても見えなかった。

いや、知り合いが死ぬということを許容したくない僕の頭がそのように見せているだけかもしれない。彼に教授頂いたのはわずかな時間だったかもしれないが、それでも僕の先生だった事には変わらない。

彼の告白に色々考えさせられる事は多いけどいつまでもこの場にいるわけにもいかない

僕も帰る事にしますかね。

「むむう！ & %！」

あっ、ごめんカミューラ。すっかり忘れてたわ。

第22話 対話（後書き）

次回はちゃんとデュエルする予定です。

第23話 学園祭(前書き)

そろそろリアルでも学園祭の季節になってきましたね。

第23話 学園祭

十代 side

俺はどうすればいいんだろう・・・。

発端は意識が完全に戻った吹雪さんの口から出た言葉だ。

「僕はあの特待生寮で特別授業を受けていた。しかしある日、地下のデュエルリングに呼び出され、そのテストデュエルの最中にタイタンと同じようなものに闇の世界に取り込まれてしまったんだ。そこはまさに悪夢のような世界だった。いつの間にか僕はその闇に蝕まれ、気付いたらダークネスと化していたんだ・・・」

「誰が兄さんをその世界に・・・」

「それは今でも分からない。でもあの日僕を呼び出し、テストデュエルを行ったのは大徳寺先生だった」

「大徳寺先生が・・・まさかそんな・・・」

皆がその名前に驚き、信じられないといった顔をしている。

勿論俺だってそうだ。

大徳寺先生・・・先生がそんなことするはずないよな！？
話を聞いてみればきっと何かの間違いだって分かるはずさ！

そう思い寮に戻り、大徳寺先生の部屋にみんなで押しかけただけど、部屋はもぬけの殻で大徳寺先生の姿はどこにも見えなかった。

それがもう数日前の出来事だ。

大徳寺先生、どこへ行っちゃったんだよ……。

俺……先生を信じていいんだよ……？

彰side

本日は珍しくオベリスクブルー寮に多く他寮の生徒の姿が見られる。普段ならばプライドの高いブルーの生徒が追い出したりするんだろうけど、今日ばかりはあまり五月蠅い事をいう生徒は少ない。

何故なら今日は学園祭の開催日であり、彼ら他寮の生徒は建前上お客という立場で来ているからだ。

例えばセブンスターズとの鬪いが続いているても、表向きは学校も通常通り運営されているため、学園祭というイベントもしっかりと行われる。

ちなみに学園祭の期間内は他の学校と同じように生徒の親族らは自由に見学できるようになっているらしい。まあこんな孤島まで学園祭を見に来る人らはすごく少ないんだけどね。

僕の所属するオベリスクブルーの出し物は喫茶店だ。

男子生徒は執事の、女子生徒はメイド服をそれぞれ着用している。

僕としてはジャツカルの姐さんのメイド服姿を期待していたんだけど、あの人がこの手のイベントに参加するはずもないことを完全に失念していた。

ほらそのキミ、彼女は執事服のほうが似合いそうだとか言わない！

紬さんは紬さんで何をどう勘違いしたのか一人だけ着物で接待している。大和撫子な彼女には勿論ピッタリ似合っているのだけど、和服美人が紅茶を入れているというのは中々にミスマッチな光景だ。

僕の役割は事前準備を方を担当していたので、学園祭当日はわりかし自由に動けるのさ。

自分の寮の出し物なんて見てもつまらないし、他の寮の出し物を見に行く予定である。

元よりレッド寮には後々遊びに行く約束しているし、とりあえず僕がちよっと前まで所属していたライイエローのところに行きますかね。

ライイエローの出し物は縁日であるということは既に三沢から聞いている。

イエロー寮の近くまでいくと祭囃子なんかが聞こえて、自然とワクワクして歩くたびに気持ち弾む。遠目から見ても中々に活気があっていかにも祭りって感じがしていいね。

射的に輪投げ、金魚掬いにスーパーボール掬い、籤引きなんてものもあるが、やはり目を引くのは食べ物系の出店だな。

たこ焼きにかき氷、チョコバナナにりんご飴、焼きそばにジャガバター等々。

屋台から発せられる匂いだけで食欲が湧いてくる。

正直僕は食べ物だけを目当てに来たといっても過言ではないんだけどね。

ちなみにガイドさんもおいしいものを求めて現在僕にくつついて来ている。

まあ折角の祭りだしあまり五月蠅い事言うつもりはないのだけれど、問題があるとすればガイドさんが先程からお面屋の前から動かないことさ。

一心不乱に三眼の怪物、クリッターを模したプラスチック製の安物お面を眺めている。

やめておきなさい、どうせ買ってもすぐ飽きて捨てるんだろ。

「おっ、お嬢ちゃんそれ気に入ったのかい？今なら半額にしておくぜ」

売り子をしているラーエイローの生徒が見かねたのか、そんなことを言ってくる。

余計な事を・・・ほら、ガイドさんはここで買わずしていつ買うのだといった表情で僕に購入を促すように視線を注ぎ始めたじゃないか！

わかった、わかりましたよ！買えばいいんだろ！

「まいどあり！」

何故彼女がスペック的には一般人とカテゴライズされるライイエロ
ーの生徒に認識されてるのか？

そんな皆の疑問を氷解させる情報を提供しよう。

先日まで僕も知らなかったんだけど、なんとあの悪魔娘、闇のアイ
テムの力を利用して完全に実体化するまでに至っている。

闇のアイテムというのは色々と特性があるが、その中にデュエルモ
ンスターズに関する虚構事象の具現化というものがある。正確には
実と虚の境界線を曖昧にしているとかなんとか説明されたが僕には
理解できない内容だったとだけ言っておこう。デュエル中に与えら
れたダメージがデュエリスト本人の痛みにフィードバックするのは
まさにこれが原因だったりするようだ。僕の部屋も似たような現象
を引き起こしているんだけどね。

彼女はその特性を応用し、自身の存在を更に確固たるものとして高
めたらしい。

この状態での彼女は一般人の人にも認識でき、接触することも可能と
なる。

まあこいつに関わりたくないなんて奇特な奴は中々いないだろうし、い
たとしてもそんな奴は性格に何らかの問題があるに決まっている。
つまりはガイドさんに似た嫌な性格の奴か、自身が虐げられる事を

喜ぶ三沢のようなDMくらいということさ。

完全実体化を維持するのに結構な力を消費するらしいので、そもそも他人が彼女を目にする機会もあまりなさそうだし、そこまで心配しているわけではないけど注意はしておいたほうがいいだろう。

闇のアイテム使ってなんか色々やっているとは思っていたが、まだ害が少なそうで良かった・・・なんて安心はできない。あの悪魔娘の事だ、今回判明した実体化の件だってきつと奴の謀りのほんの瑣末な事柄に違いない。何か調べている内の副産物みたいなものなのだろう。

現に昨日もまたカミューラを連れて廃寮の方まで出かけていったしな。

何をやっているのかとカミューラに探ってみた事もあったが、人形なのに顔を真っ青にしてガタガタ震える様子が伝わってきて、触らぬ神に祟りなし、完全に僕とは無関係だと割り切ることにした僕の判断は恐らく間違っていないはずだ。

後世の歴史家が見れば英断であったと主張してくれるだろう。

そんなガイドさんと共に縁日を回っているのだが、注目すべきは彼女の持ち物である。

頭には先程出店で買ったクリッターの顔のお面の斜めにつけ、右手にはわたあめとりんご飴、左手には金魚とヨーヨーを引っ提げ、更には両腕にたこ焼きと焼きそばの入った袋を装備し、おまけにクリボーを模した風船を括りつけている。

お前楽しみすぎだろ！

ちなみに金魚もヨーヨーも僕が取ったものだ。初めはガイドさんに任せていたんだが、明らかに取れなさそうなのでかい出目金や、一際大きいヨーヨーばかりを狙ってすぐに失敗を繰り返し、癩癩を起して受け皿で掬い始めたところで流石にこれはマズイと僕が代わり、以前縁日で鍛えたテクニクを駆使してなんとか手に入れたのさ。

僕の手にも彼女が持ち切れなかったチヨコバナナやらジャガバターやらで両手がふさがっている。これ以上持つのは無理だし、とりあえずこれらを消費しようという提案。

そして会場の外れに設置されているベンチで一休憩・・・できなかつた。

何故なら意外な介入者が現れたからだ。

「あゝっ！こんなところで私みたいに実体化できる精霊と出会えるなんて！」

なんだなんだと思っていると空から降って来たのはブラックマジシヤンガールだ。

親方！空から女の子が！

ごめん、どうしてもこの台詞言いたかったんだ。

「ほわあゝすごいですね、私はおるか師匠よりも完璧な実体化です。あっ、師匠ってというのはブラックマジシヤンの事で・・・ってその

前に私自己紹介もしていませんでしたね。初めまして、私ブラックマジシャンガールです」

おかつしいなあ、口答での会話のはずなのになんで語尾に「が付いてるとか分かるんだろ。

ガイドさんは非常に迷惑そうな顔を隠そうともせず、目障りだ早く消えろと言わんばかりのどす黒いオーラが全身から噴き出ている。

ああお前ら凄い相性悪そうだな。

というかブラマジガールはガイドさんが一方的に毛嫌いしそうなタイプだ。

「そのりんご飴おいしそうですね！良ければ私にも一口くれませんか？いや、わたあめもおいしそうですね」

驚くべきことにブラマジガールの方はそんな空気を全く読めていない。

ベタベタと馴れ馴れしくガイドさんに絡んでいく。

悪い事はいわない、やめた方がいいぞ。さっきまでは出店の食べ物のおかげで機嫌が保たれていたが、それを奪おうなんて言ったら。。。

ごめんもう遅いや。

ガイドさんの目が冷たく光ったのを見て僕はそう悟ったのさ。

「ちょっと！あふい、あふいですっ！（熱い、熱いですっ）」「

そんなこと知った事かとアツアツのたこ焼きを次々ブラマジガールの口に詰め込んでいくガイドさんを僕は見ていることしかできない。下手に手を出したらこちらにまで被害が及びかねない。

「しふぁ（舌）が火傷しちゃいまふよ！」

熱いなら冷やしてやるよと今度はかき氷を一気に食べさせる。

「くうつづつづ、頭が・・・頭がキーンとしますう！」

まさに外道。

可愛い正義なんて言葉はなかったんや！

ガイドさん怒濤の攻撃により目を白黒させながら混乱するブラマジガール。

今や彼女の帽子は赤いサンタのそれに変えられ、自慢のステッキはパチモンの電池で光る玩具杖、さらにはパーティグッズの鼻と髭が付属した面白眼鏡をかけさせられている。

いずれも先程出し物の景品でもらったやつだ。

そろそろガールが涙目になってきたから流石にやめさせたほうがいか。

ガイドには財布を持たせて再び縁日会場へと放っておいた。機嫌が悪くなったアイツと一緒に行動するなんて愚の骨頂ともいえる行為

だし、レッド寮伝統の出し物であるコスプレデュエル大会に誘われているからそろそろ行かなきゃならんしね。

あつ、そうだ。

「お前もレッド寮に来るか？みんなデュエルモンスターのコスプレしてるからそのまま参加しても大丈夫だと思うぞ」

「コスプレですか、楽しそうですね 早くいきましよう！」

元気よく飛び出すのはいいけどその前に元の格好に戻るか姿を消してくれ。

流石にそんなバカみたいな格好した奴と歩きたくないよ僕は。

レッド寮にて

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺はガールと共にレッド寮に向かっていたと思ったたらそこは悪魔すらも可愛く見える化け物がいたんだ』

何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も意味が分らなかった。

頭がどうにかなりそうだった……。

怪奇現象や闇のゲームなんていったチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものを片鱗を味わったぜ……。

何かって？

食堂のトメさんがブラマジガールのコスプレをして客引きしていたんだ……!!

どうして誰も止めないんだ！？あれは公共の場に出していいものは断じてないぞ！

というか今までレッド寮の方に客があまり来ないってオシリスレックスの生徒が嘆いていたけど、間違いなくこれが原因だ。

僕の横にいる本物のガールも顔が引きつっているのを隠せていない。そりゃそうだ、これが自分を模しているなんて言われたら僕だったら発狂モノだ。

「見なかった事にしよう……。僕らは何も見っていない……」

「そうですね……。何もありませんでした……」

気を取り直して会場に入る。

中はそこらにコスプレをした人で溢れており、それなりに活気づいているようだ。ガールも切り込み隊長やレッドアイズのコスプレをした人たちを見てわーわーきゃーきゃー喜んでる。

「僕はちよつと人に会って来るから後はテキストに楽しんでくれ」

「はい」

彼女は元気よく返事をしたあと人混みの中に紛れていった。

十代達はレッド寮の階段に集まっていた。

丸藤先輩や吹雪さん、明日香に三沢なんかもレッド寮の方まで来ていたようだ。

「どこ行っちゃったんだろうなあ大徳寺先生」

「まさか闇のデュエリストにやられたりしてないでしょうね」

「それは考えにくい。吹雪先輩を闇の世界に引き込んだのは大徳寺先生なわけだしな」

明日香の言葉に対して三沢が自論を述べる。

「だからといって敵側と決めつけるべきじゃない」

そう冷静に判断するのは丸藤先輩。

「俺は信じてるぜ大徳寺先生のことを・・・」

「十代らしくていいんじゃないですか？分からない事をとやかく悩むなんて不毛極まりない事はやめておいたほうがいいですよ。後で本人に事情を聞けばいいだけの話です」

「そうだな・・・っていつの間にそこに居たんだよ彰！」

「たった今。それよりこんなところで油売ってていいのかな？そろそろイベントを始める時間帯だと記憶しているんだけど」

「あつ、やべえ！翔、隼人！俺達も早く着替えないと！」

「そつつすね！できれば明日香さんにも手伝って欲しいんですけど」

「嫌よ、恥ずかしいじゃない！それに私ブルーだし・・・」

「いいんじゃないか？明日香のコスプレなら僕も見たいぞ」

「兄さん・・・」

「じゃあここに居る皆でやるっぜ！」

ええ、僕もやらないかんとですか？

着替え終了。サービスシーンなんてないよ。

寮の前にみんな集合する。

明日香はハピレディの衣装か。

十代はいろんな衣装のパーツがごっちゃになってもはや何か分からなくなっている。

万丈目はおそらくは特注品なのであろうXYZドラゴンキャノンの

格好をしている。

はつきり言うけどあまり格好良くないぞ。

三沢がアマゾネスペットタイガーに身を扮していたことに関しては皆が無言を貫き通した。

うん、あまり触れたくないよな。

僕？

僕はアレだよ。コスプレとかするの恥ずかしいけど、空気読めない奴にはなりたくなかったからあまり派手じゃない衣装を選んだ。

濃紺のローブに髑髏の仮面、ずばりみんな大好きホワイトさんさ！

「うわあ、彰君。なんでそんなモンスター選んだんすか？」

失礼な！

デュエル会場に出るといやに人集りができている一帯がある。

野次馬精神旺盛な僕らがその場に出向いてみると、群衆の視線を一人占めしているのは先程別れたブラックマジシャンガールだった。

「兄貴見てください！ブラックマジシャンガールがいるっすよ！すごいなあ可愛いなあ、まるで本物みたいだ」

まあ彼女は本物だしな。

ガール大好き翔はやはりこうなるか。
目に涙をためるほど感激するのはどうかと思うけど。

「あ〜っ！あなたもコスプレしてきたんですね　せっかくだしデュエルしましょうよ〜」

群衆をかき分け、僕にひつついてくるガール。

おい馬鹿やめろ。

ギャラリーの殺意の籠った視線が痛いんだ。

「ちよっ！？彰君知り合いなんですか？ずるいですよ僕にも紹介してください何で今まで黙っていたんですか失望しました僕ら友達ですよね？」

物凄い勢いで翔に絡まれる。

「いや、さつき少し会っただけだしこんな不穏な空気の中デュエルするのはちよっと僕にはハードルが高いかなと思ったりs」彰君は他ならぬブラックマジシャンガールのお誘いを無下にするとどうですか！？そんなことすればわかってるっすよねえ……」
「……はい、喜んで受けさせてもらいます……」

普段の翔からは想像もできぬほど暗い笑みを向けられ、僕には承諾するという選択肢しか残されていなかった。

~~~~~

「只今より本日のメインイベント、一之瀬彰VSブラックマジシャンガールのコスプレデュエルを行います！実況はこの私丸藤翔がお送りします！」

それはいいから早くやれという野次が飛ぶ。

というかいつの間にメインイベントになっていたんだ……。

「注目すべきは我らがアイドル、ブラックマジシャンガールだあああああっ！」

「今日は応援よろぴくです」

「うおおおおおおおっ！！」

うっ、うぜえ……。

「さあ両者デュエルディスクを展開だあ！！行きますよぉ、せいの！」

「<sup>デュエル</sup>決闘」

「先攻は僕の独断でブラマジガール！」

「私のターン、ドロー！」

ガールが何かするたびに観客から歓声上がる。僕完全にアウエーだこれ。

「私はファイヤーソーサラーを守備表示で召喚します！」

《ファイヤーソーサラー》 ATK/1000 DEF/1500

「カードを1枚セットしてターンエンドです！」

「「頑張れ！ブラマジガール！！」」

「ハ〜イ」

ギャラリーの男性陣からの熱い歓声にガールはピースして答える。

「ブラボーブラマジガール！さあ次は一之瀬選手のターン！」

「僕のターン、ドロー」

僕がドローした瞬間からブーイングの嵐が出迎えてくださった。  
ありがたくて涙がでるぜちくしょう……。

「僕はダーク・グレファアを召喚し、効果を発動。1ターンに1度、手札から闇属性モンスター1体を捨てる事で、デッキより闇属性モンスターを墓地へ送ります」

《ダーク・グレファア》 ATK/1700 DEF/1600

「バトルフェイズ。ダーク・グレファアでファイヤーソーサラーに攻撃！」

「ふふふつ、甘いです！私はリバーズカード、速攻魔法ディメンション・マジックを発動！自分フィールド上に魔法使い族モンスターがいる時、フィールド上に存在するモンスター1体を生贄に捧げて手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚します。ファイヤーソー

サラーを生贄に捧げて手札からブラックマジシャンガールを特殊召喚しちゃいますよ」

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK/2000 DEF/1700

「……かつ、可愛い！」

デュエルフィールドに現れたガールの姿に会場は今までで最高潮に盛り上がる。

「それだけじゃありませんよ。特殊召喚成功後ディメンション・マジックの効果によってフィールド上に存在するモンスター1体を破壊できるんです！ダーク・グレファアを破壊します！」

「……いいぞ〜！ブラックマジシヤンガール！！！」

僕のモンスターが破壊されると大歓声をあげる皆様方。

お前ら……。

「僕はカードを1枚セットしてターンを終了」

「私のターン！私はマジシヤンズ・ヴァルキリアを召喚します」

《マジシヤンズ・ヴァルキリア》 ATK/1600 DEF/1800

ヴァルキリアとガールって似てるよね。

若干このヴァルキリアの方が勝気そうな顔してるけど。  
親戚か何かなのかな。

「さあ皆いくつすよお〜！1！2！3！」

「バトル！！！！」

「ブラックマジシャンガールでダイレクトアタック！ブラック・バ  
ーニングー！！」

むう……。

彰LP4000                    2000

「続けていくよお〜！マジシャンズ・ヴァルキリアで追撃！マジッ  
ク・イリユージョン！」

しかしその攻撃が通ることはなかった。

何故なら僕のフィールド上にいきなりモンスターが現れたからだ。

「ああ、すみません。ブラックマジシャンガールに直接攻撃された  
時、僕の畏が発動していたんですよ。畏カード、無抵抗の真相！こ  
のカードは相手モンスターの直接攻撃によって自分が戦闘ダメージ  
を受けた時、手札のレベル1モンスターを相手に見せて発動。見せ  
たモンスター1体と自分のデッキに存在する同名モンスター1体を  
フィールド上に特殊召喚します。僕が呼び出すのはワイトキングの  
カード！」

《ワイトキング》 ATK/?    DEF/0    x2

「おつくと一之瀬選手足掻いております！」

うるせえ！

「ワイトキングの攻撃力は自分の墓地に存在するワイト、またはワイトキングの数×1000ポイントの数値となる」

「墓地にいるワイトって・・・あっ！まさかあの時に！」

「現在僕の墓地には先程ダーク・グレファアーの効果で墓地に送った2体のワイトがいるため攻撃力は・・・」

《ワイトキング》 ATK/?                    ATK/2000

「むう、バトルは中止！カードを1枚セットしてターン終了です」

外野から汚ねえぞ！とか、気味悪いモンスターを出すな！とか言われたい放題だ。

何だよ！ワイトかわいいじゃないか！

「僕のターン。僕は手札より魔法カード、封印の黄金櫃を発動！自分のデッキからカードを1枚選択し、ゲームから除外。そして発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時にそのカードを手札に加えます」

まあ僕は2ターン後まで待てないんでね。無理やり使わせてもらうよ。



「手札よりワイトメアを捨てて効果を発動！ゲームから除外されているワイト夫人またはワイトキング1体を選択してフィールド上に特殊召喚します。僕は封印の黄金櫃で除外したワイト夫人を守備表示で特殊召喚！」

《ワイト夫人》 ATK / 0 DEF / 2200

《ワイトキング》 ATK / 2000 ATK / 3000

「ちょっと！なんでワイトキングの攻撃力もあがるんですかあ！？」

「ワイトメアのカード名は墓地に存在する限りワイトとして扱うルール効果を持っているんですよ。あっ、おまけにおろかな埋葬もくれていますよ。デッキからモンスターカード、ワイトを墓地に送りますね」

《ワイトキング》 ATK 3000 ATK / 4000

攻撃力4000のワイトキング。

どやぁ・・・これこそ神の攻撃力と並び立つ王者の姿やでえ・・・。

相手は女の子だぞ！とか引つ込め！とかそんな野次は聞こえないよ。

「バトルフェイズに移行。ワイトキング2体でマジシャンズ・ヴァルキリア、及びブラックマジシャンガールに攻撃！ナイトメア・ハウル！」

思わず耳を塞ぎたくなる不協和音を彷彿とさせる不快な叫び音が音波となり相手に襲いかかる。

「伏せカードを警戒しなかったのは迂闊でしたね　私は畏カード聖なるバリア・ミラーフォースを発動します！」

しかしそのワイトキングが放った音波はバリアを容易くすり抜ける。

「ええっ！？なんでミラーフォースが効かないのお！？」

僕はフィールドでカタカタと音を立てながら笑っているワイト夫人を指さす。

「ワイト夫人が自分フィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在するワイト夫人以外のレベル3以下のアムデット族モンスターは戦闘によって破壊されず、魔法・畏カードの効果も受けなくなる」

「そっ、そんな〜聞いてないよ〜！きゃああああああああっ  
」！

実際言っていないしな。

今回の事を教訓に知らないカードが出てきたら恥を忍んで相手に聞くといいよ。

ブラックマジシャンガールLP4000　　0

「はいはい、みんなガツカリしないで。私今日はみんなに応援してもらえてとっても幸せだよ」

僕は僕で集団リンチの被害中だ。

おいワイトのくせになに調子乗ってんだコラとか空気読めよとかボロクソに叩かれている。翔！てめえもさり気無く加わってんじゃねーぞ！

ガールが苦笑いしながら宣ったやめてあげてくださいという一言で動きを止めた彼らの隙をつき、どうにか丸藤先輩と吹雪さんの背後という安全圏まで退避する。

というかもっと早めに止めてくれよ！

「はははっ、大変だったね一之瀬君」

「だが良いデュエルだった」

そうですか……。僕はもうやりたくないですけどね……。

その後ボロボロの身なりで部屋に戻った僕を、すっかり体積が減りぺちゃんこになった財布と、大量のクリボー型風船によって吊るされたカミューラ人形、更には満足そうに寝ているガイドさんの寝息が出迎えてくれたことはまたの機会に話すよ。

今日は僕も寝かせてくれ……。

## 第23話 学園祭（後書き）

やっとこさリクエスト頂いたデッキを使用できました。ありがとうございます。

無抵抗の真相よりワン・フォー・ワンの方が絶対採用率高いですけど、個人的に使いこなせたらカッコイイ罫カードの中に入っているコレを使いたかったです。

その一覧

無抵抗の真相、無力の証明、オーバーウェルム、ゼロフォース、プライドの咆哮等々

きっと共感してくれる方がいるはず・・・なのか・・・？

第24話 胚胎（前書き）

そろりと投稿

## 第24話 胚胎

「ええ〜！どういうことですか！？大徳寺先生の行方が分からないって・・・ホントに？」

「ああ。学園側でも調査したのだがどこに消えてしまったのか・・・」

「島を出た様子もないノ〜ネ」

「やはり大徳寺先生は闇のデュエルの生贄に・・・」

「万・丈・目・君！」

万丈目の配慮のない発言に明日香がジト目で非難する。

「いや、七星門の鍵はまだ2つしか開いていない。大徳寺先生は無事なはずだ」

「じゃあ今もどこかで俺達の助けを待っているんじゃないのか？きつとそうだ・・・早く探さなくちゃ！」

そう言うやいなや、十代は校長室から飛び出していった。探す当てはあるのだろうか。

部屋に居たメンバーも心配そうに十代の後ろ姿を目で追う。

「話はこれで終わりです。何か分かり次第連絡をいれますので」

まあいいや。僕もさっさと部屋に戻るか。

「ああ、一之瀬君はちょっと待ってください。少しばかりお伝えしたい事があります」

鮫島校長が部屋を出ようとする僕を引きとめる。

一体何の用なのだろうか。

「只今学園にあなたの親族の方がお見えになっています」

「親・・・族・・・？」

そんなものこの世界に居るわけがない。

「どうしたのですか？理事長からの紹介状も持っていましたし別室にお待たせしています。どうぞ面会してきてください」

なるほど、理事長関係の人か。

そりゃ堂々とセブンスターズの関係者ですなんて言えないもんな。

教えられた部屋の前まで到着したけど、すごく入りたくない。

一体何で僕に接触を図って来たのだろうか。

やっぱ帰っていいかな？面倒事の匂いしかないんだよ。

こんなことで時間を潰すより、最近学内に住みついた野良猫をもふもふしているほうが僕らの精神衛生上良い事は間切れもない事実であることくらいみんなにも解るだろ？

餌をちよくちよくあげているためか僕にはよく懐いてくれている。

こうね、喉元を撫でるとゴロゴロ気持ちよさそうに鳴いてくれるのが可愛くて仕方ないね。

ふう……。

そろそろ現実逃避はやめて部屋に入ろう。

そこにはいかにも仕事ができる女といった印象を受けるスーツで身をかためた妙齡の美女がコーヒーを飲みながら待っていた。僕が部屋に入るとカップにかけた手を戻し、ツカツカとこちらに向かってくる。

「お待ちしておりました。私は影丸理事長の使いの者です。普段は理事長の影の秘書役をさせて頂いております。どうぞ宜しくお願ひします」

そう言つて事務的に挨拶をした後、彼女は一枚の封筒を取り出し、こちらに差し出す。

「理事長からの指令を預かっております。こちらをご覧ください」  
うげえ……面倒くさい事じゃなければいいが……って無理かそんなの。



渡された書類に一通り目を通す。

要約するところだ。

当初の予定より七星門の鍵の奪取が遅れており、計画に綻びが出てきたとの事だ。想像以上に七星門の鍵を守護するデュエリストが手強く、最後の一人となってしまったセブンスターズに全て任せるのは荷が重いと判断したらしい。まあセブンスターズで仕事したと言えるのはカミューラとタニヤくらいだったし、その彼女らをして1つの鍵を奪うのがせいぜいだったのだ。まだ半数以上残っている敵を一人で倒せというのは確かに酷であろう。故に僕にも鍵の争奪戦に加わるようとの一文が添えられていた。

これが茶番であると分かっている僕からすれば溜息しか出ない内容だ。

それにしてもあまり積極的に動かさなかった僕をここに来て使うとはね。

何か問題でも起きて事を急ぐ必要が出てきたのであろうか。

「こちらから一応身を隠すための変装用の衣装を用意しております。サイズ等は貴方に合わせていますが、一応試着して確認してもらえますか？」

そうやって彼女が取りだしたのは明らかに重力を無視した造形の漆黒のコート。

うわぁ・・・これはないわ。

「できれば別の服がいいなと思ったり、試着して確認してもらえま

すか?」・・・」

どうやら僕の意見は却下されたらしい。

彼女は背後に回りコートを羽織りやすいように広げ、試着を手伝ってくれるようだ。

わかった、分かりましたよ。

彼女に従いコートを羽織る。

「ん?」

なんだろこれは。

腕を通した時に金属らしき冷たさと硬質な感触が・・・。

不審に思い、袖を巻くってみるとプレスレッドチェーンがまるで蛇のように腕に巻きついてじやらじやらと音を発していた。プレートにはそれが闇のアイテムであることを示す目の刻印がされている。

「なっ!?!?」

慌ててコートを脱ぎ棄て鎖から逃れようとするが、絡みついた鎖はそれを許さず、不気味な黒い瘴気を発しながら更に巻きついて来る。

「騙す様な形となり申し訳ありません。しかしこちら側としても既にこの学園内でセブンスターズの代わりが務まる程の人材が貴方しかいないのですよ。首輪を掛けておくくらいのことをしないと安心できないのです。今回は腕輪ですけどね」

冷酷な笑みを浮かべながらそう語る彼女を睨みつける。

まさかここに来て強硬策に討って出るとは・・・油断した！

しかしそんな事を考える余裕はすぐになくなってしまった。

なんだこれは・・・。

憎悪、嫉妬、墮落、憤怒、嫌悪、怨嗟、恐怖

あらゆる人間の負の感情と言つべきモノが闇のアイテムを通して僕  
の精神に流れ込んでくる。

くっ・・・これはマズイ・・・！

段々と意識が混濁してきた。

「来週末には影丸理事長自らの学園にいらっしやるのでそれまで  
に事を終わらしておくようお願いしますね」

彼女の言葉だけが何故かイヤに脳内に響く。いやそれだけじゃない。

聞こえる。

何者かの声が。

僕に呼び掛ける。

シタガエ・・・ワレニシタガエ・・・

やめろ！僕に入ってきて来るな！

シタガエ・・・シタガエ・・・

シタガエ

十代 side

「とは言つものの、どうやって探せばいいんだ？」

校長先生の話聞いて思わず飛び出してきたけど、俺には大徳寺先生の行方を調べる術がない事に今頃になって気付いた。

「うん・・・」

「そうっすよねえ。校長先生があの手この手使って探してるっていうし」

「そうなんだなあ。大徳寺先生の足取りが掴める何かが見つかればいいけど、俺達素人だしなあ」

翔や隼人もお手上げのようだ。でも俺はそんなんじゃ諦められない。

「だけど俺達オシリスレッドの先生なんだぜ？逆に皆が見落としてる事が見つかるともしれないだろ、なあ？」

「その通りだ」

「そうっすね・・・って、うええ!?!」

いつの間にもやら俺達の背後に万丈目が立っていた。なんで声をかけないんだよ・・・。

「フフフフ、貴様ら忘れたわけではあるまいな。この名探偵万丈目サッダー様を」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「シカトか!?!」

「灯台元暗しと言っだろう。捜査の基本はまず犯人の部屋を調べることだ」

そんな万丈目の言によって俺達はまずレッド寮の大徳寺先生の部屋を調べる事にした。

俺達の出すもの出すもの全て手掛かりとして使えないと万丈目に却下されたが、お前の推理は本当に正しいのか心配になってきたぞ。

「何だこれ」

「こつこつ事だったのか! 全ての謎が解けたぞ!」

翔が発見した地図を横から万丈目が横取りして叫ぶ。

「今度はなんなのさあ〜」

突き飛ばされた方の翔は愚痴を零しながらも質問する。

「これを見る！まさに今日、授業で習った錬金術のマークだ！錬金術と言えば大徳寺先生。これは大徳寺先生がここに居るというメッセージに違いない！」

「それって単純すぎない？」

でも何か手掛かりがあるかもしれない。

今の俺達には僅かでも縋るものが欲しいんだ。

「行ってみよう！」

~~~~~

「結局手掛かりなしか・・・」

あれから地図に記されていた場所を搜索したんだけど何一つ進展がなかった。

「まだまだこれからっすよ兄貴」

不安な気持ちを紛らわせようとしたのか、自然と話は、大徳寺先生と

の思い出についてになつていった。改めて考えるとあれほど自由な先生はいなかったな。周りの俺たちに迷惑が振りかかる事が多かったけど。万丈目や翔達も似たような思いだったらしく、大徳寺先生についての日頃の恨み事を言い合う。

「でも俺は大徳寺先生と一緒に楽しかったぜ。大徳寺先生の居ないオシリスレッドなんてオシリスレッドじゃねーだろ？」

「まあね」

「今頃絶対泣いてるな」

「うん。暗くて怖いのにゃ〜ってね」

「さて休憩は終わりだ。行くぞ！」

(にゃ〜)

万丈目が号令をかけたその時、どこからか聞き覚えのある泣き声があった。

「今のファラオの鳴き声なんだなあ！」

「あのデブ猫か!？」

ファラオは大徳寺先生の側にいつもくっついてる。

大徳寺先生が消えてからファラオも一緒に消えていたのに……。

まさか近くに大徳寺先生がいるのか!？

「みんなまずはファラオを探そう！」

カイザー亮 side

最近では以前のような調子を取り戻した吹雪に呼び出された。

どうせまた下らない事を言い始めるのだろう。

時折突拍子のない考えを思い至り、それに付き合わされるのはいつもの事だ。

しかし今はそれが心地よい。

ようやく元の俺達の関係に戻れたのだと実感できる。

「吹雪、入るぞ」

返事がない事を訝しながらも吹雪の部屋に入る。

しかし吹雪の姿はそこにはなく、俺の目に映ったのは荒らされた室内と飛散した硝子の欠片、そしていつしか錬金術の授業に出てきた錬金術を代表する印であるとされているアムナエルのマーク。

「吹雪……まさかセブンスターズに……。つつ!? 明日香！」

明日香も吹雪の部屋に行くと行っていたはずだ。

明日香も巻き込まれたのか、それとも既にこの現状を見て動き出しているのか。

どちらにせよ吹雪が事件に巻き込まれた事には違いない。

明らかに外部から割られたであろうガラス窓から外の様子を伺う。

すると寮の目の前の森まで、俺を誘うかの如く点々とアムナエルのマークが続いているのが確認できた。

しかし犯人が態々自身の痕跡を残す必要があるとも思えない。

「畏か・・・」

しかし吹雪を人質にされている以上、動かないわけにはいかない。

以前吹雪が行方不明になった時、俺は何もできなかった・・・。
助けを求める明日香にも相談に乗ってやる事くらいしかできなかった。

あの時のような惨めな思いは御免だ。

例え畏だとしてもそれを打ち破り、必ずや吹雪を救出する。

待っている吹雪。

わざとらしく残してあったアムナエルのマークを追い、木々が生い茂る森林の中を駆ける。

突如マークが消えたと思うとその先、森が開けた場所にカードが散乱していた。

「これは明日香のエトワール・サイバー……！くっ、明日香はどこだ！？」

やはり明日香も巻き込まれていたのか。

この事実には焦燥に駆られる心をなんとか落ち着かせ、彼女の行方の手掛かりになるものを探す。

この現状を見るに明日香は吹雪を連れ去った犯人に敗北したのだろう。この場に彼女の姿が見えないという事は一緒に連れ去られたのか……。

暫し辺りを探ってみると何かを引きずった跡を発見した。

周りの草木が折れ、誰かが通った痕跡も見られる。

この先か……！

しかしその時背後より何者かが向かってくる音が聞こえ、正体を見極めるために振り返る。

「誰だ！」

木々の影より現れたのはこの学園の関係者ではないと一目で解る人物。

漆黒のコートを身に纏い、フードを頭から被っているため素顔が見えない。

だが奴の腕に巻かれたブレスレットから発せられている濃い闇の気配は、セブンスターズの一人、カミューラと闘った時に感じたものと同質であると肌で感じた。

なるほど、つまり奴は……。

「お前が最後のセブンスターズか、吹雪と明日香を返してもらおうぞ！」

デュエルディスクを展開すると奴も無言でデュエルディスクを構える。

「「^{デュエル}決闘」」

十代 side

「どこだあ〜！ファラオ〜！」

ファラオの鳴き声を頼りに搜索していたんだけど、中々見つからずに、4人が別れて探す事となった。

（にゃ〜）

「兄貴！こっちから鳴き声がするっすよ！」

遠くから翔の声が聞こえ、そちらへ向かうと翔の声を聞きつけた隼人も右手の方から飛び出してきた。

「十代！そこなんだな！」

「いた！やつと見つけたぞファラオ！」

木の根元で丸くなっていたファラオを捕まえる。

「ファラオ、大徳寺先生はどこだ？」

（にゃ～にゃ～）

流石に俺でも猫語はわかんねえよ。

「あれ？そう言えば万丈目君はどこにいったんすか？」

「うわあああああああああつ！！！」

「万丈目！？」

今のは万丈目の声だ！

悲鳴の聞こえた方向に全力で向かう。

するとすぐに森が開け、大きな湖が俺達を出迎えた。

「十代、あそこ見るんだなあ！」

隼人が指さす方を見ると、そこには湖に浮かぶ万丈目のカードと泣きながら万丈目を呼ぶ、オジヤマ3兄弟の精霊が……。

「そんな・・・」

まさか万丈目もやられたっていうのか・・・。

「兄貴！地震が！」

足元が突然揺れ始めた。

「くっ、こんな時に!？」

俺の叫びと同時に大規模な揺れが島を襲った。

しかしハプニングはそれだけじゃなかった。

突如として島を囲うように6つの極光の柱が海底より空に向かって伸びていったんだ。

いったい何が起きているんだ!？

って6つ・・・？

まさか!？

「七星門の鍵が開いたのか・・・!？」

(そうに決まってるぅ〜!良くない事が起きるのよお!)

オジャマイエローの精霊が泣き叫ぶ。

「残ってた七星門の鍵は5つ。俺と万丈目と明日香、カイザーにそして大徳寺先生。その5つの内4つが開いたってことは……」

「兄貴以外は全滅！？そんな！お兄さんがやられるなんて……」

「やっぱり大徳寺先生もやられちゃってたんだなあ」

「兄貴！早く逃げようよ！もし兄貴まで鍵を奪われたら何が起こるか分からないよ。本当に三幻魔が復活して、この島も沈没しちゃうかも……」

「尚更逃げられるかっての。このまま明日香や万丈目達を見捨てられるわけないだろ」

「そりやそうだけど……兄貴がコテンパンにされたお兄さんすらやられたんすよ！」

「どんな強敵でも消えた連中を取り戻すには俺が闇のデュエルに勝つしかない」

俺が勝って皆を……！

「今度のデュエルこそが真正銘セブンスターズとの最後の闘いだ！」

この時はそう思っていたんだ。

これで終わりだよ。

第24話 胚胎（後書き）

もつと腕に闇のシルバー巻くとかSA！

TF6の情報が出回りましたね。

此の度はめでたくジャツカルさんに専用グラフィックが追加したそうだなにより。そこらの男キャラよりイケメンとは流石と言わざるを得ない。

紬さんはあまり変わっていないようですね。だがそれがいい。

皆さんのお気に入りにTFキャラはどうだったのでしょうか？

第25話 絆（前書き）

今回は主人公の出番はないです。

第25話 絆

十代 side

駄目だ・・・強い・・・！

今度ばかりは勝てる気がしない・・・。

万丈目達を倒した最後のセブンスターズの実力は本物だ。

なんとか一度は流れを掴んだけど、あつという間に戦局を逆転された。

相手の場には攻撃力3900のヘリオス・トリス・メギストス。それに対し俺の場には1枚のカードもない。

更に現在の俺の手札は0。何かを生み出す素材すら残っていない。

大徳寺先生、俺に錬金術の才能があるってのはとんだ勘違いだったな。

アムナエルのマークを辿って着いた廃寮。

その奥で俺達を待ち構えていた最後のセブンスターズ。

信じられなかった、いや信じたくなかったんだ。

大徳寺先生がセブンスターズの一人だなんて・・・。

そんな思いを抱えながらも、万丈目達を救出すべく頑張ってみたけど、どうやら俺はここまでみたいだ・・・すまない、みんな・・・。

「所詮お前は1年前と同じか？」

突然大徳寺先生が俺に問いかける。

「1年前・・・？」

その言葉で思い返すこれまでの日々。

1年前・・・俺はデュエルアカデミアに・・・。

ハネクリボー、俺は1年前お前にさえ会っていなかった。

1年前俺は皆と出会って

共に笑って

共に泣いて

1年前の俺にはなくて、今の俺にはあるもの。

そうか！この1年皆と作った記憶！これから皆と作る未来！

仲間を創り出すことこそ錬金術！

なら俺にはまだまだいくらだって可能性が。俺の仲間はデッキの中にも・・・！

「俺のターン、ドロー！」

「俺は魔法カードミラクルフュージョンを発動！ミラクルフュージョン、それは墓地に寝むるエレメンタルヒーローを融合素材にできるカード。そして呼び出すヒーローは究極のエレメンタルヒーロー、エリクシーラー！」

風、水、炎、地、そして光。

この世を構成する要素をこれだけ含んだ、まさに錬金術の究極体。

「エリクシーラーの攻撃！フュージョニスト・マジスタリ！！！」

エリクシーラーから放たれる極光の輝き。これが俺が創り上げた仲間との絆の輝き。

大徳寺先生のライフポイントが尽き、その場に崩れ落ちる。

「大徳寺先生……」

「十代、最終試験は見事合格だ。錬金術が全てを金に変えるというのは表面の現象にすぎない。その真意は人の心をより純粋で高貴なものに変えることなのだ。十代、キミは今その真実を知った。これで私の目的は達した。いずれこの島に訪れる災厄、それに対抗できる者を育て上げる事ができた……これを受け取れ……」

そういつて差し出したのは一冊の本。

授業で先生が言っていた錬金の秘伝書「エメラルド・タブレット」。

「十代、災厄を防げるのはキミだけ……いや、もしかしたら彼も・

・・・」

何かを言い終わる前に大徳寺先生の体が砂のように崩れ落ちて行った。

「まさか大徳寺先生がセブンスターだったなんて・・・」

「そうなんだなあ」

「でもこれでセブンスターは全て倒れた」

「じゃあこの学園も平和が戻ってくるんすね！」

「いや、それはわからない。先生はこの島にもっと大きな災いが起きるって言ってた」

けど大徳寺先生、その時は先生の意志を継いでこの俺が必ずそいつをブツ倒す！

大徳寺先生に勝利したことによって、囚われていた万丈目や明日香、そして巻き込まれたのであろう吹雪さんが、俺達の目の前に突然の発光現象と共に倒れた状態で現れた。

「みんな気を失っているだけなんだなあ」

良かった。やっぱり大徳寺先生は誰かを傷つけることなんてしなかったんだ。

「お兄さん・・・兄貴！お兄さんがいないっす！」

どういうことだ？他のみんなは無事に帰って来ているのに！？

「俺は大丈夫だ・・・」

声のした方に目を向けると、丁度カイザーがこの部屋に入ってくる
ところだった。本人は大丈夫だと言っているけど、明らかに疲労の
色が見られ、壁に手をつき倒れるのを防ぎながら歩いている。

「お兄さん！」

そう言つて翔が早足で駆け寄り、肩を貸す。

「カイザーも大徳寺先生に囚われていたんじゃないかなかったのか？七星
門が6つまで開かれたと思つていたんだけど」

「いや、確かに俺は負けた。しかし、それは大徳寺先生相手ではな
い」

「そんな！？だつてセブンスターズは7人だつて校長先生が言つて
たつすよ！ダークネスにカミューラ、タニヤに黒蠍盗掘団、アドビ
ス3世にタイタン。そして今回の大徳寺先生を加えればちょうど7
人っす！他に誰がいるつて言っんすか！？それにお兄さんを倒すほ
どのデュエリストがそうそういるはずが・・・」

「・・・恐らく一之瀬だ・・・」

「・・・何だつて！？」

「闘っている時は黒いフードを目深まで被っていたため分からなかったが、奴にデュエルで敗北し鍵を奪われ意識を失う瞬間、フードの奥に確かに一之瀬の顔が見えた……。それに奴の腕にはセブンスターズが用いていたものと似た闇のアイテムを付けていた」

「そんな！？まさか彰君が・・・」

「信じられないんだなあ！」

「まだ彰がセブンスターズの味方だと決まったわけじゃない！吹雪さんのように闇のアイテムで操られているのかもしれない。大徳寺先生のように何か事情があって向こう側にいるのかもしれない。とりあえず彰を探そう！」

仲間との絆。

これこそ大徳寺先生があのだデュエルで教えてくれた事。

俺の力の根源となってくれるモノ。

だから俺はそれを信じる。

ジャツカルside

珍しい事もあったもんだ。

授業ベルが鳴った20分後になってようやく教室に入った俺の感想がこれだ。

舎弟^{アキラ}が欠席するなんて初めての事だ。

アイツは基本無気力に生きているが、授業や行事といったものには休まず出席する。

まあ俺は授業ふけることが多いから、その時に休んでたかもしんねえけどな。

いつもは俺が授業に遅れてくると、生意気にも非難めいた視線をこちに飛ばしてくるんだが、今日はそれがなかった。

アイツも体調崩すこともあるだろうし、別段不思議な事じゃねーけどな。

体もひよろつちいし今まできっちり授業に出た事のほうが奇跡かもしれないー。

しかしアイツがいねーとなんか調子でねえな……。

次の日も、そしてその次の日もアイツの姿は見えなかった。

風邪でも拗らせたのか？

そんなもんは気合いでなんとかしろってんだ。

あんま心配はしてねーけど、一応俺の舎弟であるわけだし、様子くらい見に行つてやるか。そう思つてアイツの部屋に行つたんだが、そこには誰もいなかった。

アイツのPDAに連絡をいれたんだが返信はなし。

もし俺を故意に無視してるんだつたらぶっ飛ばす事が今ここで決定した。

先生なら欠席の理由を知っているんじゃないかと思ひ至り、早速掛け合つてみたが、そこらの教師は何も聞いておらず、ブルーの寮長でもあるクロノスのヤローは何か隠しているみたいな反応をしゃがった。わけのわかんねえ単語を羅列しながら教務員室まで逃げ込んでしまい、終に吐かせることはできなかつた。

ちっ、あたるとすれば後はアイツの友人関係だな。

まあアイツは極めて狭い友人関係しか作つてねーから、候補が少なえのが問題だ。

レッド寮の遊城十代とは良く話しているみたいだから、奴をあたるか。

中々根性のある奴だし、タニヤっちにも認められてたから俺の中では評価が高い奴だ。

その後保健室に向かう遊城十代の姿を見たと言つ情報を聞いた。

保健室といえ紫の付き添いで何回も足を運んでいるため、保健医の鮎川ともそれなりに仲が良い。机に置いてあつた茶菓子を勝手に

拝借したら、烈火の如く怒られたのはつい最近の事だけだな。案内小せえ女だぜ、菓子くらいいいーじゃねーかよ。

保健室の前まで来ると、俺が探してた遊城十代の声が聞こえた。どうやら情報に間違いはなかったらしい。俺が戸に手を掛けた時、中から怒声があがった。

「だから彰は俺達を裏切ったりしないって言ってるだろ！」

「しかしカイザーが一之瀬に鍵を奪われたのは事実だ。また大徳寺先生のとくのようにいくとは限らないぞ。本当に奴がセブンスターズの一味であるかもしれない。その時はどうするんだ」

「ふっ、簡単なことだ。アイツが吹雪さんと同じように敵側に操られていたら、倒して正気に戻せばいい。操られていなくとも、倒して改心させればいい」

「万丈目君の言う通りね。とりあえず彼を探しださなきゃ。もしかしたら今も危機に晒されているかもしれないもの」

「僕もダークネスに操られていたから、彼の境遇が他人事ではないんだ。できることなら早く助けてやりたい」

「何にせよこの件は学校側にも大きな問題になりかねない。下手すれば三幻魔復活の可能性に繋がるかもしれない。そうすれば話は学校だけじゃなく世界レベルにまで発展するぞ」

保健室から聞こえてくる会話に胸が締めつけられるような思いがした。

アイツが裏切り……？

アイツの危機……？

アイツが操られている……？

助けなければならない……？

三幻魔……？

世界レベルの問題……？

何を言っているんだこいつらは……。

聞こえてくる内容は頭の悪い俺には解らない事があったが、これだけは理解できた。

アイツが今大変な事態に巻き込まれていると。

巫山戯んなよあの野郎！！

一人で解決できねーことがあれば俺に相談しろって言っただろーがっ！

弱いくせに一人で問題を抱え込む癖のあるアイツだからこそ先んじて言っっちゃったのに、また一人で背負いやがって……。

俺が信用できねーっつーのかよ！

「一之瀬が七星門の鍵を奪ったという事は、必然的に十代、お前の持つ最後の鍵をアイツが狙っている可能性が高い。鍵を匣にうまく誘いだせるかもしれない」

「なるほど、じゃあ俺はできるだけ目立つように鍵を持って動いていけば彰の方から接触してくるかもしれないって事だな」

つつ!?

七星門の鍵……。

それがあればアイツからこっちに来るっていうんだな？

わりーな、そこのお前ら。

舎弟が困ってる時には兄貴分の俺がなんとかしてやらねーといけねーんだよ。

そしてアイツが誤まった道を行こうもんならそれを張り倒してでも止めるってのが俺の役目ってもんだ。

何より心配をかけさせているあの野郎に一発ぶち込まねえと俺の気が済まねえ。

なあに鍵はちよつと借りるだけだ。

用が終わったらすぐ返すからよ！

第25話 絆（後書き）

ジャツカルさん介入フラグ。

TF6でも彼女を攻略中。本当にカードゲームなのだろうかこれ。

第26話 下剋上(前書き)

感想欄でも話題に出ることが多かったあのデックス登場回。

第26話 下剋上

十代 side

「七星門の鍵がなくなった(ですって)!?」「」

「うう・・・すまねえ。でも寝る前には確かにあつたんだ!失くさないようにいつも首にかけてたんだよ!」

「翔、隼人。お前らは十代と同室だろ?何か気が付かなかったのか?」

万丈目がそう尋ねる。でもそれはさっき俺も聞いたことだ。

「僕もぐっすり寝てて・・・」

「俺もなんだなあ・・・」

「万丈目、お前だって十代とは隣の部屋だろ。何か原因がわからないのか?」

「俺は寝る時耳栓をしないと寝れないんだ!オジヤマ達が五月蠅くてな!」

三沢の質問に対し、万丈目がオジヤマ3兄弟の精霊を睨みつけながらそう答える。

「ちょっと待って。確かここに来るときにトメさんがまだ早朝の頃にレッド寮から人が出てくるのを見たって言ってたわ」

「それだけでは犯人とは判断し辛いけど、もしかしたら七星門の鍵の行方がわかるかもしれない。幸いにも七星門の鍵はただ盗むだけでは意味がない。犯人はその事を知らない人物と見るべきか……。まずは情報を集めるべきだ」

カイザーの発言を皮切りに俺達は行動を開始した。

明日香の聞いた情報を確認するため、まずはトメさんに話を聞きに行くのがいいだろうと意見が固まり、彼女の職場である食堂まで直行。

トメさんとしてはオベリスクブルーにしか所属していない女生徒がレッド寮から出てきた事に不信感を抱き、その事を覚えていたらしい。

出てきた名前は意外な人物だった。

「ジャツカルって確か彰と仲良かったやつだよな？」

「いや、あれは仲が良いと言うより尻に敷かれてたような気がするっす」

「俺もタニヤつちとそんな関係になりたかった・・・」

「貴方達、今はそんな馬鹿な話をしている場合じゃないのよ！」

「「「「ごめんなさい……」」」」

翔と三沢がすぐさま平伏体勢に入る。

「彰と関わりの深い人物なら、今回の件との関連性が高いんじゃないか？とりあえず彼女に会って聞いてみようぜ」

状況を知らない人物が持っているのに、七星門の鍵はあまりに危険なモノだ。

早いとこ探し出さなきゃ！

ジャッカル岬 side

遊城十代にはわりい事しちまったかな……。

俺の手には奴から（勝手に）借りてきた七星門の鍵とやらがぶら下がっている。

ホントにこんなんで舎弟アキラが釣れるのかは疑問だが、あいつ等の方が情報を持っているだろうし素直に参考にさせてもらおうか。

しかし出足で挫かれるとはな。俺とした事が鍵を拝借するところまではないんだが、この後どうするか全く考えていなかったぜ。

こういう時は……

勘だな！

俺ぐらいのデュエリストになるとただ歩いているだけで強え奴らが引きつけられるからな。彰も俺には及ばないとはいえ他の奴らに比べりゃ骨のある奴だ。おまけにこの鍵持ってるりゃそこら辺ぶらついてるだけでアイツの方から寄ってくるだろ。

そう考えとりあえず島内をぐるりと回ってみようと行動を起こした矢先、視線を感じた。

敵意はないようだがなんとなく気に入らねえ。

まるで値踏みされているような不躰な視線……。

気配を感じた方に目を向けると、100メートル程先の木の上から俺には似合いそうもない洒落た帽子を被った赤毛の小娘がこちらを見ていた。足は空に投げ出してブラブラさせている。

あんな奴学内で見た事ねーぞ。

そいつは俺が気付いた事を確認すると、挑発めいた微笑を浮かべ、木から飛び降り森の中へと消えていった。

面白え、ついて来いつてことかよ。

見逃さねえ様に駆け足で追いかける。アイツは丁度俺が追いつける程度のスピードで、まるで障害物などないようにひよひよいと足を進める。

どうなつてやがる、まるで木や植物の方から避けているような錯覚

を覚えさせる足運び。

こいつも外見に見合わず強えのかもしれないな。

そんな奇妙な鬼ごっこが数分続いたんだが、木々が妙に開けた場所に入った瞬間、目の前から女の姿が掻き消えた。

見失ったか……。

消えた女の跡を探ろうと足を踏み出そうとしたその時、対面からこちらに向かってくる影が目に入った。

遠目からでも分かる。伊達に長い間つるんじやいないさ。俺が探してた男だ。

「はっ、自力で探す手間が省けたぜ。本当にこんなもんで釣れるたあな」

彰が俺と向き合い立ち止まるのを確認した後、俺は鍵を弄りながらそんな軽口を叩く。

「鍵をこちらへ」

あいつは俺の軽口には付き合う気がないらしく、淡々と己が目的を述べるだけ。

「馬鹿かてめーは。その前にお前の巻き込まれているこの一連の事件について話しやがるのが先だ。一体何が起きているんだ？お前は何をしてるんだ？お前自身の意志でやっているのか？」

「貴方には関係ありません」

俺には関係ない？

その言葉で一気に頭に血が上るのを感じた。

感情が爆発し、理性が吹き飛ぶ。

気付いたらアイツの顔を殴り飛ばしていた。

「巫山戯んな・・・」

巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな
巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな
巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな
巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな

巫山戯んなよ！！

テーマが関わっている時点で俺には無関係じゃねーってこともわか
んねーのか！？

どれだけ俺が心配したと思ってるんだ！紫だつて自分の体の調子が
悪いってのに口を開けばずっとお前の事が心配だと言ってたんだぞ
！！

それなのに事もあるつか関係ないだと？

「この俺に向かってその言い様、覚悟はできてんだろーな・・・」

「力づくでも鍵は貰います」

そう言つてアイツは口からの出血を手で拭いながら立ちあがり、デュエルディスクを展開する。

いつもは弱気で下手に出る彰が俺から鍵を奪つたと？

「下剋上つてか？上等だ！お前を叩き潰してから首根っこ押えて連れて帰つてやるよ！」

「「決闘^{デュエル}」！」

「俺のターン、ドロー！」

「俺は可変機獣ガンナー・ドラゴンを攻撃表示で召喚するぞ！こいつはレベル7のモンスターだがバルバロスと同じように生贄なしで通常召喚できる！ただその場合元々の攻撃力、守備力は半分になつちなうがな」

《可変機獣ガンナー・ドラゴン》 ATK/1400 DEF/1000

「カードを2枚セットし、俺のターンはおしまいだ！」

「僕のターン、ドロー」

「おっとりバースカード！スキルドレインを発動だ！1000ライフポイントを支払う事によってこのカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上で表側表示で存在する効果モンスターの効果

を無効化するぜ。無論俺の場のガンナー・ドラゴンもだ！」

ジャツカル岬 LP4000 3000

《可変機獣ガンナー・ドラゴン》 ATK/1400 DEF/1000
ATK/2800 DEF/2000

「……………」

「はっ、てめーはいつも猪口才手口ばっか使うからな。先手で封じさせてもらっぜ」

「僕は魔法カード、暗黒界の取引を発動。互いのプレイヤーはデッキからカードを1枚ドロし、その後手札を1枚選択して捨てる」

「手札より暗黒界の術師スノウを捨てる。そしてスノウの効果が発動。このカードがカードの効果によって手札から墓地に送られた場合、デッキ暗黒界と名のついたカード1枚を手札に加える。僕が手札に加えるのは暗黒界の門……」

ちっ、墓地で発動する効果はスキルドレインでは無効にできねえ……。

「フィールド魔法、暗黒界の門を発動！」

空は暗雲に陰り、激しい雷が降り落ちる。

アイツの背後に地響きを立てながら巨大な門が迫り上がってきた。

「暗黒界の門の効果によりフィールド上に表側表示で存在する悪魔族モンスターの攻撃力、守備力は300ポイントアップする。更に

1ターンに1度、自分の墓地に存在する悪魔族モンスター1体をゲームから除外する事で、手札から悪魔族モンスター1体を選択して捨てる。その後、自分のデッキよりカードを1枚ドローする」

「僕は墓地に存在する暗黒界の術師スノウをゲームから除外し、手札から暗黒界の龍神グラファを墓地にすてデッキよりカードを1枚ドロー。そしてグラファの効果、このカードがカードの効果によって手札から墓地に送られた場合、相手フィールド上のカードを1枚選択し破壊する。ガンナー・ドラゴンを道連れにしる」

なんだあれは!?

墓地より禍々しい悪魔の腕が出現し、ガンナー・ドラゴンを引きずり込もうとしやがる!

「ちつ、俺はガンナー・ドラゴンを生贄に捧げて神秘の中華なべを発動だ!生贄に捧げたモンスターの攻撃力が守備力を選択し、その数値だけ自分のライフを回復する!」

ジャツカル岬 LP3000 5800

「暗黒界の尖兵ベージを攻撃表示で召喚!」

《暗黒界の尖兵ベージ》 ATK/1600 DEF/1300

ATK/1900 DEF/1600

「墓地に存在するグラファの効果を起こ動。自分フィールド上に存在する暗黒界と名のついたモンスター1体を手札に戻すことによって、グラファを墓地より蘇生させる」

なっ!?

破壊効果に加えて自己再生能力だと!?

アイツの場が暗黒に染まり、先程見た悪魔の腕が門より現れる……いや腕だけじゃない!凶悪な威圧感を振りまきながら、龍を思わせる禍々しい面、闇を彷彿とさせる漆黒の翼、まるで獅子のような強靱な脚部。耳を劈かんばかりの咆哮を轟かせ、その全貌が露わとなった。

《暗黒界の龍神グラファ》 ATK/2700 DEF/1800

ATK/3000 DEF/2100

くっ、伊達に神の名を冠しているわけじゃねーってか……。

「バトルフェイズ。暗黒界の龍神グラファでプレイヤーにダイレクトアタック!龍神撃衝破!」

「ぐううううう!」

ジャッカル岬 LP5800 2800

「カードを1枚セットし、ターンエンド……」

「なめんじゃねーぞクソがっ!俺のターン!」

「俺は神獣王バルバロスを攻撃表示で召喚!生贄なしで召喚したこのカードの攻撃力は1900になるが、その効果はスキルドレインで無効化されるぜ!」

《神獣王バルバロス》 ATK/3000 DEF/1200

「バトルだ！さあ一発ぶっ込め！」

攻撃力は互角。このままでは相打ちに終わるがそうはいかねえぜ。

「手札から速攻魔法、収縮を発動！フィールド上のモンスター1体を選択し、そのモンスターの元々の攻撃力を半減させる」

《暗黒界の龍神グラファ》 ATK3000 ATK/1650

「これでテメーのモンスターの攻撃力を上回ったぞコラ！いけバルバロス！トルネード・シェイパー！！」

「.....」

彰 LP4000 2650

「はっ、龍神なんて大層な名前を持つてくるくせに大した事ねー！これで俺のターンは終いだ！」

「エンドフェイス時リバーシカード、速攻魔法、暗黒界に続く結界通路を発動.....。自分の墓地に存在する暗黒界と名のついたモンスター1体を選択し特殊召喚する」

「なんだと!？」

《暗黒界の龍神グラファ》 ATK/2700 DEF/1800

ATK/3000 DEF/2100

アイツの場には再びあの悪魔が蘇りやがった……。
くっ、警戒すべきは攻撃力じゃなく、その再生力だったか

「僕のターン、ドローカード……。手札より暗黒界の尖兵ページを召喚」

《暗黒界の尖兵ページ》 ATK/1600 DEF/1300
ATK/1900 DEF/1600

「バトルフェイズ。暗黒界の龍神グラファで神獣王バルバロスに攻撃……」

「くっ、反撃しろバルバロス！」

攻撃力は互角。相打ちになるが仕方ねえ……。

「暗黒界の尖兵ページでダイレクトアタック……」

ジャツカル岬 LP2800 900

痛えダメージを負ったが問題はそれだけじゃねえ……！
アイツの墓地に再びグラファがいるってことは……。

「墓地に存在する暗黒界の龍神グラファの効果。ページを手札に戻すことによって墓地より蘇れ龍神よ！」

《暗黒界の龍神グラファ》 ATK/2700 DEF/1800
ATK/3000 DEF/2100

「しつげえ野郎は女に嫌われるぜ」

そんな俺の皮肉にもアイツは表情一つ動かさず淡々とデュエルを続ける。

「ターンエンド・・・」

今のままじゃこの状況を打開できねえ。頼む・・・来てくれよ！

「俺のターン、ドロー！！」

つつ！？

「俺は墓地に存在する獣戦士族、神獣王バルバロスと機械族、可変機獣ガンナー・ドラゴンをゲームから除外する事によってこのカードを手札から特殊召喚する！見やがれ！これが俺の切り札だ！来やがれ獣神機王バルバロスUr！！」

《獣神機王バルバロスUr》 ATK/3800 DEF/1200

グラフィアよりでけえ攻撃力を持ったモンスターならいくら蘇生されようともその都度叩き潰せる！

「喧嘩上等！獣神機王バルバロスUrでグラフィアを攻撃！閃光列破クラック・シヨ弾！！」

バルバロスUrはその攻撃力の代償に、このカードとの戦闘で相手プレイヤーが受ける0になるデメリットを抱えている。だがそういったスキルドレインで無効にしちまえば問題ねえ。

「くたばれや！クソがつ！！」

だがそれは叶わなかった。

何故なら突然アイツの場のモンスターが消滅したんだ！

「どういうことだ！？おめーの場には何も伏せられやいねーぞ！」

アイツの足元から気味の悪い巨大な花が咲き、その中より肩翼は天使、肩翼は悪魔、まるで墮天使のような異形の魔物が現れ出でる。

《ダークネス・ネオスファイア》 ATK / 4000 DEF / 4000
0 ATK / 4300 DEF / 4300

馬鹿な、今は俺のターンだぞ！？

魔法や罫を使わず最上級モンスターを呼び出したっていいのか！？

「ダークネス・ネオスファイア。これは相手モンスターの攻撃宣言時、自分の手札、フィールドより悪魔族モンスターをそれぞれ1体ずつ墓地へ送る事によってのみ、特殊召喚できるカード。手札より暗黒界の尖兵ベージと場の暗黒界の龍神グラファを墓地に送る事によって特殊召喚・・・」

「ちっ、バトルは中止だ！カードを1枚セットし、ターンを終了するぜ」

俺が伏せたのは攻撃の無力化。

コイツで時間を稼いで状況を打開できるカードを引くしかねえ。

幸いにもバルバロスU rとダークネス・ネオスファイアの差は僅か500ポイント。少しでも攻撃力をバンプできるカードを引ければまだ勝機はある！

「僕のターン。手札より暗黒界の雷を発動！フィールド上に裏側表示で存在するカード1枚を選択して破壊。その後自分の手札を1枚選択し捨てる」

暗黒界の門より発生した雷が俺の場の攻撃の無力化を鋭く射抜いた。

「暗黒界の雷の効果により暗黒界の龍神グラファを墓地に捨て効果発動。相手フィールド上のカード1枚、獣神機王バルバロスU rを破壊する・・・」

デュエル序盤で見たあの龍神の腕がバルバロスU rの腕を掴み、地獄の底へと引き摺り込んだ。

俺の場にはもう何も残っちゃいねえ・・・だがそれがどうした。最後まで戦うのがデュエリストだ。デュエルに諦めは許されない。

「バトルフェイズ。ダークネス・ネオスファイアでプレイヤーにダイレクトアタック！」

ダークネス・ネオスファイアの頭部から見開かれた目から俺のライフポイントを狩り取る死の光線が放たれる。

俺は最後までアイツの顔を見続けた。

体に衝撃が走り、意識が明滅する。

はっ、格好悪すぎだろうが俺様よ……。

何がアイツを助けるだ……。

何がアイツを止めるだ……。

ハードラック
不運だなんて誤魔化せやしねえ。

単純に俺の力足らずだってことを痛感させられただけだ。

俺じゃお前の力になれねえってのかよ……。

体がぐらつきその場に倒れる。

ふと、そんな俺の体を誰かが支えた。

誰がなんて言わなくても分かんたろうが。

いつか俺が喧嘩に向かう際に見せた、まるで俺を案じるかのような、
気遣うかのような、優しい目が俺を覗きこむ。

はっ、さっきみたいなのかを一人で背負い込んでるような辛い顔よ、
り、今みたいな情けねー顔の方がお前には似合ってるぜ……。

そこで俺の意識は暗転した。

第26話 下剋上（後書き）

説明は死亡フラグや姐さん！

主人公が敵サイドに立った時使おうと思った暗黒界。まさか相手がジャッカルさんになるうとは自分でも思っていなかった始末。でも一度はこの二人をガチで闘わせてみたかったんですね。

第27話 前哨戦（前書き）

昨日こっそり閑話も投稿済みです。時間軸が移動してますが単発ネタなのでよろしければそちらもどうぞ。

第27話 前哨戦

十代 side

「なんだ!？」

紛失した七星門の鍵を搜索している途中のことだ。

突如木々が騒めき、地面が揺れる。鳥が鳴き、大地が隆起する。更には七つの巨大な石柱が轟音と共に森の中より突き出し、円形状に出現したそれらの中心部分の森林が陥没していく。

「まさか七星門に何かあったのか!？」

「急ぎましょう!」

急ぎその現象が起こった現場に皆で急行する。

息が乱れているけどそれを気にしている場合じゃない。

着いた当初は砂埃が舞い辺りが確認できないほどであったが、少し時間が経ったことにより視界が晴れ、俺達の目に映ったのは七つの石柱の中心に一人の女生徒をその腕に抱いた彰の姿だった。

そちらに向かつて踏み出そうとしたその時、彰の手元から放たれた光、恐らくは七星門の鍵がそれぞれの石柱に取り込まれていき、柱が振動を始める。

「まさか七星門が開くのか!？」

「みなさん!!!」

「何事ナノーネ!」

鮫島校長とクロノス先生もこの事態に気付き、ここまで駆けつけてきたようだ。

しかしそんな俺達の事情など関係ないとばかりに、地響きと共に黒曜石の石柱が沸き上がり、その先端から機械が展開していく。その数秒後、動作を終えた機械から光を放ちながら出現したのは3枚のカード。

「あれが三幻魔のカードか・・・!」

三幻魔のカードを誰かの手に渡すわけにはいかない!

幸いにも彰は動く様子を見せないので俺達で確保し、また再封印ができれば・・・!

「そのカードを貴様らにやるわけにはいかんな」

俺達が幻魔のカードに向かって駆けだした時、上空から拡声器を使ったのだろう大きな声が降ってきた。

声の主を探し空を見上げると、巨大なヘリがこちらに向かって降下してきている。ある程度の高度まで下がって来たヘリのハッチが開かれ、そこからパラシュートを付けた機械の塊が落っこちてきた。

その塊は丁度三幻魔のカードの近くに着陸し、四足歩行の巨大な口

ボットに変形していき、そしてその胴体には筒状の培養液の中に浮かんでいる老人が埋め込まれている。

「なんだ・・・あのロボットは・・・」

鮫島校長が思わずそう呟いた。

「フハハハハ・・・。鮫島校長、私の声を忘れたのかね」

「その声は・・・影丸理事長!!」

理事長?このデュエルアカデミアのか!?!どうしてこんなところに・・・。

「時は満ちた。今ここに三幻魔復活の儀式を行う」

「何故理事長が三幻魔の復活など!?!」

「最初から私の計画だったのだ。三幻魔のカードをここに封印し、七つの鍵を鮫島校長に託したのも私自身なのだ・・・」

一体どうということなんだ!?!突然の影丸理事長の告白に頭が付いてこない。

「七つの鍵はお前達とセブンスターズを闘わせ、この島にデュエリストの闘志を蔓延させるための道具に過ぎない。今から数年前、私は永遠の命と世界の覇権を手にすると言われる伝説のカード、三幻魔を手にした。だが三幻魔のカードに眠る力を蘇えさせるにはデュエリストの闘志に満ちた空間が必要だとわかった。そのために私はこの学園を作り上げ、三幻魔の復活に見合うデュエリストを育てて

いたというわけだ」

「ふざけないで！それじゃあ私たちは貴方に最初から利用されてたつていうの！？」

「そうだ！勝手な事ばかり言つな！」

「自分たちの道は自分たちで切り開いて見せるんだなあ！」

明日香の発言を皮切りに翔や隼人も思いの丈を叫ぶ。

「ならばお前の野望を打ち砕くため、俺が相手をしよう。オベリス
クブルーのカイザー、丸藤亮が！」

「いいや、このデュエルだけはこの、一！十！百！千！万丈目サン
ダーが受けて立つ！！！」

「この三沢大「いいや、このデュエルはこのボク、デュエルアカデ
ミアのブリザードプリンス！天上院吹雪がお相手する！」……………
……………」

「駄目だ。私の狙いは精霊の力を最も強く持つ遊城十代……………お前
だ！お前でなければ意味がない」

「俺が……………！！？いいぜ！俺が絶対お前をブツ倒し大徳寺先生の意
志を継ぐんだ！」

「焦るでない。私が貴様の相手をするまでもないわ。一之瀬……………」

彰が俺達から影丸を庇つような位置に移動する。

「彰！お前何で！？影丸はこの世界を混乱に陥れようとしているんだぞ！」

「口論など無駄だ。コイツはもう闇のアイテムの力によって己の自我で動いていない。以前の天上院吹雪のようにな」

「てめえ、許さないぞ！彰を元に戻せ！」

思わず殴りこもうとした俺の足を止めたのは一つの影。

いつの間だ！？

彰の横にあの赤毛の少女が立っていた。事あるごとに神出鬼没に現れたあの少女だ。

彼女が指をパチンと鳴らした瞬間、周りの景色が一瞬で闇に包まれていく。

その闇から現れたのは・・・

悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔
悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔
悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔

見渡す限りに悪魔の群れ。

「なんだあこれ！？デュエルモンスターの精霊がこんなにも！？」

(クリクリ〜！！)

ハネクリボーも警戒の声をあげながらカードから飛び出してきた。

「あれは炎獄魔人ヘル・バーナー！^{ヘルジェネラル}地獄將軍・メフィストも！」

（兄貴！ヤバイよ！困まれてるう！）

（早く逃げなきゃ俺達みたいな雑魚は食べられちゃう！）

（ブラック兄ちゃん、グリーンあんちゃん！きつと兄貴が助けてくれるよ）

万丈目にも現状が理解できたようだ。オジヤマ三兄弟もこの事態に混乱している。

しかし悪魔達は俺達のことなど見ておらず、まるで影丸を包囲するかのよう群がっていく。

影丸も予想外の出来事だったらしく、周りを警戒するような挙動を取っている。

どういうことなんだ！？

混乱の渦中にいる俺達に届いたのは、ここ数日聞いていなかった友の声。

「いやあくキツイ。こう操られている演技つても疲れる。しかしもうこれでアンタの退路はないぞ影丸理事長。悪魔の軍勢から逃れることなどできやしない」

そこには、以前あの赤毛の少女が俺に見せた、イタズラが成功したような意地悪な笑みを浮かべる彰がいた。

「貴様……！！何故自我を保っているのだ！？」

僕は悪魔娘の頭をポンポンと撫でながら答える。

「悪魔の契約。僕とコイツは契約によって力のパスが繋がれている状態なのさ。普段は僕の力を彼女に流してこの世界に現界させ続けているけど、今回はその逆。闇のアイテムに対抗できる精霊の力をこの悪魔娘を介して僕に流した。それだけの事さ。それに魔の類との二重契約ってのはどの世界でも御法度なんだよ理事長さん」

「はははっ、話は良くわかんねえけど大丈夫なんだな！良かった……でもどうして操られているふりなんてしてたんだよ、心配してたんだぞ！」

十代が後ろから嬉しそうな、そして非難めいた声をあげる。

「この狸爺が原因さ。まあ長年の歳月を費やした計画だから慎重になるのは当然だと思うが、この段階に至るまで全く表に出てこようとしなかったよ。理事長を影から引きずりだし、叩くにはこの三幻魔復活のタイミングしかなかった。この時以外で僕が三幻魔を狙っているのは理事長だなんて暴露した所で白を切られるのは目に見えていたしな」

姿を消していたのもこの時を待ったためだ。僕を駒にできたと油断した影丸理事長の秘書が、理事長がこの島に来る時期をわざわざ教え

てくれたからな。潜伏中の生活は大変だったけど。

「いいのか一之瀬よ。ここで私の敵に付くという行為を理解しているのか？貴様が元の世界に帰る道を自ら塞ぐようなことをしているのだぞ。それとも貴様、私から三幻魔を奪おうという魂胆だったのか・・・？」

影丸理事長が僕を睨みながら問う。

「何、僕としても基本的にはこの世界より元の世界に帰る事の方が大事さ。一時期は僕には関係のないことだと割り切ろうとしていたこともある。でも・・・」

腕に抱いたジャツカルさんの髪を撫で、そして事態をまだ把握できていないのかポカンとしている十代達のほうを見て微笑む。

「ただ一人でこの世界に迷い込み、孤独だった僕がその感情に潰れずに今まで生きてこられたのは、ジャツカルさんや十代達、それにあまり認めたくないけどこの悪魔娘が居てくれたおかげさ。そんな彼らを犠牲にするような真似をしてまで目的を果たすだなんて思はずな事はできない。己が欲望のために落ちるところまで落ちたアంతタとは違うんだよ」

正直な話、僕が居なくなっただけで姐さんがここまで心配してくれるなんて思わなかったけどな。十代や皆からも裏切り者扱いされると思っていたし、そう思われても仕方がないと覚悟していた。

しかしどうだ。十代はこんな僕の事をずっと信じていてくれた。

姐さんに至っては僕を探すために相当無茶をやらかしてくれただ

ろう。彼女は今回の三幻魔の事件についての情報などまるで持っていないかったはずだ。きっと僕のために色々と奔走してくれたに違いない。

七星門の鍵の所有者をガイドに誘き出して貰ったのはいいが、ジャッカルさんの姿が現れた時は本当に吃驚した。

掛けて貰えた言葉は嬉しかった。

不器用だけど心の底から心配してくれているんだと伝わってきたんだ。

彼女の助けを拒否し、殴られた時の一撃はいつもの拳より遙かに重かった。

まるでそれが彼女の思いの強さだというように。

でもその事で嫌われようと、幻滅されようとも僕は彼女を三幻魔や闇のゲームなんて危険な事に関わらせたくなかった。

闇のアイテムを実際に身に付けてみて良く分かった。これは人が持つべき力ではないと。人間の負の感情といったものが込められ、抗う力のないものは一気に闇の底へと落とされる。どんなに意志が強かろうと、むしろそれが仇となってより苦しむことになるだけだ。

こんな汚らわしいものが存在する世界に踏み込んで欲しくなかったんだ。

彼女にはもっと暖かな場所において欲しい。

舎弟。

そりゃあ傍から見ればヤクザや不良の手下みたいに思う人もいるだ

ろう。

しかし本来の意味はその字の通り、友達という枠を一步越えて、家族ミリといった枠に近い呼称だ。

彼女だつてあまり考えずに僕の事をそう呼び始めたのだろうけど、僕からすれば本当に嬉しかったんだ。

この世界で独り身である僕を家族であると受け入れてくれたんだ。

その言葉にどれだけ僕が救われたかわかるだろうか？

人というのはそもそも集団に属していないと生きていくことなどできやしない生き物だ。

というか一人で生きていける奴はもう人間ではないだろう。別種の生物として定義づけられるべきだ。

その集団の最小単位であり、最も繋がり深い集団である家族というものから、己の意志とは無関係に放りだされた僕の心境は不安定なモノだったことくらいは皆にも想像がつくだろう。

だから彼女に舎弟だと言われた時、表面では迷惑だ、面倒くさいなんてことを思いながらも、心の中では言いようのない安堵感で満たされたんだ。

ああ、僕はここに在っていいんだってね。

心配してくれるのは嬉しい。助力しようとしてくれるのも嬉しい。

でもそんな大事な家族を少しの危険からも守りたいって思うのは至

極自然な発想だとは思わないかい？

「それに大切な人を守るのは男の役目ってやつさ」

自らの思考に対してポツリと呟く。

「すまんね主人公。今回は僕に出番を譲ってもらおうよ。今まで十代達に任せっぱなしだったからね。ここでやらなきゃ何のために機を伺ってきたのかわかんなくなる」

そう言つて十代にジャツカルさんの身を任せ、僕は影丸理事長と向き合う。

「愚かだな……。もはや三幻魔のカードは私の手にあるのだぞ。幻魔の力に抗えると思つているのか」

「アンタこそ耄碌しているんじゃないか理事長。むしろ幻魔程度の力で勝った気になつている理事長の方が滑稽に見えるよ。井の中の蛙大海を知らずとはよく言つたものだね」

まあ僕が大海つてわけじゃないけど。

「いいだろう。三幻魔の力をとくと味わうがいい、異世界のデュエリストよ！」

互いにデュエルディスクを展開し、睨み合う。

ここ一番の大勝負。これで負けたら男が廢る。

そうですよね？ 姐さん……。

「「決闘！」^{デュエル}」

ジャツカル岬 side

周囲の騒音で意識が覚醒した。

しかし身体がだるくて力が入らず、起き上る気力が湧いてこない。

俺はどうして意識を失って……。

そこまで思い至ったところで自分が誰かの腕の中にいることに気付いた。

不思議と安心できる匂い……。

薄く眼を開けると彰が俺を支えているのが分かった。

わけわかんねえけつたいな機械に身を包んだじじいと言いついてい

話の内容は俺にはほとんど分からなかったが、少なくとも舎弟^{アキラ}も仕方なく姿を隠さなければならなくなり、それは自分のためではなく、遊城十代らを助けるためにしたことくらいは理解できた。友人を助けるためという理由は納得してやるけど俺を心配させたこととは別だからな。後で覚悟しやがれよ……。

「いいのか一之瀬よ。ここで私の敵に付くという行為を理解しているのか？ 貴様が元の世界に帰る道を自ら塞ぐようなことをしている

のだぞ」

ふと彰が俺の髪を撫でる。

髪を撫でられるのなんて何年ぶりだっけかな……。

親に撫でられるのが恥ずかしくて自分から反抗し始めたんだが、たまには悪くねえな……。

「ただ一人でこの世界に迷い込み、孤独だった僕がその感情に潰れずに今まで生きてこられたのは、ジャツカルさんや十代達、それにあまり認めたくないけどこの悪魔娘が居てくれたおかげさ。そんな彼らを犠牲にするような真似をしてまで目的を果たすだなんて恩知らずな事はできない。己が欲望のために落ちるところまで落ちたアంతタとは違うんだよ」

こいつらが言い合う「元の世界」というのがどういった意味で使われているのか俺にはわからねえ。でも、彰が自分の大切なモノを捨ててまで俺達を守ろうとしてくれていることは言葉の端から伝わって来たんだ。

はっ、中々良い漢気おとこぎじゃねーかよ。それでこそ俺の見込んだ男だ。

「それに大切な人を守るのは男の役目ってやつさ」

彰がこちらを見ながらそう呟くのが聞こえてしまった。

ポツと顔に血が上ぼるのを感じる。

でもアイツにそれを悟られるのなんてムカつくから俺は気絶して
るふりを続けた。

第27話 前哨戦（後書き）

主人公の心情を語る上で、今までの話の中で仲間との描写が少なすぎだと後悔。これが見切り発車の恐ろしさ。そこらの閑話を後付的に挿していけたらいいなと思っています。

第28話 三幻魔（前書き）

これまでで一番難産だったかもしれないです。

三幻魔の効果はアニメ効果を採用させて頂きました。どうかご了承
ください。

第28話 三幻魔

十代 side

七星門の中心で影丸と彰が向かい合う。

互いにデュエルディスクを展開し、デュエル前特有の緊張感が場を支配している。

「さあ、闇のデュエルを始めようか・・・」

「デュエル決闘！！」

先ず動いたのは彰だ。

「僕のターン！手札よりクリッターを守備表示で召喚！」

《クリッター》 ATK/1000 DEF/600

「カードを1枚セットしターンを終了」

「私のターン。私は畏カードを3枚セット・・・」

「この男、本当にデュエルしたことがあるのか？」

万丈目が思わずそう呟いた。

「え？どういうことですか？」

「伏せカードをセットするのにわざわざ罠か魔法が宣言する必要はない」

翔の疑問には三沢が答える。そう、影丸の行動が不可思議なのは俺も一緒だ。

「だがこれこそが幻魔を呼び出すのに必要な条件なのだよ。一之瀬、貴様が大口叩いた幻魔の力、すぐにも見せてやる。私は3枚の罠カードを生贄に出でよ！第一の幻魔、神炎皇ウリア！！」

目の前に聳え立つ火山から突如火柱が上がり、紅に染まった一匹の龍が業火の中より現れた。前に教科書で見た遊戯さんの持つ三幻神の一体、オシリスの天空竜を思わせる赤き身体。

あれが三幻魔の内の一匹、神炎皇ウリアか！

（兄貴、兄貴！アイツマジでヤバいのよぉ〜！）

万丈目の周りでオジヤマイエローの精霊が騒ぎ始める。ハネクリボーも先程から警戒を解いていない。

相当にヤバいモンスターってことか・・・。

「ウリアの特殊効果発動。トラップ・ディストラクション！！」

ウリアの口より発せられた奇怪な音波が彰の場の伏せられた罠を破壊した。

「三幻魔に罫は通用しない。通用するのは発動ターンの魔法のみ。そしてウリアの攻撃力は墓地の罫カードによって決定する。私の墓地にある罫カードは3枚、よってウリアの攻撃力は3000!」

《神炎皇ウリア》 ATK/0 DEF/0 ATK/3000

罫カードが効かない上に攻撃力3000!?

「ウリアよ、その雑魚を焼き尽くせ!ハイパーブレイズ!」

今度は先程の音波とは違う、紅の火球だ。

しかしその威力は大地をも溶かし、彰のモンスターも一瞬で蒸発するほどの威力。

「クリッターがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下のモンスター1体を手札に加える。僕が選択するのは地獄のツアーガイド!」

「私はこれでターンエンドだ」

「僕のターン。手札より地獄のツアーガイドを召喚!」

《地獄のツアーガイド》 ATK/1000 DEF/600

彰の場に現れたのはあの赤毛の少女だ。本当にカードの精霊だったんだな……。

なんというか仕草や行動がすごく俗っぽい感じがするのは気のせいだろうか。

「ツアーガイドが召喚に成功した時、自分の手札またはデッキからレベル3の悪魔族モンスター1体を特殊召喚できる！」

《ダーク・リゾネーター》 ATK/1300 DEF/300

「僕はレベル3地獄のツアーガイドとダーク・リゾネーターをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！」

彰の場の2体のモンスターが光となり渦を巻き、地面に魔法陣を描く。

一体なんなんだこれは！？

「エクシーズ召喚！現れる ナンバーズ No・17 リバース・ドラゴン！」

描かれた陣から光が爆発し、6枚の翼を持つ蒼いドラゴンが現れた。その角には意味ありげに数字が掘られているのが見える。

《 ナンバーズ No・17リバース・ドラゴン》 ATK/2000 DEF / 0

「エクシーズ召喚！？彰！なんだよそれ！」

「エクシーズ召喚。それは複数の同レベルモンスターがフィールドに存在する場合に、融合デッキよりそれを召喚条件に表記されたモンスターを特殊召喚する召喚法。さながら場と同レベルのモンスターを複数揃える必要があるけど、融合の魔法カードを必要としない融合召喚さ」

聞いたことも無い召喚方法。万丈目や三沢、明日香はおるか、カイ

ザーヤクロノス先生、鮫島校長すら驚いた顔をしている。

すっげえ！こんな時なのにワクワクしてきたぜ！

あの影丸が言っていた異世界のデュエリストってまさか本当に彰は別の世界から来たって事なのか！？

「エクシーズ召喚の素材となったモンスターは墓地へはいかずオーバレイユニットとしてエクシーズモンスターをサポートする！」

あの蒼い竜の周りには2つの光の球体が、モンスターを守るかのように旋回している。

「更にリバイス・ドラゴンの効果！1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で攻撃力を500ポイントアップさせる！」

《ナンバーズ No. 17リバイス・ドラゴン》 ATK/2000 2
500

リバイスドラゴンが光の球体を喰らい、攻撃力が増加する。でも・・。

「しかしウリアの攻撃力は3000！貴様のモンスターでは太刀打ちできぬ」

「だから僕は罨カードを発動させてもらいますよ」

「何を言っている、貴様の罨は先程破壊された。さらにウリアに罨カードは効かぬぞ」

影丸の言う事は悔しいが最もだ。

しかし、彰は全く余裕の表情を崩さない。どうする気なんだ？

「墓地にある罨カード、スキル・サクセサーの効果を発動！墓地に存在するこのカードをゲームから除外することで、自分フィールド上のモンスター1体の攻撃力をエンドフェイス時まで800ポイントアップさせる！」

《ナンバーズ No・17リバイス・ドラゴン》 ATK/2500 A
TK/3300

「墓地から罨だって!？」

「墓地からの発動でウリアの妨害を受けず、さらに自軍のモンスターを強化するカードか。そうそう止められるものじゃない」

カイザーの解説にみんながなるほどと得心がいったようだ。
かく言う俺もその一人なんだけどな。

「バトルフェイズ！リバイス・ドラゴンで神炎皇ウリアに攻撃！バイス・ストリーム!!」

リバイスドラゴンの口から放たれた蒼き光線がウリアの腹を貫いた。

影丸LP4000 3700

「カードを1枚セットし、ターン終了です」

《ナンバーズ No・17リバイス・ドラゴン》 ATK/3300 A

「やったぜ彰！これで三幻魔の1体は倒れた！」

「やっぱアイツはすげえ。」

俺は彰なら幻魔にすら負けないんじゃないかとそう思えるんだ。

「だがこの私のターン、お前は三幻魔の力の前に絶望を味わうこととなる！ドロー！」

「私は神炎皇ウリアの特殊効果を発動！手札の罾カードを墓地に送ることによって墓地のウリアを蘇生させる！」

「自己再生能力を持つモンスターだって！？」

思わずそう叫ぶ。何度倒そうとも蘇るなんて・・・これが幻魔の力ってやつか！！

「フィールド魔法、失樂園を発動！」

一瞬にして周りが寂れた荒野に移り変わる。

すごく虚しい、生命を感じさせないほど廃れた大地。

「このカードはフィールド上に神炎皇ウリア、降雷皇ハモン、幻魔皇ラビエルのいずれかが存在する場合、1ターンに1度、私は2枚のカードをデッキから手札に加えられる！」

「私は場に3枚の魔法カードをセット」

「またアイツ伏せたカードの種類を宣言した！」

翔の言葉に皆が警戒を強める。

来るのか・・・！？2体目の幻魔が・・・！

「見るがいい、これが第二の幻魔！フィールドの3枚の魔法カードを生贄に、出でよ降雷皇ハモン！！」

生贄にされたカードが凍りつき結晶となりて大地を穿ち、巨大な水晶が隆起し過剰な放電現象により砕かれる。視界を覆う白い蒸気が咆哮による衝撃で吹き飛ばされ、巨大な幻魔の姿が露わとなった。

《降雷皇ハモン》 ATK/4000 DEF/4000

「いけ降雷皇ハモン！喰らえ、失楽の霹靂！！」

ハモンから放たれた雷が彰のリバイス・ドラゴンに直撃する。

彰 LP4000 2500

「更にハモンの特殊効果発動！ハモンはモンスターを破壊した際、相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える！受けるがいい、地獄の贖罪を！！」

「くっ・・・」

彰 LP2500 1500

「彰！！」

「彰君！」

あっという間に戦局を逆転されてしまった。これが第二の幻魔、降雷皇ハモン！

（兄貴、ア・・・ニキ・・・助けて・・・）

「おじゃまいエロー！」

万丈目の言葉によって、みんなが異常な事態に気が付いた。

「デッキのモンスターが弱ってしまったているわ」

周りを取り囲んでいた悪魔の様子もおかしい。上級の悪魔はまだ耐えているが、下級のモンスターは膝をつきいかにも苦しそうな呻きをあげている。

「今頃気付いたか。今、闇のデュエルを行っている一之瀬以外、既に幻魔がフィールドに現れた時から、お前たちのモンスターの生気を吸い上げている！」

「そうか、幻魔は他のモンスターの生気を吸い取り、力にするモンスター！」

「だからこそ封印されたカードなのか・・・」

影丸の言葉に対してカイザーと三沢がこの事態を把握する。

くっ、俺のヒーロー達もいつもより明らかに元気がないのが伝わっ

てくる。

「だが、私の三幻魔を操る力は未だ完全ではない。この結界の中でなければ三幻魔を操る事は不可能。三幻魔を操るには精霊を操る力が必要不可欠なのだ。当初の予定では遊城十代が我が贄あつたが、一之瀬・・・貴様も遊城十代と同程度の力を保有しているようだな」

俺を興味深げに見ていた影丸の視線が、対戦相手である彰に移る。

「私が闇のデュエルに勝利しお前の力を吸収した時、三幻魔は結界から飛び出し、世界中に宿るデュエルモンスターの精霊を喰らい始める！そして三幻魔は私に永遠の命を与え、私はこの地上で神となることができるのだ！」

「そんな・・・！じゃあ彰の敗北はデュエルモンスターの消失を意味するっていうのか!？」

俺の言葉を無視し、笑い声をあげる影丸の姿に変化が生じていく。幻魔が吸収した精霊の力が影丸に流れ込んでいるんだ!!

「みなぎる・・・みなぎるぞ！力があああああつ！」

影丸が入っていた金魚鉢のような容器に罅が入り、すぐに粉々に割れて中の液体が流れ出る。そしてそこから腰布だけを付けた筋骨隆々な男が飛び出してきた。

「そんな馬鹿な！影丸理事長は百を遙に超える御高齢のはず・・・」

「そんなじーさんには見えないぞ」

鮫島校長から伝えられた情報に思わず万丈目がそう答える。
確かにアイツはそんな年には見えない。

「そうか・・・あれは理事長本人がデュエルモンスターの生気を
吸い取り、若返った姿！」

「そんなクレイジー！」

「ヤバい、ヤバいよ兄貴！彰君のドラゴンがやられた上に幻魔が
2体も・・・」

翔が泣きついてくる。確かに厳しい状況だ。

「うるせえぞ水色チビ」

いきなり俺の横からキツイ言葉が発せられた。

「え〜っと、確かジャツカルだったか？いつ気が付いたんだ？」

「それはきつ・・・いや、今だ、今！というかそんなのどうでもい
いだろうが！」

なんだよ。心配しただけなのに。

「水色チビって僕のことっすか？」

「いいから黙って見てろ。アイツは普段なよなよして頼りねえけど、
やる時はやる男だ」

翔の言葉は完璧に無視してジャツカルが立ちあがり、前を見据えて

仁王立つ。

その背中には微塵の動揺も見えない。

きつと彼女は彰が絶対に勝つと信じている、彰を信頼しているからこそそのように振舞うのだろう。

そうか、そうだよな。

仲間を信じる事。

これもまた仲間との絆があるからこそできること。

だから俺も信じるぜ。

お前なら絶対にこの状況をもひっくり返してくれるってな！

444

彰 side

「このターン、ウリアでとどめをさしたいところだが、ウリアは特殊効果で蘇ったターン、他のモンスターが自分の場にいる時攻撃できない。私のターンは終了だ！」

まあ攻撃されても大丈夫だったけどね。

「エンドフェイス時にリバーズカード、速攻魔法終焉の焰を発動！自分フィールド上に黒焰トークン2体を守備表示で特殊召喚します。」

ただしこのトークンは闇属性モンスター以外の生贄召喚のための生贄にはできない」

《黒焰トークン》 ATK/0 DEF/0 x2

「そして僕のターン。僕は手札からモンスター1体を墓地送って魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！手札またはデッキからレベル1のモンスター1体を特殊召喚する！デッキよりレベル・ステイラーを特殊召喚」

《レベル・ステイラー》 ATK/600 DEF/0

「三幻魔、その力は三幻神にも匹敵するものと言われている。しかしその神が暴走した時の事を危惧したデュエルモンスターの生みの親、ペガサス・J・クロフォードが抑止力として作成に至ったカードを知っていますか？そのペガサスさえもその強大な力を恐れ、製作を途中で止めた経緯すらある、そんなカードを・・・」

「貴様・・・まさか・・・！」

「僕は場に存在する三体のモンスターを生贄に捧げ、出でよ恐怖の根源！邪神ドレッド・ルート！！」

周囲を囲む悪魔が騒めきだす。

まるで恐怖の波動に共鳴するかのように。

己が種の神を迎合するかのように。

辺りが漆黒の闇へと塗り替えられ、今ここに強大な威圧感を撒き散らし、豪快な地響きを立て悪魔の巨神が降り立った。

《邪神ドレッド・ルート》 ATK / 4000 DEF / 4000

「ドレッド・ルートがフィールド上に存在する限り、このカード以外のフィールド上のモンスターの攻撃力守備力を半減させる！」

《神炎皇ウリア》 ATK / 4000 DEF / 0

《降雷皇ハモン》 ATK / 4000 DEF / 4

000 2000

ドレッド・ルートは恐怖の名の元フィールドに世界を支配するのだ。

ただ邪神の肩にちょこんと座っているガイドさんのせいで台無しになっっているけどな。

というかお前勝手に出てくるなよ！

そして手を振るんじゃない！振り返さないからな僕は！

「バトルだ！邪神ドレッド・ルートで降雷皇ハモンに攻撃！ファイア
ーズノックダウン！」

邪神の一撃は弱体化した幻魔なぞ容易く粉碎する。

「くっ、貴様あああああつ！」

影丸 LP 3700 1700

「許さん・・・許さんぞ！私のターン、ドロー！失樂園の効果によりデッキより2枚のカードを手札に加える！」

「魔法カード天よりの宝札！互いのプレイヤーは手札が6枚になる

ようにカードを引く」

僕も嬉しい恩恵だけど、嫌な予感がプンプンするぞこの流れ。

「私は死者蘇生を発動！墓地より蘇れ、降雷皇八モン！」

《降雷皇八モン》	ATK / 4000	2000	DEF / 4000
----------	------------	------	------------

「そして魔法発動！幻魔の殉教者！場にウリアと八モンが居る時、手札2枚を墓地に送り、幻魔の殉教者トークンを3体特を殊召喚する！」

《幻魔の殉教者トークン》	ATK / 0	DEF / 0	x 3
--------------	---------	---------	-----

「今ので畏カードが2枚も墓地に送られたことで、ウリアの攻撃力が2000もアップしてしまう・・・！」

解説ありがとう、三沢。君の出番はもうないよ。

《神炎皇ウリア》	ATK / 2000	ATK / 3000
----------	------------	------------

「許さんぞ！幻魔を虚仮にした罪、その身を持って償って貰おう！フィールド上の3体の幻魔の殉教者トークンを生贄に最後の幻魔を召喚する！出でよ！そして最強の姿を現せ！最強の幻魔、幻魔皇ラビエル！！」

雷が奔り、曇天の空が割れる。上空より飛来した光の柱が視界を覆う。激しい風圧が襲いかかり、その暴風音と混ざりながらも人の恐怖心を煽る咆哮が確かに聞こえてくる。

目を開けた僕らが目にしたものは猛り狂う嵐のような絶対強者の御姿。

最後にして最強の幻魔の皇。

《幻魔皇ラビエル》 ATK4000 DEF/4000 AT
K/2000 DEF/2000

「ふふふっ・・・漲る、漲るぞ!!」

ラビエルが召喚され、フィールドに3体の幻魔が揃ったことによつて、デュエルモンスターの生気を吸収するスピードが速まる。影丸理事長の姿はそれに伴い、さらに若返っているようだ。

「ラビエルの効果発動!1ターンに1度だけ、自分フィールド上のモンスター2体を生贄に捧げる事で、そのモンスターの攻撃力をこのターンのみラビエルに加えることができる!私はウリアと八モンを生贄に捧げる!」

《幻魔皇ラビエル》 ATK/2000 ATK/4500

「いけラビエル!邪神ドレッド・ルートを粉碎しろ!天界蹂躞拳!」

ラビエルの拳がドレッドルートの胴に風穴を開け、邪神が打ち倒される。

彰LP1500 1000

ガイドさんはドレッドルートがやられる瞬間に飛び移ったようで無事な御様子。

しかし自身の乗り物を破壊され、若干不機嫌になっているなあ表情は。

「我が最強の幻魔の前では邪神すらも及ばぬぞ！」

「痛々なあもう……。それに握っている札が神1体だとも思っていましたか？ 僕が戦闘ダメージを受けた時、手札に存在する古代エジプトに伝わる悲劇の魔物の特殊召喚条件が満たされましたよ」

地面より湧き上がるは太古の石板。ウヘジュ

その石板に封印されし邪悪な魔物が瘴気を撒き散らしながら引き摺り出でる。

《トラゴエディア》 ATK/? DEF/?

「トラゴエディアは自分が戦闘ダメージを受けた時、手札から特殊召喚できるカード。そして攻撃力、守備力は自分の手札×600ポイントアップする。」

《トラゴエディア》 ATK/? DEF/? ATK/3000
0 DEF/3000

「だが貴様の場にモンスターが召喚、特殊召喚されたとき、ラビエルの特殊効果によって私のフィールドに幻魔トークンを守備表示で特殊召喚する！」

《幻魔トークン》 ATK/1000 DEF/1000

「まだ私のターンは終了していない！手札から罠カードを墓地に送り、ウリアを蘇生させる！」

墓地より火柱が上がり、再びウリアが降臨する。

《神炎皇ウリア》 ATK/7000 DEF/0

「邪神を失った貴様にもはや対抗できる術なぞ存在せぬぞ！私のターンを終了する」

「僕のターン、ドロー！」

《トラゴエディア》 ATK/3000 DEF/3000 A
TK/3600 DEF/3600

「トラゴエディアの効果、1ターンに1度、手札のモンスター1体を墓地に送る事で、そのモンスターと同じレベルの相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してコントロールを得る」

「なっ！？まさか貴様……！しかし神と同レベルのモンスターなどそうそういるはずも……」

「まさか三幻神の抑止力として作られたカードがたった1枚だけでも思っているわけじゃないでしょう。手札より邪神イレイザーを墓地に送る事によって同じレベル10のモンスター、神炎皇ウリアのコントロールを奪わせてもらおうよ」

「くっ、だが貴様の墓地には罨カードは存在しない！よってウリアの攻撃力も0だ！」

《神炎皇ウリア》 ATK/0 DEF/0

別に攻撃力などいらぬよ。僕が欲しいのは贅さ。

「墓地に存在するレベル・ステイラーの効果を起動。このカードは自分の場のモンスターのレベルを喰らうことよって墓地より特殊召喚できる！ウリアのレベルを一つ下げ、墓地よりレベル・ステイラーを守備表示で特殊召喚！」

《レベル・ステイラー》 ATK/600 DEF/0

「正直ドレッド・ルートを戦闘破壊されるとは思わなかつたよ。伊達に三幻神に比肩すると謳われたわけじゃないか。でも・・・」

邪神はそれすらをも凌駕する。

「僕は場の3体のモンスターを生贄に捧げる！邪神は再び貴方の眼前に示現する！降臨せよ、邪神アバター！！！」

天より降下せしは黒き球体。

想起せしは暗黒の太陽。

しかしそれを見る者は否応なく理解させられるだろつ。この球体よ^{プレッシャー}り放たれる異様な威圧感、そして己の負の感情を映し出されるような忌避感を。

《邪神アバター》 ATK / ? DEF / ?

「邪神アバターは場に存在する如何なるモンスターをも凌駕し、永遠に世界に君臨し続ける！このカードが召喚に成功した場合、相手ターンで数えて2ターンの間、相手は魔法、罫を発動できない！そしてこれこそが邪悪の化身と謳われる所以、アバター！メタモルフォーゼせよ！」

黒い球体が渦を巻き、飛散しやがて再び形成される。そこに御座すは先の球体の姿とは似ても似つかぬ幻魔の皇。全てが漆黒に覆われた幻魔皇ラビエルの複製。

《邪神アバター》 ATK / 4100 DEF / 4100 (幻魔皇ラビエル・ベース)

「邪神アバターの攻撃力、守備力はフィールド上に存在するアバターを除く、攻撃力が最も高いモンスターの攻撃力+1000ポイントの数値となる！」

「場の最強モンスターを上回る永続効果だと!？」

アバターの前では数値上の攻撃力など無に等しい。例えそれが神であるうともだ・・・。

「手札より装備魔法ニトロユニットを発動！このカードは相手フィールド上モンスターにのみ装備可能なカード。装備モンスターを戦闘によって墓地に送った時、装備モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！このカードを幻魔皇ラビエルに装備！」

ラビエルの胸に巨大な爆弾が植えつけられる。

幻魔は罨の効果は無効化される。しかし、神への魔法効果は1ターンのみ受け付ける。

「ブチ噛ませ！あきらあああああああつ！！！」

背後よりジャツカルの姐さんの吠える声が聞こえる。

「いくよ理事長。これで最後だ！邪神アバターで幻魔皇ラビエルに攻撃！」

僕はその声に答えるよう、そして負けぬよう叫ぶ。

「天界 蹂躞拳！！」

アバターの拳がラビエルの胸を穿ち、ラビエルに装着された爆弾が強烈な光を放ち爆炎が僕らの視界を覆い尽くした。

「ああっ！？うわあああああああああああああああああああああああああ
ああああっ！！！」

影丸LP1700 0

「馬鹿な、三幻魔が・・・敗れた・・・だと!?」

影丸理事長の身体から奪われた精霊の力が光の粒子となり解き放たれ、あるべき場所へと帰って行く。

「あああああああつ！！うわあああああああああああつ！！！」

「理事長！」

精霊の力が全て回帰すると、そこにはよぼよぼな老人が力なくへたり込んでいた。

「なんだか青春を取り戻したかったとかわけわからん釈明をしている影丸は十代に任せよう。とりあえず後処理的な面倒事は皆に任せて僕はこの場を逃げる算段をつける。」

「いやあ一件落着、めでたしめでたしってことで。ということではこれで！」

「おい」

ガシリと掴まれる肩。

ミシミシと軋む骨。

「おつかしいなあ・・・、十代と影丸理事長以外は皆僕より結構離れたところにいたはずなんだけどなあ・・・。」

人ってのは窮地に陥ったとき、こんな風に諦めの境地に至るのか。いやはや勉強になったよ。

「背後に御座すはニコニコ笑顔なのに三幻魔を屠った邪神をも超えるプレッシャー威圧感を放つ閻魔が・・・。」

「いや本当に悪かったと思っていますんですすみませんゴメンナサイ仕方のない事だったんですよ僕だってやりたくてやったわけではなくてですね、あそこの爺が全ての発端で僕はあくまで被害者という立場で何が言いたいかというこの件で僕が責められるのは理解で

きますけど情状酌量の余地があつたりなかつたりするのは当然の権利だと思わなくないですかと全人類の皆様に問いたい気分にはなりませんか？なりませんよね！そうですね！僕が悪いですよね！本当に心配をお掛けして申し訳ありませんでした！！」

即座に土下座の姿勢となる。

この間僅か数秒の事。速さは力だつてどこかの兄貴も言つてた。

そして来るべく閻魔ジャッカルの裁きの時を待つ。

「もういい……」

「え？」

どういうことだ！？聞き間違い？それとも天変地異の前触れなのか！？

「だからもういいつつつてんだコラ！」

そう言いつつ頭にチョップが飛んできた。

避けられなくもないスピードだったけど甘んじて受ける。

「おめーにも色々と事情があつて仲間を守るためにやったってなら仕方ねーだろうが」

ごめん、僕は姐さんの事を誤解していたようだ。こんな大事を「仲間のため」ということを理由に不問に付してくれるなんて「ただしあの爺が言つてた事は後で全部聞かせてもらうからな」……。

うん……。

ですよ。

「それは俺達も聞きたいぜ。なあみんな」

「そうだな。影丸理事長との会話もそうだが、あの見たこともない召喚方法。興味が在る」

「そうっすよ！僕達に秘密事はなしっすよ彰君！」

「そうなんだなあ」

十代を皮切りに三沢や翔、隼人なんかも好き勝手言ってくる。

明日香や丸藤先輩なんかも目で訴えているのが辛いよ。

こんな時は彼女を呼ぶしかないだろう。

助けてガイドさ〜ん！！

そんな僕の心の叫びは虚空へと消え去った。

あの悪魔娘、事が終わったからってさっさと消えやがったらしい。少しばかり期待した自分はなんて愚かなのだらうと心の中で嘆く。

「分かった、わかりましたよ！でも今日は疲れているのでまた後日！後日にしてくれ。今日はもうふかふかのベッドで寝たいんだよ」

「ていうか彰なんかキャラ変わってないか？」

「つつさいなあ、こつちが地なんだよ。いちいちめんどくさいし、もう演じる必要がなくなったしな」

「演じる？」

「まあ、今となつてはどうでもいいことさ。戯言と思つて聞き流しててくださいよ」

「なんだよそれ。まあいいけどさ！」

この世界に来てからずっと考えていた事がある。

僕はいずれ元の世界に帰るべき存在だ。

ならばこの世界で友人を作つたところでどうなる。いずれ来る別れの時に辛くなるだけだ。

繰り返される自問自答の末、結局僕はそれを選んだ。

だから

僕は他者と距離を取りたかつた。

あまり親しくしないで欲しかった。

一定の距離に踏みは居られぬよう、わざと他人行儀な喋り方をした。

十代や三沢達と関わっていたのだから彼らがこの物語を象徴する主人公サイドの人間であり、僕程度では彼らの強固な絆の中には入れず適度に距離を置いた関係が築けるだろうと算段していたからだ。

なんて汚い、打算的な奴なんだろう。
そんな自分に嫌気が差したこともあった。
それも仕方ない事だと割り切った。

僕の誤算はそんな僕のパーソナルサークルなど楽々踏み砕いて進入してきた人がいたことさ。

勝手に人の中に入り込み傍若無人な振る舞いをする彼女。

距離を置こうとしても、そんな脆弱な壁を全てを叩き壊して近づく彼女。

初めは一体何がしたいんだろうと思った。

何故わざわざ僕なんかの所に来るのか疑問が尽きなかった。

だからある日聞いてみたのさ。何故僕なのか。

そうしたら彼女は僕を馬鹿にしたような顔をした後こう宣ったのさ。

「はっ？そんなもん気に入ったからに決まってるんだろ」

予想外の解答に啞然とした僕の背中をバシバシ叩き、彼女は颯爽とその場を去って行った。

全く、そんなの対策の取りようがないじゃないか。
彼女の背を目で追いながら心の中でそう愚痴る。

なんだがやりきれない気持ちになった一方、こんな僕という存在を無条件で好いてくれた事がすごく嬉しかった。

そしてこう悟ったのさ。

いずれ別れが来るといっのはどの世界でも一緒だ。

昨日会った友人が事故で亡くなるかもしれない。

突然遠方に引越しとなり会えなくなるかもしれない。

単純に喧嘩してそのまま関係が終わることもあるだろう。

自分自身が存在しなくなることだって有り得る。

だったらいずれ元の世界へ帰ろうとしている僕でも、心から信頼できる友人というのを作ってもいいのかもしれない。

そう思えた時世界が変わった。

いや、変わったのは僕の考え方んだけど、僕にはそう思ってしまうほど世界の色が変化したように見えたのさ。

彼女のおかげで僕はこの世界にも愛着を持ち始めてしまった。

もうこの世界がどうでもいいなんて割りきれなくなってしまったんだ。

今回の事件はまさに僕の考えが、いや僕自身が変わる切欠として相応しいものだったのかもしれない。

今まで積み上げてきたものがそうそう変わる事などないだろうから、大変なのはむしろこれからのだろうけど。

「勝手にいなくなったことは許してやったが、この俺や紫を心配させたことは許してねーからな」

うん、これもまた大変なことなんだよ……。

僕が変わるために必要なことなんだ。そう思い込むんだ！

「あの……、その侘びは分割払いとかにできないっすかね？いくらなんでも背後に修羅を纏った姐さんを相手にすると地獄を見るっというか、そのまま地獄に突き落とされそうなんですけど……」

その閻魔^{ジャッカル}は笑顔で首を横に振る。

審判は下った。

僕には非情なる結果で……。

来世では天国へ逝けることを願った男の行く末を知る者はいない。

第28話 三幻魔（後書き）

イレイザーは犠牲に（ry

何使うか迷ったけど、せつかく悪魔をここまで出したのならそれをプッシュしていこうという事に。夜行デッキでバルバロス混ぜればジャッカルさんとの接点もつくれたのかなと思ったりもしました。

とりあえず十代達に異世界の者と強く認識させるためにシンクロかエクシーズは取り入れる予定だったので、せつくなのでガイドさんも彼らにお披露目しておくことに。

アニメのウリアは罨しか破壊できないんですよ。その分他が鬼強化ですが。

ラビエルの攻撃力上昇効果も若干強化。

ハモンなんていなかった。

ドレッドルートの半減効果は他のカード効果の処理の後適用するためなんだか面倒くさい事に。

ラスト部分が未だ納得しきれていないので、もしかしたら修正するやもしれません。

秘話 イフルートエンド（前書き）

リアルが忙しく、これからも更新が遅れてしまいそうです…。

そんなの待ってやれねーよという人達用に、初期の頃考えていた最終話を書いてみました。

あくまでifulrootなので、本編の続きはこれとは別に更新していく予定です。宜しくお願いします。

秘話 イフルートエンド

影丸理事長との対戦を終え、皆の追求をとりあえず保留にしておらうことで問題を先送りにしたその後、鮫島校長とクロノス教諭は影丸理事長に肩を貸し学園へと戻って行った。

残ったメンバーはやっと今回の三幻魔事件を収束できた事に安堵の色を見せ、喜びを分かち合っている最中だ。

僕はジャツカルさんの説教によってぐったりしているが、先程束の間の休息時間を頂き、大の字になって倒れている最中だ。

もはやこのまま睡眠に入りたい。

そんなことを思っていた時の事。

僕の方にジャツカルの姐さんから何かを放られた。

なんぞこれ。

「これは……ノートですか？」

「おめーが休んでた時の分のノートだ」

僕が休んでいた時の授業ノート？

あのおぼろなジャツカルの姐さんが授業ノートを書いたのか…？

うど

だ　と　こ　う　い

これは何かの罠か？

まさか姐さんの皮を被った他人なのだろうか。

いや、何者かに憑かれている可能性も危惧しなければならない。

確かに渡されたノートはすでに2学期後半、というかもうすぐ進級という時期にも関わらず、そのノートは未だ真新しくほんの数ページしか使われていない。

ただここ数日の日付だけはしっかりと記載されており、授業内容も粗雑な字ながらも頑張って書き込んだのだろうなと思わせる筆跡が見られた。所々不自然に内容が飛び飛びであったり、涎が垂れたのであろう形跡も発見されたが、それはまあ御愛嬌だろう。

「有難うございます。なるだけ早く返します。じゃないと姐さんが勉強しませんからね」

「うっせ、俺は別に勉強なんてどうでもいいんだよ」

今のところ彼女は全ての筆記テストで補習の餌食となっているからな。僕にやらせるといふ処理手段を得てからは補習も苦にならなくなったのが原因の一つにあげられるのだろうけど、学生という本分を忘れぬようこつこつという所で少しずつ軌道修正を計らなければと思っ

ているんだ。

「ところで彰、あれがお前の精霊なのか…？」

十代がそう言い指差したその先。

七星門がせり上がった時にできたクレーターを中心。

「そうだけど…何やってんだアイツ」

うちの悪魔娘の奴がいつの間にもやらそこにしゃがみこんで何かしている。

彼女が拾い上げたのは先程影丸の指から滑り落ちた指輪。

無論それにも闇のアイテムであることを示す特徴的な目の刻印が見られるものだ。

ガイドはそれを自身の指に嵌めると、パチンと指を鳴らして自前のバスを呼び出した。

正直全くもって良い予感がしないのでなにかしでかす前に取り押さえるべく彼女の元に向かうと、何をする暇もなく襟首をぞんざいに掴まれ、バスの中へと放り込まれた。

「ちよっ！？いきなりなにすんだ！」

予想外の出来事に驚きの声をあげる。

僕の抗議の声などまるで無視してバスのドアがブザー音を鳴らしながら閉まり、急アクセルで発進する。

その場に居た十代達は突然の出来事に対応できず、茫然と突っ立っていたが、バスが発進したことにより意識が戻ったのか僕に向かって叫ぶ。

「どこ行くんだよ彰！」

知らんよ。ガイドに聞いてくれ。

発車したバスが初速を稼ぐと、目の前に忽然と現れた次元の裂け目に躊躇いなく突入する。

僕が最後に目にしたのは、突然の事に目を丸くした皆の顔だった。

~~~~~

これは…。

以前現実世界からこちらの世界に来た時には、僕はぐっすり就寝中であり気付いたら着いていたため、こうして意識がはっきりしている時に狭間に入るのは初めての経験だ。

視界が歪み、平衡感覚がおかしくなるような感覚に陥る。

いや、視界の問題じゃない…これは空間自体が歪な状態なのか…？

幼少の頃に行った遊園地の鏡を用いたトリックルームなんて比じゃないな。長時間こんな所にいると脳がおかしくなりそうだ。今もバ

ス内の通路が螺旋状に見え、窓の外に至ってはおおよそ普通の生活をしていれば一生お目にかかれぬであろう不可思議な光景が広がっている。

白銀に輝くカーテンのような靄を突き抜けると、そこはまさしく世界の狭間と言つべきなのだろうか……。現在走っている立派な道とはお世辞にも言えない、走つた後は崩れ去るのではないかと思つほどの細い経路。両側面は凄まじい量の濃霧が立ち込めており、目を凝らした程度では到底その先を拝むことなどできそうにない。

若干不安定な足場に慣れそんな風に外を眺めていた僕は、突然背後から何者かに組み伏せられた。

その者は僕の肩に顎を乗せペロリと舌舐めずりをする。

「カミューラ！何故お前がここに！？といつかなんで元の姿に戻れているんだよ！？」

そんな僕の疑問など彼女は全く介せずいきなり首筋に牙を突き立てられる。

「痛っ！」

首に鋭い痛みが走る。

カミューラは僕の血を抜き取ると、僕はもう用済みとばかりにあっさりと解放する。

抜き取った血を手持ちの試験瓶の中に抽出し、しっかりと栓を閉めた。

「お前・・・何するんだ・・・！」

噛まれた部分を押さえながらカムイラと距離を取るよう後ろに下がり、睨みながら問う。

「私はただあの小娘との取引に応じただけよ。私の身体を人形の状態から戻すことと引き換えに、あの小娘の計画を手伝うっていうね」

計：画：？

状況が全く理解できない。

カムイラはその試験瓶をガイドに投げ渡し、受け取ったガイドは窓を開きバスの屋根に上って行く。

そんなガイドを追おうとするが、カムイラの一言で僕の足は止まった。

「貴方、本当に異世界から来たらしいわね」

それと今回の事に何の関係あるんだ。

「まず初めにこれだけははっきり言っておくわ。」

私は私の一族や居場所を理不尽な理由で奪い取った人間など大嫌い！

己が欲望を満たすために罪なき者達を排斥し、自分たちの恐れる者達を理不尽に排除し、それを為した後、今度は同士で争い始める愚かな種族。

そして無論その毒牙は我々誇り高きヴァンパイア一族にも及んだわ。  
中世ヨーロッパにおいてヴァンパイア族は全盛を誇り、誇り高き一族として孤高に生きていた。しかし人間どもは我々を怪物と呼び、その存在すら許さなかった！

謂れなき誹謗中傷を大義名分にし、我らの一族を根絶やしにしたのだ！

だから私は人間が嫌い、大嫌い、死ぬほど嫌いだし、これからもずっと嫌いなまま。

当然人間である貴方のことも嫌いだわ。

特に今回私の野望が挫かれる原因となったのは偏に貴方のせいだとも言えるんだからさらに憎々しく思っているのは解るわよね」

いきなり何なんだ。コイツは何が言いたい。

「でも……理由もなく唐突に家族や仲間、住み慣れた場所を失い、独り見知らぬ地に放り出されるその孤独……認めたくないけどそれは私にも理解できる。

私も同じだから……。

理由もなく家族を奪われ、友を奪われ、慣れ親しんだ家も失い私は独りになった……。  
生きる希望を失い、縋る者も何もない私は棺桶の中で独り永遠の眠りにつくしかなかった……。

ヴァンパイア一族を復興させるといふ生きる目的を与えたのもまた人間だというのは中々に皮肉な事ね。

だけどそれが私に再び生きる活力を与えた。

再び夢を持つようになった。

ヴァンパイア一族の復興、それは古に奪われた私の大切なものを取り返せるかもしれない一抹の希望。

私が帰りたい場所は未だ取り返せていない。

だから私はこう思うわ。

帰るべき場所がまだあるならば貴方はそこに帰るべきよ」

でも今の僕には帰るべき手段が存在しないんだ。

一体どうやって僕に帰れというのか…簡単に帰れるなら疾つくの昔に帰っているさ！

カミューラは未だ混乱する僕の手を取り、軽々と屋根の上まで誘導する。

「貴方も知っているでしょう、あの小娘が事あることにぶらつき闇のアイテムを回収していたのを…」

今も僕らの立ち位置より遙か前方の方で、ガイドの奴が今まで収集してきたものをコトコトと音を立てながら並べている。彼女を中心

としたまるで儀式をするかのような規則性のある配置にはなんらかの意味があるのだろうか。

「それと今回の事がどう関係しているんだよ」

「闇のアイテムには元より空間を作り出したり、他空間への入り口を繋ぐ特性があるのよ。正確に言えば他空間との境界線を曖昧にし、互いに干渉し合えるようにしているんだけど、それはまあいいわ。我らセブンスターズとの闘いを見ていたのなら貴方にも何となく理解できる場所があるでしょう。例えば私の幻魔の扉も同じようなモノ。あれは闇の世界と現世を繋げる扉としても機能していたでしょう」

しかしそんなことで簡単に世界移動ができるなら、僕の世界とこの世界の両方でなんらかのアクションが起こっても不思議じゃない。事が露見したら流石に大多数の人の耳に入る大ニュースとして報道されるのは間違いない。

闇のアイテムは確かに珍しいものではあるが、この世界には数多く存在するのだ。そのような話が世に出回らないとは考えにくい。

ガイドも僕の世界とのリンクは本当にイレギュラーな事態だったと言っていたし、闇のアイテムを使用した程度でどうにかなると思えないんだけど…。

「三幻魔が一時的とはいえ復活したことによって、その影響が世界や精霊界の次元層まで及んでいるそうよ。そこにあの小娘が収集していた闇のアイテムを故意に暴走させ、共鳴させることによって力を無理やりに引き上げる」



共鳴…暴走…？

まさに今ガイドが先程指に嵌めた指輪に力を流し、それに呼応するかのように周りに設置したアイテムもカタカタと振動し始めている。そして辺りの空気が一気に重くなった。

「普通にやろうとしたら闇のアイテム複数程度じゃ他世界軸への干渉は難しいでしょうが、今はその次元層が一時的にでも三幻魔復活によって不安定になっている。そしてそこに共鳴、暴走させた力をつづければ次元層に穴を開ける事が可能かもしれない。貴方の血液は言わば貴方の世界へと層を繋げる道標のようなもの。適当に世界を繋げたところで貴方の世界に繋がるだなんて都合のいいことは起きないでしょうしね」

「でも闇のアイテムを暴走させるなんてこととして大丈夫なのかよ！？普通の闇のアイテムでさえ扱いを間違えると自分が闇に取り込まれ兼ねないほど危険なモノだっていうのに」

実際タイタンはそのように闇の力に溺れ、その身を滅ぼしたと聞いた。というより闇のアイテムと関わった者がそうそう都合良く目的を達成できるとは思えない。あれは得る力以上の代償を要求するものだという事は、これまでの経験でよく分かっている。

「大丈夫なわけがないでしょうが。相当にヤバい事だと思っわよ。少なくとも私は絶対にそんな事はしない。一族を復興するまで軽々に命を危険に晒すわけにはいかないわ」

「そんな！？じゃあイツはどうなるんだよ！事前に聞いていたお前なら止める事もできただろうがっ！！」

そんな危険な行為をさせるわけにはいかない！

カミューラに筋違いだと分かっている文句を投げつつガイドの元へ  
駆け出す…

その寸前で再びカミューラに取り押さえられました。

「それは私の知ったことじゃないわね。なによりこの計画を立てたのはあの子自身で、この役を選んだのもあの子よ。初めに言っただと私とあの小娘はあくまでただの取引相手。私に害が及ばぬ限り口を挟む気はないし、そもそもそお門違いの行為よ。なによりそれはあの娘の覚悟を穢すことになるわ。我らヴァンパイア一族は誇り高き一族と言っただはずよ。そんな無粋な真似はしないわ」

カミューラは若干非難と怒りを込めた眼差しでこちらを睨む。  
掴まれた肩に力が籠り僕の行動を制限する。

「それは…そうかもしれない…けど…」

「大体貴方は何が不満なのよ。元の世界に帰りたくないの？家族に会いたくないの？折角のチャンスをふいにするつもりなのかしら」

「でも…あいつを犠牲にしてまで…、それにこの世界でお世話になった人に何も告げず勝手にいなくなるなんて…」

「残念だけどそんな時間はないわ。幻魔が完全に復活していたならば話は別だったかもしれないけどね。この状況を作り出したのはむしろ貴方が原因とも言えるのよ」

言い訳じみた僕の言葉などカミューラによって一蹴されてしまった。

今までにないほど頭が混乱している。

どうすればいい…本当にこれでいいのか…？

これが千載一遇のチャンスだってことは良く分かったし、確かに元の世界には帰りたいさ。

だけど心のどこかに引っ掛かるものがあることもまた確かなんだ。

そう言う間にも着実にガイドの方は準備が進んでおり、共鳴し始めた闇のアイテムが鈍い黒色の光を放ち、彼女の周りを不気味に照らしている。振動が更に大きくなりバスはおるか周りの空間事態が揺れているようだ。

それに加えて前方から未だ嘗て感じた事がないほどの悪意の波動。心が揺さぶられ、己の弱い部分を曝け出される様な忌避感。身体の内芯から溢れ出る恐怖。

ヤバイヤバイヤバイ…。

本能が全力で警告アラートを発している。

感覚という感覚がそれに関わってはならないと訴えかけてくるようだ。

そこへ思考を停止せざるを得ない出来事。

ガイドが突然吐血したのだ。

「おい、大丈夫か!？」

僕の叫びは無視して、彼女はさらに暴走を促すように力を流す。今や自慢の帽子は吹き飛び、顔は苦痛で歪み、尋常じゃないほどの汗が額を流れている。周りには凄まじい濃度の闇の渦が纏わり憑き、それが足から徐々に彼女の体を浸食していく。

「もういい…もういいから止めてくれっ！このままじゃお前が…！」  
無理やりにも止めてやりたい。

しかしそれはカムイラによって動きを拘束されている僕には無理な事。

吸血鬼の力を振り解く力などあるはずもなく、無様にもがく事と叫ぶ事しかできない…！

「離せ、離せよっ！」

「あの子はこんな状況も覚悟して今回の行動を選択したと言ったでしょう。今は小娘よりあちらを御覧なさい！」

カムイラが無理やり僕の首をバスの側面に固定する。

そこには立ち込めていた濃霧の至る所で渦が巻き、空間に罅が割れ、裂け目が生じ始めているのが確認できた。見ている間にもそれはどんどんと大きくなり、一人一人が楽に通り返けられるほど大きな穴になる。

この穴が僕の世界へと繋がっているのか…？

僕が渴望した目標。

それが目の前にあるっていうのに、未だに決心がつかない…。

「元の居場所を取り戻す…。」

それは私には叶えられないかもしれない願い。

だから…

世界は私が味わった理不尽な悲劇だけではないと証明して欲しい。

私はこれからでも私の居場所を取り戻せるという希望を持たせて欲しい。

私があの子に素直に従うのはそんな自己満足のためよ。

貴方自身の事はどうでもいいわ。これはあくまで私のためよ」

カミューラはそう言うと、吸血鬼が誇る力で僕を掴み次元の狭間へと投げ飛ばした。

宙へと投げ出された僕にはもはや抵抗すらできない。

僕は手を伸ばした

届かないと分かっているながらもガイドに向かって手を伸ばした

彼女を見続けた

泣きそうな顔をしていたと思う

視線が交差する

彼女は苦痛に耐えながらも、そんな僕の顔を見て一瞬だけどいつも  
の悪戯めいた笑みを浮かべた

彼女の口元が僅かに動く…

か細いが確かに聞こえた言の葉

それなりに楽しかったし、一応礼を言っておくわ

ありがとう

崩れ落ちるガイドを最後の光景に僕の意識は闇に落ちた。

~~~~~

ここは…。

額を伝う冷たい水によって意識が覚醒した。

見上げるは黒い夜の帳と曇天たる空。

降りしきる雨と夜の暗さによって把握し辛いが間違いない。

ここは僕が遊戯王の世界へ移動する発端となったバス停だ。

あの時と同じようになす術もなく、ただ雨に打たれる。

僕は…戻って来たのか…。

あれだけ祈願していた帰還を成し得たのに僕の中に渦巻く感情は喜びのそれじゃない。達成のそれでもない。安堵のそれでもない。

混乱が頭の中を支配し、うまく脳が機能しない。

胸の中にぽっかりと穴があいてしまったような喪失感だけが心を締めつける。

あいつはどうなったんだよ…

あんなに無理な力を使って…

あんなに小さい身体をボロボロにして…

血反吐まで吐いて…

なんでだよ…

お前は自分を犠牲にして誰かのために行動を起こすなんて性格じゃなかったじゃないか

なんでだよ…

確かにお前とはこの世界へと帰還を名目に契約を交わしたさ

でも…

あんな無理をしなくちゃならないんだったら、僕は帰還を望まなかった。

僕個人の問題であるこの件に関して、他者に被害を与える事はしてはならない。

そう考えたから影丸理事長から離反し、帰路の道を自ら断つたのだ。

自分自身ならともかく、他の誰かの犠牲を伴うなんて事は絶対に嫌だ。

それが僕の身近な者、大切な者であれば尚更の事。

お前もその中の一人だったんだぜ…？

イタズラばかりして場を引つ掻き回す事しかしないけど、それでも向こうの世界でずっと共に暮らしてきた家族であり、友人であり、仲間なんだ。

そっちは僕と同じように思ってくれているかは分からないけど、僕はそう思っていたんだ。

僕なんかのために傷ついて欲しくなかった…。

なんでだよ…。

どうしてお前は僕なんかのために…。

もはや顔を伝うのが雨なのか涙なのか自分でも分からない。

深々と降る雨の中…、身体だけでなく心まで冷めていく。

もう何も考えられない…。

思考が停止する。

その時…。

突如僕に降りしきる雨が止んだ。

僕に降っていた雨だけが止んだのだ。

誰かが傘をさしてくれたのだと気付いたのは、雨が止んだと共に黒

い影が僕を覆い尽くしたからだ。

無気力に顔をあげる。

やめてくれ…。

放っておいてくれ…。

そう言うつもりだったんだ。今は他者の優しさというものが何よりも辛かったから。

まず見えたのは黒いヒール。

髑髏のプリントがされたストッキング。

濃紺のレディーススーツにシヨルダーバッグ。

スーツの胸元とバッグには禍々しい髑髏の装飾が付いている。

特徴的な赤毛に、洒落た帽子にもこれまた髑髏。

帽子は破れ、唇からは血を流し、服にも所々血痕がこびりついているが、その顔には不敵な眼差しといつも通りの悪戯めいた微笑を浮かべたガイドがそこにいた。

「お前…！」

僕の呆気にとられた顔が御気に召したのか彼女はケタケタと笑う。

「ははっ…、無事だったんだな？本当に大丈夫なんだな！？」

思わず彼女に抱きつき感涙に咽ぶ。

「良かった…本当に良かった…」

彼女はそんな僕の様子に呆れながら、頭をポンポン撫でるとホールドから脱出し起った経緯を説明してくれた。

僕は最後にガイドが倒れるのをみたもんだから、てつきり闇の力に呑まれて命の危機に瀕しているとか、闇の世界に取り込まれてしまったんじゃないかと思っていたんだが、なんとこの悪魔娘、暴走した闇の力をも掌握し己が力の糧としてしまったのだ。

更には力技で無理やり僕の世界への入り口を切り開いたせいとか、普段はすぐさま復元に入るはずの狭間が未だ不安定な状態を保ちつつあるため、僕とのリンクを導に再びこちらに潜りこんできたらしい。まあそれもいつまで持つか分からないらしいが。

そもそもコイツは本気で自分が闇に呑まれるわけがないだろうと過信していたらしく、今回の件は己のパワーアップも兼ねていたようだ。

なんて奴だ…！

今なら邪神すら呼び出せる気がするとか言っているのだが嘘だよな。

嘘だよね…？

嘘だと言ってよバーニー！

よってガイドはどうかやら僕に身の無事を伝えるために来たわけではないようで、僕が落ち着くのを待ってから本題に移った。

彼女が取りだしたのは古びれた洋紙皮。

いつか取り交わした契約書。

僕とガイド、両方の手が触れる。

するとそれが突然燃え盛り、塵となって消えていく。

僕はこの世界へと戻る事が出来た。

契約は履行されたのだ。

これで彼女との繋がりも切れた。

これでもう用は済んだとガイドは再びバスに乗り込む。

「ちょっと待ってくれ」

まさかまた付いてくるのか馬鹿なお前と呆れた表情を浮かべるガイド。

「いや、折角お前が身体張ってこの世界に返してくれたんだ。その好意を無下にできるはずもない」

そちらの世界へ行って再び戻れる保証もない。

それにもう一度ガイドに無理させようなんてこともできるはずもな

い。

彼女には暫し待ってもらおうことにして僕はやり残したことを彼女に託すために、行動を始める。

「これを向こうの世界に届けてくれ」

この思いが届くように。

感謝の気持ちが届くように。

ジャッカル side

彰が再び消えてからはや十日。

遊城十代や万丈目曰く、彰を連れ去っていった赤毛の少女はデュエルモンスターズの精霊であり、彰と共に行動していたようだから危険はないだろうとの事だったが、俺は理由の分からない不安感で心が一杯だった。

その予感は的中し、アイツはそれから十日経った今でも姿を見せない。

流石に事態を重く受け取った鮫島校長や遊城十代達も懸命に搜索に当たったが、なんの情報も得られず現在に至る。

俺はあの日から毎日アイツが消えてしまった場所まで赴き、帰って来るのを待つことを繰り返している。

この行為の意味の有無なんぞ関係ない。

ただ何もせず事態が推移していくのが嫌だったんだ。

今まではただこの拳を振るっていけば良かった。

大抵はそれで解決したし、他は俺にとって大した問題じゃなかったから無視した。

だが今回は違う。

単純な暴力で解決できる問題じゃないし、無視できるものでもない。

俺の舎弟みいぢが関わっているんだ。

それなのに俺にはただ待つことしかできない。

何もできない自分が許せない…。

握りしめた拳に込められた行き場のない力が更に俺に無力を感じさせる。

その時だ。

俺の頭上から何かが落っこちてきたんだ。

地面に落ちたのは一冊のノート

彰に渡したはずの俺のノート。

周りを見渡すが先程と変わった点は何もなく、渡り鳥が悠々と空を飛び交っているだけだ。

今のところ唯一の手掛かりと思わせる俺のノートだけ。

拾い上げ開いてみる。

俺は普段授業なんて全く聞いてないから、そのノートは用意したはいいがほんの数ページしか使っていない…はずなのだが…。

「これは…！」

殆ど使われていなかったノートの大部分が埋まっている。

それは俺や遊城十代達それぞれに宛てた彰のメッセージ。

あいつがこの世界の住人ではない事。

帰還方法をずっと探っていた事。

影丸に元の世界へと帰る手助けをする代わりに三幻魔復活の手伝いを持ち掛けられた事。

結局はそれを断り、他の帰還方法を探る事を決心した事。

離反を悟られぬように行動を控えていた事。

理事長側が強引な手段を持ってして彰を操ろうとした事。
操られたふりをして反撃の機を伺うために潜伏していた事。
影丸を誘き出すために七星門の鍵を奪取することにした事。
その過程で計らずとも俺とデュエルするはめになってしまった事。

そして今回消えた事についてだ。

アイツが元の世界へ帰る事が出来る千載一遇のチャンスが、あの日
アイツが消えたあの時だった。

俺の前に現れたあの赤毛の少女。

彼女が自分の体を張ってまで彰を元の世界へ帰そうと画策し、結果
としてそれが成功したらしい。

問題は彰がその計画を全く知らなかったということだ。

長ったらしい謝罪の文言が数ページ近くにわたっており、正直途中で
読み飛ばした俺は悪くねえ。普段の俺だったらその時点で放り投
げてるんだからまだマシだと思いやがれ。

そして最後にはこんなことが書かれていたんだ。

アイツの思い。

アイツが抱えていたもの。

『初めは自分の身に降りかかった不幸を嘆き、何故こんな事になっ

たのかと思い悩んでばかりいました。

そして何より孤独でした。

友も家族もない見知らぬ土地で、先の見えぬ未来。

元の世界に戻るかもわからずただただ流されることしかできない。

僕がデュエルアカデミアに入学を希望した本当の理由はそんな孤独感を紛らわし、自ら考えて行動することを放棄したかったためかもしれない。

孤独感を紛らわせたいがために入学したのに、初めは周りを見ると自分は異質な存在だと強く認識させられました。それに加えて僕は元の世界への帰還願望ゆえに、皆と距離を置いていたことも影響し、心から友と呼べる人もできませんでした。

貴方が声をかけてくれるまではの話ですがね。

正直に言うところ初めはあまり関わり合いたくないタイプの人だななんて思っていました。

出会いが会いでしたからね。拳句の果てにはいつの間にもやら舎弟にされている始末。

でも…。

貴方は僕を、僕と言う存在を認めてくれた。

こんな僕と繋がりをもってくれた。

本当に嬉しかった。

救われたんだ。

貴方は僕が孤独に負けずに生きてこれた大きな要因となってくれた。本当に感謝してもし足りない。

貴方はただそこにいるだけで僕の力になってくれました。

大切な…本当に大切な人です。

そしてこれは弟分としての最後の我儘…。

もし…再び相見えることができたならば…

また姐と呼ばせてもらっていいですか？

勝手に飛び出していった不出来な弟分ですが、再び僕を家族として僕を受け入れてくれませんか？
』

全てを読み終えた後、自分の目から涙が流れているのに気付いた。

「はっ、なんだよ。弟分がめでたく目標を達成できたつてのに、それを祝ってやるべき立場の俺がなんで泣いてるんだよ…。」

自分の感情が整理できない。

これは嬉しいのだろうか、寂しいのだろうか、楽しいのだろうか、それとも悲しいのだろうか。

あいつが俺に感謝していた事。

それは俺が意図的にやったことじゃないから実感がわからない。アイツの事情を知らなかった俺が何をしてやれたのかわからない。

でも…。

俺はアイツの力になれていたんだ。少なくとも彰はそう思ってくれていた。

それだけで何か救われる気がしたんだ。

そして文末の返答を今ここでしてやる。

くだらねえことを聞くんじゃねーよ。

お前は俺の弟分だ。

それは例え住む世界が違えども揺ぎ無い事実。

この俺様が世界なんぞくだらない境で物事を判断していると思っ
ているのかよ。

家族の絆ってのはそんなもんじゃ断ち切れない。

お前がお前で在る限り、俺はお前の頼れる存在として在り続けている。

いつしか再び会えた時、お前が驚くくらい格好良い人間になってやる。

その時は勝手にいなくなった罰として一発重い覚悟しとけよ！

もはや涙は止まっていた。

天を仰ぎ大きな声で叫ぶ。

心の底から叫ぶ。

届くように。

違う世界のお前にも届くように。

「またな。また会おうぜ、彰！」

秘話 イフルートエンド（後書き）

まさに打ち切り漫画のような終わり方。

初めは本当にこのくらいの話数で最終回になりそうだと考えていました。

そのためにカミューラとか闇のアイテムとか集めてたのは内緒の話。ガイドを喋らせるかどうかも迷いましたが、あくまでイフルートだからいいやと軽い気持ちでやってしまった。本編のほうでは喋らせる気はないです。

第29話 会合（前書き）

社長登場回。

第29話 会合

やあみんな、元気してたかな？

ああそうかい、壮健でなによりだ。

僕？

僕は何と言えはいいのか…。

「いいから早く貴様のカードを見せろ！俺は暇じゃないんだ」

「海馬ボーイ、あまり高圧的に接するのはよくアリマセーン。彼が怯えてイマース」

現在修羅場の中にいます…。

僕の目の前には海馬コーポレーション総帥たる海馬瀬人、そしてデュエルモンスターズの生みの親インダストリアル・イリュージョンの社長ペガサス・J・クロフォード。

両者ともこの世界において最高クラスの財力、権力、勢力を築いている、まさに世界を動かしている権力者。

一庶民に過ぎない僕が相対するには荷が重すぎるだろ！

誰か…、誰か助けてください…！

時を遡る事数日前。

今回の三幻魔の件についての事や、この世界に来た経緯やらを関係者らに話すことになったのだが、それを全て聞いた上での十代の反応がこれだ。

「すっげえ、別の世界だってよ翔！そっちにも色んなデュエルモンスターズがいるんだろ？俺も行ってみてえな〜！」

「兄貴、気持ちは分かるっすけどそれは今言う事じゃないっすよ」

「翔君の言う通りね。というか彰君の気持ちも考えなさい！」

「そうだな…ごめん彰。俺、お前の気持ち考えてなかった…」

「別に構わんよ。もうそこら辺の折り合いは付けているつもりだからね」

まあ映画や小説、漫画なんかのフィクションの世界に憧れる少年なら異世界と言うワードに興味を抱いても不思議じゃないよね。

だって異世界だぜ？

僕だって当事者じゃなかったらもつと面白おかしく興味対象として認識していたはずだ。

全く何の因果でこんなことに…。

そんな物思いにふける僕に鮫島校長から質問が飛んできた。

「それで一之瀬君はこれからどうするつもりなのですか？やはり帰る術を探すのですか？」

「そうですね…。一応こちらでも（ガイドが）調べているのですが、何分事が事なのでどうしようもないのが現状ですね」

「私のほうでも色々調べてみましょう。例え貴方が他の世界から来たといっても、この学園の生徒であることには変わりありません。生徒のために苦心するのが我々教職員の仕事ですからね」

「そうナノーネ。シニョール一之瀬は大船に乗ったつもりでいるといいノーネ」

嬉しい事言ってくれますね。

正直クロノス教諭にはなんの期待もしていないけど、校長先生が協力してくれるのは大きい。彼の人脈や情報網は僕みたいな一般人とは桁外れだからね。

もしかしたらペガサスや海馬社長なんかともコネクション持っていたりして。

うん…、この言葉がフラグになっていたなんて思わなかったんだ…。

そして話は冒頭の日に戻る。

休日だというのに突然校長室まで呼ばれ、何だ何だと思いつつ校長

室に向かつてみると、そこにはこの世界屈指の権力者といっても過言ではない2人が出迎えてくれたわけだ。

ペガサスさんは三幻魔についての報告から、己が作成を中断したはずの邪神が存在している事に関して調査するために。

海馬社長のほうは以前より海馬コーポレーションが管理している立ソリ体映像システムソド・ウイジョン、デュエルリングのメインサーバーに報告されていた解析不能な謎のデータ。これまではただのエラーとして処理されていたらしいのだけど、三幻魔との決闘にて再び報告されたそれが海馬社長の目にとまったことよって。

それぞれの思惑を持ってして件の最重要人物である僕に興味を抱き、鯨島校長からのコンタクトもあつてこの度の会談が成立してしまつたらしい。

確かに一時的とはいえど三幻魔が復活した影響により、世界中のデュエルモンスターズのカードに変化が生じてしまったため、それを隠し通すのは無理だとは思っていたよ。

思っていたけどいきなりこんな最高権力者たちに出張られても、小心者の僕にはハードルが高すぎる。

二人（特に海馬社長）から放たれる威圧感にガクブルしながら僕の事を説明する。ペガサスさんの鋭い眼光が僕を突き刺し、嘘や誤魔化しは通用しない。

まあそれでもこの世界が漫画ベースの世界だという事は全員に伏せるつもりだ。貴方は漫画のキャラクターですよなんてでも言われたら、誰だっという気はしないだろう。下手に原作による未来を知つ

ているなんて情報がどこかに漏れたら取り返しのつかない事態になりかねないし、僕の知識通りに話が進むなんてことも保証できない。そんなのは占いと同じようなものだ。

僕の下手な情報で皆の行動を制限するのはあまり宜しくないだろう。まあ今回の三幻魔のような本当にヤバい事態の時には干渉するかもしれないけど。

僕の拙い説明（と言う名の釈明）に対して二人は真剣な表情で聞いてくれている。ペガサスさんは僕の世界について、海馬社長はもっぱらシンクロやエクシーズといったカードの事しか聞いていなかったのは割愛しておこう。というか緊張しすぎて何喋ったか覚えていないんだ。

「とても興味深い話デース。確かにデュエルモンスターの精霊界などの他世界の存在は判明していますが、この世界と似た構造の世界が存在し、そこにもデュエルモンスターのゲームが行われているなんてアンビリーバブル！」

まあこちらの世界のようにカードが世界経済を動かす様な事業ではないけどね。

あくまで娯楽の一つであってそれ以上でもそれ以下でもない。

デュエルモンスターの精霊や闇のゲームなんてオカルト的存在もないし、社長は僕の世界のほうが好みかもしれないな。ただ立体映像ジョンの技術はないからせひともその分野を発展させてもらいたいものだ。3Dの技術力に関してはこちらの世界のほうが遥かに進歩している。

「何とも信じ難い非現実的な話だが、ここに貴様が存在し俺の知らないカードがあることだけは認めてやる。」

社長は僕のシンクロモンスターのカードを弄りながらそう言う。ドラゴン族が一杯いるからシンクロの方に惹かれたのかな。そもそもエクシーズモンスターの数がシンクロよりまだ数が少ないのもあるけど。

そんなこんなで僕の懸念とは大きく外れ、二人が案外あっさりと僕の状況に関して信じてくれたのは嬉しいんだけど、只今別の部分で問題が発生中だ。

先程からうちの悪魔娘の奴が、僕が委縮しているのを良い事にペガサスさんや海馬社長の周りをうるちよろしているのだ。

おいやめろ。やめるんだ。

本当に心臓に悪いからやめろ！

二人にはガイドの姿が見えていないようだが、その存在をなんとなく感知しているらしく時折不自然に視線が動いたり、不審に思っている節があるんだ。

だから社長の膝になんかに座らないでくれ！

そしてペガサスさんの髪を弄るな！

そしてその手に持つ油性ペンは何なんだ！？

本当にやめてください、死んでしまいます！

「貴様…、俺の話を見無視するとはいい度胸だな」

えっ？

「貴方の持つカードを実際に使用する所を見てみまシヨウという話
デース」

「この俺が直々に相手をしてやると言っているのだ。光栄に思うが
いい」

ちよ！？

無理無理無理！

ただ対峙しているだけでSAN値がガリガリ削られているんだ！

狼狽える僕を横目にずかずかと部屋を出ていく海馬社長。
そしてその場で極度の混乱によりフリーズする僕。

「何をしている。俺は暇じゃないと言ったはずだが…」

「ハイ、ワカリマシタ…」

「今回はシンクロとやらを見せてみる。いいな？」

「ハイ、ワカリマシタ…」

「oh…、彼は大丈夫なのデスカ？」

「ハイ、ワカリマシタ…」

「どうしまシヨウカ、海馬ボーイ…?」

「くだらん、引き摺ってこい」

決闘場にて

「俺のターン、ドロー!」

まずは社長のターンから。先攻は僕にくれてやるって言うてくれたのに、進む威圧感によってガチガチに固まってしまった僕を呆れた目で見た後、さっさとデュエルを始めてしまったのだ。

情けないなんて言わないでくれよ。君らだって同じ状況になったらこうなるはずさ。

「手札より魔法カード古のルールを発動!手札よりレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する!」

ちよっ!?

社長が呼び出す高レベルの通常モンスターって事は…。

「俺のプライド、俺の魂、それを受け継ぎし我が最強のしもべの姿、
ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン貴様に見せてやる!出でよ!青眼の白龍!」

フィールドに発生した竜巻より咆哮があがり、伝説の白龍が場に舞

い降りる。

全てを睥睨する蒼き視線に貫かれ、ソリッドヴィジョンであると分かっていたながらも原始的な恐怖が沸き起るほどの迫力。

ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン
これが青眼の白龍！

ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン
《青眼の白龍》 ATK / 3000 DEF / 2500

「先攻1ターン目は攻撃する事ができない。俺はカードを1枚セツトし、ターンを終了する。どうだ、我が最強のしもべを見て意識は戻ったか？ 貴様の持つシンクロとやらの力をこの俺に見せてみる！」

海馬社長の言葉にようやく平静を取り戻す。

完全に社長の空気に吞まれてた。

だってこの人めっさ怖いんだもん！

ただこのまま腑抜けていたら本気で怒られそうだ。どうやら覚悟を決めるしかないようですね…。

「僕のターン、ドロー！」

「相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、攻守を半減する事でバイス・ドラゴンは手札から特殊召喚できます」

《バイス・ドラゴン》 ATK / 2000 DEF / 24000
ATK / 1000 DEF / 1200

「更に手札よりチューナーモンスター、トラスト・ガーディアンを通常召喚！」

《トラスト・ガーディアン》 ATK/0 DEF/800

「これがチューナーモンスターか……。ふんっ、いいだろう。見せてみるがいいシンクロ召喚とやらを……」

「レベル5のバイス・ドラゴンに、レベル3のトラスト・ガーディアンをチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！」

トラスト・ガーディアンが光に溶け、三つの輪になりバイス・ドラゴンを取り囲む。

「シンクロ召喚！我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン……」

爆炎と共に舞い上がるは紅蓮に染まる紅き龍。

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》 ATK/3000 DEF/2000

「ほう……俺のブルーアイズと同等の攻撃力を持つか……」

「バトルです！レッド・デーモンズ・ドラゴンで青眼の白龍ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンに攻撃！アブソリュート・パワーフォース……！」

「ブルーアイズよ迎え討て！滅びのバーストストリームツ……！」

レッドデーモンズの腕から放たれた紅蓮の業火とブルーアイズの口

より放たれた白銀の光線が衝突し、あたりに破壊を齎す。フィールド全体に朦朧たる砂塵が巻き起こり、視界が白色に支配される。

そして煙が晴れた時、フィールドに悠然と存在するは我が誇り高き魂。

「なっ！？何故貴様のモンスターは生きているのだ…！」

「トラスト・ガーディアンTMのモンスター効果。トラスト・ガーディアンはレベル7以上のシンクロモンスターのシンクロ召喚にしか使えないデメリットがありますが、このカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない効果を得るんです。ただしこの効果を使用したダメージステップ終了時、そのモンスターの攻守が400ポイントダウンしてしまいますが…」

「小賢しい真似を…！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》 ATK/3000 DEF/2000
ATK/2600 DEF/1600

「僕はカードを1枚セットしてターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！貴様は俺のブルーアイズを攻略した気でいるだろうが、その考えが如何に浅はかなものかを教えてやる！」

「我がブルーアイズは龍族の中でも最も高貴なる血筋！リバーサイドオープン！永續罫、正統なる血統！俺の墓地に存在する通常モンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する！蘇生させるモン

スターは勿論、青眼の白龍ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン！！」

《青眼の白龍》 ATK / 3000 DEF / 2500

「貴様のモンスターは先程の効果によって攻撃力が減少した。例えば戦闘破壊の耐性を持っていようとともその都度我がブルーアイズで粉砕してくれる！ブルーアイズよ！レッド・デーモンズ・ドラゴンに攻撃！滅びのバーストストリーム！！」

再び放たれる神々しさすら感じさせる白銀の光線。でもそう簡単にやらせはしないよ。

「僕は畏カード、バスターモードを発動！自分のフィールド上のシンクロモンスター1体を生贄に捧げ、そのシンクロモンスターのカード名が含まれるノバスタースラッシュと名のついたモンスターをデッキより特殊召喚する！レッド・デーモンズ・ドラゴンを生贄に捧げ、モードチェンジせよ！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター》 ATK / 3500
DEF / 2500

「貴様の反撃など読んでいるわあ！速攻魔法、収縮を発動！貴様のモンスターの攻撃力を半減させる！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター》 ATK / 3500
1750

「砕け散るがいい！滅びのバーストストリーム！」

ああ！出落ちバスター！

全く現世でも空気なのにここで頑張らないでどうするんだ！！

彰LP4000 2750

「くっ、だけどレッド・デーモンズ・ドラゴンノバスターが破壊された時、自分の墓地に存在するレッド・デーモンズ・ドラゴンを特殊召喚できる！蘇れレッド・デーモンズ・ドラゴンよ！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》 ATK/3000 DEF/
2000

「ふんっ、俺はこれでターンを終了する」

「僕のターン、ドロー！」

互いの攻撃力は互角。

ブルーアイズには豊富なサポートカードが存在し、その中には先程の正当なる血統のような墓地より蘇生させる手段も多い。

迂闊な攻撃でレッド・デーモンズ・ドラゴンを失うわけにはいかな
いか…。

「僕はカードを1枚セットしてターンを終了します」

「ふうん、我がブルーアイズの前に成す術がないようだな。俺のタ
ーン！」

「俺は速攻魔法エネミーコントローラーを発動！」

こっつ、これは!?

生の社長のエネコンが見られる日が来るとはなんだか感無量だな。

「コマンド入力、上、左、下、右、A!このコマンドにより相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の表示形式を変更する!レッド・デーモンズ・ドラゴンを守備表示に変更しろ!」

「ブルーアイズよ!今度こそレッド・デーモンズ・ドラゴンを殲滅しろ!滅びのバーストストリーム!」

まだまだ!まだ終わらんよ。

「永續罫、スクリーン・オブ・レッドを発動!このカードが存在する限り、相手モンスターは攻撃宣言をする事ができなくなる!」

「おのれえ...!俺はジャイアント・ウィルスを守備表示で召喚し、ターンを終了する!」

《ジャイアント・ウィルス》 ATK / 1000 DEF / 1000

「僕のターン、ドロー!」

「僕は手札より魔法カードワン・フォー・ワンを発動!手札からモンスター1体を墓地に送る事により、手札またはデッキよりレベル1のモンスター1体を特殊召喚する!シンクロ・ガンナーをデッキより特殊召喚!」

《シンクロ・ガンナー》 ATK / 0 DEF / 0

「更にスクリーン・オブ・レッドの効果を発動！フィールド上にレッド・デーモンズ・ドラゴンが表側表示で存在する場合、このカードを破壊することで自分の墓地に存在するレベル1のチューナー1体を特殊召喚できる！」

「レベル1のモンスター……。ふん、先程の魔法のコストで捨てていたのか……」

その通り。

「墓地より救世竜セイヴァー・ドラゴンを特殊召喚！」

《救世竜セイヴァー・ドラゴン》 ATK / 0 DEF / 0

「雑魚を何匹並べようとも、我がブルーアイズの足元にも及ばぬぞ！」

その概念はシンクロの登場と共に駆逐されたといってもいい。それを今から証明してあげますよ。

「レベル8レッド・デーモンズ・ドラゴンと、レベル1、シンクロ・ガンナーに、レベル1、救世竜セイヴァー・ドラゴンをチューニング！研磨されし孤高の光、真の覇者と成りて大地を照らす！光り輝け！シンクロ召喚！大いなる魂！セイヴァー・デモン・ドラゴン！」

燃え盛る灼熱の業火より飛翔するは天使のそれを彷彿とさせる4つ

の白翼を身に纏い、天を駆け火を統べる紅の龍。羽ばたく度に火焰を撒き散らす最上級ドラゴンの1体。

《セイヴァー・デモン・ドラゴン》 ATK/4000 DEF/3000

「ぶつにくい…！」

社長も分かるかね、この美しさを。

でも浮気は駄目だと思うよ。唯でさえオベリスクとかに浮気してたっていうのに。

「セイヴァー・デモン・ドラゴンの効果を発動！1ターンに1度、エンドフェイズ時まで相手のモンスター1体、ジャイアント・ウィルスの効果は無効化にし、そのモンスターの攻撃力分このカードの攻撃力をアップさせる！パワー・ゲイン！」

「攻撃力を吸収するだど！？」

《セイヴァー・デモン・ドラゴン》 ATK/4000 5000

「バトルフェイズに移行！セイヴァー・デモン・ドラゴンでブルーアイズに攻撃！時の狭間へと消え去れ！アルティメット・パワーフォース！」

己の体を業火で纏い、その大いなる翼によって空を駆け、伝説の白龍を一瞬にして蒸発させる孤高の光。その姿はまさに不死鳥の如し。

「ぐうあああああっ！」

「まだまだ！セイヴァー・デモン・ドラゴンが攻撃した場合、ダメージ計算終了後にフィールド上に守備表示で存在するモンスターを全て破壊する！ジャイアント・ウィルスを破壊しろ！デモン・メテオ！！」

セイヴァー・デモン・ドラゴンの腕より放たれた紅の火球がジャイアント・ウィルスを容易く粉碎する。

「セイヴァー・デモン・ドラゴンはその強力な効果故、エンドフェイズ時にこのカードをデッキに戻さなければなりません。その代わりに僕の墓地よりレッド・デーモンズ・ドラゴンを1体特殊召喚する効果も持っていますかね」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》 ATK/3000 DEF/2000

「おのれ、2度も我がブルーアイズを…！許さんぞ、俺のターン！」

「俺はカードを2枚セットし魔法カード、命削りの宝札を発動！自分の手札が5枚になるようにカードをドローし、5ターンのスタンバイフェイズ時、手札を全て捨てる！」

天よりの宝札に次ぐ強力なドローカード。

相手にカードを引かせないという点ではこちらのほうが優秀と言えるか…。

「更に手札より早すぎた埋葬を発動！ライフを800ポイント支払

う事によって、俺の墓地に存在するモンスター1体を選択し蘇生させ、このカードを装備させる。早すぎた埋葬が破壊された時、蘇生したモンスターも破壊されてしまうがな。再び蘇れ我が忠実なるしもべよ！」

海馬LP2000 1200

《青眼の白龍》ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン ATK/3000 DEF/2500

「フハハハハハッ！貴様に見せてやる！史上最強にして華麗なる究極のモンスターの姿を！リバースカード、融合の魔法カードを発動！場に存在するブルーアイズと手札の2枚のブルーアイズを3体融合！現れよ！青眼の究極竜！！！」ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン

3体のブルーアイズの融合体。

単純な攻撃力なら三幻神すらも上回る絶対強者。

《青眼の究極竜》ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン ATK/4500 DEF/3800

「貴様のエースモンスターなど、俺にとってはやられ役の雑魚だという事を教えてやるう！アルティメット・ドラゴンよ！敵を粉碎せよ！アルティメット・バースト！！！」

3つの口から放たれた破壊の光線が一つの巨大な力のうねりと化し、敵対者を塵も残さず消し飛ばす。

「ぐう…！！」

彰LP2750 1250

「フハハハハハハハッ！粉碎！玉砕！大喝采！！」

「どうやら社長のテンションがマックスにまで至ったようだ。

先程までの冷静さはどこへいったのやら高笑いが止まらない。」

「俺はカードを1枚セットし俺のターンを終了する。さあ貴様のターンだ！」

「僕のターン！手札より死者蘇生を発動！蘇れ我が魂！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》 ATK/3000 DEF/
2000

「ふうん…、何度も倒されにご苦労な事だ」

「本当だよ。このままじゃ過労死するかもしれない。」

「更に手札よりコール・リゾネーターを発動。自分のデッキからリゾネーターと名のついたモンスター、クリエイト・リゾネーターを手札に加えます」

「そしてチューナーモンスター、クリエイト・リゾネーターは自分フィールド上にレベル8のシンクロモンスターが存在する場合、手札から特殊召喚できる！」

《クリエイト・リゾネーター》 ATK/800 DEF/600

「更に手札よりチューナーモンスター、バリア・リゾネーターを通

常召喚！」

《バリア・リゾネーター》 ATK/300 DEF/800

まさかコイツまで使う事になるうとは…
流石は海馬社長といったところか。

ただど向こうも切り札を出してくれたんだ。
こちらもそれ相応のモンスターで対抗しなければ失礼に当たる。

こちらも最強のモンスターで迎え撃つ…！

「レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンに、レベル1のバリア・リゾネーターと、レベル3のクリエイト・リゾネーターの2体のチユナーモンスターをダブルチューニング！」

「合計レベルが12…！我がアルティメット・ドラゴンと同ランクのモンスターだと!？」

「王者と悪魔、今ここに交わる！荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの周りを真紅の炎の輪が幾重にも取り囲み、天を貫く業火の柱となり、新たな灼熱の紅蓮龍を呼び起す。

「シンクロ召喚！紅蓮の悪魔！スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！」

《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》 ATK/3500 DEF/

3000

地獄の業火を纏いし悪魔の咆哮がフィールドを震えさせる。

「中々に強力なモンスターだと褒めてやりたいが、俺のアルティメット・ドラゴンは更にその上をいくぞ！」

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの効果を発動！僕の墓地のチューナーモンスター1体につき、500ポイント攻撃力をアップする！僕の墓地のチューナーモンスターは4体。よってスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は2000ポイントアップし、5500となる！」

《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》 ATK/3500 5500

「くっ、攻撃力上昇効果を持っていたのか…！」

「バトルだ！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンで青眼の究極竜を攻撃！バーニング・ソウル！」
ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン

手足を折りたたみ、フォルムチェンジしたスカーレット・ノヴァ・ドラゴンが攻撃体勢に入ったその時…。

「リバーズカードオープン！罨カード、万能地雷グレイモヤを発動！相手モンスターの攻撃宣言時に相手フィールド上に存在する最も攻撃力モンスター1体を破壊する！」

フィールド上に凄まじい爆発が起き、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンに直撃する。

「甘い…甘いぞ！我が高貴なるアルティメット・ドラゴンに容易く触れられると思わないことだな！」

それはどうでしょうかね。

僕の余裕を証明するかのように爆炎の中より姿を現したスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの一撃が青眼の究極竜の腹にドでかい風穴を開けた。

海馬LP1200 200

「なっ…なんだと!？」

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない！倒したければこのモンスターを上回る攻撃力で圧倒してみせてください」

まあバウンスとか除外で終わるんですけどね。

言わぬが花とはこのことか…。

「面白い…！この俺にパワーで挑むとはな…。ならば俺は貴様以上の力を持って叩き潰すまでよ！俺のターン！」

ええ、僕まだターンエンド宣言していませんけど…。

まあどうせターン終了するつもりだったから別に展開に変わりはないけど、勝手にターンを飛ばすとは流石社長…悔りがたし…！

「俺は魔法カード龍の鏡を発動！自分のフィールドまたは墓地より融合素材をゲームから除外し、ドラゴン族のモンスター1体を融合

召喚する！俺は墓地より3体のブルーアイズを除外し、再び現れよ
ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン
！青眼の究極竜！」

ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン

《青眼の究極竜》 ATK / 4500 DEF / 3800

「更に装備魔法巨大化を発動！装備モンスターの攻撃力を2倍にする！」

唯でさえ巨大なモンスターなのに巨大化を使われた今、その姿は幻魔を遙かに凌ぐほどの巨体となり、フィールドに絶対なる脅威として君臨する。

ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン

《青眼の究極竜》 ATK / 4500 ATK / 9000

「フハハハハハッ！強靱！無敵！最強！これぞ我がしもべにして最強のモンスターだ！覚悟するといい！」

最高にハイってやつだ。

確かにこんなの場に出せたらテンションあがるだろうな。

ここでの攻防が勝敗を分ける分水嶺になるな…。

両者の緊張が高まったそんな時にひよんな闖入者が登場した。

「兄様！こんな所で何やっていんだよ！もう島を出ないと会議に間に合わなくなるよ！」

現れたのは海馬社長の弟さんである海馬モクバ。恐らく僕らと同年代か、少し年下であるのにも関わらず、世界中に支社を持つ大企業海馬コーポレーションの副社長として兄をサポートしている天才児（？）だ。

「モクバ…！しかしまだデュエルの途中「兄様！」…ふんっ、仕方がない…」

海馬社長はデュエルディスクを操作し、ソリッド・ヴァイジョン立体映像システムを解除する。

「命拾いをしたな。己の強運に感謝するといい」

「それはどうでしょうかね。まだ頑張れたかもしれないですよ」

「ふん、やはりまだ何かを隠していたか…。だがこの俺を相手にしてそう簡単に事が運ぶとは思わない事だな」

「兄様、ヘリポートに急いでくれよ！本当に時間がないんだ！」

「むっ、ペガサス！後の事は貴様に任せる。委細決まったら俺に連絡を寄せ」

「全く人使いが荒いのは相変わらずデウス。もう少し年上を敬つてもいいんじゃないですか？」

「ふっ、俺はもう行くぞ。最後に一之瀬、先程は邪魔が入ったが次にやる時は完膚なきまで叩き潰してやる。覚悟しておくがいい！」

僕にそう言い捨てた後、無重力コートを翻しその場を去っていく海馬社長。

目的は僕とデュエルすることじゃなくてシンクロモンスターとかの検証じゃなかっただろうか…。何だが目的が変わっていませんか社

長さん！

「Oh…素晴らしいデュエルでした！あの海馬ボーイとここまでの闘いを繰り広げるとは、三幻魔を打ち倒したというその実力は確かなようデウス。ところで最後の海馬ボーイとのやり取りはどういうことだったのデスカ？」

海馬社長という嵐が去った後、気が抜けた僕にペガサスさんが話しかけてくる。

「ああ、単純にスカレッド・ノヴァ・ドラゴンは自身を除外することで相手モンスターの攻撃を1ターンに1度無効にできる能力があるんですよ。まあ海馬社長ならその状況からでも思いもよらぬ手で追撃してきそうでもありましたけどね」

社長の手札も残り1枚だったけど、そんなのこの世界の人たちには関係ないからな。欲しいカードを欲しい時に持つてくるというドロ―力はどうすれば身につくのだろうか。

「ふむ…まだ効果を隠し持っていたわけデスカ。面白い、実に面白いデース！これは是非とも我が社で研究、開発させてもらいたいデウス。できれば貴方にも協力して頂きたいのデスカ…」

「協力は構わないですけど、僕はまだ学生をしていたいのですが…」
本音はただ働きたくないんだ。労働が嫌なんだ。

「勿論構いません！では貴方には我が社のテストプレイヤー兼アドバイザーとして雇わせてもらいます」

ふむ、これで我が家の家計も少しは助かると思えばいい話だったのかもしれないな…。

最終的にガイドの奴に大半は消費される嫌なヴィジョンしか見えな
いが、少しは貯蓄しておかねば買いたい物も買えない世の中になっ
てしまうよ。僕にはあまり浪費癖はないけど多少なりとも欲しい物
はあるんだ。

ふふふつ、バイト代が入ったら何を買おうか…。今からでも決めて
おこつ。

今回の修羅場を無事乗り切った自分への御褒美さ。

だって相手はあの海馬社長だったんだよ？御褒美くらいあっても誰
も文句言わないと思うんだ。

よしつ、それでは早速部屋に戻ってネット・サーフィンを…。

「Wait！少しばかり待ってくださいイ」

「なつ…なんででしょうか…？」

なんだか嫌な予感がするぞ。

あの獲物を狩るときの猛禽類のような彼の目は一体…。

「ふふつ、先程のデュエルを見て私も胸から沸き上がる闘志が抑え
られないのデウス。私は確かにデュエルモンスターの生みの親で
すが、一人のデュエリストでもあるのデウス。さあ私ともデュエル
をしようではありませんか」

彰は逃げた。

しかしペガサスに回り込まれてしまった！

「迷がしませんヨ？」

さらば平穩なる日々…。

たゞは變じき日々…。

第29話 会合（後書き）

社長vs元キングはきっとパワー勝負の熱い展開になった上で社長が勝つんだろーなと思っています。社長ならきっと初見でもスカノヴァに対応しそう。

追記

戎鴛さん、零 さんのご指摘により誤字等修正致しました。有難うございました。

第30話 会議と悩みとお土産と（前書き）

ごちゃごちゃわけわからん事言っているので深く考えず読むのが吉です。

第30話 会議と悩みとお土産と

ブラック企業（インダストリアル・イリユージョン社）に勤めているんだけど、もう俺は限界かもしれない。

ああ、すまない。

いきなりこんな事言われても何を言っているんだかわからないよね。

まあ僕もよくわからん状況なんだけど。

事の発端は海馬社長との胃に穴があきそうなデュエルの後、ペガサスさんに軽い気持ちで新カードの製作のアドバイザーの仕事をお願い負ってしまった事に起因する。

分かり易いよう順序良く話していくと、海馬社長と僕のデュエルを見て熱く滾る心を抑えられなくなったペガサスさんに何度もデュエルの相手をさせられたんだ。

自分の知らないカードが出る度に目を輝かせて喜んでくれるのは別に構わないんだけど、デュエルが終わる度に再戦をせがまれて、この世界屈指の権力者相手にノーと言える度胸が僕にあるはずもなく、彼が満足行くまで接待をさせられたわけさ。序盤こそはこちらの世界にはまだ存在しないカードを大量に投入している僕のデッキに中々対応できなかったようだけど、流石はデュエルモンスターの生みの親、数度の対戦であっという間に対抗策を練り出し、勝敗で言えば五分五分の所まで引き上げた。というか流石に簡易融合からの

サウザンド・アイズ・サクリファイスは駄目だと思っただよ僕は。

ようやく一区切りついたところでペガサスさんが「この興奮が覚め止まぬうちにさっそく新カード製作の企画案に取り組みまシヨウ！アカデミアの事は大丈夫デース。鮫島校長先生には私から話を通しておきマース」なるセリフを疲れ果てその場にへたり込んでいる僕に残し部屋を出ていったんだ。

彼の話がイマイチ理解できなかつただけけど何が大丈夫なのだろうか？

そんな僕の疑問に行動をもつて答えてくれたのは先程から脇に控えていたペガサスさんのガードマン達だ。僕の両側にスタスタと立つと両肩をホルルドされヘリポートまで連行されたのさ。捕縛されてしまった宇宙人はこんな気持ちなのだろうか。というか飛行機は嫌でござる！嫌でござるよ！

まあ聞き入れてもらえるはずもなかつただけだね。

あれやこれやという間にインダストリアル・イリユージョン本社へ。

唯一の救いは乗ったものが特権階級者御用達の、この世界の技術力の粋を結集した最高峰のジェット・ヘリだったという点で、空の旅が比較的早く終わったことだろうか。

本社専用のヘリポートに着いた途端にがたいのいい黒服サングラスのガードマン達が出迎えてくれたよ。

休む暇も無く豪華な会議室まで通され、事前に連絡がされていたのだらう、恐らくは本社の重役である面々が厳肅たる雰囲気を出しながら僕らを待っていた。

凄まじく場違いな僕に突き刺される視線。

正直アルバイト感覚でカードサンプルの提供と、実際にそれらが普及していた環境に居た者からの参考意見程度で済むだろうと思っていた僕の見込みの甘さをこれほど後悔したことはない。

まさかここまで大事になるとは誰が思おうか…。

ペガサスさんから軽く僕の紹介があった後、長くなるであろう会議が幕を開けた。

会議とは言っても未だ骨組みすら作られていない企画案だ。正直ペガサスさんの思いつきというか勢いから始まったといっても過言ではなく、まずは事業として取り組むに値するかの議論からはじまり、方針や企画設定やらが討論されている。

時たま僕にも話題を振られることがあるので話題についていかなきゃならないのが辛い。こちらら義務教育が最近終了したばかりの若造なんだ。

まあおかげでこの世界のカードについて、以前から疑問に思っていたことに対する答えがわかった。それはこのデュエルモンスターズ至上主義の世界で、何故カードの供給率が良いとは言えないのかということについてだ。

その解答は呆れるほどに簡単で、カードの存在価値が高いがゆえの弊害とでも言えはいいのだろうか。

例えば現代日本に置いて、考えも無く1万円札を大量に刷ったらどうなるかくらい君達にもわかるだろう。経済全体で見た需要と供給のバランスが崩れ、総需要が総供給を上回り、モノやサービス全体の価格レベル、すなわち物価が持続的に上昇するインフレーションの状態に陥る。つまりは貨幣の価値が下がり、同じ貨幣で買える物が少なくなるのだ。

この世界のカードの存在価値というものはまさに貨幣と同等かそれ以上に規定されている上に経済というものに深く関わっているため、下手にカード供給を増やすとカードの価値がそれに反比例して減少していき、経済的大混乱が起きてしまう。カード価値の信用不安の問題も浮き上がり、デュエルモンスターズ自体が一気に衰退する恐れすらあるだろう。

ゆえにカードの開発や供給に関しては、今まで築き上げてきた体制や価値観を崩さないよう幾度も討論を繰り返し、細心の注意を払った上で実行に移されるのだ。

一般的な新カード開発においてもこのような措置が取られる。

まして今回のシンクロやエクシーズといった企画案はデュエルモンスターズの根幹であるルールや制度にも変革を及ぼす、最高レベルに重要な案件であるということは誰の目から見ても明らかだ。そうホイホイと事が進むはずもない。

他者との連携、特に立体映像システムを一手に引き受けている海馬ソリッド・ヴィジョンコーポレーションとの会談もしなければならぬし、その他の機関ともそれ相応の時間を割いて議論し合う必要がある。

その他にも開発事業がスタートした場合の普及への対応や、その際

に発生しうる問題対策の素案、反対派への対応、新たな事業案の検討、経済界全体の調整等、正直僕には到底理解できないような議題が次々に挙げられている。

もう僕帰っていいんじゃないかな？

「もう少し我慢してクダサーイ」

あっ、そうですか。

というか心読まんでください…。

~~~~~

先程数時間に渡る会議が一先ずお開きとなり、安らぎの時間の到来だ。

会社内にある宿泊施設の一室を用意してもらい、ベッドに倒れ込む。

明日もまた会議の続きがあると聞いて僕の状態は限りなく削られているけど、引き受けてしまった以上ここで放りだすわけにもいかないよね。

ちなみにガイドの奴もここまで付いて来ている。

始めの方は僕の目の届く範囲内にいたんだけど、会議が始まって退屈になったのかいつの間にもやら姿が見えなくなっていた。

こんな大企業の総本社で問題など起こされたら、僕の蚤の心臓が破裂しかねない。アイツが自重してくれていることを願うばかりだが、

楽観的思考すぎるだろうと心の中で溜息を尽き、疲れた体に鞭を打って捜索に乗り出す事にした。

フットワークが軽く、思考回路も僕と遙かにかけ離れている彼女がどこで何をしているのなんて予想をするのは難しいのだけど、アイツを探す事自体は案外容易だったりする。

彼女の通った後に、童話「ヘンゼルとグレーテル」で主人公が森で迷子にならないようパンくずを落としていったが如く、お菓子の袋やら菓子くずがぼろぼろこぼれ落ちているんだ。

それを目印に追跡しながら何やら騒がしい所を探せばいい。十中八九、奴はそこに居る。

予想通りというかなんというか、すでに色々といタズラをしていた形跡が彼女を追う途中で露見していった。どうやら各階に設置されているトイレからトイレトペットパーを片っ端から盗んで来たらしく、数階に渡り吹き抜け構造となっている本社一階の受付ロビーに向かつて、最上階から端を結びつけたそれを遠投しやがったのだ。

小さな垂れ幕のように幾つものトイレトペーパーが風に靡いている光景を、もはや悟りの境地のような顔で眺めた後、本社一階にある土産物屋でガイドの奴を発見した。

休憩用のベンチに座って本社限定ペガサスマンじゅうなるものを咀嚼し、反対側の手には彼女の小さな手の平にも収められるほどの袋を握っている。

なんだよそれ。

僕の疑惑の視線に気付いたガイドがそれを見易い場所まで掲げ、力を込めて握る。

『ふうん…』

握る。

『全速前進だ！』

握る。握る。握る。

『ぶつくしい…』

『強靱！無敵！最強！』

『粉碎！玉砕！大喝采！』

うん…。

もういいからそれちょっとこっちに寄りこしなさい。

というかこれ何なんだよ。よく高速道路のサービスエリアとかに売っている笑い袋の類なのか？社長袋なのか？本体価格1250円とか高過ぎだろこれ。地味に売れてるけど。

海馬社長に許可取っているんだろうか、いや取っているわけないか。あの人がこんなふざけた物を作る許可を与えるはずもない。地味に売れてるけど。

あつ、よく見ると海馬袋じゃなくてシ毎馬袋になってるぞこれ。これで海馬社長とは無関係だと言い張るつもりなのだろうか。やり口が汚いな。地味に売れてるけど。

ヤバい、地味に欲しくなってきた。

僕も記念に買っついていこうかな。

絶対後で買った事を後悔するって分かっているのに買いたくなるこの衝動。

いややっぱり無駄遣いは良くない…いや、でも…。

僕が心の中で葛藤していると本社正面玄関ホールの自動ドアが開き、見覚えのある顔が入ってきた。

「あれ？隼人じゃないか？」

「え？なんで彰がここにいるんだなあ！驚いたんだなあ！」

アカデミアにいるはずの彼が何故ここに。僕も人の事は言えないけど。

軽く彼がここにいる理由を聞いてみたところ、なんでも隼人のデザインしたカードがインダストリアル・イリュージョン社主催のコンテストで優勝したらしい。その際に本社からの勧誘とデュエルアカデミアからの推薦もあって、デュエルカードデザイナーとしてインダストリアル・イリュージョン社に先日正式に迎えられたそうだ。

隼人はカードデザイナーを夢見てデュエルアカデミアを受験したという経緯があるため、今回の事は本当に喜ばしい事である。

良かったな夢が叶って。その年で夢を実現するなんて賞賛に値するよ。

今日はその挨拶に来たらしい。

正直似合っていないスーツ姿には口を挟まないでおこう。

「そういえばもうすぐ進級テストがあるんだなあ。彰は試験受けなくて大丈夫なのかあ？」

え？

「ちゃんと受けないと俺みたいに落第しちゃうんだなあ。でもこの時期にアカデミア外にいるって事はそこら辺の話はちゃんとつけてるんだろ？」

「……………」

「まさか……………知らなか「ちよつくらペガサスさんに話聞いてくる」……………まあ頑張るんだなあ」

大丈夫だよね？

十代 side

今日の集会で卒業試験結果の発表があった。

みんなの予想通り成績トップはカイザーだった。  
全教科で満点を叩きだしての文句なしのナンバーワンだ。

ただの試験だったならばやっぱりカイザーはすげえやっていう感想だけで終わったんだけど、今回は少しばかり意味合いが違ってくる。

卒業試験とはその名の通り、現三年生にとっては最後の試験であり、このデュエルアカデミアで築いてきた集大成を示す場となる。またもう一つ重要なことがあって、それは卒業試験で一番に選ばれた者は卒業デュエルという、在校生に模範という名の道を作るデュエルを行う役割を与えられることだ。対戦相手の在校生はその卒業デュエルに選ばれた3年生が選択する権利を持っているらしい。

これまで卒業デュエルの相手として選ばれていたのは大抵オベリスブルーの生徒で、ごく稀にライエローの生徒、そして俺の所属するオベリスクレッドからは未だ嘗て卒業デュエルの相手として選ばれた者はいないと聞いた。

だから周りのみんなは今年もブルーかイエローから相手を選ばれるだろうと予想している。俺も誰が選ばれるのかワクワクしながら待っていたんだ。

でもついさつき、そのカイザー本人がレッド寮の俺の部屋まで来て、他愛ない話をしていった後にこう言って去って行った。

「卒業デュエルではお前らしい味のあるデュエルを期待しているぞ」

初めは何の事を言っているのか分からなかったんだけど翔に言われ

て気付いた。

俺が卒業模範デュエルの対戦者に選ばれたということに…。

「兄貴、こんな事僕が言うのもなんだけど、兄貴の全身全霊を賭けてお兄さんの相手してやってください。お願いします！」

先程の翔のセリフが胸に反芻する。

オシリスレッドから対戦者が選ばれるのは前代未聞のこと。その事も俺の心にプレッシャーを与える。前に負けた時のような無様なデュエルはできない。

カイザーは強え。俺が知る限り最強の相手の一人だ。そしてカイザーとデュエルするのもこれで最後か…。

勝ちてえ…！

どうすればあのパーフェクトな男に勝てるんだ…！

っつ！？

そうだ！アイツなら何か分かるかもしれない！

「とということ教えてれ！頼む！」

「いや…頼むも何もいきなりそんな事を言われてもわけがわからないのだが…」

ようやくアカデミアに帰り自室でゆっくりできると思った矢先に十代からの襲撃。開口一番のセリフがこれじゃ、エスパーじゃない限り満足のいく回答を返すことは不可能だろ。

なんだかいつもの十代らしくなく、切羽詰まっている感じを受けるがどうしたんだコイツは。

「彰はカイザーから七星門の鍵を奪ったってことは、カイザーを倒したんだろ？あのパーフェクトデュエリストを相手にどうやって勝つことができたんだ？」

「そりゃ確かに勝ちはしたけどなにゆえそんな事を…」

「俺、カイザーから卒業模範デュエルの相手に指名されたんだ」

ああ、そういえばもうそんなイベントもあつたね。正直三幻魔のことやらその後の後始末やら、海馬社長やペガサスさんのことやらで頭が一杯だったからな。進級テストでさえ忘れていたんだ。学校行事のことなんて頭からすっぱ抜けていたよ。ちなみにテストの方はペガサスさんの口添えのおかげでなんとかなるそうだ。良かった良かった。

「俺も前にカイザーに負けた時より強くなったと思うんだけど、それだけじゃカイザーに勝てない気がするんだ。だからカイザーのデ



ツキを研究してどうすれば勝てるのか考えたんだけど中々いい案が浮かばなくて…、だから実際にカイザーに勝った彰に聞きに来たんだ。頼む！教えてくれ！」

そう言つて頭を下げる十代。

ふむふむ、なるほどねえ十代がカイザーのデッキ研究してまで…。

え？

十代が研究？

研…究…？

「十代や、お前なんか悪い物でも食つたのか？それとも熱があるのか？具合が悪いなら無理せず保健室に行ったほうがいいぞ」

「俺は至つてまともだ！」

いやだがしかし、お前がものを考えて行動するなんて想像できないというか。確実にお前はラスボスのダンジョンに事前情報やセーブもなしに突っ込んでいくタイプじゃないか。

「多分今回がカイザーと最後のデュエルになる…。翔にも全力で闘つて欲しいって頼まれてるし、俺だって最後までアイツに勝ちてえんだ…！」

はあはあ〜。

らしくない言動をしていると思えばそういうことか。

しかし七星門の鍵を奪った時はジャツカルさんの時に使った暗黒界を完全にガチ仕様にカスタマイズしたデッキ使っていたからな。まさか僕も初手マインド・クラッシュでサイバー・ドラゴンが3枚落ちるとは思ってもみなかったし、そのままごり押しで終わってしまったから参考になるはずもない。

単純に丸藤先輩のデッキを対策するならば話は簡単だ。

相手のサイバー・ドラゴンと機械族を除去しながら融合召喚できるキメラティック・フォートレス・ドラゴンを融合デッキに差し込むだけで勝率はグンと上がるだろうし、相手の場と墓地の機械族を全除外できる魔法カード、システム・ダウンの採用も考えられる。相手の切り札が分かっているのだから禁止令で封じてしまつのもいいだろう。いつそバーンで焼（ry

でも…。

「十代は本当にそんなデュエルをしたいのかい？」

「どうということだよ？」

「いや、これはまあ個人的な感想なんだけど、そもそも頭で考えるなんてこと自体が十代には似合わないってね」

多少なりとも考えているのかもしれないけど十代は確実に本能とその場の閃きで闘うタイプのデュエリストだ。無理に頭を使つたところでデッキバランスを崩して逆効果にならないとも言えない。

「丸藤先輩のことだ、大方対戦相手に選ばれた時なんか言つてな

かったかい？」

「俺らしい味のあるデュエルを期待している…」

やっぱりね。

「それで頭を使って考えるのが十代らしい味のあるデュエルになるのかって話さ。別に十代の行為が駄目だと言っているわけじゃないよ。相手のデッキ特性を理解し、対策を用意する。これ自体は立派な戦術だし、勝率を飛躍的に上げられるだろうさ。実際三沢は完璧にこのタイプのデュエリストだし、最近はそうでもないけど僕もどちらかというところちら側に分類されるしね」

「難しくてよくわかんねえ…」

まあデュエリストならば誰もが一度は悩む所だ。

「じゃあ簡単な質問をしよう。十代はなんでデュエルするんだ？デュエルに何を求めている？お前にとってのデュエルとはなんだ？」

シンプルだけど答えるのは難しい、そんな質問。

君たちならなんて答えるだろうか。

「俺にとってのデュエル……。俺は……。俺はデュエルが楽しいんだ。世界中にはいろんなデュエリストがいて、そいつらはどんなモンスターを使うんだろう！どんな戦術でくるんだ？そんなことを考えているだけでワクワクしてくるんだ。アカデミアに入ってからも色んな強え奴とデュエルできて、その度に楽しくて楽しくて俺の幸せはデュエルすることなんだなあってそう思ったりもした。勝ったら嬉しいし、負けたら悔しいけど、俺はそういうのを全部ひっくり

めてデュエルモンスターズが大好きなんだ。上手く言葉にできないけど、それが俺にとってのデュエルモンスターズという存在なんだと思う…」

おうふ、これはまたドストレートな。

穢れている僕には眩し過ぎるぜ。

「なら悩む必要はないでしょうよ。勝敗なんて二の次にして丸藤先輩との最後のデュエルを思いっきり楽しめばいいのさ。確かにゲームは勝敗という要素に捕われがちだけど、僕はどのゲームにも本来の役割は遊戯や遊びごと、つまりは楽しむことが根底になって形成されているものなんじゃないかと思っっているんだ。本当の意味で勝者と言えるのはゲームを最も楽しんだ者。遊戯という枠の中で王者足り得るのはそんな人だといいなってという僕の願望でもあるんだけどね」

僕はわりと本気で遊戯王の称号は十代みたいな人が相応しいんだろうなとそう思うよ。

まあこの定義は人によって変わるからなんともいえないけど。

勝負事で勝利を望むことは極自然な事だし、それが楽しいと思えるならばその人はその人なりにゲームを楽しんでいると言えるわけだしね。

要はゲームの楽しみ方の違いさ。

「そっか……、そうだよな…俺は今まで信じてきた俺のやり方でデュエルを心の底から楽しめばいいだけなんだ。ははっ、なんでこん

な簡単な事に気が付かなかつたんだろう。今までずっとそうしてきたのに。サンキューな彰！明日は全力でカイザーと闘い合えそうだぜ！..!」

そうかい。役に立ったのなら何よりだ。

ああそうだ。

「そういえばこれE2社に行った時のお土産。ほらここをこつすと...」

『貴様のおかげでレアカードに傷がついたわ!』

「.....」

「きつ、気持ちだけ受け取っておくよ。じゃあ俺明日の卒業デュエルのために最終調整しなきゃいけないから帰るわ」

うん...、頑張つてね。

十代が去つた数刻後、またもや来訪者が現れた。

「失礼する」

先程も話に出た丸藤先輩その人だ。

「どうなさったんですか？というか珍しいですね僕の部屋に来るなんて」

まあ来客自体が珍しいんだけど、そこはまあ秘密にしておいてくれ。というか突っ込まれたら僕の心が甚大なダメージを被るから止めてください。

「明日の事でちょっとな。俺が十代と卒業模範デュエルをする事は聞いているか？」

ああはい。ていつかついさっき本人から聞きましたよ。

「当初は十代と一之瀬、どちらを選ぼうか迷っていたんだ。しかし君は最近アカデミア内にいなかっただろう？校長に話を伺ったところ、インダストリアル・イリュージョン社まで出向いていていつ帰るか分からないと言われたのでな。十代に頼む事にしたんだ。相手が当日いないかもしれないのでは話にならないからな」

すみません。でも僕のせいじゃないですよ！

いや、僕のせいでもあるんだけど僕のせいじゃないですよ！

「どの道目立つ事を嫌う君ならその時居たとしても十代を勧めていただろう？」

僕の事を良く理解してくれているようでなにより。

「そこでだ。十代とのデュエルが終わった後、俺とデュエルして欲しい。場所は海岸ならほとんど誰も来ないだろうから君にとっては好都合だろう」

「丸藤先輩にはお世話になりましたし、学生の間では最後の機会です。デュエルするのは全く構わないのですが、どうして僕と……？」

「ふっ、カイザーだなんだと言われているが俺も一介のデュエリストだ。異なる世界のデュエリストなどと聞いたら勝負してみたいと思うのはデュエリストとして自然な発想だろう。これが最後のチャンスかもしれないなら尚更だ。それに以前君に負けた借りを返さなければならぬいな」

そう言っただけで薄く笑う丸藤先輩。

だからあの時の勝負は僕の運が良かっただけじゃないですか！なんて言っても、それも実力の内だと返すに違いない。

まあいいや。先輩の門出くらい後輩としてしっかりと祝わせてもらいますよ。

僕の返事に満足した丸藤先輩が礼を言っただけで部屋を出て行くとする。

「あっ、ちょっと待ってください！これE2社で買ってきたお土産です。どうぞ貰ってやってください」

ぎゅっ。

『負け犬から馬の骨に昇格させてやる！』

「……………」

凍る室内温度。

「ははっ、やだなあ…冗談ですよ。こちらが本当のお土産です」

そう言って限定菓子折りセットが入った袋を渡す。一応買っておい  
て良かった。

「ああ気を使わせて済まない。ありがたく頂戴しておこう。だがさ  
りげなく滑り込ませたその声が出る袋は遠慮しておく」

「はい…」

くそう、こっそり混入できたと思ったのになあ…。

というかもう飽きたからこれいらんだけどどう処理しよう。

「吹雪なら気に入るかもしれないぞ」

なるほど！

ちよっくら渡してくらあ！



第30話 会議と悩みとお土産と（後書き）

次回はVSカイザー予定。

さあなんのデッキを使おうか絶賛迷い中。

第31話 表裏（前書き）

V Sカイザー。

### 第31話 表裏

卒業模範デュエル当日。

アカデミアの生徒のほとんど全ては今頃デュエルフィールドで十代対丸藤先輩のデュエルで盛り上がっている頃だろう。

だろうという推測に基づく発言をしているのは僕がそのほとんど全ての生徒の中に含まれていないためである。

僕も彼らの決闘に興味は尽きないんだけど、試合前に相手の札を見るのは少しばかり気が引けたものでね。丸藤先輩の大体のデッキ構成や戦術は分かっているんだけど、まあ気分の問題さ。

よって僕は十代と丸藤先輩のデュエルが終わるまでひたすら自宅警備に勤しむだけである。

「しっかし丸藤先輩とデュエルねえ……。海馬社長とやるよりかはまだ精神的に頑張れるけど……」

しかしそんな僕の独り言に相槌を打つ存在が……。

「へえ、あのぼうやとね……。なんなら私が代わりに相手してきてもいいわよ?」

「……若干動けるようになったとはいえ人形のお前がどうやってデュエルするんだよ……」

目の前には威厳を出すために短い腕を組もつと四苦八苦しているカ

ミューラ人形。

悪意の権化であるガイドの玩具として遊ばれていた影響か、最近になって自分の力で動けるようになったらしい。まあ動けるといって、も初めは生まれたばかりの小鹿のようにすっ転んばかりだし、マシになった今でもあっちへふらふらこっちへふらふらする状態だ。力も無く害のある存在にはなりえないから捨て置いている。一度歩けないならばとローリングを駆使して逃走を図ったこともあったのだけど、幾度トライしても結局ガイドの罠に掛かり御用となるのを繰り返し、憔悴の顔と共に降伏宣言。そもそも逃げ出したところで人形の体ではどうしようもない事に気付き、いずれ自身の体を取り戻す事を報酬に悪魔娘に仕えることで話がついた。というか僕がそう打診してやった。天の邪鬼なガイドの奴がお前の願いを叶えてくれるとは限らないけどな。

「私が指示するから貴方が手を動かさなさいな。今度こそあの坊やを私のコレクションの一部にしてあげるわ！ふふふっ……」

カミューラは未だに丸藤先輩に御執着らしい。

というか仮に丸藤先輩を人形にしたところでお前も人形には変わらないからな。

いや、人形同士だからこそ芽生える何かがあるのか？

うん…、ないな。

それ以前に闇のアイテムなしに闇のゲームや、罰ゲームである対戦相手の人形化ができるのかというところから甚だ疑問だ。

「連れて行かないからな。説明とか面倒くさいし……」

少し前にも勝手に僕のバッグに潜りこんでいたのを辛うじて教室前の廊下で気付いたんだが、カミューラに文句を言っていたところに丁度姉嬢が登校。傍目人形相手に話しかけている姿を見られ、あらぬ誤解を受けるところだったんだ。

「一之瀬様は人形と会話できるのですね。私にもできるでしょうか？」

少しばかりズレた誤解の仕方だったけど本人の目は至って真面目だったとだけ言っておこう。勿論姉嬢に関してはちゃんと諭しておいたから心配はいらない。

その後も連れて行けと五月蠅いカミューラを簾で巻いていたら、丸藤先輩から連絡が入った。

卒業模範デュエルが今終わったと。

なんだかいつもより機嫌が良さそうだから順当に丸藤先輩が勝ったのかと思ったら、どうやら十代とのデュエルはドローとなったらしい。

おお大健闘じゃないか十代。

僕にも期待しているとかなんとか言っておこうから切ってしまった。

「よいしょつと…」

布団もグルグル巻きにしたからもうカミューラも追ってこれんだろ。

じゃあ僕もいきますかね。

カイザー亮side

遊城十代との卒業模範デュエル。

以前に闘った時より、彼は遙かに成長していた。

序盤から十代らしいキレのあるデュエルを見せ、俺の全力を出したのにも関わらず最後まで奮戦し、結局は負けず嫌いなあいつの意地によって引き分けまで持つていかれてしまった。

やはり彼を最後の相手に選んで良かったと心から思える、そんなデュエルを行えた。

そしてもう一人。

十代と同じくアカデミアの入学試験の時から興味を抱いていた人物。

普段の生活においてはやる気のない言動が目立つが、ラー・イエロ―からあつという間にオベリスク・ブルーに昇格した唯一の生徒。

見慣れぬカードを多数使うとは思っていたが、その正体はこの世界ではない、別の世界から来たというデュエリストだったとは流石に思いもよらなかった。本人が望んでこの世界に来たわけではないらしいがな。

そして先日の三幻魔の事件の際には、セブンスターズ側にまわっていた彼と知らずに闘い敗北を喫した。

久々の敗北。

あの時は三幻魔による世界の危機とも言える状況であったため、深く考える事はできなかった。

パーフェクトデュエリストと呼ばれる俺に何が足りないのか。

アカデミア卒業後、デュエルモンスターのプロリーグに挑戦する前に確認しておきたい。

「来たか…」

「遅れて申し訳ありません。」

一之瀬、君ともう一度闘えばそれがわかるかもしれない。

もはやこれ以上の言葉はいらない。

デュエルディスクを構えると、彼も一息ついた後にデュエルディスクを展開する。

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

「先攻は僕が貰いますよ。手札からダーク・グレファアを通常召喚

します！」

《ダーク・グレファア》 ATK / 1700 DEF / 1600

十代は俺のサイバー・ドラゴンの展開を警戒し後攻を選択したが、彼は真逆に先攻を取って来たか…。

「そしてモンスター効果を発動！1ターンに1度手札から闇属性モンスター1体を捨てる事でデッキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る。デッキからハウンド・ドラゴンを墓地に送ります」

「そしてフィールド魔法、ブラック・ガーデンを発動！」

その発動宣言と共に一之瀬の足元から蔓が蛇の様にのた打ちながらフィールドを浸食していく。辺りは蔦が蔓延り、毒々しい色の薔薇が咲き乱れている。

まるで何人たりとも逃れ得ぬ棘の牢獄。

「ようこそ、誘いの黒薔薇の園へ」

以前セブンスターズが一人、アマゾネスのタニヤが使用したアマゾネスの闘技場にどこか似ている。しかし、タニヤのそれとは違い、こちらは薄ら寒さを感じさせる何かが…。

「これで僕はターンエンドです」

「俺のターン！相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、サイバー・ドラゴンは手



札から特殊召喚できる！出でよサイバー・ドラゴン！」

《サイバー・ドラゴン》 ATK/2100 DEF/1600

サイバー・ドラゴンの召喚と共に、突如フィールドに蔓延る鋭利な棘の付いた幾つもの蔓がサイバー・ドラゴンに絡みつき、その力を奪っていく。

「なんだこれは…!？」

《サイバー・ドラゴン》 ATK/2100 ATK/1050

「ブラック・ガーデンが表側で存在する間、召喚、特殊召喚されたモンスターの攻撃力は半分となり、自動的にローズ・トークンが相手の場に攻撃表示で特殊召喚される。ここはブラック・ガーデン、モンスターの命を養分に花咲かせる魔界の花園です」

一之瀬の言通りに、彼の場に一輪の薔薇が咲く。

《ローズ・トークン》 ATK/800 DEF/800

成程。攻撃力半減効果とトークン生成効果を併せ持つフィールド魔法ということか。

「しかしローズ・トークンの攻撃力は僅か800ポイント。半減されたサイバー・ドラゴンでも十分に破壊は可能！サイバー・ドラゴンでローズ・トークンに攻撃！エヴォリュ ション・バースト！」

彰LP4000 3750

「俺はカードを1枚セットし、ターンを終了する」

「僕のターン。手札よりサイバー・ダーク・エッジを攻撃表示で召喚！」

《サイバー・ダーク・エッジ》 ATK/800 DEF/800

ATK/400

刃物のような尖った翼に漆黒の外殻を身に纏ったモンスターが場に現れた。

サイバー・ダーク…。

サイバーの名を持っているモンスターにも関わらず、サイバー流の後継者である俺が見た事のないモンスター…。

まさか話に聞くサイバー・エンドが陽、表なら、それと対をなす陰裏の存在である誕生とともに初代の師範が封印したとされているカードなのか…？

そんなカードまで所有していようとは…。

「ブラック・ガードンの効果はフィールド魔法ゆえ勿論僕にも適用されません。よって丸藤先輩の場にローズ・トークンが特殊召喚されます」

サイバー・ダーク・エッジに蔓が巻きつき力を吸収。

その養分によって俺の場に薔薇が花開く。

《ローズ・トークン》 ATK / 800 DEF / 800

「続いてサイバー・ダーク・エッジの効果が発動。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下のドラゴン族モンスター1体、ハウンド・ドラゴンを選択し、装備カードとしてこのカードに装備。ダーク・エッジの攻撃力はこの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップ！」

《サイバー・ダーク・エッジ》 ATK / 400                      ATK / 2100

墓地より引き摺り出された細身の竜にサイバー・ダーク・エッジが取り憑く。

他のドラゴンを己が力の糧としているのか…。

あのモンスター相手に攻撃力が半減されたサイバー・ドラゴンでは太刀打ちできないが、そう易々とやられるつもりはない！

「罠カードオープン！アタック・リフレクタ　・ユニット！俺のフィールド上のサイバー・ドラゴン1体を生贄に捧げ、自分のデッキからサイバー・バリア・ドラゴンを特殊召喚する！」

サイバー・バリア・ドラゴンは1ターンに1度相手モンスターの攻撃を無効にできるが、それはこのカードが攻撃表示の場合のみの効果だ。しかしサイバー・バリア・ドラゴンの攻撃力は僅か800ポイント。ブラックガーデンの効果により更に半減され、相手の場に生成される攻撃力800ポイントのローズ・トークンにすら及ばない。一度だけ攻撃を無効にした所で2体目のモンスターで追撃を受ける事必至。

ならば…。

「サイバー・バリア・ドラゴンを守備表示で特殊召喚する！」

《サイバー・バリア・ドラゴン》 ATK/800 DEF/2800  
ATK/400

「相手フィールドにモンスターが特殊召喚されたため、僕のフィールドにローズ・トークンが特殊召喚されますよ」

《ローズ・トークン》 ATK/800 DEF/800

ブラック・ガーデンの攻撃力半減効果により、元より守備力の高いサイバー・バリア・ドラゴンを戦闘破壊するのは至難。まずは場を繋ぎ、ブラック・ガーデンの打開策を練る。

「バトルフェイズに移行。ローズ・トークンでローズ・トークンに攻撃！」

トークンの攻撃力は互角。

相打ちとなり互いの薔薇が消滅する。

「さらにサイバー・ダーク・エッジで攻撃宣言！」

「馬鹿なっ!? サイバー・バリア・ドラゴンの守備力は2800ポイント。サイバー・ダーク・エッジでは破壊することはできないはずだ！」

「サイバー・ダーク・エッジのモンスター効果発動です。このカードは攻撃力をダメージ計算時のみ半分にすることで相手プレイヤー

に直接攻撃する事ができる！相手プレイヤーにダイレクトアタック  
！カウンター・バーン！！」

サイバー・バリア・ドラゴンの防御をすり抜け、相手モンスターの  
攻撃が襲いかかる。

「くっ…！」

カイザー亮LP4000                    2950

「そしてカードを1枚セットしターンを終了します」

「面白い。俺のサイバーと君のサイバー・ダーク、どちらがデュエ  
ルを制するか…。俺のターン、ドロー！」

「俺は魔法カード、強欲な壺を発動し更にカードを2枚ドローする  
！」

ふっ、来たか。

「まずはその邪魔なフィールド魔法から崩させてもらおうぞ。速攻魔  
法、サイクロンを発動！フィールド上に存在する魔法、罫を1枚破  
壊する！無論対象はブラック・ガーデンだ！」

雷を纏った荒れ狂う暴風がフィールドの棘を根こそぎ破壊し尽くす。  
これで厄介な効果は消え去った。

「手札よりプロト・サイバー・ドラゴンを攻撃表示で召喚する！」

《プロト・サイバー・ドラゴン》 ATK / 1100 DEF / 600

「更に融合を発動！手札のサイバー・ドラゴン2体とフィールドのプロト・サイバー・ドラゴンを融合！プロト・サイバー・ドラゴンはフィールドに表側表示で存在する限り、カード名はサイバー・ドラゴンになる！サイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》 ATK / 4000 DEF / 2800

「バトルだ！サイバー・エンド・ドラゴンでサイバー・ダーク・エッジを攻撃！エターナル・エヴォリユ ション・バースト！！」

これこそがサイバー流の切り札。  
一気に一之瀬のライフポイントを削り取る。

彰LP3750 1850

「くっ…、サイバー・ダーク・エッジのモンスター効果発動！このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊することで戦闘破壊を免れる！」

《サイバー・ダーク・エッジ》 ATK / 2100 ATK / 400

身代わり効果も備えていたか…。

だが寄生していたモンスターが墓地に送られたことにより戦闘力は激減。

「俺はカードを1枚セットしターンを終了する」

「僕のターン、ドロー！」

「ダーク・グレファアの効果を発動します。手札からサイバー・ダーク・キールを墓地に送り、デッキよりサイバー・ダーク・ホーンを墓地へ…」

何故サイバー・ダークを墓地へ…。

相手の思惑は分からないが警戒しておいた方が良いでしょう。

「僕はフィールドに存在するレベル4のサイバー・ダーク・エッジとダーク・グレファアをオーバーレイ！2体のモンスターでネットワークを構築！」

2体のモンスターが光に溶け螺旋の軌道となりてフィールドに巨大な魔法陣を描く。

影丸戦でも一度見たこの世界にはまだ存在せぬ召喚方法。

「エクシーズ召喚！<sup>ナンバーズ</sup> No.39 希望皇ホープ！」

《<sup>ナンバーズ</sup> No.39 希望皇ホープ》 ATK/2500 DEF/2000

陣から発せられた光より現れたのは純白の翼を広げ、黄金に輝く鎧を纏った白き騎士。

腰には対の剣を携え、場を威圧する様はまさに主君を守る忠義の騎士<sup>イト</sup>といったところか。

「ホープの攻撃力ではサイバー・エンド・ドラゴンはおるか、サイ

バー・バリア・ドラゴンすら破壊できませんね。これで僕のターンは終了します」

「俺のターン、ドロー！」

一之瀬の場には攻撃力2500の希望皇ホープと伏せが1枚のみ。ホープを攻撃表示で立たせているのは伏せカードによる迎撃を狙っているか、もしくはホープにそれに準ずる効果があるためだろう。

現状こちらが有利ととれるがやはりそう簡単に勝たせてはもらえないようだな。

だが先程の行動、サイバー・ダークを墓地に送っていたのは確実に反撃の準備。時間を与えれば戦局をひっくり返される恐れがある。ここで逃げるわけにはいかない。相手の畏への対策もできている。

「バトルフェイズ！サイバー・エンド・ドラゴンで希望皇ホープに攻撃！エターナル・エヴォリュ ション・バースト！！」

「相手モンスターの攻撃宣言、ホープのモンスター効果を発動！そのモンスターの攻撃を無効にする！ムーンバリア！」

先程からホープの周りを旋回していた2つの光の球の内の一つがホープの胸元にある碧色の宝石の中に取りこまれ、宝石と同色の光を放つ。すると両翼が堅固な盾と化し、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃が完全に防がれる。

「成程。攻撃無効のモンスター効果か。しかし今の様子を見る限りその効果は無制限に使えるものではないらしいな。効果を使用した



時に取りこまれた光の球。先程までは二つあったが今は一つのみ…。つまりその効果を使えるのは後一度だけということか」

「流石ですね。ホープの効果を使用するためにはエクシーズ召喚に使用した時の素材を一つ取り除く必要があります。ホープは2体のモンスターを使ってエクシーズ召喚されたため、効果を使えるのは後一度のみ。さらに言ってしまうとこのカードはエクシーズ素材が無い状態で攻撃対象に選択された時自壊してしまうというデメリットも抱えています」

つまりホープ破壊するには2回攻撃する必要があるということ。次のターンまで時間を稼がれるのは免れないか…。

「俺はこれでターンを終了する」

「僕のターン、ドロー」

「手札から魔法カード、テラ・フォーミングを発動します。デッキからフィールド魔法1枚をサーチ、手札に加えるカードは竜の渓谷。そしてそのまま発動です！」

フィールドの大地がせり上がり、辺りは巨大な渓谷へと姿を変える。上空ではドラゴンの鳴き声があがり、その翼で飛翔する姿が至る所で確認できる谷底。

「フィールド魔法の効果は今使えませんが、フィールド魔法があるという事実が必要だったんですね。僕は融合デッキよりサイバー・エンド・ドラゴンをゲームから除外し、手札よりSinサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚！」

《Sinサイバー・エンド・ドラゴン》 ATK/4000 DEF  
/2800

「なっ!? サイバー・エンド・ドラゴンだと!？」

いや、違う!

確かに姿形は良く似ているが幾つか相違点が見られる。相手のサイバー・ドラゴンの羽根は純白ではなく、その対極である漆黒。そして3つの頭にもそれぞれ白から黒へと着色が変化している。

「Sinサイバー・エンド・ドラゴンはサイバー・エンド・ドラゴンと対になるモンスター。故にステータスもサイバー・エンド・ドラゴンと同等のもの」

まさに表裏ということか。

攻撃力4000にも及ぶモンスターを簡単に召喚したのは賞賛に値するが、先程のホープと同じ。強力なモンスターや効果にはそれに付随する代償があることが一般的だ。それは先程の一之瀬の発言と行動から推測できる事でもある。

つまり…。

「フィールド魔法が存在しないと召喚不可のモンスターということか…」

「むう正解です。正確に言えばSinと名のつくモンスターはフィールド魔法が存在しないと場に顕現できないデメリットを負ってい

ます。召喚してからも少しばかり厄介な制約がまとわり付くのですけどね」

それでも攻撃力4000のモンスターを容易く出されるのは辛いところがあるぞ。

「バトルフェイズ！Sinサイバー・エンド・ドラゴンでサイバー・エンド・ドラゴンに攻撃！エターナル・エヴォリユ ション・バースト！！」

「ふっ、サイバー・エンド・ドラゴン同士のバトルか。面白い、受けて立つぞ！反撃のエターナル・エヴォリユ ション・バースト！！」

2体のサイバーエンドから放たれた光線。

片や白光、片や黒線。

互いの光線が互いを貫き、フィールドに粉塵を巻き起こす。

そして視界を覆う土煙が晴れた時…。

「なんだあのモンスターは！？」

フィールドには未だ嘗て見た事のない黄金に染まる巨大なドラゴンが君臨し、こちらを睥睨していた…。

彰 Side

「自分フィールド上に存在するSinと名のついたモンスターが戦闘またはカードの効果によって破壊された場合、ライフポイントを半分支払うことよつてのみ、このカードは特殊召喚できます。降臨せよ！Sinトゥルス・ドラゴン！！」

彰 LP 1850            925

《Sinトゥルス・ドラゴン》 ATK/5000 DEF/5000

数多の矛盾より生まれし竜の眞実の姿。

1ターン目にダーク・グレファアの効果によつてコイツを墓地に送つていたので。

「攻撃力5000!?!」

「まだバトルフェイズは終わつてないですよ。Sinトゥルス・ドラゴンでサイバー・バリア・ドラゴンを攻撃！更に希望皇ホープでプレイヤーにダイレクトアタック！ホープ剣・スラッシュユ！！」

Sinトゥルスの一撃でバリアドラゴンは一瞬にして粉碎され、ホープによる追撃が決まる。

「ぐうあああああああああああつー!!」

カイザー亮 LP 2950            450

流石に削り切れないか。

「これで僕のターンは終了です」

というかもうできる事が無いと言った方が正しい。

丸藤先輩の場には伏せカードが1枚のみ。

これで押し切れるといいけどそうは問屋が卸さない気がする。

「流石だな……。十代といい君といい、俺はいい後輩を持ったものだ。だが、最後に勝つのは俺だ！ドロー！」

「俺は魔法カード、天よりの宝札を発動！最後の勝負に向けての先輩からの手向けとして受け取るといい。互いに手札が6枚になるようにドローする」

あっ、有難うございます。

「手札から速攻魔法、サイバネティック・フュージョン・サポートを発動！ライフポイントを半分支払う事によってこのターンに機械族融合モンスター1体を融合する場合、自分の墓地に存在する融合素材モンスターをゲームから除外することで融合召喚を行う事が出来る！」

カイザー亮LP 450 225

「そして魔法、パワーボンドを発動！墓地に存在する3体のサイバ

ー・ドラゴンをゲームから除外し、サイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚する！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》 ATK/4000 DEF/2800

「パワーボンドによって特殊召喚されたモンスターは攻撃力が2倍となる！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》 ATK/4000 ATK/8000

「更にサイバー・ジラフを攻撃表示で召喚し、バトルフェイズ！サイバー・エンド・ドラゴンでS i n t ウルース・ドラゴンに攻撃！エターナル・エヴォリユ ション・バースト！！」

これを通すと僕の負け。

「させませんよ！希望皇ホープの効果によりサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃を無効にする！ムーンバリア！！」

S i n t ウルースに向かった光線の前にホープが回りこみ、その両翼で怒濤の攻撃を防ぎきる。

だが…。

「これでもうその効果は使えまい。サイバー・ジラフで希望皇ホープに攻撃宣言！そしてホープは自らの効果で自壊するんだったな」

《サイバー・ジラフ》 ATK/300 DEF/800

ぐはぁ、ベラベラ弱点を喋るんじゃないか…。

「メインフェイズ2に移行し、サイバー・ジラフの効果を発動！このカードを生贄に捧げる事でエンドフェイズ時まで俺の受ける効果ダメージを0にする。これによってパワーボンド発動ターンのエンドフェイズ時に、特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けるというデメリットを無効にする。カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

やっぱり自滅はしてくれないよね。

期待してなかったといえば嘘になるけど。

「僕のターン、ドロー！」

「竜の渓谷の効果を発動。手札を1枚捨てる事により、デッキからドラゴン族モンスターを墓地に送ります。手札のハウンド・ドラゴンをコストに仮面竜を墓地へ…」

この行為にはあまり意味はないけれど、少しでもアレの攻撃力の底上げのためだ。

「僕はフィールド魔法をセットし竜の渓谷を破壊します。そしてS i n t ウルース・ドラゴンはフィールド魔法が表側表示で存在しない場合フィールドに存在できず破壊される」

あっけなく砕け散るトゥルースを見て丸藤先輩が呆気に取られた顔をしている。

そりゃライフ半分支払ってまで召喚したモンスターを簡単に捨てる

なんて普通は思わないだろう。だけどこいつの本来の役割はこれから呼び出すモンスターの餌なのだよ。

「魔法カード、サイバードーク・インパクトを発動！自分の墓地よりサイバー・ダーク・ホーン、サイバー・ダーク・エッジ、サイバー・ダーク・キールをそれぞれ1枚ずつデッキに戻し、鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンを融合召喚します！」

全てのサイバー・ダークモンスターの融合体。それぞれの形状の特徴を取りこみ、巨大な竜となりて場に顕現する。

《鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン》 ATK/1000 DE  
F/1000

「サイバー・ダーク・ドラゴンの効果発動！このカードが特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。そして装備したモンスターの攻撃力分、サイバー・ダーク・ドラゴンの攻撃力がアップ！更にこのカードの攻撃力は自分の墓地に存在するモンスターの数×100ポイントアップする。墓地のモンスターは6体。よって攻撃力は600ポイント上昇！」

Sintウルース・ドラゴンの巨体が墓地より引き摺り出され、サイバー・ダーク・ドラゴンが寄生する。更に墓地より湧き出る瘴気がサイバー・ダーク・ドラゴンのパワーを更にする。

《鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン》 ATK/1000  
ATK/6600



普通のデュエルでは攻撃力6600でも大したものだけど、それでもまだサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力には敵わない。

「カードを2枚セットしてターンを終了します」

これで僕の間にはサイバー・ダーク・ドラゴンと序盤からずっと伏せたままのカードに、今伏せた2枚を加えリバースカードが3枚。そしてもう使わないであろう伏せのフィールド魔法。

最後の勝負は次の丸藤先輩のターンのようだね。

「俺のターン、ドロー！」

「長い勝負だったが、これで終わりにしよう。このターンで俺の全力を見せてやる。十代は最後まで付いてきたが、一之瀬、君はどうだろうな」

十代も頑張ったって言うのなら僕だって頑張らせてもらいますよ。

「バトルだ！サイバー・エンド・ドラゴンで鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンに攻撃！エターナル・エヴォリュ ション・バースト……！」

幾度も放たれる破壊の光線。

まずは前哨戦だ。

「僕は畏カード発動！デモンズ・チェーン！フィールド上に存在す

る効果モンスター1体の効果を無効化し、更に攻撃を封じる！」

虚空より飛び出した鎖がサイバー・エンド・ドラゴンに絡みつぎ、その行動を制限しようとする。

だが…。

「リバースカード、トラップ・ジャマーを発動！このカードはバトルフェイズ中のみ発動でき、相手の罠カードの発動を無効にし破壊する！」

あのパーフェクトデュエリストがそう簡単にこんなバレバレの罠を通すわけがない。

そんなこと分かっていたさ！

「ダメージステップに入り、リバースカード、速攻魔法リミッター解除を発動！自分フィールド上に存在する機械族モンスター、サイバー・ダーク・ドラゴンの攻撃力を倍にする！」

《鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン》 ATK / 6600  
ATK / 13200

制限が外れたサイバー・ダーク・ドラゴンが勢り立ち、反撃の咆哮を上げる。

「ふふつ、先程の十代とのデュエルと同じような展開になるとはな…。こちらからも行くぞ！リバースカードオープン！速攻魔法リミッター解除を発動！サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力を倍にする！」

やはり攻撃力変動効果を持つカードを伏せていたか…。

「十代はこの局面でなお足掻いて見せた。お前も見せてくれ、パーフェクトをも超える可能性を…！」

十代と同じくらいに僕を買ってくれているとは…。

僕はヘタレだけど相手の期待に答えたいと思う気概くらいはあるんだ。

まだ手は残されている。

随分と前に伏せたのにここまで使う局面が無かった最後の伏せカード。

ここにきて使う時が来るとは…。

「丸藤先輩。これが僕の最後の一手です。先輩のリミッター解除にチェインし、リバース・カード発動！速攻魔法、禁じられた聖槍！フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力を800ポイント下げる！」

天より飛来したるは伝承に謳われるロンギヌスの槍。

その刺し傷から血を受けた聖杯は持つ者に奇跡の力を与える逸物。

「発動の気配すら見えなかったリバースカードを今使うか…。だが、たかが攻撃力を800ポイント下げようとも、その絶対なる力の差は揺るがない！」

「聖なる槍と謳われたそれを甘く見ない方が良いでしょう。この聖槍、そしてその刺し傷より血を受けた者は神の加護を受け、エンドフェイズ時までこのカード以外の魔法、罠カードの効果を受けなくなる！」

チエーンを逆順処理。

カード効果の応酬は最後に発動したのから適用される。

「なん…だと…!？」

「禁じられた聖槍の効果を受けたサイバー・エンド・ドラゴンにリミッター解除の効果は適用されない!よって攻撃力は…」

《サイバー・エンド・ドラゴン》 ATK/8000      ATK/  
7200

「馬鹿なっ!？」

「在校生の一人として卒業生に送る最後の一撃です!鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンよ!反撃のフル・ダークネス・バースト!」

サイバーエンドとは対照的な漆黒の一撃が白光を打ち消し、砂塵と轟音を巻き起こす。

「ぐうっぐうっぐうっぐうっぐうっぐうっぐうっぐうっ!」

カイザー亮LP225      0

「全く…十代にしるお前にしる最後まで予想をいい意味で裏切ってくれる…」

僕は十代程奇想天外な事はしてないつもりだけどなあ…。

「これからプロリーグに参戦するというのに最後のデュエルで2戦とも勝ち星を拾えないとはな…。俺もまだまだ研鑽が足りないようだ。勝負に熱くなり、伏せカードの警戒を怠ってしまったか…」

いやあ、こちとらギリギリでしたけどね。

というかライフポイント計算がえらい事になってた。

「だが良い経験になった。パーフェクト…確かに聞き覚えの良い言葉かもしれないが、それはこれ以上成長の余地がない限界とも言える。俺は完璧という言葉に満足し、己の限界を己で決めてしまったようだ。だが…十代や一之瀬、君達とのデュエルを通してこう思った。俺はまだまだ高みへ辿りつけていない。だから…」

一拍入れた後、こちらを真剣に見つめる。

「プロリーグを通し俺は今より強くなる。必ず強くなってみせる。パーフェクトという俺の限界を超え、更なるデュエリストの高みへ至ってみせる。そしてその時こそ君から勝利を奪わせてもらうぞ」

そう言っつて右手を差し出しニヤリと笑う丸藤先輩。

これはあれか？

ライバル認定されてしまったのだろうか。

カイザーと呼ばれる丸藤先輩が相手では僕にはちと荷が重くないかと思わないでもない。

現状でも僕が丸藤先輩に優っているのはカードプールの量くらいのものだと思っている。そしてそれが埋まるのは時間の問題だ。今も着々と新規カードの企画案が検討されているしね。うかつかしていると一足飛びに離されてしまうだろう。

でも…。

「こちらもおつさりと負けないよう研鑽を積んでおきます。僕も一応負けず嫌いな方だと思うのでね…」

こちらからも手を差し出し、しっかりと握手を交わす。

こういうのも偶には悪くない。

そしてその日、デュエル・アカデミアの皇帝カイザーと称された男が学園を去っていった。

### 第31話 表裏（後書き）

何のデッキ使おうか散々迷った結果、あんぎゃーすさんの案を頂きました。有難うございました。

サイバー流対決も試案したのですが、キメフォ乙な展開を避けられそうになかったので裏サイバーに。

唯の裏サイバーだと味気ないので黒庭突っ込んだり、出してみたかったSinサイバーエンド入れたりしたら事故率が高そうなデッキになりました。

困った時の死者蘇生、強欲な壺、天よりの宝札からいつになったら卒業できるのか。

閑話 顔合わせ（前書き）

すっかり読み返さないと自分でもどんなこと書いてきたかあやふやになってきた今日この頃。



## 閑話 顔合わせ

僕が通うデュエルアカデミアという学校はその名の通りデュエルモンスターズに関する勉強を取り扱う専門学校である。

しかし扱う教材はなにも全てデュエルモンスターズの事だけではなく、他の学校と同じく一般教養の類も存在する。それと同様にこの学校でもあるような部活動やサークル活動も行われているんだ。

もともと運動系の部活動はいくら練習した所でアカデミアが存在するのは絶海の孤島だ。そんなところまで対戦校が来てくれるはずもないし、逆にこちらから出向くなんて面倒はできない。よって部活動といっても軽いサークルみたいなものという捉え方をするのが正答と言える。適当に身内で集まってスポーツを楽しむ、そんな感じの軽い活動内容。

女生徒が多いという理由から、女っ気のないライイエローやオシリスレッドの生徒はテニス部への入部が多いらしいが、テニス部の部長という者は代々学年で最も熱血漢な（もとい暑苦しい）奴がなるという謎の伝統があり、そのような邪な理由で入部したものは部長の扱いで地獄を見る事になるそうだ。

そんなテニス部という例外を除き運動系の活動はお遊び程度のものが多いためそこまで大した活動をしているわけではないが、文化系のものになってくると少しばかり話が変わってくる。例えば「アイリスの会」という紅茶サークルはオベリスクブルーの女生徒のほとんどが入部している大規模なモノで、表では紅茶とお喋りを楽しむことをコンセプトに掲げあげているが、実際はそこで生徒間のコミニティを広げ卒業後のコネクションを築いたりすることを目的と

しており、精力的に取り組んでいる生徒が多い。

勿論デュエルアカデミアらしく、デュエルモンスターズに関する活動をしている部活動も多数存在しており、三沢は「カード理論研究会」にちよくちよく足を運んでいる。他にも三沢が隠れてアイドルカード同好会の部室を訪れていたのを偶然目撃したその日は、僕の昼飯がちよつとばかり豪勢になったのは言うまでも無い。今でもそのネタでちよくちよくお昼を御馳走になっている。

学園非公式だけど吹雪さんのファンクラブやら明日香のファンクラブなんかも目下活動中。どの世界でもこの手のクラブに参加する者には無駄にアグレッシブな奴が多く、聞くところによると、同じオベリスク寮の生徒であり両者とある程度接点のある僕を無理やりに入会させ、彼ら兄妹に関する情報を集めさせるといふ計画を立てた者もいたらしい。まあ僕はジャッカルの姐さんの舎弟としての認知度が高かったために、姐さんを恐れて計画段階でおじゃんになったようだけど。

そして今僕が訪れている部活は文化系に属しているけど、部員が極端に少なく、このデュエルアカデミアではあまり人気が無い部活動。茶道部である。

どうもこの学園では西洋系のお洒落な紅茶サークルの方に人が流れてしまい、和の心である茶道のほうに人が集まらないという悲しき現状のようだ。

僕自身は誇り高き帰宅部であるが、紬さんが茶道部であるためにたまにお邪魔させてもらっている。

本日も彼女からのお誘いがあり、こうして出向いた次第。

いつもはジャツカルの姐さんと一緒か、僕一人で訪問する事がほとんどなのだけど今日は若干違う。ここまで来る途中で明日香とぼったり遭遇し「俺もいたぞ!」、茶道というものに少し興味があつた彼女も付いてき「だから俺もいるぞ!」… ついでに三沢も付いてきたのだ。

「ようこそ御出で下さいました。至らぬ点も御座いましょうが、どうぞ御ゆるりと」

予定とは違い複数人で来てしまったけど、紬さんは嫌な顔一つ見せず、逆に喜んで応対してくれた。そもそも茶道部には紬さんともう一人の女生徒しか在籍しておらず、お客さんは大歓迎ということだ。

人数的にはいつ廃部になつてもおかしくないが、バツクに鮫島校長という最高の後盾を擁しているためにそのような事態は避けられているらしい。どうして鮫島校長が態々一部活程度に気をかけているか不思議でならなかったが、とある事情を聞いてすぐにその疑問は氷解した。顧問として鮫島校長の意中の人であるトメさんを据えているからという凄まじく私的な理由がその答えだ。職権乱用とも言えなくもないが、そのおかげで紬さんが助かっているというなら僕としても文句はない。

茶室に入り藺草の香りが僕らを迎えた。やっぱり畳はいいね。

人伝に聞いた知識なんだけど畳には調湿効果や断熱効果、防音効果に加えて空気清浄の効果もあるらしいよ。

細さんは伊達に良いとこの出じゃないらしく、いつもはのほんとしてどこか抜けているように感じる彼女だけど、座り方や立ち方、お辞儀の仕方や歩き方、襖の開け方や閉め方など隅々まで洗練された所作を見せ、隣の明日香や三沢も感銘を受けているようだ。僕ももう何度も見ているんだけど、毎回感心させられる。

しかしその流れるような動きが突然と中断してしまった。

「ああ困りました…。確かに先程までここに用意していたはずなのですが……」

なんでも用意していたはずのお茶受けのお菓子がなくなっていたらしい。それどころか買い置いていたはずの貯蓄も無くなってしまったようだ。

「申し訳ありません。今すぐ御用意致しますので皆様暫しお待ちを」

「いや、別に無理に用意してもらわなくても構わないですよ。ねえ？」

「ええ。そもそも私たちが突然来たのが悪いのだし、気にする必要はないわ」

「俺も同感だ」

僕の言葉に明日香と三沢も同意を示す。

「そうはいきません。お客様に対して無遠慮な御持て成しをするなんて細家の名折れ。すぐに用意させて頂きますので」

紬さんは頑としてこちらの意見を受け入れず、自室に保管してあるという茶菓子を取りに行つてくるといふ。僕も同行を申し出たのだけれどお客様ですからお手を煩わせるわけにはいきませんと言われ押し切られてしまった。

心配だ。

以前にも大した用じゃないので5分程で戻ると言つた際、彼女が帰つて来たのはおよそ5時間後だったからなあ。目的地までの移動中に体力が尽き、休憩を挟みながら向かつていたらしいのだが途中で体調を崩し、偶然出くわしたジャツカルの姐さんに保健室まで運ばれたのがその経緯らしい。

やっぱり追い掛けよう。

彼女の体力ならすぐに追いつけるし。

そう思い立つて行動に移そうとした時、茶室に新たな来訪者が現れた。

「見つけた！良かった、トメさんが彰達がこっちの方に向かっているのを見たって教えてくれて助かったぜ」

「兄貴い！速すぎるっすよ」

「ハアハアツ……。クソっ、この体力馬鹿が…！」

十代に続き翔と万丈目も入って来る。

「どうしたんだ？そんな息を切らして…」

用があるなら連絡くれればいいのに…ってそう言えばPDA部屋に置きっぱなしにしてたな。メンゴメンゴ。

「俺のハネクリボー見なかったか？」

はい？

「実は2、3日前から姿が見えないんだ。初めはあんまり気にしてなかったんだけど、万丈目のおジャマ3兄弟達の姿も見えないって聞いて心配になっちまって…」

「ふんっ…。あいつらなんていない方が静かでいい」

そう言いつつも十代に付いて来る辺り万丈目も多少なり心配しているのだろう。

これがツンデレというものの一種なのだろうか。まあ男のツンデレなんて見たところで全く嬉しくないけど。

「彰もカードの精霊が見えるだろ？どこかで姿を見なかったか？」

「いや。残念だけど見てないね」

十代の住んでいるレッド寮と僕の住んでいるブルー寮では距離が離れ過ぎているし、十代のハネクリボーはうちのガイドと違って常に外に出ているわけじゃないしな。

「そっか…。くっ、どこに行っちゃったんだよハネクリボー…」

すまんな役に立たなくて。

「そう言えば三幻魔の事件の時にカードの精霊の話が出ていたけど、十代達にはデュエルモンスターの精霊が見えるの？万丈目君はよく見えない何かと会話しているようだったから、てつきりおかしくなったのかと思っていただけねど……」

不意にそう発言したのは明日香だ。

「誤解だ、天上院君！俺はおかしくなってなんかいない！くそつ、アイツらめ！奴らのせいで天上院君の俺に対する好感度が下がったじゃないか！」

「そんなの元からないんじゃないっすか……？」

万丈目の弁解の余分な一言に翔が突っ込みを入れる。

「見えるぞ。子供の頃から不思議な声が聞こえていたんだけど、ちゃんと見えるようになったのは遊戯さんに貰ったハネクリボーが最初かな。だからアイツは俺の相棒なんだ！ちなみに万丈目の相棒はおジャマ三兄弟なんだぜ？」

「万丈目『さん』だ！それにアイツらは俺の相棒なんかじゃない！奴らが勝手に付きまとっているだけだ！」

そついや精霊見える事ばらしても大丈夫なのかな。

まあ明日香や三沢達は三幻魔の事件の時に色々絡んでいるし、精霊の事自体は認識しているはずだからいいか別に。

「俄かには信じ難いな。精霊が見えない俺には確認の仕様がなし。だが十代だけなら兎も角、万丈目や一之瀬まで見えているというのなら話は本当なのだろうな」

「むっなんだよ三沢、その含む様な言い方は！俺の事馬鹿にしているように聞こえるぞ」

「実際お前は馬鹿だろうが。まあこの、一！十！百！千！万丈目サ  
ンダー様と比べられると仕方ない事だと言えるがな。フハハハハ  
ッ！」

高らかに笑う万丈目はスルーして明日香が話を回す。

「なんだか羨ましいいわね。私もエトワール・サイバーの精霊と会っ  
てみたいわ」

「僕は断然ブラマジガールがいいっす！」

だろうと思ったよ。というか翔は学園祭の時に会っただろう。

「俺はp」「三沢君はピケルっすよね？」「……………」

お前もぶれないな三沢よ。

「彰君の精霊は何なのかしら？」

僕の？

「僕のは明日香達も一度見た事がある奴だな」

「ええ〜っ！？でも僕全然覚えがないっすよ」

「私もだわ。いつの間に出会っていたの？」



以前皆に僕の事情を話した時はガイドが側にいなかった時だったかなあ。

割かし概要だけの説明でガイド本人をその場で皆に会わせたわけじゃないし、むしろ話の進行をスムーズにするためにはアイツはいない方が良かったという事情もある。いちいち彼女に場を引つ掻き回されたら時間がいくらあっても足りない。

十代と万丈目は分かっているようで得心のいった顔をしている。

「ほら、影丸理事長とのデュエルの時に最初の方に出した女の子のモンスターがいただろ」

「正直三幻魔にその後出てきた邪神のインパクトが強すぎてあまり覚えていないわね……」

そらそうか。流石に幻魔やら邪神やらがワラワラ出てきたら印象が薄れても仕方がない。

「具体的に言うと体躯は小柄でレディースのスーツ着ている赤毛の娘っ子さ。アイツは自力で実体化する術を持っているから皆にも見えるんじゃないかな」

見えない方が確実にいいけどな。主に精神面の健全のためには。

「それって今そこの半開きの襖からこちらを覗いているあの女の子のことかしら？」

明日香の発言に皆の視線がそちらに向かう。

そこにはお茶受けの和菓子で頬をパンパンに膨らませている家の悪魔娘がこちらを覗いていた。僕らの視線に気付き、慌てて口内に含んだものをお茶で一気に流し込み、上辺だけ人懐っこい笑顔を浮かべる。

てめえそれ細さんが用意していたっていう菓子じゃないだろうな？

只今のガイドは表面上は良い子ちゃんを装っているのだが、彼女の目は面白い事見つけた！どうやって引っ掻き回そうかという不穏な意志が端々に見て取れる。伊達にコイツと長く一緒に居るわけじゃないよ。

「うわぁ！可愛いなあ！いいなあ彰君は…。こんな可愛い子が精霊として一緒にいるなんて羨ましいっす！！」

「あら、可愛い子じゃない」

「くっ…、俺にはタニヤっちゃピケルというものが…！」

おい騙されるなお前ら！

コイツはそんな唯のマスコットキャラに甘んじる奴じゃないぞ！

「こんな形だが正体は性悪の悪魔娘だよ。己の身が可愛いなら極力近づかないほうがいい。何をされるか分かったもんじゃないぞ」

これはもはや教訓だ。己の身で味わってきた発言ほど重みがあるものはない。

人とは過去の経験から学び進歩していく種族だからね。

しかし…。

「ちょっと！いくら精霊だからといって女の子に向かってそんな言い方はないんじゃない？見た感じ良い子に見えるわよ？」

そんな明日香の言を耳聴く聞きつけ、僕の発言に対してよよよと明日香に泣き付くガイド。だが騙されてはいけない。上手く手で口元を覆い隠しているが、こちらを伺いながらニヤニヤ笑ってやがる。というかわざと僕にだけ見えるように手の位置を調整している。

「ほら傷ついているじゃない！いい？女の子はデリケートなんだから発言には気をつけなさい！十代なんかとは違うのよ？」

「なんでそこで俺が引き合いに出されるんだよ！」

それに気付かない明日香はガイドを庇うように抱き、彼女の頭を撫でながら怒鳴る。

気付いてくれよ！あの悪魔娘はあんな発言で傷つくほど軟じゃないんだ！ほら今だってこっちに向かって舌出しやがった！

「そーだそーだ！可愛いは正義っす！」

「一之瀬の事情は良く解らないが俺も女性に向かって先程の発言はどうかと思っぞ」

翔と三沢も明日香の援護に回る。

ちくしょう！お前らはコイツの本性を知らないからそんな事言えるんだ！

「はははっ…、俺は前からちよくちよく遭遇していたから彰が言い

たい事もなんとなくわかる気がするぜ…。というか舌出してるの俺も見ちゃったし…」

「俺もだ。何となくだが途轍もなく面倒事の匂いがする」

同じ精霊を持つ者同士、十代と万丈目は何かを感じ取ったようだ。そしてその勘は頗る正しい。

「そうだ！同デュエルモンスターの精霊ならハネクリボー達が今どこにいるかわかるんじゃないのか？」

十代が嘘泣きを止めたガイドに尋ねる。

ガイドは暫し思案した後、何かを思い出したのかポンと手を打ち、軽く指をパチンと鳴らす。すると茶室の縁側の向こう側に風情も何も感じさせない真っ黒なバスが異空間より飛び出し、その場に停車した。

（（兄貴イイイイイイイイイイツ！！））

扉が開き中からおじゃま3兄弟が泣きながら万丈目に向かって飛びかかる。

「なんだお前らくつつくな！ああもう邪魔だ！さっさと離れろ！」

続いていつの間にもやらバス前まで移動していた悪魔娘が十代のハネクリボーらしきものを胸に抱えてこっちへやってくる。

「ハネクリボー！どうしたんだよお前！？」

僕が「らしき」という言葉を付け加えたのはハネクリボーの外見が若干以前のものと違うからだ。天使のような白い羽根は今や、悪魔が生やしていそうな蝙蝠の翼に取って代わっている。ものっそい窠れているんだが何があったんだ…。

ガイドはどうだとばかりにハネクリボーの羽根を強調し見せびらかす。

なにこれ新種？デビルクリボーとでも名付けておくか。

いや待てよ。クリボーはそもそも悪魔族なんだからデビルなんて名前つけなくていいんじゃないか？これはこれでハネクリボーといえるだろ。ちゃんと羽根生えてるし。

天使族のハネクリボーに悪魔の翼が…光と闇が両方備わり最強に見える。

ああでもこいつナイトじゃないや。

光と闇のナイトっていったら開闢だけどあいつは謙虚じゃないからな。

自重なんて言葉知ったことかを地で行く奴だし。

……………。

すまない。事態が上手く把握できずに混乱してどうでもいい話に流れてしまったようだね。

というか今回の騒動の原因もお前かガイドよ…。

今度は一体何をやらかしたっていうんだ…。

僕の目の前ではおジャマ三兄弟が万丈目に張り付きぎゃーぎゃー騒

いでいる。

（兄貴！ひどいのよああのガイドの姐御が！いきなり地獄観行ツアーに連れてかれていかれたと思ったたらひどいのよおおおおおおおおおっ！！）

（いきなり血の沼地に放りこまれるわ、デーモンの巣窟である万魔殿ニラムに特攻するわ、ラヴァゴーレムの檻の中が今流行りの観光スポットだと言い張るわ、ガイドの姐御本人は飽きたとか言っ先にごちの世界に戻るわで！）

（俺たちや何回死ぬかと思ったか…）

うわあ…。

おジャマ達の報告に万丈目の顔も引き攣る。

「それより十代のハネクリボーはどうしてこんな姿になっているんだ？」

原因を知っていきそうなおジャマイエローに話を聞こう。恐らくその現象を引き起こした張本人であるガイドはハネクリボーを弄るのに夢中で話を聞ける状態じゃない。

（それがガイドの姐御がコザツキーの変態と組んで作ったわけのわからない薬を飲ませたせいなのよお。あの姿の方が可愛いからって理由だけで…）

コザツキーってアイツだろ。働き過ぎて頭がおかしくなっているっていう悪魔。ギゴバイトは彼に改造されまくってゴギガ・ガガギゴ

に至り精神が崩壊してしまっただし、大木人18インバチを人造木人18インバチに改造したのも奴の仕業だ。

ていうかガイドとコザツキーのタッグとか絶対にヤバい匂いしかない。言うなれば火種と発火剤の関係だ。メントスとコーラの組み合わせくらい危険だということは火を見るよりも明らかだろう。

「そんな！？なんとかして元に戻せないのか？」

十代が焦った様子で叫ぶ。

そりゃ相棒が突然こんな目に合わせられればたまったもんじゃないだろう。

僕だつてガイドがいきなり素直ないい子になったらと思つと……

……あれ？

それは物凄く望ましい展開ではないだろうか？

ガイドは何故元に戻さなければならぬのか意味がわからないといった御様子で十代を眺めている。

いいから早く戻しなさい！

結局ガイドの説得には時間が掛かったが、ハネクリボーを元に戻すことは成功した。というより説得途中にハネクリボーの羽根が徐々に元の白い天使の羽根に戻っていっただけなだけだな。どうやら薬の効果は一時的なものだったらしい。

幾度も過剰に摂取した場合は元の姿に戻れなくなるとかなんとか不穏なことを宣まっていたが、彼女のバスの中からその薬品が大量に発見されたことから、ガイド本人は真剣にそうしようと考えていやがったことは間違いない。全部処分させたけどな。

あのゴタゴタとした状況で紬さんが帰ってきたら更にややこしい展開になりかねなかったが、彼女は案の定自宅へ戻る途中で体力が尽き、保険医の鮎川先生に捕まって休養命令をだされたそうだ。僕の懸念は的中してしまっただけ、今回は逆に助かった。後で御見舞に行こう。

よって本日のお茶会はこれでお開きとなり解散の流れとなったのだが、まだハネクリボーを元に戻したことに納得がいていないガイドさんが脹れっ面をしてその場を動こうとしない。

はあ〜もう面倒くさいなコイツは…。

未だにあっちのほうが可愛いだの元は悪魔族の同胞だの愚痴っている。

「ほら、食堂のジャンボパフェ買ってやるから機嫌直しんしゃい」膨れたほっぺをツンツンしながらそう言ってやる。コイツが不機嫌な状態なのは僕にとっても主に保身的な意味であり好ましい状況ではない。まあガイドは機嫌がいい時でも碌な事起こさないから難しいところなのだけだ。

その効果は靦面で、僕の言葉に目の色を変えたガイドは僕の腕を引っ張り食堂に向かって行軍を開始する。



やめろやめるんだ！パフェは逃げないよ！

僕の制止なぞこ奴が聞き入れるはずも無く、バランスを失った僕は無様に倒れ、その状態のままガイドに引きずられていくこととなった。

十代 side

目の前で彰が精霊の少女に引きずられていく。

引きずられている部分からガリガリと嫌な音が聞こえるんだけど彰は大丈夫なんだろうか…。

「ううゝ、やっぱり羨ましいっす！僕もあんな可愛い子と腕組んでみたいっすよ！」

「あれは腕を組んでいるんじゃないじゃなくて引きずっているようにしか見えななんだが…」

翔の発言に三沢が冷静に突っ込む。

「それでも羨ましいものは羨ましいんすよ！」

「翔。現実には時に残酷なんだぜ？」

俺も外見で騙されそうになったけど、さっきのような事があれば認

識を一段と改めざるを得ないな。彰が初めに注意したように関わらないのが一番の正解な気がする。

「一之瀬の奴も苦労しているんだな……」

俺と似たような事を考えていたのか、万丈目が今も引きずられている彰に哀れみの視線を注ぎながらそう呟いた。

「俺はお前が相棒で良かったよハネクリボー」

ハネクリボーを撫でると気持ちよさそうにすり寄って来る。

本当はもっと感動的な場面でこの言葉を使ったかったな……。

## 閑話 顔合わせ（後書き）

ガイドさんが翔や三沢なんかを直接的に弄るため、今のうちに顔合わせしてしまえという回。

### 追記

誤字訂正。オベリスクレッド オシリスレッドに修正。

葦東良日さん、おにぎりさん報告ありがとございましたm（――）

m

## 閑話 水色と吸血鬼

今日も今日とて面倒事に巻き込まれるのは僕の性なのだろうか。

事の起因は皆も容易く予想できる通り家の悪魔娘で、ブルー寮の端に設置されている倉庫からキックボードを発掘してきたのが始まりだ。

なんでそんなものがあるのかブルーの先輩に聞いてみたんだけど、数年前の卒業生がクリスマスパーティのビンゴ大会の賞品であったそれを放置したまま学園を去ってしまったそうだ。当初はブルーの生徒が遊び半分で利用することもあったそうだけど、ブームも過ぎ去った昨今では倉庫で埃を被る時間のほうが長かったようである。そいつをガイドが拾ってきたわけだ。

目をキラキラさせて屋内にも関わらずガーガー走っているうちはまだ良かった。いや、廊下が汚くなるから良くなかったけどまだマシだったと言っべきか。

僕が問題としたのは闇のゲームの罰ゲームで人形の体になってしまったカミューラとキックボードのハンドルを紐で括り付けて、ガリガリ引きずりながら疾走し始めたことだ。

声にならない悲鳴を上げるカミューラを見て流石に同情の念を禁じ得なくなつた僕は、なんとかガイドの鬼の所業を止めるよう進言し、ボロボロになつたカミューラを部屋まで連れ帰ることに成功したんだ。

「貴方もっと早く助けなさいよ！おかげで体の糸が解れているじゃない！」

「いや、僕に文句を言うなよ。やったのはガイドの奴だろう」

部屋の扉を開きながら彼女の愚痴を適当な相槌で聞き流す。

「それでもよ！全くなんで私がこんな目に会わなきゃいけない……」

「ん？どうしたんだ？」

カミューラが突然話を中断したことを疑問に思い、彼女の様子を窺うと一点を見たまま固まっている。その視線の先を追うと、どうやら部屋で僕の帰りを待っていたらしい十代と翔、両者とぼつちり目が合ってしまった。

カミューラは現在人形とは言え、以前は敵側であるセブンスターズの一人で、クロノス教諭を人形にただけではなく、卑怯卑劣な手段を取って襲ってきた相手だ。

無論そんな相手が突然目の前に現れたら混乱するのは当然で……。

「ちょっと！なんでこんな奴を部屋に置いているんすか！」

「貴方には関係ないでしょ。それに私は弱虫坊やに興味などないの。さっさと失せてくれないかしら」

「なんだって！？インチキカードの幻魔の扉や人質なんて卑怯な真

似をしてもお兄さんに勝てなかつたくせに！」

「なっ！？ふんっ、自分の功績でもなくせにそんな風に誇るなんて本当に小さい奴ね！小さいのは身長と肝っ玉だけにしてくれないかしら？」

「身長のこととは関係ないっす！それに自分のお兄さんのことを誇つてなにが悪いんすか！」

その一番の犠牲者であると言える翔とカミューラの間で口論が勃発しこの現状である。

人形である身のためこちらに危害を加えることなどできないし、うちのガイドの奴が監督しているから危険な存在ではないことを話すと十代は納得してくれたけど、やはり人質とされた翔はカミューラのことを認められないらしい。

「はっ！貴方なんかが本当にあのカイザー亮の弟なの？彼は私好みの良い男だったけど貴方なんて彼とまるっきり違うじゃない」

「うう…自分でもそんなの分かってるっす…。でもお前なんかに言われる謂れはないっすよ！」

「ふんっ、私が何を言おうと私の勝手よ。それに私が言っている事は嘘偽りなき事実。貴方がカイザー亮の弟として相応しくないのは本当のことでしょう？全くお兄さんも不憫よね。こんな出来の悪い弟がいるせいで彼の評価も下がってしまうもの…」

「つつ！？そんな……！？僕が弱いことと兄さんの評価は関係ないだろ！」

カミューラの心ない発言に徐々に押されていく翔。

流石に口では勝てないだろう。相手は数百年の時を生きる吸血鬼だ。

「理屈ではそうでしょうけど浅はかな人間どもはそんな風には見えてくれないわよ？貴方にも心当たりがあるんじゃないかしら？」

「うう…なら…なら僕が弱虫じゃないことを証明すればいいんだろ！」

「ならデュエルで示してみなさいな。私に勝ったら認めてあげなくもないわよ」

「くっ、いいよ！やればいいんだろ、やれば！お前なんかには絶対負けないからね！」

半ばやけっぱちで叫ぶ翔を見て大丈夫だろうかと思ってしまうのは仕方ないことだろう。

「おっ、なんだお前らデュエルするのか？楽しみだなあ！」

翔とカミューラ、両者の熱い口論に僕と同じく置いてけぼりにされていた十代がデュエルの部分だけに反応する。

「ふふふっ、じゃあ10分後に寮のすぐ近くの空き地に来なさいな。坊やにその度胸があるならばの話だけど」

「ふっ、ふん！そっちこそ覚悟するといいつすよー！」

「あっ、おい翔！待ってくれよー！」

カミューラの明らかに嘲笑を交えた言葉に腹を立てた翔が十代の制止を無視して部屋を飛び出していく。

すると翔と入れ替わりになるように明日香が万丈目と三沢を連れてやってきた。

「ねえ、今翔君がすごい勢いで部屋を飛び出して行ったけど何かあったの？」

「全く騒がしい奴だな」

「随分慌てていたようだが大丈夫なのか翔は…」

3人とも十代に用があったらしく、彼を探してここまで来たらしい。

この際だからもう彼らも巻き込んでしまおう。

決して面倒事をみんなに分担させて楽しようと思っているわけじゃないよ？

本当だよ？

翔 side

少し時間をおいた後、カミューラとのデュエルのためにブルー寮近くのフリースペースに向かう。



僕が現場に着くとそこには兄貴だけじゃなく、どこからか話を聞きつけたらしい明日香さんや万丈目君も集まってきた。あっ、あと三沢君も…。

うう、ギャラリーが増えると余計に緊張するよ！

そんなことを考えていたら面倒くさそうにデュエルディスクを装着した彰君がカムイーラを肩に乗つけてやってきた。カムイーラは闇のゲームで人形に魂を封印されたままだから、本人の代わりに彰君がカードの操作するようだ。

彰君の肩に仁王立ちしたカムイーラが意地悪く僕に声をかけてくる。

「あら、ちゃんと来ていたの？ てつきり尻尾を巻いて逃げ帰るかと思っていたのだけれど…」

「誰が逃げるって！？ それはこっちのセリフですよ！」

正直吸血鬼を相手にするのは怖いけど今のあいつはただの人形だもん。

そう考えればなんとか闘える！ 頑張るんだよ僕！

勇気を奮い起しデュエルディスクを展開する。

「「デュエル  
決闘！」」

「先攻はもらうわよ。私のターン、ドロー！」

偉そうに言っているけど実際にカードを引くのは彰君だ。

「フフフツ、貴方を素敵な夜の世界へ案内してあげるわ！フィールド魔法、アンデットワールドを発動！」

カード発動の宣言と共に辺りが突然と暗くなり、毒々しい色の木々や植物が生い茂っていく。紫色の靄が立ち込み、折角の満月がその靄に邪魔をされ、不気味な色を発している。

うう…、明かりは欲しいけどこんな不気味な明かりならない方が絶対がいいよ！

コッソ

視界が悪くなったことで足元の注意が疎かになって何かに躓いてしまった。

一体何に……

「つてぎゃあああああああああああああああつ！！骨が！骸骨があああああああつ！！」

僕の足元には夥しい数の人骨がそこらかしこに転がっていたんだ！

「五月蠅いわね！たかが骨くらいで男がぎゃーぎゃー言うもんじゃないわよ」

「そつ……そんなこと言っただって怖い物は怖いんだよ！」

僕は夜一人でトイレに行くのすら怖いんだから仕方ないだろ！  
小学生の頃はお兄さんに途中まで付いてきてもらっていたのは内緒  
の話だよ？

「ゴブリンゾンビを守備表示で召喚してターンを終了するわ」

《ゴブリンゾンビ》 ATK / 1100 DEF / 1050

うう…、やっぱりカミュラはアンデットデッキのようだ。  
アンデット族は怖いモンスターが多いから苦手なんだよ…。

「僕のターン、ドロー！」

落ちつけ！落ちつくんだ僕！

周りにあるのは全てかぼちゃだと思っただ！そうすれば怖くない！

「よし！僕はスチームロイドを攻撃表示で召喚！」

《スチームロイド》 ATK / 1800 DEF / 1800

カードから飛び出したのは僕のお気に入り一枚。

蒸気機関車をモデルとした黒いボディと煙突と車輪が特徴的なモン  
スター。

ロイドと名のつくモンスターは全て自動車や飛行機みたいな乗り物  
がモチーフになっていて、どのモンスターもクリクリした可愛らし  
い目がついてい……………

「うわああああああああああっ！？」

何故かスチームロイドの片目が腐って飛び出している！

「なんだよこれ！どういうことなんすかっ！？」

「アンデットワールドの効果によってフィールドと墓地のモンスターは全て可愛いアンデット族になるわ。またこのカードがフィールド上に存在する限りアンデット族以外のモンスターは生贄召喚することができなくなるのよ」

「何てことをするんだ！僕のモンスターを気味悪く変えてしまっなんてっ！」

「あら、そちらの方が可愛いじゃない」

そう言ってカミュラはウフフと笑うだけでまるで反省する素振りも見せない。

うう…僕がこういうの弱いと知ってわざとこんなデッキを使っているわけじゃないよね？

アンデット族に変えられてしまったということはリミッター解除みたいな機械族専用サポートカードが封じられてしまったということだ…。

でもアンデット族になっただけでステータスや効果に変化があるわけじゃないらしい。

これなら…！

「行くぞお！スチームロイドでゴブリンゾンビに攻撃！そしてスチ

ームロイドは相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が500ポイント上昇する！」

《スチームロイド》 ATK / 1800                      ATK / 2300

スチームロイドの体当たりで相手のモンスターは容易く破壊される。

「へっへっくん！どうだ！お前の気味悪いモンスターなんて僕にかかればこんなもんなんだぞ！」

「本当にお馬鹿な子ね。ゴブリンゾンビがフィールドから墓地に送られた瞬間、効果が発動するわ。デッキから守備力1200以下のアンデット族モンスター、ゾンビ・マスターを手札に加えさせてもらうわよ」

「またアンデットモンスター!？」

そうだった！クロノス先生とのデュエルの時だって倒しても倒してもワラワラと後続のアンデット族モンスターが湧いてきていた…！

「そして私のターン。私はゾンビ・マスターを攻撃表示で召喚！」

《ゾンビ・マスター》 ATK / 1800    DEF / 0

カミューラの場に現れたのはボロボロの服と黒いコートを羽織った不気味な男のモンスター。僕の方をみて不気味な笑みを浮かべるのはやめてほしいよ。

「ゾンビ・マスターはその名の通り、幾多のアンデット族を従えし

者。その力を見せてあげるわ。ゾンビ・マスターの効果！1ターンに1度手札のモンスターカード1枚を墓地に送ることで互いの墓地に存在するレベル4以下のアンデット族をモンスター1体を従属させる！私は馬頭鬼を墓地に送り、蘇りなさい！ゴブリンゾンビ！」

ゾンビ・マスターが地に手を翳すと、地面が盛り上がって墓地に眠っていた死者が蘇る。

《ゴブリンゾンビ》 ATK/1100 DEF/1050

「ゾンビ・マスターとスチームロイドの攻撃力は互角。しかしスチームロイドは相手モンスターによって攻撃された場合、ダメージステップの間攻撃力が500ポイント減少するデメリットを抱えたモンスターということは知っているわよ？」

「げっ…！」

「バトルよ！ゾンビ・マスターでスチームロイドに攻撃！」

《スチームロイド》 ATK/1800 ATK/1300

「スチームロイドが！」

効果によって攻撃力が下がってしまったロイドが相手の攻撃を耐えられず破壊されて、その超過ダメージを受けてしまう。

翔LP4000 3500

「更にゴブリンゾンビで追撃！」

「うわあああああああああああつ！！！！」

翔LP3500                      2400

「まだよ！ゴブリンゾンビの効果！このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手のデッキトップのカード1枚を墓地に送る！」

デッキからアンデット族を持ってくるだけじゃなく相手のデッキを削り取る効果も隠していたなんて……。

「ああっ！ドリルロイドが……！」

墓地に落とされたカードは僕の主力モンスターの1つなのに！まずいよまずいよ！

「ふふっ、アンデットワールドの効果によってお互いの墓地のモンスターは全てアンデット族モンスター。次のターン、貴方のモンスターを墓地から奪わせてもらおうかしら」

カミューラが嫌らしい笑みを見せる。

やっぱり強い……！

そうだよ、今の外見に騙されていたけど、彼女はクロノス先生を倒したほどのデュエリストなんだった！

「うう……僕のターン、ドロー！」

「僕はサブマリンロイドを召喚！」

《サブマリンロイド》 ATK / 800 DEF / 1800

「何を出すかと思えば攻撃力たったの800の雑魚モンスターとはね」

「サブマリンロイドは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができるんだ！いけ！サブマリンロイド！ディープ・デス・インパクト！！」

サブマリンロイドが地中に潜り、相手モンスターを避けながらプレイヤーに直接攻撃を加える。

「ちっ…」

カミューラルLP4000 3200

「更にサブマリンロイドは効果によってダメージステップ終了時に表示形式を守備表示に変更することができる！そしてその守備力は1800！ゾンビ・マスターじゃ僕のサブマリンロイドは倒せない！」

でもゾンビ・マスターで僕のドリルロイドが操られたら一巻の終わりだよ。

僕のドリルロイドは守備モンスターを攻撃した場合、そのまま破壊する効果を持っている。サブマリンロイドがやられたら僕のライフポイントは一気にゼロまで削られちゃう…。

お願いだ！これに賭けるしかない！



「僕はカードを1枚セットしてターンを終了するよ！」

「たった守備力1800のモンスターで私の攻撃を耐えられると思っ  
ているのならばとんだ笑い話よ？私のターン、ドロー！」

「まずはその目障りな伏せカードから壊させてもらうわ！手札から  
速攻魔法サイクロンを発動！さあその伏せカードを破壊しなさい！」  
やった！引っ掛かったな！

カミューラのフィールドから発生した竜巻が僕の伏せカードを破壊  
する。

だけど僕の狙いはまさにそれだ！

「破壊されたカードは罨カード、ワンダーガレージ！セットされた  
このカードが破壊され墓地に送られた時手札からレベル4以下のロ  
イドと名のついた機械族モンスターを特殊召喚できる！僕はエク  
スプレスロイドを守備表示で特殊召喚する！」

《エクスプレスロイド》 ATK/400 DEF/1600

「更にエクスプレスロイドの効果も発動！このカードが召喚、反転  
召喚、特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在するエクスプレ  
スロイド以外のロイドと名のついたモンスター2体を手札に加える事  
ができる！僕はスチームロイドとゴブリンゾンビによって墓地に送  
られたドリルロイドを手札に加えさせてもらうよ！」

これで僕の間には壁モンスターが2体。

それに墓地のモンスターを回収することでゾンビ・マスターに僕の

モンスターを奪われる脅威からも守れた！

よし、いける！いけるぞ！

クロノス先生を倒し、お兄さんをも苦しめたあのカミューラ相手に互角に闘えている！

「生意気な……！少し私を出し抜いただけで勝った気になりやがって！それが全くの勘違いだってことを教えてあげるわ！私は手札よりチューナーモンスター、ゾンビキャリアを召喚！」

《ゾンビキャリア》 ATK/400 DEF/200

「うええ！？チューナーモンスターって何なのさ？……ってまさか彰君のカード!?」

僕の問いに彰君は思い出しかのようにこう答えた。

「あれ？言ってなかったっけ。ほら、カミューラのデッキは丸藤先輩に敗れた時に崩れ落ちる古城と共に湖の底に沈んじやったから僕のカードを貸してるのさ」

「そういうことは早く言っつてよっ！！」

ヤバイよヤバイよ。彰君のカードは僕の知らないものばかりのはずなんだ。

影丸理事長とのデュエルの時も見ただけど前に少し話を聞いた時、あの時使わなかった召喚方法もあるって言っつてたし！

「いくわよ！レベル4のゴブリンゾンビに、レベル2チューナーモ

ンスター、ゾンビキャリアをチューニング！」

幾科学的な円が相手のモンスターを囲み、光に溶けていく。  
なにになんなの？まさかこれが…。

「シンクロ召喚！冥府へ誘え！蘇りし魔王八・デス！！」

大量の蝙蝠が集結し、一つの体を形成していく。

濃紺のマントを翻し、場に顕現したそのモンスターはまさしく魔王に相応しい迫力だ。

《蘇りし魔王八・デス》 ATK/2450 DEF/0

「一応解説しとくとカミューラは自分フィールド上に存在するチューナーとチューナー以外の1体以上のモンスターのレベルを合計して、そのレベルと等しいモンスターを融合デッキから特殊召喚させる召喚方法、『シンクロ召喚』を行ったんだ。今回はレベル4と2を足したレベル6のモンスターである八・デスが召喚されたわけだね。まあレベルを合わせる他にも素材の制限があったりするんだけど」

「へえ、なるほどなあ。おもしれえ！俺もデュエルしたい！次は俺とやるっぜ！」

「アンタ達五月蠅いわよ！」

彰君…兄貴…、あんまり認めたくないけど今回はかりはカミューラと同意見っすよ…。

「墓地に送られたゴ布林ゾンビの効果発動！デッキより守備力1  
200以下のアンデット族モンスター、ブラックナイト・オブ・ダークドラゴン闇竜の黒騎士を手札に加え  
る。そしてゾンビ・マスターの効果によって今加えたブラックナイト・オブ・ダークドラゴン闇竜の黒騎士  
をコストに送り、墓地よりブラックナイト・オブ・ダークドラゴン闇竜の黒騎士を特殊召喚！」

ブラックナイト・オブ・ダークドラゴン  
《闇竜の黒騎士》 ATK / 1900 DEF / 1200

「まだよ！墓地に存在する馬頭鬼の効果が発動！このカードをゲ  
ムから除外することで自分の墓地よりアンデット族モンスター1体  
を特殊召喚するわ！蘇れゴ布林ゾンビ！」

《ゴ布林ゾンビ》 ATK / 1100 DEF / 1050

「我ら不死のアンデット一族の力を思い知れ！永続魔法一族の結  
束を発動！自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類  
の場合のみ、自分フィールド上に存在するその種族のモンスターの攻  
撃力は800ポイント上昇する！」

《蘇りし魔王ハ・デス》 ATK / 2450 ATK / 3250

《ゾンビ・マスター》 ATK / 1800 ATK / 2600

ブラックナイト・オブ・ダークドラゴン  
《闇竜の黒騎士》 ATK / 1900 ATK / 2700

《ゴ布林ゾンビ》 ATK / 1100 ATK / 1900

そんな!?

たった1ターンでカムイラのフィールドに強力なアンデットモン  
スターが布陣しちゃった……。しかもどのモンスターも僕のモン  
スターじゃ太刀打ちできないほど強いなんて…。

「アーツハハハハハハ！これこそ我が新たなアンデット族デツキの真骨頂！さあ覚悟はいいかしら、坊や」

僕はこんなにもあっさり負けちゃうのか…？

嫌だ嫌だ嫌だ！

そんなんじゃアカデミアに入学した当初から全然成長していないじゃないか…！

「バトルよ！ブラックナイト・オブ・ダークドラゴン闇竜の黒騎士とゴブリンゾンビでエクस्प्रेसロイド、サブマリンロイドに攻撃！」

強力なアンデット族モンスターを前に2体のロイドが為す術もなく破壊される。

「これで終わりよ！蘇りし魔王ハ・デスでプレイヤーにダイレクトアタック！ライフポイントを狩り取りなさい！」

冥府の魔王から放たれた闇の波動が僕に襲いかかる。

頭が真っ白になる。

やっぱり僕なんかじゃ駄目なんだ…。

駄目駄目な弱虫なんだ…。

お兄さんの経歴に傷をつける存在なんだ…。

「翔！諦めるな！デュエルは何が起きるかわからない。手札には無

限の可能性があるんだ！」

兄貴の声が聞こえる……。

その声とともに頭に思い浮かんだのは兄貴と慕う人の後ろ姿。

どんな苦境だろうとも逃げずに立ち向かう姿。

そうだ、兄貴はピンチの時でもいつも諦めなかった。

僕はそんな兄貴の姿に憧れを抱いて兄貴を兄貴と呼ぶようになったんだ。

僕もそんな風になりたい……なりたいんだ！

ありつたけの勇気を振り絞り、可能性を模索する。

何かこの状況を打開できるカードは！

つつ！？そうだこのカードは！

「僕は手札のカイトロイドの効果を発動！このカードは相手の直接攻撃による戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から捨てる事によってその直接攻撃によって発生する自分への戦闘ダメージを0にする！」

「くっ、小賢しい……！しかしまだ私のモンスターの攻撃は残っているわよ！行きなさいゾンビ・マスター！」

「まだまだ！墓地に存在するカイトロイドの効果！このカードをゲ-

ムから除外する事で相手の直接攻撃によって発生する戦闘ダメージを一度だけ0にする！」

「なんですって!?!」

「いいぞ翔!すごいじゃないか!」

「カミューラの猛攻から耐えきったわ!」

よし!これで次のターンまで繋いだぞ!

「くっ、ならば闇竜の黒騎士の効果!1ターンに1度、相手の墓地から戦闘によって破壊されたレベル4以下のアンデット族モンスター1体を私のフィールドに特殊召喚できる!サブマリノイドを墓地より引き摺り出さない!」

《サブマリノイド》 ATK/800 DEF/1800 A  
TK/1600

「カードを1枚セットしターンを終了するわ」

ターンは繋いだけど相手の場にはさらにモンスターが増えてしまった。

「ふんっ、このターンを耐えたからって結果は同じよ。もはやこの戦況は覆せない。素直にサレンダーすることね」

「嫌だ!僕は絶対に諦めない!」

小さい頃からずっと追いかけてばかりだった。  
お兄さんや兄貴の後を追いかけて追い掛けて……その背中を見て  
いただけだった。

でも決めたんだ！

僕はもう追いかけない。

強くなって一緒に歩いて行くんだ！

「僕のターン、ドロー！」

「手札より強欲な壺を発動！更にカードを2枚ドローする！」

考えるんだ！相手の場には圧倒的な攻撃力を持つモンスターがいる。  
これをどうやって倒せばいいんだろうか。

相手は凄まじい程の展開力でここまでモンスターを並べた。ゾンビ・  
マスターがその中核だけど、それよりも厄介なのが次々と仲間をデ  
ッキから加えさせるゴ布林ゾンビ…。

つつ！？そうだった！！

さっきからゴ布林ゾンビで仲間を集めていたけど、アイツの効果  
で加えられるモンスターは全て守備力が1200以下なんだ！

高い攻撃力に目がいつてしまっていたけれどどのモンスターも守備  
力だけみれば僕のモンスターでも簡単に倒せる！



そしてその手段は今のドロワーで僕の手には…！

「いくよ！僕は魔法カード、アースクエイクを発動！フィールド上に存在するモンスター全てを守備表示にする！」

「なんですって！？」

《蘇りし魔王ハ・デス》 DEF / 0

《ゾンビ・マスター》 DEF / 0

ブラックナイト・オブ・ダークドラゴン

《闇竜の黒騎士》 DEF / 1200

《ゴブリンゾンビ》 DEF / 1050

《サブマリンロイド》 DEF / 1800

「くっ…、アンデット族の薄い防御を狙うなんて…！」

「そして僕はパトロイドを攻撃表示で召喚！」

《パトロイド》 ATK / 1300 DEF / 1300

「パトロイドは1ターンに1度、相手フィールド上にセットされているカードを1枚めくり確認する事ができる！」

「弱虫の上に覗きが趣味なの？いやらしい…」

「違うよっ！！なんでそんな誤解を招くような発言をするんすか！」

「！」

前にも風呂覗きの疑いをかけられて大変だったのに！

ってこんな事を考えている場合じゃなかった。

相手の伏せカードは奈落の落とし穴…！  
これならいける！

「手札より魔法カード、ビークロイド・コネクション・ゾーンを発動！手札のスチームロイド、ドリルロイド、サブマリノロイドを墓地に送り、ビークロイドと名のついた融合モンスター1体を融合召喚する！来い！スーパービークロイド・ジャンボドリル！！」

3体のビークロイドの融合体。僕のデッキの最強モンスターだ！

《スーパービークロイド・ジャンボドリル》 ATK/3000 D  
EF/2000

「貴方本当に馬鹿なの？それとも見たばかりの事を忘れちゃうほどおつむが可哀そうなのかしら。罠カード、奈落の落とし穴を発動！相手が攻撃力1500以上のモンスターを召喚、反転召喚、特殊召喚した時、そのモンスターを破壊しゲームから除外する！」

ジャンボドリルの真下に突如ぼつかりと地獄へと続く穴が開く。しかしジャンボドリルはその穴を自慢のドリルで崩し脱出する。

「なっ！？どういうことよ！何故そのモンスターは破壊されない！」

「残念！ビークロイド・コネクション・ゾーンで特殊召喚したモンスターには魔法、罠、効果モンスターの効果によっては破壊されず、効果を無効化されないんだ！ジャンボドリル！蘇りし魔王八・デスに攻撃だ！」

それだけじゃないよ！

「ジャンボドリルのモンスター効果！ジャンボドリルが守備モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を上回っていれば貫通ダメージを与える！」

「ハ・デスの守備力は0！くっ、きゃあああああああああああああああああああつ！」

カミューラLP3200                    200

「後は残しておく厄介なそいつを倒させてもらっよう！パトロイドでゾンビ・マスターに攻撃！シグナル・アタック！」

サイレンを鳴らしながらの猛スピードの体当たりでゾンビ・マスターを吹き飛ばす。

これでそう簡単にモンスターを展開できないはず！

「どうだ！僕だって闘える！もう守ってもらってばかりの僕じゃないんだ！」

十代 side

「いいぞ翔！このまま押し切れ！」

翔があのかロノス先生を倒し、カイザーをも苦しめたカミューラ相

手に善戦している。

カミューラのライフポイントは残りたったの200。ハ・デスというエースモンスターも倒したし、ひよっとしてこのまま勝っちゃうんじゃないか！

「ふんっ、確かにちよつとばかり見縊っていたようね……。私のターン、ドローするわ」

「へんっ！ 攻撃力3000のジャンボドリルはそう簡単には倒せないよ！ 更にビークロイド・コネクション・ゾーンの効果によって破壊効果に耐性を持っているんだ！」

確かにあのジャンボドリルを倒す手段は早々ないはずだ。

俺がもし高い攻撃力に破壊耐性を兼ね備えているモンスターなんて出されたら、相当困るんだなあと想像してみる。

しかしカミューラはその不敵な態度を崩さない。

「破壊できないならば他の手段をもって対処すればいいだけの話よ。手札より傀儡虫を捨てて効果を発動するわ」

墓地から這い出てきた手が刃物になっていて奇妙な虫がジャンボドリルに取り憑き、体内に侵入する。すると目の色を変えたジャンボドリルが相手フィールドに移動し、翔に敵意の視線をぶつける。

「なっ、翔のジャンボドリルが！ そんな……どうして!？」

「傀儡虫は相手フィールド上の悪魔族またはアンデット族モンスターに取り憑き、そのターンのエンドフェイズ時までコントロールを奪い取るカードよ。翔君のジャンボドリルはビークロイド・コネク

シヨン・ゾーンの効果によって破壊効果は受け付けられないけど、言っ  
てしまえばそれ以外の効果には抗う事はできない……」

「天上院君の言う通りだ。本来ならば対戦相手のデッキに左右され  
る使い勝手の悪いカードだが、カミューラはアンデットワールドの  
効果を利用する事で相手の種族を強引に変え、傀儡虫を利用できる  
環境に整えたんだ」

明日香や三沢の解説で気付かされた。

カミューラは初めからこの状況を想定しながらデュエルを進めてい  
たんだ！

「墓地のゾンビキャリアの効果を発動するわ。手札を1枚デッキト  
ップに戻す事で、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に  
特殊召喚する。しかしこの効果で特殊召喚されたこのカードはフィ  
ールドから離れた場合除外されてしまうけどね」

《ゾンビキャリア》 ATK/400 DEF/200

「レベル4のサブマリントロイドとレベル2のチューナーモンスター、  
ゾンビキャリアをチューニング！」

彰の言っていた通りなら今回のレベル合計も6……！

「シンクロ召喚！地獄より這い出でよ！デスカイザー・ドラゴン！  
」！

大地が裂け地の底より体の芯から震え上がる様な怨嗟の叫びが放た  
れる。

地獄の底より這いずりあがってきたのは一度死して朽ちた龍だ！

《デスカイザー・ドラゴン》 ATK / 2400 DEF / 1500

デスカイザー  
死の皇帝……！

まさにアンデット族を統べる皇にふさわしい風貌と威圧感を兼ね備えているモンスターだけど、翔にとってはまた違った意味合いを持つはずだ。

カイザー  
皇帝

翔の憧れであり目標である兄の異名をその名に冠するモンスター……。

カイザー自身は対戦相手をリスペクトするリスペクトデュエルを信条にしていたけど、目の前に存在するモンスターは相手への怨嗟に満ちた姿をしている。

カイザーと同じくリスペクトデュエルを信条としている翔にはきつと認めたくないモンスターだろう……。

「デスカイザー・ドラゴンが特殊召喚に成功した時、相手の墓地に存在するアンデット族モンスター1体を攻撃表示で私のフィールドに特殊召喚できるわ。再びサブマリノイドを引き摺り出さなさい！」

《サブマリノイド》 ATK / 800 DEF / 1800

デスカイザー・ドラゴンの咆哮に反応し、翔の墓地からモンスターが奪われる。

「そんなっ…!?!」

「やりなさいデスカイザー・ドラゴン、我が僕共よ!」

カミューラの命令に従い、フィールドのアンデットモンスター達が翔に襲いかかる。

「うわあああああああああああああああああああっ!!」

悲痛な叫びとともに翔のライフポイントが削り取られた。

翔LP2400 0

彰 side

全くこいつは…。

わざわざデスカイザー・ドラゴンを出さずとも、コントロールを奪ったジャンボドリルで攻撃するだけで終わっていたというのにこのDS吸血鬼が。

「なっ何よ…?!」

僕のジト目に若干うるたえた様子で返すカミューラ。

これで翔が完全に自信を失くして再起不能になったらどうするんだ。 たった1敗くらいでと思うかもしれないが、翔にとっては今回のデュエルは本当に大切な転機となるデュエルだったはずだ。

カミューラは己の兄を苦戦させ、さらには自分のせいでその兄に敗北を与える切欠になっていたかもしれない相手。ともすれば自分の弱さのせいで憧れの兄を貶めていたかもしれないかった認めたくない過去。

優れた兄に出来ない弟。

普段からもそんな風にアカデミアの生徒から陰口を叩かれることもあったけど、実際に自分が原因で兄に迷惑をかけたあの丸藤先輩とカミューラとの一戦は翔の心に大きな傷を残したんじゃないかと思う。

だからこそ今回のデュエルは過去の弱い自分と決別するための決意表明の意味合いも込められていたはずだ。

それをこの吸血鬼は最後の最後で無駄なフルボッコを嬉々として行っただけだ。

別に負けてくれとか手を抜けとか言ってるんじゃない。もう少しシャープなやり方で終わらせてやれよ！

翔は敗北のショックでその場へたり込んでいる。

「おい、翔！大丈夫か！」



十代が慌てて駆け寄り、翔の体を抱き起こす。

「兄貴…駄目だったよ……。今までの弱虫な自分は嫌いだから変わろうと思ったんだけど…結局負けちゃった……。やっぱり僕はダメダメな奴なんだ……」

「そんなことはないさ！俺はさっきの翔のデュエルを見てすっげえワクワクしたぜ？」

「でも…負けちゃったし……」

「デュエルは勝ち負けだけが大事なんじゃないさ。俺も前に彰に言われたんだけどな。それに翔は前よりだいぶ成長しているぞ！俺が保証する！」

「兄貴……」

「私もよ翔君。今のデュエルは本当に素晴らしかったわ。亮も見ていたらきつと貴方を褒めてくれる。それだけの力を貴方は示したと思うわよ」

「まあこの万丈目サンダー様には敵わないが、あのクロノス教諭を倒したカミューラ相手によくやったと認めてやる。泣いて感謝するといい」

「俺もだ。それに相手は一之瀬の世界のカードを使っていたしな。未知のカード相手にあそこまで健闘できるのは素直に称賛に値する」

「明日香さん…万丈目君………あれ？三沢君もいたんだ」

「最初からいた！」

おおなんだかいい雰囲気だぞ。僕の懸念は外れそうだけど最後のー  
押しをしておこう。

（ほら、カミューラお前のせいでもあるんだからフォローしろよ！  
ガイドの奴に、カミューラがもう一回キックボートに括り付けられ  
てヒヤッハーしいって言っていたと進言するぞオラア）

（ちよつと！？ふざけないで貴方私を殺す気なの！？あの小娘にそ  
んなこと言ったら………嫌よ、想像もしたくない！あんな事やこん  
な事をあばばばばばばば）

（なら頼むよ。本当はお前だって少しは認めているんだろ？あんな  
にごつそりライフポイントを削られたんだし………）

（分かった、分かったわよ！その代わり本当にあの小娘に妄言を申  
告するのは止めなさいよ！ふう………全く高貴なヴァンパイアたる私が  
なんで人間無勢なんか………）

今は人形だろうが君は。

ぶつくさ文句を呟くカミューラを肩に乗せ翔のもとへ向かう。

「ちよつといいかしら」

「なんすか……、敗者の僕を笑いにきたんすか……？」

「全く可愛くない臍曲がりね…。違うわよ、私が勝つのは当然のことなんだからそんなことを誇っても何の意味もないでしょうが」

こいつは何しにここに来たのか分かっているのだろうか。  
これ以上翔を凹ませないでくれよ。

「貴方がカイザー亮の弟に相応しくないという言葉は取り消すわ。」

「えっ…?」

「だから貴方がカイザー亮の弟に相応しくないってという言葉は取り消すって言っているのよ!一回で聞き取りなさい!」

「でも…僕は…」

「あゝもう!男がいつまでもうだうだ言ってるんじゃないわよ。そんな奴に本気を出した私が馬鹿みたいじゃない!」

「僕を…僕を認めてくれるんすか…?こんな僕を…」

翔が顔を上げ感動した面持ちでカムミューラを見る。

ふう…。

よかったよかった。

翔はこれできじめかけた心を立て直すことができるだろう。

「なんだ、カムミューラも本当はいい奴なんだな!翔のことを励ましてくれてるんだろ?」

十代が横から余計な口をはさむ。

「かつ勘違いするな人間！決してお前らを認めたくはないわよっ！」

「へっへん、それなら認めてくれるまで頑張ればいいだけの話っす！次こそは僕が勝たせてもらうっすよ！」

「だからいい気になるなと…ちょっとやめなさい！頬を抓るな！」

十代と翔がカミューラをもみくちゃにする。

折角の感動シーンが台無しだ。

「なあカミューラ、次は俺とデュエルしてくれよ。翔の弔い合戦だ！」

「嫌よ面倒くさい。大体貴方みたいな暑苦しいタイプは好みじゃないわ！」

「ちょっと兄貴！僕は死んでないっすよ！！」

逃げ出したカミューラの後を追う十代と翔。

「全く…彼らは相変わらずね…」

「阿呆ばかりだ…」

「はははっ、賑やかなのはいい事じゃないか」

明日香の諦めを含んだような呟きに万丈目が相槌を入れ、三沢が締める。

まあこんな終わり方も彼ららしくていいか…。

## 閑話 水色と吸血鬼（後書き）

翔の成長イベントとしてはぽつと出の胡蝶蘭よりカミューラのほうがいいかなって思った次第。ちよっぴりフライングしてカミューラとデュエルして貰いました。

カミューラのデッキはシンクロ使わないで最後は火車で占める構成も考えていましたが、都合よくカイザーの名前がついたモンスターがいたのでそちらに。

### 追記

あんぎゃーすさんのご指摘により、傀儡虫が墓地に送られた後も結束の効果が発動されていたのを修正致しました。報告有難うございましたm(\_\_\_\_\_)m

### 第32話 道化

脈絡もへったくれもない唐突な質問だけど、もし君たちが最も心躍る季節はいつかと問われればなんと答えるだろうか。

雪が溶け草木が萌え芽ぐみ花々が蕾をつけ桜咲く『春』。

気温が上がり日差し強く人々の行動が活発的になる『夏』。

暑さや和らぎ穀物や果実が実り成熟する天高く馬肥ゆる『秋』。

日が短く寒くなり落葉樹は葉を落とし動植物が眠りゆく『冬』。

どの季節にもそれぞれの趣というものがあ、この問いに対する返答は各々で違ったものになる事は間違いない事実であるけど、僕と同世代近辺の人々、言うなれば学生という立場に身を置く者を対象に『どの回答が一般的であるか』という条件を付け加えると、おそらく『夏』と答える者が多いのではないかと思う。

なにせ夏には学生たちにとっては1年の間における最大イベントである『夏休み』が他の追隨を許さない圧倒的な支持を得て君臨している。

春休みもなかなか幅広い支持層を得ているけど、遊びたい盛り年齢である若人が対象では、他の季節と比べて人々が行動的となり、戸外活動を積極的にに行いやすい夏休みと比べられると一歩遅れを取る形に成らざるを得ない。

冬休みに至ってはワンパンチで吹き飛ばされるだろう。

あいつは期間が短いからな…。

そんな学生たちに大人気である夏休みとやらが、先日進級テストを

終えた僕らデュエルアカデミアの生徒もやってきたわけだ。ちなみにデュエルアカデミアは日本の学校とは違い、10月から新入生が参入して新学期が始まる海外スタイルになっている。

これが何を意味しているのかみんなにはおわかりだろうか？

そう！1年の学業過程を既に終えているため宿題というものがないのだよ！

遊び放題怠け放題というまさに夢のような休暇を過ごす事ができるかつてない機会！

そんな期待に胸ふくらませて満を持してやってきたザ・夏休み。

学年を跨ぐ長期休暇期間ということで原則生徒はみな帰省する。

しかし当然のことながら異世界から来た僕には帰る家など存在しない。

アカデミアに入る前に一時身を寄せていたアパートはもう払い戻しちゃったしね。

鮫島校長先生の計らいで夏期休暇中も特別に学生寮を使わせてもらえるようにしてもらったので、精々この豪華なブルー学生寮を貸し切りで自堕落ライフを送ろうと思った矢先の一報。

嫌な予感しかしなかったが連絡先がインタストリアル海馬ロボジロシヨンI2社とK・Cなら確認しないわけにはいかない。

そうだよ、もしかしたら休暇のお誘いかもしれないじゃな…ああ駄目だ、一行目から本社のほうに召集指令だ完全に終了しました。どうやら僕が暇になるこの期間を狙ってペガサスさんらがスケジュー



ルにぎつしり仕事を詰めてくれたようだ。

全くありがたくて涙が出るぜちくしょう……。

こうして僕のスローライフが計画初期段階で頓挫することとなった。

~~~~~

ああ空が近いな…。

現在僕が来ているのは童実野町の中で高層ビル群が立ち並ぶ一画の中でも一際目を引く大企業本社最上階の社長室だ。目の前にはその大企業、海馬コーポレーションの総帥たる海馬瀬人社長が立派な社長御用達デスクに肘を寄せ、顔の前で手を組み、鋭い眼光で此方を射抜いている。

僕が窓の外の様子を窺っていたのは一重にこの視線から逃れたかったからに他ならなく、人はそれを現実逃避と呼ぶらしい。

雲はいいよね…自由で…。

「なんですかこれは」

海馬社長から受け取ったのは1枚のカード。

まあカードといってもデュエルモンスターズのカードじゃなくて、免許書とかキャッシュカードとかそういう類のものなんだけど、僕の名前が入っているのは何故なのだろうか。

「貴様のプロデュエリストライセンスだ。再発行はできるが時間がかかる。絶対に失くすな。後は自分で管理しておけ」

いやいやいやいや！

「ちょっと待った！いや待ってくださいよ！いきなりで意味がわからないですし、そもそもプロになるにはプロ試験を受けてどうのこのやるんじゃないんですか？テストなんて受けた覚えはないですし、そもそもプロに志願すらしていないんですけど…」

「ふん、そんな制度俺にとっては些細な事だ。我が社を持つてすればどうとでもできる琐事。プロデュエリストとしての必要手続きは滞りなく完了している。書類上では貴様は既にプロデュエリストの一人というわけだ」

おおい！僕のいないところで何してくれてるんだこの社長は！？
というか何の意義があつて僕がそんなものに成らなきゃいかなのか。

「貴様の役割は道化だ。我が社とI2社が共に推し進める貴様の世界のカードを原案とした新カードの制作と新システムの導入。その広告塔として貴様を利用するために今の内から人目を惹くプロデュエリストとして動かし、世界の貴様に対する認知度を上げておくのだ」

それならば別に僕じゃなくてもいいでしょうが。
スター性のある十代なんかをお勧めするよ。

「別に我々も適当にこの配役を決めたわけではアリマセーン。もしユーがプロとして相応しくない者であれば、代役を用意していただ

けの話デース』

画面の向こうのペガサスさんが僕の顔色から思考を読み取ったのか
そう説明を加える。彼も忙しい身のため、今回は遠距離通信という
形での参加となっている。今回僕がここ海馬コーポレーション本社
に向かうことになったのもまた彼から頼まれた事なのだけれどね。

『以前私や海馬ボーイがユーと対戦したのは何もユーのカードを見
るただけだったのではナイノデース。デュエルを通してデュエリ
ストとしての才能をはかり、ユーはプロとして、あるいは広告塔と
して利用価値があるほどの腕前だと判断されたのデスヨ。なにより
この企画の原案はユーから生まれたモノ。それならばそれを広め、
皆に伝える役割を担う人物としてユー以上の適役は存在しないのデ
ース』

つまり自分から生まれた企画なのだから自分も責任持てよって事で
すか…。

安請け合いました結果がこれだよ！みんなも気をつけたほうがいいよ
マジで。

「明日、明後日の2日に渡り今期にプロとなった新人が現役のプロ
デュエリストと決闘を行うイベントが我が社の海馬ドームで開催さ
れる。新人にとっては己の力を世界に示す登竜門だ。それゆえ多数
の企業が注目する場でもある。力を示せばスポンサーが付き、プロ
として生きていくことができるかもしれん。だが敗北者には転落の
道が待っているだろう」

弱肉強食。

弱きは淘汰され強者がその犠牲の上に立ち栄える。

まあそれは世界の理でもある。

そんなところで挫ける弱者に興味など微塵も無い。敗北者は敗北者らしく惨めに生きていくといいと吐き捨てる海馬社長。

この弱肉強食の世界で勝ち抜いてきた彼だからこそ感じるところもあるのだろう。過酷な人生の中で数々の挫折を味わいながらも諦めずに喰らいつき、そして勝利をもぎ取ってきたのが海馬瀬人という男だ。そうして得た自らの力に絶対なる自信と誇りを持っている。だからこそ彼は弱者であることを理由に大した努力もせず諦める者を嫌悪するし、努力せずに結果のみを求めようとする凡愚共を唾棄すべき対象と捉えているのだ。

反面、弱さを自覚しながらも力を求めて努力し結果を残した者は、例え海馬社長が個人的に気に入らない者でもちゃんと評価をする。城之内克也がそのいい例だ。

…でそのイベントがどうしたって？

「無論貴様にも参加してもらおう。我が海馬コーポレーションがスポンサーとして後ろに控えているのだ。貴様に敗北の2文字は許されんぞ」

ちよー！？

死の宣告の如く下される命令。

ヤバイよヤバイよ。負けたら何されるんだよ。社会的に抹殺とかは

勘弁してください。

というかマジで海馬コーポレーションはブラック企業なんだよ。銃の扱いを社員教育で行っているんだぜ？元は軍事企業から玩具やゲーム、アミューズメント事業へと転換していった経緯があるからさらに恐ろしいよ！

『まだユーのとおっておき（シンクロ、エクシード）は公に出さないでクダサイ。時機を見て行動しないと無用な混乱を生むだけデース』
僕としては初戦からド派手に使ったほうが注目を集めるんじゃないかと思つたが、二人には別の思惑があるようだ。今はそれを使わずとも耳目を集められる事もその一つであるらしい。

なにせ僕の場合は後ろにI2社とK・Cという世界でも有数な大企業がスポンサーとして付いているのだ。出所不定で今はただデュエルアカデミアで学生をやっている若造の背後に、これだけの大企業が手を貸したらそりゃ注目を集めるだろうさ。

その連鎖として僕個人の情報と、I2社K・Cとの背後関係を調べられる企業が出てくることは確定事項。むしろこの2社の動向に気を配れない企業がこの世界で生き残れるはずがない。

そこへ喰いついてきた者たちに、現在I2社とK・C社が共同で推し進めている新カード制作や新システムの事業情報を故意にある程度漏らし、各々の企業でその改革とも言える事業案を認知させる。

今の内から大つぴらに情報を開示しないのは、確実に出るであろう保守派の人間への対策であると考えられる。どの世界、どの時代においても改革にはそれ相応の労力が伴うものだ。

まあ今回の企画を推し進めるのはデュエルモンスターズの生みの親であるペガサス・J・クロフォード率いるI2社と、海馬瀬人筆頭のデュエルモンスターズ関連の事業のみならず他の事業でも凄まじい規模のシェアを持つK・Cだ。反対派がどう足掻いたところで結託した2大企業に太刀打ちできるはずもなく、権力によるごり押しで事業が推し進められるであろうことは紛うこと無き事実であるが、此方側も無用な混乱は避けたい。

よつてある程度の経済力を持つ企業に情報を意図的に流し、自発的な行動を促す事によつて此方の余計な労力を削ると共に、反対派を黙らせるため外堀から埋めてしまえ作戦というわけだ。

反対派にとつてもI2社、K・C側は正式にその事業を推し進めているなどとは公表していないため、抗議したところで白を切られるのは分かり切つた事だろう。むしろ下手に抗議をするとその事業案が正式に稼働した場合、反抗した企業は世界情勢から一気に取り残される事となり、衰退の道を辿る可能性すらある。

つまりペガサスさんや海馬社長は世界に浸透しやすい時期までデュエルモンスターズのルールにすら介入する新種のカードの情報は正式に開示せず、機を窺つて一気に焚きつける心算のようだ。まあ僕の世界の正史のようにまずはシンクロ召喚を、次にエクシーズ召喚をと段階的に進めるらしい。いきなり大規模な変革を行ったところで理解されなければ何の意味もない。人々がそれを当然のことだと認知するまでにはどうしても時間がかかるしね。

ところで僕はそれまで役者の如く働かなければならないのだろうか？

「ふうん。貴様は精々道化の如く舞台上で踊っているがいい」

ああ…さいですか…。

知らぬ間にプロデュエリストになっていた日から2日後。

何の因果か僕は本日海馬ドームで行われる決闘イベントデュエルに参加せねばならない。

ちなみに昨日は丸藤先輩がデュエルを行っていた。相手はエックスというデュエリストで、プロとしてのランクでは最近売り出し中のプロリーグの貴公子と言われているエド・フェニックスより上だったらしい。エックスは試合前に初めて闘った相手には負けた事がないと豪語していたのだが、丸藤先輩のサイバーエンドの猛攻を耐えきれずあっさり負けてしまい、その記録も途切れてしまったとの事だ。

エックスは相手のデッキ信頼を破壊する事に喜びを覚えるサディストで、デッキ破壊によって勝利する戦術をとっていたために頗る人氣が悪く、そいつを蹴散らした丸藤先輩はその実力とルックスもプラス要素となり、一挙に人氣が爆発している。特に女性人氣がだ。

というかやっぱこちらの世界ではデッキ破壊による戦術は強い嫌悪感を抱かせる行為なんだな…。僕も一回ジャッカルの姐さんに説教された事あるし…いや、あの事は思い出さないでおこう…。

まあそんなことは置いといて本日の事だ。

プロとしての仕事なんて欠片も分からないけど、本来はペガサスさんの秘書の一人である女性が、暫定的にマネージャーとして動いてくれているから基本僕は何もしていない。

というか彼女が優秀すぎて指示に従うままに動いていただけなのだけど…。

伊達に大企業の社長秘書をしているわけじゃないという事だね。

彼女の前情報によると既に海馬ドームには数万の観客動員数が確認されているらしい。

正直ここまでの規模になると緊張するとかそういうものを超え、悟りにも似た諦観の境地に至る。

実際に現在数万人の観衆に囲まれながらデュエルフィールドに立っている僕が言っているのだから間違いない。

『さて本日新人一之瀬選手に立ちはだかるデュエリストはプロランク第10位！その緻密な戦略から数学博士の異名をもつマティマティカ選手だあっ！！！！』

「デュエルは数学だ。偶然の入り込む余地はない。それを新人君に教授してやろう」

相対するのは凄まじくカールのかかった髪と数字のプリントがされた赤いスーツと蝶ネクタイが特徴的な細身の男。

すごいな、どこで売っているんだろうかそのスーツは。特注品？

『いや、それにしても一之瀬選手は若いですねえ。資料によると彼

はエド・フェニックスの一つ年上で、デュエルアカデミアに通う現役の学生とのことだ。だが学生だからと侮ることなかれ！彼はなんとI2社社長にしてデュエルモンスターの生みの親、ペガサス・J・クロフォード、そしてこの海馬ドームの建設者であるK・C社長海馬瀬人両名の推薦を持ってプロ入りしたとされるとんでもない新人だあつー！」

その情報に周りが一挙にざわめく。そりゃこの業界の頂点と言っているいいビッグネームの連名だ。

相手の選手も目を剥いて驚いていたが、すぐに気を取り直しデュエルディスクを構える。

「ふつ、上に気に入られただけの子供に私の数式は破れん！」

いや、僕も好きでこんな状況になったわけじゃないんですよ。理解者がいないというのは斯くも悲しき事とは…。

「「決闘^{デュエル}！！」」

「私のターン、ドロー！」

「まず先攻を取ったのはマティマティカ選手！さあ今回はどのような計算を見せてくれるのかあ！」

「私は手札より増援の魔法カードを発動！デッキよりレベル4以下の戦士族モンスターを手札に加える。私はマジック・ストライカーを手札に加える」

「そして私の墓地に存在する魔法カードを1枚ゲームから除外する事でマジック・ストライカーは特殊召喚する事ができる！」

マジック・ストライカー ATK/600 DEF/200

「さらにモンスターをセット、リバーズカードを1枚セットしターンを終了する。さあ君のターンだよ」

『おおつとマティマティカ選手はお得意のダイレクトアタッカーを中心とした攻撃的なデッキのようだ！攻撃力が低いと侮るなかれ、彼の戦略に嵌まってしまい敗れ去ったデュエリストは数知れず！』

「僕のターン、ドローカード」

さあて僕もやりますかね。

というか大事な初戦に負けたりしたら本当に社長が怖いんだよ！

「手札より墮天使ゼラートを捨て魔法カード、トレード・インを発動！このカードは手札のレベル8のモンスターカードを1枚捨てることによって自分のデッキよりカードを2枚ドローできます」

『おおつと！一之瀬選手はいきなり手札交換の魔法カードだ！初手の引きが悪かったのでしょうかっ！』

どうもこの世界は手札交換カードを軽視しているように感じる。強欲な壺とかは大好きなくせに不思議なものだ。真のデュエリストならそんなものに頼らず引き当てるといふことなのだろうか。デュエリストはすごいなあ…僕にはとてもできない…。

「さらに魔法カード発動、大嵐！フィールド上に存在する魔法、畏カードを全て破壊する！」

フィールド全体を覆うほどの巨大な暴風が発生し、互いの場を荒れ狂う。

「ちっ、グラビティ・バインドが破壊されたか……。まあいい……」

『マティマティカ選手のリバーカード1枚に大嵐を発動です！少々慎重になりすぎているように感じますが、これも何か考えがあったることなのでしょうか！？』

そりゃそうだ。展開を邪魔されたら堪ったものじゃない。

どうせこのターンで終わらせるつもりだしね……。

「手札からヘカテリスを墓地へ捨て効果を発動！デッキより永続魔法、神の居城・ヴァルハラを手札に加え、そのまま発動します！」

フィールドに迫り上がったのは純白の大理石で建造された神聖で荘厳なる神々の居城。鮮やかな紅のカーテンを背に据えられた王座には空位であるのにも関わらず、誰しもが思わず膝き頭を垂れてしまふほどの存在感を放っている。

「神の居城・ヴァルハラの効果。自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、1ターンに1度手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる！降臨せよ！墮天使アスモディウス！」

ヴァルハラを中心である王座から放たれる光がおさまった時、そこに顕現するは天使であったころの名残である純白の衣装に、墮ちた証である黒翼と漆黒の甲冑を纏いし墮天使。

かつて智天使であったとされているが、今やソロモン72柱に属する魔神の一柱、72の軍団を率いし序列32番の王だ。

墮天使アスモディウス ATK/3000 DEF/2500

このカードはデッキまたは墓地から特殊召喚できない制約を持っているが、逆に言えばそれ以外の場所からは特殊召喚できることにならない。

「アスモディウスの効果を発動！このカードは1ターンに1度自分のデッキから天使族モンスター1体を墓地に送る事ができる。よって僕はデッキから墮天使スペルビアを墓地へ」

さあ墓地で出番を待っているといいよ。

まあすぐに呼ぶけどね。できたら今の内にアップよろしく頼むよ。

「そしてフィールド魔法、死皇帝の陵墓を発動！このカードによって互いのプレイヤーは生贄召喚に必要なモンスターの数×1000ライフポイントを払う事で生贄なしでそのモンスターを通常召喚できる！僕は2000ポイントのライフを支払い、手札よりレベル7モンスター、アテナを通常召喚！」

己の命を削り呼び出すは知恵、芸術、工芸、そして戦略を司るギリシア神話の女神で、オリュンポス十二神が一柱。天界を守護せし神盾アイギスと、人々に勇気を与え勝利へ導く銀槍を手に携える戦争と武勇の女神。

アテナ ATK/2600 DEF/800

その美しく気高き容貌にスタジアムの観客らから感嘆の声が漏れる。
ふつくしい……。

でも彼女は美しいだけじゃない。

戦闘力は他の大天使に一步後れを取るけど、戦いの女神と謳われたその力は彼女の効果に凝縮されている。

「そしてアテナの効果を起こ動。1ターンに1度、アテナ以外の自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスター1体を墓地に送る事で、アテナ以外の天使族モンスター1体を墓地より蘇生させる！僕は墮天使アスモディウスを墓地に送る事によって、墮天使スペルビアを墓地より特殊召喚！」

紅の翼で飛翔せしその墮天使の名の意味は七つの大罪の内の一つ『傲慢』。

他者を見下し、驕り高ぶった結果として堕ちた天使。

しかしそうなった理由は彼の者が本当に強大な力を秘めていたからに他ならない。

墮天使スペルビア ATK/2900 DEF/2400

「墮天使スペルビアは墓地からの特殊召喚に成功した際、自分の墓地に存在する墮天使スペルビア以外の天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる！蘇れ！墮天使ゼラトよ！」

地獄より舞い戻りしそれは、本来ならば純白であつた翼を血を彷彿とさせる濁りきつた赤に変色させ、彼奴の憎悪を表わすかの如く漆黒に染まつた強靱な肉体を持つ大天使。

それはかつて聖域を探し求めながらも闇に堕ちた戦士の成れの果て…。

墮天使ゼラート ATK/2800 DEF/2300

『何と何と何とお!!これは何ということでしょうか!!? たつた1ターン! たつた1ターンで最上級の大天使をフィールドに3体も揃えるとはっ!?!』

「さらにアテナのモンスター効果! フィールド上に天使族モンスターが召喚、反転召喚、特殊召喚された時、相手ライフに600ポイントのダメージを与える! いけアテナ! ゼウスの雷霆!」

ギリシア神話の主神たる全能の存在、天空神であると共に、オリュンポス十二神をはじめとする神々の王であり、実の父でもあるゼウスより借り受けたる武器。『電光』の意を持つケラウノスから放たれた雷光が女神に仇なす者に襲いかかる。

「くうっ…! まだだっ!」

マティマティカLP4000 2800

「まだいきますよ! 墮天使ゼラートのモンスター効果! 手札から闇

属性モンスター1体を墓地に送る事で、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する！手札から堕天使スペルビアを墓地に送り効果を発動！滅ぼせ！邪なる光芒！！」

ゼラートが放った黒き派動が相手のモンスターを砕き、滅殺する。伏せられていたのは戦闘破壊耐性を持ち、攻撃された際に1000ポイントの誘発ダメージを与える効果を持つマシユマロン…。

ああだから最上級モンスターが出てきても余裕そうな顔していたのか。だがその壁が完膚なきまで破壊された今、彼の表情は一変し顔面蒼白だ。

『なんとお！？堕天使ゼラートの強力な効果によってマティマティ力選手のフィールドはがら空きだあ！』

「そつ、そんな……私の計算が……！」

すまんね。こちとら負けたら社長に怒られるんだ。僕のために負けてくれ。

「バトルです。僕のフィールドの全モンスターで相手プレイヤーにダイレクトアタック！」

スペルビアとゼラートがその紅翼をはためかせマティマティカに襲いかかり、止めとばかりにアテナの銀槍が光に溶ける。

「馬鹿な馬鹿なっ！？この私が新人などに負け…うわああああああああああああああっ！！！」

アテナの流星の如き一撃がマティマティカに突き刺さり、崩れ落ちる。

マティマティカLP2800 0

『決まったあつ！決まりました！何ということでしょうか！プロランク10位のマティマティカ選手がたった1ターンで敗れるとは誰が予想したでしょうかあ！？』

「くう…プロの計算が新人に押しつぶされるとは…お前は計算外の男だ…」

一応後攻1ターンキルだ。派手に注目を浴びるのには十分な成果を出しただろう。観客の歓声が飛び交うドームを無気力に眺めながらそう思考する。

もう帰っていいよね？ていうかそろそろ帰らないと胃に穴があきそうです本当に勘弁してくださいお願いします。

お腹に手を当てながら選手控室に戻ると、休む暇もなくマネージャーさんが分厚い手帳をペラペラめくりながら今後の予定をつらつら述べていく。メディア関連の取材に、K・C主催のイベントがいくつか、さらには今回の件を通して僕の事を知った企業らが、E2社やK・Cとのコネクションを築こうと早速アプローチを仕掛けているらしい。だがその数が尋常じゃない。さっきから引つ切り無しに彼女の携帯電話が鳴り響いている。僕はペガサスさんと海馬社長の影響力をまだまだ甘く見ていたようだ。というか僕は本当にこの数

のイベントをこなさなければいけないのか？それは世間的にいう自殺と同義なのではないだろうか。

休みが……僕の夏休みが……。

崩れ落ちる僕を無視してバリバリ仕事を処理していくマネージャーさん。

そしてその横で同じようにバリバリペンを片手に作業するガイドさん。ちなみにこいつがやっているのは勿論仕事の手伝いなどではなく、クロスワードパズルをやっているだけだ。読者プレゼントサービスにある蟹やら霜降り肉やら豪華な食材がふんだんに盛り込まれた当選者1名のご当地特産品セットがメーカーでぐりぐりされている。

こいつはこいつで状況が変わっても全くぶれない。僕がプロデュエリストになったと報告した時も全くと言っていいほど興味を示さなかったし、先ほど僕が大変な重圧を受けながら臨んだデュエルの時も観客席のほうでポップコーンを食べていた。

うん…、僕だって別に励ましてくれるなんて高望はしていないし、君のいつもの態度から鑑みてそんな浅はかな考えすら浮かばなかったさ。

でも…でも同情くらいはしてくれてもいいんじゃないかなと思わなくもないわけですよ。

え？何？煩い気が散る？

ああすみません…どうぞパズルを続けてください…。

十代にハネクリボーと家のガイドを交換してくれないか本気で頼んでみようかな…。

第32話 道化（後書き）

ノリでこんな展開にしまって次に繋がられるのか…！

最近「星に願いを」を使いたくて仕方がない。コンフィや霧の王等の守備力0の子達を中心に考えていたらストライカーワールフのTG出張セットやワンマジも守備力0だ。じゃあついでに同じく守備0のご隠居入れてやれシエン出そう、やれ植物出張セットも混ぜようとかやってたカオス。

頭の片隅で素直にガガガ先輩使えよという心の声を完全に無視して何がしたいのだろうか自分でもよくわからなくなってきた今日この頃。

第33話 仁義（前書き）

新たにTFからキャラが出ますが、設定は多少なり弄っています。

今回は長いので2分割しています。後編は今夜8時頃に投稿予定。

第33話 仁義

ジャッカル岬 side

あっちい……。

夏の日差しが容赦なく照りつける街道を、重いスポーツバッグを引きずりながら歩む。

あまり意味はないと分かっているながらもつい手で空を煽いでしまう。やっぱり駄目だ、無駄に体を動かすことでさらに暑くなってきやがった……。

真昼間だというのにこの地域一帯は人が少ない。日差しと熱風を避けて室内に籠る奴が多いというわけではなく、こちら辺は町外れのほうであまり店もないため、普段から人通りが少ないだけだ。

額から流れる汗を手で拭いながらダラダラと歩く事数十分、目的地に到着する。

そこは町外れも外れに存在していて、見た感じ閑古鳥が鳴いていそうな宿屋だ。

別に宿泊施設自体が目的ではない。用があるのはそこにいるであろう人物だ。

俺は勝手知ったる他人の家の如く遠慮なくドアを開け中に入る。

「ちーっす、姐さーん。お久しぶりです」

「ああ、なんだい岬か…久しいね」

ドア正面のカウンターに足を投げ出し、いかにも退屈そうにした女性に声をかける。

左の頬にはトレードマークのハートのペイントが施されており、猛禽類のようなギラギラした目とのギャップが彼女の魅力を高めている。

この人はノーマネー弥生さんといって俺の憧れの人だ。

ガキの頃の話だが、ただ力を振るうことしかしていなかった俺に喧嘩のなんたるかを叩きこんでくれたことがその要因だ。関係でいえば師匠と弟子みたいなもんだと想像すれば分かり易いが、俺にとっではやはり「姐」と言ったほうがしっくりくる。まあそれはこの人の世話焼きな性格も影響しているんだろうけどな。

「アンタ、アカデミアはどうしたんだ？まさか…退学になったんじゃないだろうね？」

「ちげーよ！季節考えりゃわかんだろ！今は夏休みだ夏休み！！」

初めに思い浮かぶことが退学って姐さんは俺をなんだと思ってやがるんだよ！

そりゃ確かに昔はやんちゃばっかしてたかもしんねーけどよ。

「それで学生生活はどうだ？楽しくやっているか？授業はちゃんと受けているんだろうな？」

「はっ、授業なんてつまんねーもんフケてるに決まってるんだろ。出席日数足りてりゃいいんだよ。てゆーかお袋みたいなこと言っんじやねーよー！」

元々俺はアカデミアなんぞ行く気はなかったしな。義務教育なんて面倒くさい制度が終わったらすぐ働きに出るつもりだったんだが、姐さんが絶対に通えとうるさかったから仕方なしに入学した面が強い。残りは強そうな奴に会えるんじゃないかという好奇心だ。

「まったくアンタは……そんなんじゃないや何のためにアカデミアに通っているのか分からないだろうが……」

「いいじゃねえか別に。誰の迷惑にもなつてねえし」

いや、いつもノートを貸してもらったり、補習を手伝わせている彰の奴には少しばかり迷惑かけているかもしれないが……

あいつならまあいいだろ。

「はあ……若い頃にすっかり勉強しないとアタイみたいな社会からはぐれもんになつちまつて昔から言つてんだろ」

姐さんは額に手を当てながら溜息をつく。

確かにこの言葉は嫌って言うくらい何度も聞いているさ。俺に学校へ行けと説得した時も同じような事言っていたしな。その度に俺は反抗していた。

姐さんは昔からやんちゃばかりしていたらしく、人様には言えないような悪事も働いていたそうだ。というか今もここら辺のシマを占めているギャングのボスだったりする。

でも俺からすればそんなの関係ない。

何故なら俺は知っている。

姐さんは仲間を決して見捨てないし、弱者に対して無闇に暴力を振るったりもしない。それどころか組織同士の抗争で親を失った者や孤児を自ら引き取って世話を焼く。捨て猫なんかも放っておけない性格で宿の空き部屋は動物たちの住処になっている。俺が動物好きになったのは少なからず姐さんが影響していると思う。姐さんのトコに行く度に子猫やらなんやらが群がってくるんだ。仕方がねえだろうがっ！

それにここら一带を仕切っているのも姐さんがやり始めたことじゃなく、姐さんに惹かれた奴らが勝手に増えていった結果とも言える。

俺は姐さんは尊敬に値する人物だと思っている。

だから姐さんみたくなくなっちまうぞと言われても嬉しこそすれ嫌なわけがない。

それなのに姐さんは自分の事を社会の害悪だと卑下した見方しかない。

俺はそれが気に食わない。アンタにはもっと胸を張って生きて欲しい。

まあこの会話の流れは既に何度もしているし、その度に平行線を辿るところになることは過去の経験から分かっている。だから適当に会話の流れを変える。

「それよりも喉渴いちゃったよ。なんかくれ」

「なんかってアンタ……。そういうところは一年経っても成長して

ないね…」

文句は馬鹿みてーに照りつける太陽に言ってくれよ。

姐さんは2度目の溜息を尽きながら奥のほうに引っこみ、冷蔵庫から冷えた缶コーヒーを取ってきて俺に投げ渡す。

姐さんが飲むコーヒーはいつもブラックだ。俺は苦手だったんだが姐さんに子供扱いされるのが嫌で、我慢して飲み続けた結果いつの間にもやら普通に飲めるようになっていた。まあ今でも特にうまいとは思わないけどな。

姐さんはちよつと調べ物があるとかでパソコンをカタカタ動かし始め、手持無沙汰になった俺は近くに置いてあるソファに腰を下ろし、特に意図もなくテレビをつける。

見たい番組なんてないし、適当にチャンネルを切り替えるだけの暇つぶしだ。

『さあて本日新人一之瀬選手に立ちはだかるデュエリストはプロランク第10位！その緻密な戦略から数学博士の異名をもつマティマティカ選手だあっ！！！！』

へえ…アイツと同じ名前のプロデュエリストがいるんだな…。
コーヒーを口に含み、軽い気持ちでテレビを見やる。

しかし…。

『いや〜それにしても一之瀬選手は若いですねえ。資料によると彼はエド・フェニックスの一年上で、デュエルアカデミアに通う現

役の学生とのことだあ！だが学生だからと侮ることなかれ！彼はなんとI2社社長にしてデュエルモンスターの生みの親、ペガサス・J・クロフォード、そしてこの海馬ドームの建設者であるK・C社長海馬瀬人両名の推薦を持ってプロ入りしたとされるとんでもない新人だあっ！！」

実況者の解説に沿ってテレビに映っていたのは俺がよく知っている奴だった。

「ぶほっ！かはっ！げほげほっ…！」

思わず口内のコーヒーを吹き出す。

「ちよつとアンタどうしたんだよいきなり咽込んで。ほらこれで拭きな」

「げほっ…ああすまねえ…」

姐さんがこつちに投げて寄こしたタオルで口元を拭き一息つく。

……ってそうじゃねえ！！何やってんだあの野郎！

「アカデミアの学生だって聞こえたけどまさかアンタの知り合いなのかい？」

俺の様子を窺いに此方まできた姐さんが問いかける。

「知り合いつつーかなんつーか…俺の弟分なんだが…、何やってんだかアイツは…」

「ほう、アンタが他人とつるむとはねえ…。しかも男かい。もしかしてアンタのコレかい？」

姐さんがニヤニヤしながら小指を立てる。

「なっ！？ち、ちげーよ！弟分だつて言っただろーがっ！」

姐さんからの予想外の質問が飛んできたことに動揺して、自分でもどうしてかわかんねえが顔が熱くなっていくのを感じる。くそう、これも夏の暑さのせいだっ！

「あはははっ、まさかアンタがそんな顔するなんてね！なんだいしつかり青春してるじゃないか！」

「だからアイツとはそんな関係じゃねーって言ってんだろっがっ！聞けよ！！」

くっ、姐さんはいつもそうやって俺をからかうんだ！

「それにしてもすごいじゃないかアンタの彼。学生の身でありながらプロデュエリストになるなんて…。しかもバツクにはあのI2社とK・C！有望株だね。絶対に手放すんじゃないぞ？」

「だ・か・ら！……はあ……もういいっ……！」

今のこの人には何を言っても無駄だ。思い込みが激しいというかなんというか。

拗ねる俺の背中をバンバン叩きながらケタケタ笑っているこの人はもう無視だ。

その時上階のほうからドタドタと間抜けな音をたてながら、姐さんが面倒をみているがきんちよどもが下りてきた。どうやら姐さんの笑い声に誘われたらしい。

「ああ〜！岬おねえちゃんだあ！」

先頭の女の子が俺の姿を確認すると共に大声をあげ、此方に抱きついてくる。こいつらとは数年前から顔見知りだ。たまに遊んでやっていたら思った以上に懐かれてしまったのは誤算だったがな。女の子は素直な子が多いから相手してやるのは楽なんだが、問題は男連中で、近頃その年に相応しい捻くれ方をし始めた。

具体的に言つとだ…。

「あ〜っ貧乳だ！貧乳だ！いつ帰ったんだ貧にゅー！」

「なっ！？このクソガキが！よおしそこを動くなよ今すぐにぶつとばし！子供相手になにしようとしているんだお前は！」痛え〜っ！
？」

クソガキを殴ろうとしたその背後から俺の頭に向かって姐さんの拳が振り下ろされた。

くそう…、わりーのはあのガキだろうが！？

ああいう奴は一発ガツンと言ってやらねえといつまでも生意気なままだっつーのに、過保護な姐さんはあまり強く注意しない。

つーかいいいじゃねえか貧乳でも！貧乳のなにが悪い！誰かに迷惑かけたか！？

大体あんな無意味な脂肪の塊ぶら下げて馬鹿じゃねーのか！

喧嘩する時も邪魔だろっし無駄に肩も凝るとかないほうがいいだろ
うがっ！！

どいつもこいつも胸の大きさをんぞ糞の価値にもならねえもんで人
様を計りやがって！

別に悔しくねーぞっ！本当だからなっ！

「がきんちよの悪口くらい聞き流しな。自分より小せえ奴に喰って
かかるなんて恥ずかしい真似するんじゃないよ」

姐さんが呆れた顔で腕を組む。

そしてそのせいで姐さんの胸についている豊満な二つのブツがさら
に強調される。

「なあ姐さん…。姐さんは俺くらいの年の時なに食って生きてたん
だ？」

「何だい、いきなりわけわか「なに食ってたんだよ！早く教えやが
れっ！」……はあ……」

「あのね〜弥生おねえちゃんは牛乳が好きなんだよ」

俺にまだくっ付いていた少女が不意にそう口にする。

なるほど牛か！？牛なのか！？牛がいいのか！？

ようし、よくわかった。今すぐに牛乳をひとつ走り買ってくるぜ！

俺がそれを行動に移そうとしたその時、突然入口のドアに異変が起こった。ガコンツとでかい音をたて、宿屋のドアを蹴破って柄の悪いスーツの男どもがズカズカと入ってきたんだ。

「がきんちよどもは早く上の階に戻りなっ！」

姐さんはすぐに子供たちに部屋に上がるよう言いつけ、侵入者の視線からガキどもを守るかのように立ちはだかる。

「やあ今日は。相変わらず寂れた宿屋ですなあ。それで今日はいい返事を聞かせてもらえるんでしょうかねえ」

その声をかけたのはまだ30代前半くらいの若い男だ。奴の挙動に対して周りの連中が注意を払っていることから、この男が相手側のリーダーらしい。

「何度来たって無駄だっ！アタイはここを立ち退く気はないし、テーマなんぞに付き従うつもりなんて微塵もない！」

いきなりの展開についていけない俺は小声で姐さんに尋ねる。

（おい姐さん。なんだよこいつらは地上げ屋か何かか？）

（最近ゴルフ場やパチンコなんかのアミューズメント業界で急成長している大瀧グループのもんさ。そこにいる大瀧修司が頭やっている。ここら一帯の土地を買い占めて事業を興そうと、こつして立ち退きに応じない奴に圧力をかけてきているのさ。こつちの事情などまるで考慮せずにな）

はっ、気にいらねーな。姐さんが邪見に扱うのもよく分かるぜ。

姐さんはこういう権力を嵩に他者を排斥するような行為を最も嫌う。

「ふふっ相変わらず豪気な方だ。貴方が協力してくれれば他の反対派の活動も丸く収まると思うのですけれど。困りましたねえ……」

「テメーの事情なんぞ知ったことじゃないんだよ。分かったらさっさと帰りな！」

このシマに住む者の行動指針は基本的に姐さんの方針と合致するよう動くからな。姐さんがいる限りここらで好き勝手できる奴はいないだろう。

「でも…これを見ても同じことを言えますかねえ…？」

そう言つて大瀧という男が此方に見せつけたのは1枚の書類。

強制立ち退きの証書。予想通り自分たちの都合の良い文面がつらつら書き並べられており、ここ一帯の地域の買収件の合法性を説いた内容。それだけなら何を勝手にほざいてやがると言つてやるだけで済んだ。問題はその証書に海馬コーポレーションの印も添えられていることだ。

「なつ！？何故海馬コーポレーションがテメーらなんぞに手を貸すんだ！」

「なに、私は個人的に海馬コーポレーションの上層部の役人と仲良くさせてもらっているだけです。排斥されたとはいえ私の父、大瀧修三はかつて海馬コーポレーションの重役グループBIG5に名を連ねていたこともありましたしねえ」

姐さんの動揺した姿に満足したのかニヤニヤ笑いながら説明する。

「いくら貴方でもかの海馬コーポレーションを敵に回して立ち回れるはずもないでしょう？貴方を慕う者たちもどんな目に会う事かわかったもんじゃありませんからねえ……ふふふつ、ああ失礼」

拳を握りしめ怒りを抑える姐さんを馬鹿にするように見下し、嘲笑う大瀧のヤローに対して怒りが爆発し、俺はあのクソヤローに向かって駆ける。

「てめえ卑怯な真似してんじゃねーぞゴラァ！俺がぶつ飛ばしてやるっ！「やめな岬っ！」つつ！？なんで止めるんだよ姐さん！」

奴に辿りつく前に姐さんに後ろから羽交締めされて身動きが取れない状態にされる。

「岬！頼むからさらに状況を面倒なことにするな！お前は黙って後ろにいろ！」

姐さんは有無を言わさぬ圧力で俺を後ろに追いやる。

そんな俺たちの行動を面白そうに見ていた大瀧が突如声を上げた。

「フフフツ、貴方と貴方の組織が私の傘下に入るといふならば、今回の件に関して考えないところがないわけでもありませんよ？どうですかねえ、受け入れてはもらえませんかねえ」

「わりーが俺は俺が認めた奴にしか従う気はねえんだよ。戯言は俺に真正面から勝ってから言いやがれこのコシヌケ野郎が」

姐さんのその言葉に、大瀧は言質を取ったと言わんばかりにニヤリ

と笑う。

「ほう…、つまり貴方に何らかの形で勝利すれば素直に我が傘下に加わるとそう解釈して宜しいので？ではこうしましょう。今夜我が社にご足労願ひ、デュエルで勝負しましょう。まあ勝負相手は私ではなく此方で雇った者ですがねえ。もし貴方が勝てば今回の件については此方側から手を引きますよ？」

「なんだと!？」

「無論其方が敗北した時のことはわかっていますよねえ…?。それでどうしますか?この勝負お受けになりますかねえ」

「くっ…いいだろう、その勝負乗ってやるよ!だがためえが今吐いた言葉忘れんじゃねーぞ!」

「それは此方の台詞ですよ。それでは今夜…」

その台詞を残し、黒服のガードマンらを連れて大瀧のヤローは去って行った。

「なんだよアイツらは!」

「さっき言った通りさ。奴ら大滝グループは裏で色々あくどいやり口をしているってモッぱらの評判もある。それにちよつと前にウチのもんがあいつらといざこざを起こしてね。その時はアタイがその場を収めたんだけど、それ以来事あるごとにこつちに突っかかってくるのさ」

ふん、ホントにいけ好かねえ野郎だな。

「アタイにもこの他にいくつかアジトはあるが、そこでがきんちよどもの面倒をみるのは無理だ。とてもガキどもを置いておけるような環境じゃない」

「だからってあんな野郎どもの言う事きかなきゃならねえのかよ！」

「アイツらだけならまだやり様があつたが、バックに海馬コーポレーションが付かれたならもうお手上げさ。流石にK・C相手じゃアタイらみたいな一端の組織じゃ一息で吹き飛ばされるだけだ。ハナっから喧嘩にすらなりやしない。完全なワンサイドゲームだ」

「ただだよ、アイツらが言っている事は全て嘘だつて可能性もあんだる？」

そんな事を言いたげな俺の表情を読んだ姐さんは首を振り答える。

「あの男はグループの社長という立場の他にレアカードコレクターつて一面も備えている。無論真つ当な手段で手に入れたものじゃないだろうけどな。大方自分のコレクションを海馬コーポレーションの上層部へ上納して機嫌を取ったんだろうさ。あの証書もそれを利用して手に入れたんだろう…。くそが、まさかあの野郎が海馬コーポレーションとのコネを持っているたあねえ…」

姐さんが悔しそうに爪を噛む。

「それでどうするんだよ姐さん。あの野郎との勝負の話だつて怪しいもんだぜ？勝ったところで奴が本当に約束を守るなんて保証はねーぞ」

「それでも行くしかないだろうさ。僅かでも可能性があるならば尚更な。何より売られた喧嘩を買わねーわけにはいかねえし、受けた勝負を途中で投げ出すなんぞこのアタイがするわけないだろうが」
はっ、だろうと思ったよ。それでこそ俺の憧れた人だ。

「じゃあ俺も「お前は来るな」……あぁっ？なんでだよ!？」

「これはアタイらの問題だ。お前は関係ない。部外者はすっ込んでな」

「ふざけんなよ、関係ないはねーだろうがっ!」

俺にとっては姐さんもガキどもも関係のない存在なんかじゃねえ!

「お前が来たところで何の意味もない。たかが学生の身分のお前が大企業をバツクにつけた奴ら相手に何ができる」

「つつ!?それは……」

「いい機会だ。金輪際アタイに関わるのをやめろ。今回の件だって一般人の目線から見れば相手側に理があつて、アタイらはそれに反対する害悪分子としか写つちやいないだろう。社会的にはむしろそれが正しいと言えるしな」

姐さんから告げられた言葉が俺の胸に突き刺さる。

「くっ、そうかもしんねーけどなんで姐さんとの関係まで断ち切らなきゃいけないんだよ!関係ねーだろうがっ!」

「アタイみたいなのと一緒にいるとお前までそういう風な目で見られるようになる。好き好んで社会の外れ者になる必要はない。お前はまだ若いんだ。お前の前には無限の選択肢がある。どんな道だって選べる。それなのにその選択肢を潰すような真似はするんじゃない。アタイみたいなのと関わって人生を駄目にして欲しくないんだ！」

俺の肩を掴んで今まで見たこともないほど真剣な眼差しでこう告げる。

「岬、お前には真つ当な人生を歩んで欲しいんだよ」

「……………なんだよそれ……………」

掛けてくれる言葉は嬉しい。

姐さんはいつだって俺のためになるよう説教し、行動していた。

そして翻って見ればいつもそれは正しかった。

だから俺は姐さんの進めるままデュエルアカデミアに入ったし、勉強が嫌いでも未だに辞めていないのはそれが俺のためになると姐さんが考えてくれたからだ。

でも…。

でも今回ばかりはいくら姐さんでもきけねえ頼みだ。

生憎恩人を見捨てて自分だけ幸せになるなんて無粋な真似なんぞする馬鹿野郎に鍛えてもらった記憶なんてねーからな。

「ちっ……………」

俺はそのまま挨拶もせず姐さんの宿から飛び出し、自分ができる事を探す。

裏で悪い評判を噂されるような奴らが、姐さんとの約束を守るとは到底思えない。

実際に見た感じも胡散臭さ爆発の野郎だったしな。

俺一人が頑張ったところで姐さんの言う通り、何かができるわけじゃない。

悔しいがそれは覆せない圧倒的なまでの事実だ。

しかし俺は今僅かながら一つの可能性が思い浮かんだ。

昔の俺だったらぜってーこんな方法をとらなかつただらろつなと自嘲しながら、それを行動に移す。

早く出るよあの野郎…。

第33話 仁義（後書き）

ノーマネー弥生さんの解説文が殺伐とし過ぎていたので、自分のイメージで仲間思いの良い姐御に設定変更しました。ただ牛乳が好きなのは本当らしいです。

大瀧修三という名前では分かり難いけどエロペンギンといえば大抵の人が分かる不思議。

第34話 姐と姐と弟（前書き）

長いので分割した話の後編。

今回対戦相手がアニメオリカを多用するので気になる方は注意。

第34話 姐と姐と弟

ジャッカル岬side

俺がその場に着いた時には既に勝敗は決していた。

地面に倒れ伏す姐さんとそれを見下す大瀧修司。周りには幾人ものボディーガードらしき黒スーツの男達がいるが、一際目立つのは大瀧の後ろに立つデュエルディスクを装備している巨漢の男だ。

どちらが勝者でどちらが敗者かなど一目瞭然だろう。

「ふふふつ、これで決まりましたね。貴方には私の計画に反対する者たちの露払いとして従ってもらいますよ」

「待ちやがれっ！次は俺と勝負してもらおうか…」

話が終わってしまう前に大瀧のヤローの前に躍り出ていき、姐さんと奴の間に割って入る。テメーらの好きにはさせねえよ。

「岬！来るなつて言っただろうがっ！」

姐さんが後ろで怒鳴っているがそれを完全に無視する。

俺が視界に入れているのはムカつく顔をした大瀧のヤローとその後ろで面白そうに俺を見やるでかい筋肉野郎だ。

「俺が勝つたら今の話を無かったものにしてもらおうか…」

「残念ながら私には貴方の勝負を受ける理由がないですねえ…」

奴はわざとらしく溜息をつきながら両の手のひらをみせ、理解不能だというジェスチャーをする。

「勿論テメーにも利があるようにするさ。俺に勝つたらこのレアカードをくれてやるよ。テメーはレアカードのコレクターなんだろう？」

デッキから抜き出したカードを大瀧に見せつける。

俺の最も大切なカード。

アイツが俺の弟分となったあの日、喧嘩デュエルに向かう俺にアイツが俺に託したカード。そして生まれて初めて異性から貰ったプレゼントでもある。

『禁じられた聖杯』

初めて異性から貰った物がカードっていうのはちょっとと思うところがないわけでもないがな…。

「このカードの所有者は俺を除くとあと一人しか存在しない。アンティとしては十分な価値があるだろ？」

このカードは彰と俺しか持っていないはず。

何せ異世界から来た彰から貰った異世界のカードだからな。

「ふふふっ、いいでしょう。その勝負乗りました！しかし貴方も物好きな方ですねえ…自分からレアカードを捨てるような真似をする

とは…。おい、軽く揉んでやれ！」

大瀧は後ろの男を顎で合図する。

巨漢の男がニヤニヤ笑いながら俺の前に立つ。

「止める岬っ！そいつは元プロデュエリストでプロリーグの対極である地下デュエル界では20戦無敗と言われているマッドドッグ犬飼だ！裏の世界じゃかなり名が売れている野郎なんだぞ！お前の敵う相手じゃないっ！」

姐さんが俺に相對している男を睨みながら叫ぶ。

折角の忠告だがそいつは聞けねえ命令だぜ。

「はっ、こんな筋肉達磨に俺が負けるわけねーだろ。こちとら喧嘩百段、デュエル百段のジャッカル岬様だぜ？」

「はーっははははっ！中々威勢のいい嬢ちゃんじゃねーか！だがこの俺をナメた事はただけねーなあ…。完膚なきまでぶっ潰してやるるか…？」

犬飼が犬歯を剥き出しにして豪快に笑う。

「やってみやがれ！テメーにそれができるならなっ！」

互いに罵り合いながらデュエルディスクを展開する。

「^{デュエル}決闘！！」

「先攻は俺だ、わりーな嬢ちゃんよ。ドロー！」

嬢ちゃん言うんじゃないぞクソがつ！

「俺はアシッド・スライムを攻撃表示で召喚する！」

アシッド・スライム ATK/800 DEF/1000

ソリッドヴァイジョン
立体映像によって映し出されたのは、中心の口のような部分から四足に別れている、プルプルした青色のスライムモンスター。

確かこいつは…。

「ほう、こいつの効果がかかっているらしいな。こいつは戦闘によって破壊された時、相手ライフに800ポイントのダメージを与えるモンスターだ」

俺に自分のカードの情報を与えたところでなんの痛みもないってか…。
ふざけやがってっ…!!

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

「オレのターン、ドロー！」

いいぜ。テメーが俺をナメて掛かるんだったら一気にたたみ掛けてやるよ！

「オラオラいきなり飛ばしていくぞ！神獣王バルバロスを攻撃表示

で召喚だ！このカードは生贄なしで召喚した場合、攻撃力は1900になるがな！」

咆哮を上げ現れるは百獣の王。俺が最も頼りにしている相棒だ。

神獣王バルバロス A T K / 3 0 0 0 D E F / 1 2 0 0

A T K / 1 9 0 0

「ほう…バルバロスか」

「バトル！行けバルバロス！あの雑魚を吹き飛ばせっ！トルネード・シエイパー！！」

アシッド・スライムの効果ダメージなんぞ甘んじて受けてやる！ただしテメーにはそれ以上の痛打を与えてやるよ！

「そして手札より速攻魔法禁じられた聖杯を発動！エンドフェイズ時までフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力を400ポイント上昇させ、効果を無効化する！オレはバルバロスの攻撃力減少効果を無効化し、さらに攻撃力をアップさせる！」

神獣王バルバロス A T K / 1 9 0 0 A T K / 3 4 0 0

「さあー発ぶっ込めっ！」

「おつと永続罨、DNA改造手術を発動！このカードがフィールドに存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの種族を俺が決めた種族に変えることができる。俺が宣言するのは機械族だ！」

「種族を変えたところでどうなるってんだ！バルバロスの攻撃はとまんねえぞっ！」

しかし筋肉達磨は余裕の表情を崩さず、逆に畏にかかった獲物を見つけたかの如く口元を吊り上げる。

「さらにリバースカードオープン！畏カード、酸のラスト・マシン・ウイルスを発動！俺のフィールドの水属性モンスター1体を生贄に捧げ、貴様のフィールド、手札、そして3ターンの間にドローしたカードに機械族がある場合それを破壊する。錆びつけ！バルバロスよ！」

畜生、このための改造手術か！？

機械族化したバルバロスの体表全てが錆びつき、為す術もなく破壊される。

「くっ、なんだと…！？」

さらに俺の手札には機械族モンスター、可変機獣ガンナー・ドラゴン！

酸の浸食によって一瞬にして錆びにされ、墓地に送られてしまった。

「そして破壊したモンスター1体につき500ポイントライフを削る！」

「ぐぐっ…！！」

ジャッカル岬

LP4000

LP3000

「ちっ、これでオレのターンはオシマイだ」

「俺のターン、ドロー！」

「俺は魔法カード、成功報酬を発動！相手プレイヤーは手札が6枚になるようにカードをドローする。そして貴様が引いたカード1枚につき、俺は1000ライフポイントを回復する！」

くっ、俺が引いたカードは3枚。

ゆえに奴のライフポイントが3000も回復する…！

マッドドッグ犬飼LP4000 LP7000

「酸のラスト・マシン・ウィルスの効果により、ドローしたカードは確認させてもらっぜ」

俺が引いたのは不屈闘士レイレイ、収縮、そして機械族モンスターである神機王ウル…！

「ふははっ、酸のラスト・マシン・ウィルスの効果により機械族モンスターを破壊！そしてプレイヤーに500ポイントのダメージを与える！」

「ちっ…」

ジャツカル岬LP3000 LP2500

「そして手札よりクローン・スライムを守備表示で召喚！」

クローン・スライム ATK/0 DEF/0

奴が場に出したのはまたスライムモンスター……。
緑色のグネグネした物体が人型を形成して守備の構えを取る。

「ターンエンドだ」

「オレのターン、ドロー！ドローカードはライトニングギア光神機 - 桜火おうか。天使族モンスターだ。酸のラスト・マシン・ウイルスでは破壊されねえ！」

一瞬光神機の文字を見た時やべえと思ったのはここだけの秘密だ。
機械族じゃなかったんだなこいつ…。

「手札から不屈闘士レイレイを攻撃表示で召喚するぜ」

不屈闘士レイレイ ATK/2300 DEF/0

「バトルだ！不屈闘士レイレイでクローン・スライムに攻撃！」

「ふふふつ、残念だったな。クローン・スライムは攻撃対象になった時、墓地のスライムモンスターと入れ替わる事ができる。俺はアシッド・スライムをカードを交換！そしてバトルは続行される」

レイレイの攻撃が当たる瞬間に、奴の場のクローン・スライムが発光し、墓地のアシッド・スライムへと姿を変える。

「なっ!?!」

「アシッド・スライムの効果を忘れてないだろうな。こいつが戦闘

で破壊された時、相手プレイヤーは800ポイントのダメージを受ける！」

「くうううううううっ！」

ジャツカル岬 2500 1700

畜生…！完全にあの野郎にペースを握られている…。

つか見た目ただの脳筋だと思いきや、中々どうして頭を使った戦術をしやがる。

裏の世界で名が売れている理由が分かったぜ。確かにこいつは強い…！

姐さんがやられたのもまぐれじゃねーってかよ。

「レイレイが攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示に変更される。カードを1枚セットし、これでオレのターンを終了するぜ」

不屈闘士レイレイ DEF/0

「俺のターン、ドロー。そして強欲な壺を発動しさらにカードを2枚ドロー！」

「さらに俺は魔法カード、スライム・ベースを発動！手札のスライムモンスター1体を特殊召喚できる。レベル6モンスター、マルチプル・スライムを攻撃表示で召喚！」

黄色いスライムが場に現れ、まるで猛獣のような風貌を形成し此方を威嚇する。

マルチプル・スライム ATK / 1500 DEF / 1500

「バトル！マルチプル・スライムで不屈闘士レイレイに攻撃！ジェリー・バースト！！」

ちっ、俺の場に伏せてある収縮の魔法カードを使ったところでレイレイの守備力は0。戦闘破壊は免れねえ…。

レイレイはマルチプル・スライムの放った黄色い液体に包まれ、苦しみながら破壊される。

「カードを2枚セット。ターンエンドだ」

くっ、またリバーズカードを！

「おいおい、最初の威勢はどこへいったんだ！この程度の実力でよくもまあ大口叩けたもんだぜ」

ブチッ…。

くそがつ…調子に乗りやがって…！！

はんっ、いいだろう…。テメーのナメた口ごとぶっ飛ばしてやるっ！！！！

「オレのターン、ドロー！ドローカードは強欲な壺！そしてそのまま発動し、新たにカードを2枚ドローだ！！」

引いたカードは1枚はモンスターカード、もう1枚は魔法カード。

そしてその2枚こそ反撃の狼煙。

「俺は墓地に存在する獣戦士族モンスター、神獣王バルバロスと機械族モンスター、神機王ウルをゲームから除外することで、獣神機王バルバロスUrを攻撃表示で特殊召喚する！来やがれっ！！バルバロスUr！！」

獣神王バルバロスの強靭な肉体と、神機王ウルの強固な鎧を兼ね備えた、最も神に近きモンスターがフィールドに降臨する。

獣神機王バルバロスUr ATK/3800 DEF/1200

「ふふん、ところがそうはいかねんだよなあ…。畏発動！スライム・ホール！モンスターが特殊召喚された時発動。そのモンスターの攻撃力分のライフポイントを回復！そしてそのモンスターを破壊する！」

場に出現したバルバロスUrの周りにゲル状の物体が纏わり付き、体内に侵入してモンスターを蝕み内部から破壊される。

「ふははははははっ！！そして3800ポイントライフを回復だ！」

マッドドッグ犬飼LP7000 LP10800

「万策尽きただろう。これで俺のライフポイントは1万を超えた！ここからこの戦況を覆すことはできまい。貴様の敗北は確実となった…！」

己の勝利を確信し狂ったように笑う犬飼。

「何勘違いしてんだ筋肉野郎…。この俺が負けるだど？負けるのはテメーだ…！」

だから俺は奴のその考えが完全な誤まりであることを告げてやる。

「無理無理、不可能だ」

じゃあ見せてやるよ！俺のもう1つの切り札をなっ…！！

「手札から速効魔法、デーモンとの駆け引きを発動！このカードはレベル8以上のモンスターが墓地へ送られたターンにのみ発動できる！自分の手札またはデッキよりバーサーク・デッド・ドラゴン1体を特殊召喚する！さあ猛り狂え！バーサーク・デッド・ドラゴン…！！」

墓地に散っていったバルバロスU_rのポリゴンの粒子が空を舞い、漆黒のドラゴンへと変貌していく。鋭き爪をフィールドに突き刺し、戦いに狂う死の竜が雄叫びを上げ、己が獲物を捕捉する。狂竜に狙われた者に待つ未来には「死」あるのみ。

バーサーク・デッド・ドラゴン ATK / 3500 DEF / 0

「なに…!?」

「バトルだっ…！！バーサーク・デッド・ドラゴンでマルチプル・スライムに攻撃！ヘル・ヴィシヤス・フレイムツ…！！」

バーサーク・デッド・ドラゴンから放たれる地獄の火球が相手の場のスライムを蒸発させる。

「ぐはっ!」

マッドドッグ犬飼LP10800 LP8800

「なんの! マルチプル・スライムが戦闘によって破壊されたことにより、効果を発動! このカードが戦闘によって破壊された時、スライムスタートークンを3体攻撃表示で特殊召喚する!」

スライムスタートークン ATK/500 DEF/500

x3

「さらに罠カード、トラップ・トリップ! 自分の墓地より罠カード1枚を手札に加える。このカードの効果によって酸のラスト・マシン・ウィルスを手札に回収する!」

はっ、さっきの面倒くせえカードかよ。

「俺の場には3体の水属性モンスターがいる。1体でも残ればそいつを生贄にして発動! それでジ・エンドだ。バーサーク・デッド・ドラゴンを潰せば貴様に勝機はない!」

「はっ、だからさっき言っただろう。負けるのはテメーだ! このターンでテメーをぶっ潰してやるよ!」

「フンッ、馬鹿な。そんな事ができるわけがないだろう」

その余裕面、すぐに崩してやるよっ!!

「この程度で俺の攻撃が終わると思うなっ！バーサーク・デッド・ドラゴンは相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃が可能な特殊能力を備えたモンスターだ！」

「な、なんだとっ!？」

「俺をナメた回数分、ドでかいのブチ込ませてもらうぜ！バーサーク・デッド・ドラゴンでスライムモンスタートークン3体に攻撃！ヘル・ヴィシヤス・フレイム3連打ッ!!!」

狂竜が咆哮をあげながら空へと飛翔し、地を這いずる雑魚を一掃する地獄の劫火を喰らわせる。衝突と同時に轟音と爆煙が巻き起こし、勝利の鬨を、そして新たなる戦いを求め竜は叫ぶ。

「ぐわあああああああああああああああああああああああああああ
あっ!!!!!」

マッドドッグ犬飼LP8800 0

「おい、俺の勝ちだ。さっきの約束忘れてねーだろうな？」

場に倒せ伏す筋肉野郎を一瞥した後、この状況が信じられないような様子で目を剥いている大瀧に向かって告げる。

しかし奴はすぐに気を取り直し、まるで悪びれた様子も見せずにござけたことをぬかす。

「はて、私はそんな約束をした覚えなどないですねえ……」

さらに此方を馬鹿にしたような笑みを浮かべながら戯言を続ける。

「ただの小娘との口約束程度でこの利権を逃すはずがないでしょう。法に則った契約というわけでもない……。貴方達は私に従って貰いますよ。それにこのまま貴方がたが強情を張るとあの宿屋に住む子供たちにも不幸が訪れてしまうかもしれないねえ。何せ最近の世の中は物騒ですからね……ふふふっ……」

「なっ！？てめえどこまで腐ってやがるっ！！！」

「ガキどもは関係ないだろーがっ！！このクズ野郎めっ！！！」

大瀧は俺と姐さんの罵倒をそよ風のように払い除け、勝利の宣言を告げ……。

「ふははっ、なんとも言ううがいいですよ。しかし貴方がたがどう足掻いたところで私の勝利は……」

ようとしたその時だ。

「すみませ〜ん、ちょっとお邪魔しますよ」

緊迫したこの場にまるで似つかわしくない面倒くさそうな声が、俺たちのいる場所から少しばかり離れた所より聞こえた。

ここにいる奴らは誰も分からねえだろうが俺だけはこの声の主を知

っている。それこそそのいつの姿を見なくても声で分かるほどな。

普段はやる気なくダラダラしていることが多いけど、やる時はやる俺の弟分さ。

はっ、おせえんだよ馬鹿野郎が…！

ノーマネー弥生side

突然現れた少年にその場の誰もが困惑する。

いや、岬だけは彼の方を見ながらどこか安心した様子をみせている。

「誰ですか貴方は？」

大瀧がここにいる者たちの疑問を代弁するかのような質問を闖入者にぶつける。

「僕ですか？僕なんか名乗っても大した意味はないので教えません。身分としてはアカデミアの学生だったはずなのに、いつの間にかI2社とK・C社の犬みたいな存在になりつつある哀れな貧弱一般人ですかね。今も海馬コーポレーションのお仕事でこっちまで来たんですよ。まあ今回に限っては僕が無理についてきただけなんですけど。ああそれが真実であることは此方をご覧ください。何なら本社の方に連絡しても構いません」

少年は自分が海馬コーポレーションの使いである証明書類を此方に見せるように掲げる。

「なっ…何故海馬コーポレーションの者が…。それで何用なんだ？」

大瀧の奴も状況を把握できていないらしい。

「いやあ、一般の方から善意の通報がありましたね。なんでも海馬コーポレーションの名前を利用して周りの事を考えずに強引に自らの事業を推し進める愚か者がいるとか。そのことで海馬社長が怒りになりました、こうしてその元凶を潰しにきたわけです」

「なっ！？ふざけるな！私の持つこの証書は本物だ！」

大瀧は証拠を突き付けるように少年に証書を見せつける。

しかし少年のほうは余裕の笑みを崩さず、むしろ必死に抗弁する大瀧をまるで可哀想な奴を見る目になってきている。

「海馬コーポレーションとはあくまで海馬瀬人社長個人の持ち物ですよ。彼の決定が絶対であり唯一無二。彼の許可なしにK・Cの名を騙るなど笑止千万。海馬社長本人はそんなものを許可した覚えはないそう。ああ因みにその証書を勝手に出した役人は既に更迭済みですよ」

「そんなっ…馬鹿なっ！？嘘だ嘘だ嘘だっ！貴様のようなガキの言う事が信じられるかっ！！」

驚愕の事実を突き付けられた大瀧は、それを受け入れまいと足掻き続ける。しかし少年の方はそんなものに付き合っ気はさらさらな

いらしく、すぐに次の行動へ移す。

「という事でやっちゃってください」

そのセリフと共に彼の背後からサングラスをかけた黒スーツの屈強な男たちがあらわれ、次々と大瀧と奴のボディガードらを拘束していく。結局海馬コーポレーション専用ヘリの中に連れ込まれるまで大瀧は己の無実を叫びギャーギャーと騒いでいた。

いまだに事態が掴めないアタイはその場で茫然としていたが、岬の奴は先ほどの少年の方へ向って突っ走り、容赦のないドロップキックをぶちかました。

「テメーおせえんだよ！どこで油売ってやがった！」

「ちよっ！？ホント勘弁してくださいよ…。あれだけ漠然とそれだけで無茶な頼みをして…。証拠固めとか色々あつたんですよ！これでもかなり無理してもらったんですからね！」

「っーかなんで俺に黙ってプロなんぞになってるんだテメーはっ！」

内容は互いの落ち度についての言い争いなんだが、傍から見るとじやれあっているようにしか見えない。それに岬本人は気付いていないだろうが、俺でも今まで見た事ないくらいの楽しそうな顔をしてやがる。

アイツらの話を聞く限り岬があの子に連絡を取ってくれたおかげで助かったようだ。

驚きだ。

アタイの知っているあの子なら自分一人の力でどうにかしようとしていたはずだ。なまじ力が強い程度はある程度は一人で解決できてしまう。だからあの娘が他者に頼ったというケースは見た事がない。

もしアイツが昔のままのアイツだったら今頃こんな展開には結びついていなかったらう。

ふふっ、誰かに頼る事を覚えてくれたってわけかい。

無理やりにもアカデミアに通わせた甲斐があったってもんだ。

誰に聞かせるわけでもなく心の中でそう呟く。

自分の妹のような岬の成長を感慨深く感じていると、例の少年が此方へ向かってきた。

「大丈夫ですか？お怪我とかはありませんか？」

「ああ、問題ない。助かったよ。それにしてもアンタは何者なんだい？岬から助けを請われたことくらいはさっきの会話から分かるんだが、あの娘がこの事を知ってまだ1日も経っていないんだ。そんな短時間で海馬コーポレーションを動かすなんて、そんな奴はそれこそこの世界に指で数えられるくらいしかないだろう」

「今回は運が良かっただけです。偶々ジャツカルの姐さんがこの件について知り、彼女の友人である僕が偶々海馬社長とコンタクトを取りやすい立ち位置にいただけ。役人が不正を働いていたのも、そのような事を海馬社長が断じて許さない性格だったということも幸いしただけです」

こいつはそれがさもなくともない事のように言っているが、かの海馬瀬人と短時間でコンタクトを取れる位置にいること自体がすごいことだっという事を分かっているのだろうか。

それに経緯は分かったが自分の事についてはぼかしやがったな。

だがそうはいかねえ。俺の妹分をわけのわからん奴に任すわけにはいかねえからな。

「アタイはノーマナー弥生ってんだ。岬とはそれなりに長い付き合いをやってる。お前も名を教える」

「僕は一之瀬彰といいます。先ほども言った通り、姐さ…ジャッカルさんと同じくデュエルアカデミアで学生やっています」

一之瀬……ってどこかで聞いたような…。

「ってそうだった!? 昼頃にテレビに映っていた新人プロデュエリストの奴かっ!」

「うええっ、アレ見てたんですか? 僕の中では将来確実に黒歴史の出発点としてしか成り得ない出来事なのに……」

情けない声を上げる少年を傍目に思考の海に潜る。

確かあんとき岬は弟分とか言ってたけか。正直冗談半分で聞いていたが、岬はこの少年との関係をまんざらでもない様な感じだったしな。

それに先ほどの岬とのやりとり…。

こいつなら……。

「なあ、会ったばかりの奴にこんなこと言うのはアレだと思うけど
一つ頼まれてくれないかい？」

「内容にもよりますね。既に安易に頼み事を引き受けた結果悲惨な
目に会った過去があるので……ていうか現在進行形で続いているんで
すけど……」

彼はどこか遠くを見るような目になる。よっぽど後悔しているのだ
ろう。何があったのか気になるところだが、今はそれを置いておく。
もっと大切な用件があるからな。

アタイは岬のほうを目で合図しながら真剣に頼む。

「あの子のことをよろしく頼むよ。がさつで乱暴な面が目立つが根
は素直で優しい子なんだ。ちつとばかり不器用だから他人に伝わり
づらいだけだな。岬本人も誰かれ構わずつるむ様な性格じゃないか
ら、アカデミアで孤立していないかアイツの姐としては心配だよ……。
誰にも理解されないでそのまま社会から外れちまうんじゃないかっ
てな……」

このアタイが会ったばかりの奴に自分の心情を吐露しているなんて
なんだか不思議な気分だ。でもこいつになら言っても大丈夫だと根
拠のない確信があったのさ。その証拠に少年は先程までの情けない
顔から一転して真面目な表情となりアタイの話聞いてくれている。

「大丈夫、頼まれなくてもそのつもりです。僕も貴方には及ばない
と思いますが、彼女が優しいって事は分かっているつもりですから。

それにジャツカルさんと仲良くしているのは僕だけじゃないですね」

そしてその期待たのみに答えてくれた。

「ふっ、それを聞いて安心したぜ…」

そうか…岬は一般という枠組みにちゃんと解け込んでいるんだな…。

俺みてーな逸れ者じゃなく、上手くやっているんだな…。

良かった…。

本当に良かった…。

「あの…どうしたんですか？」

俺の様子を気遣ったのか、少年が声をかけてくる。

「ああ、なんでもねえよ。お前が気にする必要もねえ」

ちいとばかり緩み掛けた涙腺に活を入れるために両手で頬を叩く。

そんな俺の様子を見て目の前の少年は再び首を傾げる。

「っーか何コソコソやってんだよ!! さっきから俺の方を見ながら喋り込みやがって! おい彰、テメーまさか姐さんにろくでもねーこと吹き込んでるんじゃないやねーだろうなっ!?!」

とそこに岬の奴が騒ぎながら此方の会話に乱入する。

ふふっ、全くいつも以上にいい顔をしゃがって…。
しかし岬の姐としての立場からすれば少し面白くないところもあるな。

飼っている猫が自分より他人に懐いてしまったような…そんな感じ
と云えばわかるかい？

「いやいやいやいや！僕はただ自己紹介をしていただけ「なあに、アカデミアでの岬の恥ずかしい話を教えてもらっていたのさ」ちょっとおおおおおっ!?!?」

「彰…：テメーはどうやら死にたいらしいな…：」

「違う！違うって！弥生さんも何言ってるんですか!?!?」

ふふっ、可愛い妹分を取られた姐のちよっとしたイタズラさ。
突如降りかかった災厄を回避せんと助けを求める少年に俺はウインクで答えてやる。

「だから違うんですよおおおおおおおっ!?!?!」

唯一の救いの糸をあっけなく切られてしまった少年は、叫び声をあげながら脱兎の如くその場から逃げ出す。

「おいっ待ちやがれっ!! テメー姐さんに何吹き込みやがったんだっ!?!」

それを逃がすまいと肉食獣のような迫力で追従する岬。

二人の背中を見ながら笑っちゃったのは許してくれよ？

第34話 姐と姐と弟（後書き）

ヘルジャツカルにはなりません。ただBGMにクリティウスの牙は流れていたかもしれませぬ。そしてジャツカルさんの初手バルバ率は十代がピンチの時に引くバブルマンと同じくらいになっていそう。

マッドドッグ犬飼さんも名前ではあまり知られていないですが、ヘルカイザーにグオレンダアされた人と言えば大抵の人は分かってくれるはず。しかしこの人はあんな機械族メタでよくもまあ20連勝もできたものだとは誰しもが思う事。三沢と同じくメタデッキの使い手のだろうか。ウィルスがジャツカルさんのデッキにはあまり刺さらないため、演出のためだけにウルが採用されたのは内緒の話。

そしてオシリスOCG化おめでとう。原作効果はかなり忠実に再現されているそうでも嬉しいです。イラストもかなり格好良くて言う事なし。かつて神と呼ばれたラーじゃなくて、ちゃんとした効果のラーの翼神竜はまだなのでしょうかね。

ホルアクティやマトまでOCG化するよう。しかしホルアクティの入手方法が鬼畜すぎるぞコナミ！

追記

焙じ茶さんのご指摘によりレイレイをゴブリン突撃部隊と誤表記していたのを修正。報告ありがとうございますm(____)m

閑話 とある少年の悲日常

みんなには興味がない事だとは重々承知だが、プロデュエリストとして仕事を始めて以来多忙な日々を送っている僕の話聞いて欲しい。

仕事を始めた当初の頃はあちこちに飛ばされたせいで睡眠時間も満足に取れず、移動中に仮眠を取るというまさに馬車馬の如き扱いをされていたわけだが、最近になってようやく余裕が生まれて、海馬コーポレーションが経営している豪華なホテルを拠点に活動するというところまで漕ぎ着けたんだ。

僕はあまり贅沢をする人間ではないけれど、社員にのみ提供されているIDカードを使えば海馬コーポレーションが経営している施設を無料、若しくは格安で利用できるとなれば有効利用せざるを得ない。むしろ使わないほうがこの制度を考案してくれた人に失礼にあたるよねという言い訳を胸に隠してだけ。

そして今回の悲劇はその拠点としているホテルの一室から語らせて貰うこととなる。

『ふうん。所詮雑魚は雑魚、この俺に盾突いたことを後悔するがいい！ブルーアイズよ！力の差を思い知らせてやるがいい！滅びのバーストストリームツッ！！』

ブルーアイズから放たれた絶対なる破壊の力が彼に仇名す敵を塵も残さず消し飛ばす。

『粉碎！玉砕！大喝采！！フハハハハハッ！！これが我が最強の僕！ブルーアイズ・ホワイトドラゴンだ！！』

その勝利の高笑いに対して僕はこう答えた。

「うるさいんだよっ！少しは静かにしてくれっ！！」

勿論僕が海馬社長にこんな暴言を吐けるわけがない。

そんな胆力なんてあつたら僕の人生はもう少しいい方向に向かっていただろう。

ゆえに僕がこの言葉を向けたのは海馬社長ではない。しかしながらあのような高圧的かつ特徴的な言葉を発する者が海馬社長以外に存在するのかという疑問が君たちに残ると思う。

だがそんな疑問も次の僕の言葉で氷解するだろう。

「朝っぱらから大音量でテレビを見るなって言っただろうっ！」

そんな僕の叫びに対してガイドの奴はどこ吹く風、此方の方を見もしないで彼女の興味はもっぱらテレビの中の虚構世界に対して向けられている。

現在時刻は午前7時を若干回った頃合。

ガイドが食い入るように見ている番組は毎朝7時より絶賛放送中である特撮テレビ番組「正義の味方カイバーマン」だ。

海馬コーポレーションの提供でお送りしているこのヒーロー番組は、

カイバーマンに扮する有名企業の社長が、その財力と権力を武器に己に刃向かう愚者共を懲らしめていくというのが大まかなストーリー展開となっている。どうやら正義の味方というのは広義での使われ方ではなく、あくまでカイバーマンにとっての正義を貫く作品のようだ。

第一期は世界に4枚しか存在しない青眼の白龍の力を巡った争いが主な主題である。その圧倒的な財力と権力の力によりブルーアイズを3枚までは確保したカイバーマンだが、残りの1枚がヒトデ魔人の手に渡ってしまい、その力を自己顕示欲のために使うヒトデ魔人からブルーアイズを奪取する流れとなっている。このヒトデ魔人とやらは敗者の腕にシルバーアクセサリーを巻き付けた上で罰ゲームと称し相手の精神を崩壊させる必殺技『マインドクラッシュ』を使用したり、二重人格であると自称したり、配下に不良を侍らせたりと中々にぶっ飛んだ人物であるらしい。カイバーマンは人々を守るためにヒトデ魔人のブルーアイズを破壊するという苦渋の決断をすることとなり、己の大事なものを犠牲にしてまでも世界のために動いたカイバーマンの行動に胸打たれたヒトデ魔人は彼の配下になつて過ちを償うと決意、めでたしめでたしという展開で終わった。

現在は第二期に入り、全てを見透かす目を持つブルーアイズの生みの親とカイバーマンとの戦いが物語の中心となっているらしい。

僕が内容をここまで知っているのは一重にガイドの奴が毎日録画したこの番組を視聴しているためだ。仕事のないプライベートタイムにもカイバーマンの高笑いを聞かなければならないという罰ゲームにも似た日々を送っていることに遺憾の意を表明したい。

それに今日の予定は海馬ランドで行われるイベントだけなので、朝にゆっくりできる希少な機会を奪われたとなればその怒りも一際大

きくなるのは仕方のないことだろう。

仕返しに仕事終わった後海馬ランドで遊ぶ約束を反故にしてやるうかと真剣に悩んだが、その場合はその場合でガイドの癩癩によってさらなる面倒事が起きそうだと断念する。決して報復が怖いわけじゃないぞ。

いや、ここで見栄を張っても意味ないか。

すごく怖いです…。

睡眠不足ではあったが滞りなく海馬ランドで開催されていたイベントのゲストとしての仕事を終えた後、予定通りランド内をガイドと二人で遊びに出る運びとなった。とはいっても僕が汗水たらしながら働いている頃、こいつは先に一人でアトラクションを心行くまで楽しんでいやがったんだがな。

僕が合流した時もデパートの屋上なんかによく置いてある百円硬貨で動くグレムリン型の乗り物に跨って颯爽と現れた。明らかに待ち合わせしていたエリアまで持ってきていい乗り物じゃなかったからすぐに元の場所に戻させたけど、こいつはあんな恥ずかしいものに乗ってよくここまでこれたもんだとある意味感心に値する。周りのアトラクションを凌ぐ勢いで衆目を独り占めしていたしな。

現在僕らがいるのは海馬ランド内に存在するゲームセンターエリア

だ。ここには体感型ゲームからアーケードゲーム、プリントシールコーナー、プライズゲームが設置されているファンゾーン等々、室内でのゲームを楽しむエリアとなっている。

折角遊園地に来たのだし、ここでしか体験できない大型のアトラクションの方がいいのではないかと思っただが、ガイドの奴がクレインゲームのコーナーにへばり付いて離れなくなったんだ。別段僕もこの手のゲームが嫌いではないためここで遊ぶのは構わないのだけれど、ガイドの手によって僕の財布から次々と連投されていく硬貨を見ていると気持ちよく遊べなくなるのは理解してもらえらるるか。

それにこいつはこういうゲームにはとことん向いていない。決して不器用というわけではないのだが、自分が欲しいと思っただ物を一直線に取るうとし、搦め手や妥協を一切しないことがその原因である。今もクリッターのでっかいぬいぐるみではなく横に置いてある小さい景品なら楽に取れだろうにそれをせず、馬鹿の一つ覚えのように同じところにアームを引つ掛けては失敗するというのを繰り返している。おいこらその悪魔娘よ地団太踏んでも仕方ないだろう、そしてゲーム機自体を揺らすんじゃない。猿かね君は。

全くこいつは…。

ガイドが痼癢を起こす前に僕が代わりにコインを投入する。

こつというのは無理せず一度に運ばずに景品の位置を調整した後、一気に運び去るものなんだよつと…！

足元と肩にがつちりとアームを掴ませ、ガイド御所望の景品を隅に設置された開口部に落とす。

「ふっ、こんなもんよ！」

ここぞとばかりにしたり顔でガイドの様子を窺うが、奴の姿はもうそこにはない。いたのは僕の得意満面な顔をいきなり向けられて困惑した様子で苦笑する通りすがりの男女カップルだった。

ちくしょう！いらん恥をかいたじゃないかっ！！

ガイドの奴はすこし離れたクレーンゲームに挑戦中のところを発見した。彼女の隣に立ち状況を見てみると、ゲーム機の奥に設置されているディスプレイのガラス製ブルーアイス模型を取ろうと四苦八苦ししている。

それ景品じゃねーからっ！！注意書きにも書いてあるだろう！

僕の突っ込み空しくアームの先がディスプレイを固定している糸に引っ掛かり、普通にプレイしているうちには絶対に聞けないであろうミシミシという嫌な音をたてて、ついにはディスプレイがガシャンと転倒。先ほどまでの美しい姿は見る影もなく、首と翼が折れた伝説の竜の残骸が内部に飛散する。

おい……………どーするんだよコレ…。

この惨状を作り出したガイドをジロリと睨みつけるが、彼女はへたと笑ってペロリと舌を出す。

残念ながら僕はそんな可愛い仕草で誤魔化されないぞ。とりあえず店員さんに謝らせようといいつが逃げないように首根っこを掴んでおく。

「お客様…ディスプレイに設置してあるものは景品ではないのでこのようなことはご遠慮ください…」

音を聞きつけたスタッフさんが駆け付け不機嫌さを滲み出しながら僕らに近寄って注意をする。

「すみません、こいつがふざけてやってしまっ…。後でよく言っておく…ん…で…」

犯人であるガイドを付き出そうと持ちあげたときの異様な軽さに疑問を抱き目をやると、そこには捕まえたはずのガイドではなく、彼女の上着だけがそこに吊るされていた。その上先ほど僕が取った景品のクリッターのぬいぐるみも強奪していったという始末。

「……………」

さて、そろそろみんなも気になるであろう海馬ランドの外観や施設について少しばかり説明しておこう。

まず正面入り口から3体のブルーアイズが出迎えてくれるブルーアイズ・アーケードが聳え立ち、そこを潜ると目の前にはまたもや3体のブルーアイズ像に囲まれた巨大な海馬社長の銅像がブルーアイズ・アルティメット・ワールドと呼ばれる施設の上に建立されている。

ここまででも突っ込みどころ満載でお腹いっぱいになるのだが、社長のブルーアイズ愛はそこでとどまる事を知らないようで、園内をぐるりと巡っているブルーアイズトレインにブルーアイズ・ジェット・コースター、ブルーアイズ型のジェット飛行機体、そして至るところに存在するブルーアイズの彫像等々、もはや視界にブルーアイズをいれない方が難しい有様になっている。数少ない例外として、モンスターホラー館というお化け屋敷に限って闇道化師のサギーがコメントに添えられているのだが、もはや焼け石に水と言わざるを得なく、みんなの中のブルーアイズがゲシュタルト崩壊を起こすだろうこと受け合いだ。

そして僕とガイドの奴が今向かっているのは数少ないブルーアイズ以外のモンスターが外観を飾っている施設、カイバーマン・シヨウである。アトラクション名ですでお気づきであろうが、ここは正義の味方カイバーマンのシヨウエリアとなっており、例の番組のファンであるガイドの強い希望で足を運んだわけだ。無論ターゲット層の関係上、僕ら以外の客層は年齢が低い子供たちが主であり、そんな中いい年した高校生の僕がガイドに引つ張られ一番前のど真ん中の席まで引きずられている光景を想像してみてください。そして僕の気恥かしさや居心地の悪さを少しでもいいから分かち合っただけいい。なにより子供の付き添いとして来ている保護者の視線が背中に突き刺ささっているんだ。そんな貴方達にも一言だけ言わせてくれ。僕もこの悪魔娘の保護者として来ているのだと。決して高校生にもなつてヒーローシヨウに興奮するような輩ではないと。あつ、これじゃ一言じゃないや。

正直子供向けのイベントだと大した期待もしていなかったけど、ここにソリッドビジョンも立体映像の技術を用いた演出を加えており、さながら生でCG映像を見ているかのような迫力がある。それに加えて遙か上空よりパラシュートで落下してくるといふカイバーマンの登場シーンで

は、全てを立体映像ソリッド映像に頼らずスタントじみた演出まで加えており、1つのシヨウとしてはかなりの完成度を誇っているのではないかと思う。

これにはガイドも満足点を与えられたようで終始キラキラした目で舞台を見ており、この調子なら僕が懸念するような問題も起きそうにないなと安心した。したのが間違いだった。

事はシヨウの一環でヒトデ魔人が客席の子供を人質に取るという、サプライズを含んだ出演者とお客一体型のシーンで起きた。

客席まで下りてきたヒトデ魔人が人質を物色する際に、誤ってガイドが足元に置いていたドリンクを蹴飛ばしてしまい、先ほど僕がガイドにやったクリッターのぬいぐるみにその中身がぶちまけられてしまったんだ。その事に腹をたてたガイドの奴が僕の制止を振り切り、カイバーマンの代わりにヒトデ魔人をボコボコにするというシヨウを崩壊させる事案が発生。

観客の子供たちは敵の役者が倒されるその光景を大喜びで見っていたが、僕の方は頭を抱えて苦悩するしかない。止めようにも既にガイドは自分が打倒した相手の頭を踏みつけるという愚拳に及んだ後だ。今更取り繕ったところでどうしようもない。子供たちの歓声と拍手をさらりと受け流したガイドは僕の隣の席まで戻り、何事もなかったかのように僕のドリンクを奪って飲む。

そうなるやと当然僕の方まで視線が集まる事となり、騒然とした舞台とシヨウの一時中断のアナウンスに居た堪れなくなった僕はガイドを担いでその場からの逃走を計る……が…。

「お手数ですがお客様…事務所の方まで御同行願えますか…？」

海馬ランドの従業員の方と警備員のおじさんに捕まり、当事者のガイドと連れである僕はその後事務所の方まで連行され、お話という名の説教をたっぷり聞かされる運びとなった…。

僕らが解放されたのはもう日が傾いた頃だった。

まあ今回は相手側にも非がないわけじゃなかったことと僕が海馬社長と懇意にしていることからその程度で済んだんだ。僕が海馬コーポレーション側の人間だと確認が取れるまで社員の黒服のお兄さん方の威圧感が半端なかったとだけいっておこう。確実に懐にチャカを仕込んでそうな凶体のかい外人さんが腕組んでこっちを睥睨しているんだぜ？表向きは夢の国とか謳っている海馬ランドだけど、裏側もある意味とんだ夢の国だよ！

因みにガイドの奴はずっと話を聞いておらず、携帯ゲーム機を弄っていたことは言うまでもないだろう。向こうのお偉いさんも初めこそガイドを咎めるように見ていたけど、こいつには何を言っても無駄だと分かったのか、途中から完全にいない者として扱っていたしな。その判断は大いに正しかったと心からの賛辞を贈りたいが、そのせいで僕が話に付き合わされたことを差し引くところらの損害の方が多いため大っぴらには言わない。

そういえば最後に相手側が長時間拘束した詫びに汚れたぬいぐるみと同じ物をくれると言ってくれたのだけれど、何故かガイドは頑として受け取らなかった。

こいつに遠慮なんて感情が存在したのか、はたまた自分の行いを少

しは反省しているのか。

それはないな。

自分で考えておきながら即否定するとは思ってもよらなんだ。

「貰っておけばいいじゃないか。折角の好意なんだしさ」

まあガイドの事を知っている僕からすればあまりにもらしくない選択だったので、折角だし貰っておくように進言したのだが、アイツは僕の事を呆れた様子で眺め、溜息を吐きながら汚れたほうのクリッターぬいぐるみを抱えてさっさと部屋から出て行ってしまった。

……なんかガイドに溜息を吐かれると腹が立つぞ。

溜息吐きたいのはこっちだっちゅーに。

納得のいかない感情を胸に収めつつガイドの背中を追って外に出る。

海馬ランドのパンフレットを広げていることからこいつはまだ遊ぶつもりだようだ。

「これ見て今日はもう終わりにしよう。流石に疲れたよ」

僕は1日中ガイドの奇行に振り回されて疲れたからもうアトラクションに乗る気力なんてないけれど、折角だし最後のイベントだけ見て帰ろうと提案。そろそろ夜間最大の目玉イベントであるエレクトリカルパレードが始まる時間帯なんだ。

このパレード、電球や光ファイバー、発光ダイオードに加え、この
ソリッドワイジョン
世界独自の技術である立体映像を用いて装飾したフロートに乗った

出演者が、踊りやパフォーマンスを行いながら進む光景は流石に壮観であるらしく、この海馬ランドのイベントの中でも群を抜いた人気を博しているらしい。ここだけの話、僕もこれを楽しみに海馬ランドまで来たといっても過言ではないしね。

出演者が巡るルートとは事前に決められているため、パレードがよく見える場所には何時間も前から場所取りしている人もいる程だ。事前にはリサーチなどしていないし遠目から見ただけでもいいやというスタンスで来た僕には関係のない話だけだ。

「お前もそんな事気にするタイプじゃないよなガイドよ……ってまたいねえ……」

僕の横にいたはずのガイドの姿が消えていた。目を離すとすぐにいなくなる様はもはや野良猫やネズミなんかと同等かそれ以上のレベルに達している。

もうガイドのことは放っておこう。アイツを一所に抑えることはもう不可能だということばかり切ったことだった。もしまた騒ぎを起こしたとしても彼女の傍にいなければ僕に害が及ぶ可能性を最小にできるだろう。

そんな事を考えている間にランド内にもいくつも設置されているスピーカーから愉快的な音楽が流れ出し、周りの人たちも期待に目を輝かせてパレードの始まりを待つ。

運よく僕の現在地の目の前の道路にもパレードが通過するらしく、結構な数の人たちが列を成している。

大きなドラの音を合図に海馬ランド中央にでかでかと聳え立つカイ

バ・キャツスルの城門が開き、中から煌びやかにデコレーションされた車両が次々に現れ、ダンサーのみなさんがそれに並行しながらパレードに花を添える。先頭を切るのはやはり輝かしいイルミネーションに装飾されたブルーアイズ型の車両で、その背にはカイバーマンのコスプレをした出演者が様々なポーズを決めている。ブルーアイズの他にもXYZ・ドラゴン・キャノンやダイヤモンドドラゴンを模した車両も存在している。やはり海馬社長が愛用しているカードが優遇されているようだ。車両と共に行進しているきぐるみのモンスターもミノタウルスやヴァンパイアロード、サイクロプスにブラッドヴォルス等、どれもこれも社長のデッキに投入されていたカード群で、鼻屑もここまで来るといっそ清々しささえ感じるようになる。

まあそんな風に考えてしまうとところがあるとしても、このパレード自体はランドの目玉と言われるだけあるな。僕の世界の某ネズミソリットウィジョンランドにも引けを取らない絢爛さがある。いや、立体映像を加えるとそれ以上とも言えるかもしれない。

ちょうどパレードが僕の目と鼻の先を通過中ということもあり、あまりの情景に言葉を失って見入っていたのだけれど、ふと隣でパレードを見ていたグループの会話が耳に入ってきた。

「なあ、あんなもの今までのパレードにあっただっけ？」

「いや、俺も知らないな。新しい出し物じゃないか？ほら中を見てみるよ、デュエルモンスターズがいるし」

なんとなく嫌な予感がして彼らの指さす先を追う。

そこにあっただのはものすごく見覚えのある真っ黒なバスがヘッドラ

イトを音楽に合わせてチカチカ光らしてパレードに追従している光景だった。バスの中では異形の悪魔たちが歌えや騒げのお祭り状態らしく、その先導をしているのはこれまた見覚えのある赤毛の少女だ。

うん……………。

パレードの異変に気付いた海馬ランドのスタッフらがざわざわし始めた。

いや、すまない僕の勘違いだった。あんな奴見覚えあるはずがなかった。聞いてください、僕はアイツらとは無関係なんですよ信じてくださいお願いしま…ちよガイドてめえ僕に向かって手を振るんじゃない！スタッフのみなさんがこつちを見ているだろうが！ハハハッ嫌だなあみなさん、僕の知り合いにあんな非常識な事する人がいるわけないじゃないデスカ。こちらら平平凡凡の一学生ですぜ？いやあ確かにプロデュエリストなんて仕事もしていますけど僕の本分はやはり学生なわけでして何が言いたいかというと、そんな凡人の知り合いなんて似たような奴が相場というもの、よく言うでしょう？類は友を呼ぶってね。つまり彼女と僕は無関係に等しき間柄で、それと同じく今回の件と僕は関係がないというのはおわかり頂けたと思うので…ああちよつと！何故スタッフさんは僕の肩を掴んでいらつしやるのでしょうか？え？少しばかり事務所でお話を？またまた御冗談を！いったい僕に何の非があるのでしょうか。その僕と彼女は無関…ああ貴方は先ほどのショウのスタッフの方でしたか！じゃあ言い逃れできませんね！そうですよ！彼女は確かに僕の連れですが何か？僕が何か悪い事でもしたでしょうか！？していませんよね！？ということでは僕は帰らせてもらいま…ああやっぱ駄目ですか…そうですね。分かっていましたとも。世界はこんなにも理不尽なことできてくるってね。時に正義ってなんでし

ようね。公正ってなんでしよう。あるいは道義や観念といつてもいいかもしれませんが。確かに人間が人間である以上、それらを貫くことは甚だ困難な事ですが、だからといってそれを蔑にしていいいわけじゃないと思うのですよ。つまりは（中略）ということとで僕の言いたい事は理解してもらえたでしょうか？できませんか、できませんよね！それじゃあ事務所の方まで逝きましようか！

空を仰ぎ見ながらこの世の不条理を嘆く少年は、そのまま肩を掴まれたまま再び事務所の方まで連行されていき、その後の彼の顛末を知る者は誰もいなかったという。

閑話 とある少年の悲日常（後書き）

GSやらDTやら新パック等々、色々情報が出てきたようで最近遊戯王が熱い。やはり剛健再録に皆さんの関心が集まっているようで。

最近の新規カードはイラストが秀逸なものがたくさん出てきて嬉しい限り。ジェムナイトマスター・ダイヤは背景までイケメンでドラゴラドはちっこいブルーアイズみたいで可愛いですね。

番外編 現実発異界経由分岐世界行？（前書き）

気分転換に書いた番外編。これが終わったら本編の2年目に入る予定。

番外編 現実発異界経由分岐世界行？

遊馬 side

「無理無理！跳び箱20段なんて無理に決まってるだろ！」

「それぐらいの高さなら飛んでやる！！かつとビングだぜオレ
っ！！ってうわああああああああっ！！！」

どんがらがっしゃーん。

「あっ…！大丈夫？遊馬……」

「よう小鳥……。かつ……、かつとんだぜ……」

「ハハハハハ！馬っ鹿じゃねーの！」

「ブフフツ、お次は何に挑戦するんだ遊馬！？」

「ちよつと鉄男君っ！！！」

「そんじゃこのくらいの距離のプールなら息継ぎなしで泳ぎきってやるっ！」

「無理無理！できるわけねーって」

「言ったな鉄男！たどり着けたら今日はとことんデュエルに付き合

つてもらうつからな！かつとピングだぜオレ！つてぶはあああああ
あああああつ！！」

ゴポポポポポツ。

「遊馬っ！」

「ダーハハハハハハッ！」

「ちくしょー、今日も全滅だあ！」

「何が全滅よ。もう…本当に馬鹿なんだから」

隣の席に座る幼馴染の観月小鳥が呆れた様子で話しかけてくる。
全くわかってないなあ小鳥は……。

「あれはチャレンジさ！かつとび！いやかつとピングなんだ！！」

「って言ってもどれも出来ていないじゃない」

「それがわかってないんだ小鳥は。大事なのは挑み続ける事！かつ
とび続ける事だろ！？諦めなきゃいつかは飛べるしたどり着けるか
もしれない。なんつったってオレにはこの鍵があるんだからさあ」

オレは胸にいつもかけているペンダントを手にとって眺める。

「それって冒険家だったお父さんとお母さんの形見の品なんですよ
？」

「ああ！この鍵はいろんな可能性の扉を開けられるんだ！」

オレはそう信じている。父ちゃんから貰った大切なお守り。

「遊馬の目指す扉って今は一つしかないじゃない」

「まーね！どでかい扉さ！」

そう、オレの今一番のかつとビングー！！

「おっしっみんなやってるな！」

「本当にみんなデュエルが好きねえ」

「小鳥もみれば分かるさ！デュエルって最高なんだぜ！？」

D・ゲイザーセット！AR・ヴィジョンリンク！！

様々なウィンドウが宙に浮き数式の羅列が一瞬視界を覆う。世界が造りかえられていく。

これが日常とは別のオレのもう一つの世界。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

突然目の前に巨大な異形の生物が飛んできて、周囲の壁や床を砕き砂煙を巻き起こす。

何も知らない人が見ればパニックを起こすかもしれないけどなんの

ことはない。これはバーチャル世界の出来事だから、実際にはなんの影響もないんだ。

これぞARデュエル！ソリッドヴィジョン立体映像による迫力と衝撃を立体的に体感できる新しいデュエルスタイルだ！

オレがさつき装着したD・ゲイザーはARデュエルの時に目に装着する小型の視覚装置で、これを使う事によってデュエルを行う者同士、そして観客との情報をリンクしてソリッドヴィジョン立体映像を共有することができる。細かいところや詳しい事は難しくてオレにはさっぱりわかんねえけどな！

デュエル！

これがオレの目指す扉！

オレデュエルで世界チャンピオンになるんだ！！

「これで俺の37戦37勝目だな遊馬！」

「くっそお！また鉄男に負けたあああああっ！！これでオレ37連敗かよ……」

「けどそんなオレの夢はまだまだ先が長いようだぜ……」。

「遊馬はいつまで連敗記録を伸ばすのかしらね」

「おい小鳥！次は勝つさ！なあ鉄男もう一回！もう一回デュエルしようぜ！」

「何度やったって同じ、これが腕の差ってやつだ。全くお前は何度言ってもゴゴゴゴレムの効果を覚ええないし、伏せた罫カードの存在を忘れるし。そんなんじやいつまで経っても俺には勝てないぞ。それに今日はこれから母ちゃんに用事頼まれてよ。わりーが俺は先に帰るぜ！」

そう言つて鉄男はお得意のスケボーに乗ってさっさと帰ってしまった。

アイツはでかい図体のわりに運動が得意なんだよな。

「あつ！ずるいぞ勝ち逃げがあつ！！」

「何言つてるの、もう……。遊馬は鉄男君に一度も勝つた事ないでしょー！」

ぐっ……。そうだった……。

でも鉄男もずるいぜ。オレはモンスター・エクシーズ持ってないのにガンガン使つて気やがって……！そりゃあ多少腕の差もあるのは認めるけどさ……。

「くそあつ！今からオレのデッキの本気が出せたっていうのに！ふっ、鉄男の奴命拾いしたな」

「はあ、ホントに馬鹿なんだから。来年には私たち中学生になるっていうのに遊馬は全然成長しないね……」

失礼なこと言うなよ小鳥！オレだって成長してるさ！

この前だつてついにバク転ができるようになったんだぜ！？

そう文句を言おうとした時。

「全く元気がいいなあ最近の子供たちは…。それに引き換え僕は何をやっているんだか…はあ…」

横からそう呟いた誰かの声が聞こえた。小鳥にも聞こえたようで二人で首を捻つてみると、オレ達から少し離れたところに高校生くらいの男の人が気だるそうに小型のキャリアバッグ腰掛けているのが見えた。

ここらでは見ない制服を着ていて、腕には一昔前のデュエルディスクを抱えている。今や折りたたみ式でコンパクト、そしてデュエル以外にも端末としての機能も持つD・パッドが主流で、デュエルディスクを使っている人なんてほとんどいないはずなんだけどなあ。

まあなんにせよデュエルディスクを持っているということはこの人もデュエリストのはずだ。暇そうに座っているし、オレもまだまだデュエルし足りなかったから相手として丁度いいかもしれない。

「なあそのアンタ、暇なんだつたらオレとデュエルしてくれないか？」

「ちょっと遊馬！年上の人にそんな言葉遣いじゃ駄目だよ！あのすみません、遊…コレは本当におバカな奴なんで悪気はないんですほらっ、遊馬も早く謝って！」

「いや、構わないよ。別段僕は敬語を使われるに値しない人間だと

思うしね。気軽に接してくれた方が良さ」

しかしその人は手をひらひらさせながら大して気にした様子もみせずになんか言う。

「でも……」

「この人もいって言っているじゃんか。だいたい小鳥は堅すぎるぜ？」

「も〜！そういう問題じゃないの！全く、遊馬はお子様なんだから……」

「やにおう！お前だってオレと同じ歳だろうが！」

「えっと、それで僕に何か用なのかな？」

オレ達が睨み合っていることに気を使ってくれたのか、向こうから話を促してくる。

「だからオレとデュエルしようぜ！旧式のデュエルディスクとはいえ、それを持っているんならアンタもデュエリストなんだろ？」

「あつ本当だ。昔お父さんが似たようなもの持ってたなあ。でも今じゃD・パッドが主流でデュエルディスクなんて使っている人はほとんどいませんよ？着ている制服もこの辺ではあまり見ないものですね」

「う〜ん……まあ色々な事情があつてね。それに僕はこの町の人間じゃないんだ。訳あつて3、4日程滞在することになったのさ」

その後もガイドの奴一人で遊びに行きやがってとか、元の世界どころか全然違うところに来ちまったじゃないかとか、数日経たないと再び歪が出現しないのは困ったもんだとか良く分からないことをブツブツ呟いている。

もしかして危ない人だったりする……？

「ああそつだ。その少年の質問にまだ答えていなかったね。一応僕はデュエリストのはしくれだよ」

この町にいる事情つてのはよくわかんないけどやっぱりデュエリストなんだな！

「じゃあさじゃあさ！デュエル！オレとデュエルしてくれよお！鉄男の奴さっさと帰っちまって相手がいないんだ！」

他の町に住むデュエリストとの戦いつてなんだか燃えないか！？
普段はあまりできない機会だしすっげえ面白そつだ！

「むう…僕も特にやる事はないから構わないんだけど、このデュエルディスクでできるのかい？僕はそのD・パッドつて機械を持っていないんだけど」

「マジで持っていないの？今時珍しい奴もいるもんだな。じゃあもしかしてD・ゲイザーも？」

「恥ずかしながら……」

D・ゲイザーは生活必需品レベルの物なのになあ。デュエリストじ

やなくても大抵の人が持っている代物だ。もしかしたらこの人はすぐく田舎の方から来た人なのかもしれない。

「じゃあオレの予備を貸すよ！こんなこともあるつかと平日頃から持ち歩いているのさ！やっぱオレって天才かも？」

「それは遊馬が無茶やらかすせいでしょうっちゅう壊すから、予備を持たされているだけでしょ！」

それをばらすなよ小鳥！

「D・ゲイザーセット！デュエルターゲット・ロックオン！D・パッド展開！！よし行くぞ！」あっ、ちよっと待ってくれ」ってだはあっ！！！」

勢に乗ったところでストップをかけられてついでつこけちゃったじゃねーか！

「えーっと、ここをこうして。これでいいのかな？よし、準備オケー。それじゃあ行くよ」

まあ初めてでD・ゲイザーの使い方が分からなかったようだから仕方ないか。

オレも初めは操作がわからなくて小鳥に教えてもらっはめになったし。

「よおし！かっつとピングだぜオレっ！！！」

気を取り直してD・パッドを構える。

「^{デュエル}決闘!!」

遊馬 LP4000

??? LP4000

デュエルは何より先手必勝だぜ!

「オレの先攻、ドロ―!手札からズババナイトを攻撃表示で召喚!
!」

ズババナイト 星3 ATK/1600 DEF/900

ズババナイトはギザギザの双剣を構え、金色の鎧に身を包んだ屈強な騎士。

攻撃力1600はオレのモンスターの中でもかなり高い数値なんだ!
オレの主力モンスターはそう簡単にはやられないぜ!

「よし!ズババナイトで相手プレイヤーに攻撃だ!ズババソードッ
!」

これで一気に相手のライフポイントを削り取れる!

しかしそんなオレの思惑とは違い、ズババナイトは一向に動かなか
った。

「あれ？どうしたんだよズババ！」

「先攻を取ったプレイヤーは最初のターンは攻撃できないよ。デュエルモンスターの基本ルールだけど知らなかったのかい？」

あっ！？やべえすっかり忘れてた…。

「遊馬しつかりしなさいよ！そんな事デュエルをしたことない私でも知ってるわよ」

「うるせーぞ小鳥！ちよつと忘れてただけだっ！ならオレはこれでターンエンドだ！」

あの人はそんなオレと小鳥のやり取りを肩を竦めて見ていた。

「それじゃあ僕のターンだね。デッキからカードをドロー！」

相手が鉄男だったら何を出してくるのか少しは予想できるんだけど、今回は全く知らない人だからどんなモンスターを使うのかワクワクするぜ。

「僕は手札より永続魔法セイクリッドの星痕せいこんを発動！」

カードの発動の宣言と共に、相手フィールドの上空に光り輝く謎の紋様が浮かび上がる。

「セイクリッド…？」

今まで聞いた事のないカードだ。どんな効果を持っているんだろう！？

「セイクリッドとは神聖を意味する言葉。あるいは神の使いと言い換えてもいいよ。星の加護を受けしセイクリッド・クラスター星光の騎士団を今見せてあげよう」

なんだかよくわからないけどすごそうだ！騎士団って響きがすげえカッコイイじゃん！

オレのモンスターのほうが絶対カッコイイけどな！

「僕は手札からセイクリッド・ポルクスを攻撃表示で召喚！」

半身だけ金色の装飾がされた鎧を身に着け、武骨な二又の大剣を担いだ純白の騎士が、まるで星の光のような輝きを放ちフィールドに降り立つ。

セイクリッド・ポルクス 星4 ATK / 1700 DEF / 600

「攻撃力1700！？ズババより強いカードが手札にあったのか！」

「さらにセイクリッド・ポルクスのモンスター効果。このカードが召喚に成功したターン、自分は通常召喚に加えて1度だけ セイクリッド と名のつくモンスター1体を召喚することができる。来い！セイクリッド・カウスト！」

ポルクスと同じく煌びやかな光に包まれて現れた獣戦士のセイクリッドモンスター！

その手には弓を番えてズババナイトを鋭く睨む。

セイクリッド・カウスト 星4 ATK/1800 DEF/
700

こっちは攻撃力が1800！

まさかたった1ターンでズババを超えるモンスターを2体も出して
くるなんて。

この人もしかして鉄男より強いかもしれんねえぞ。気を引き締めねえ
と…。

「ここでセイクリッドの星痕の効果を教えておこう。この永続魔法
は自分フィールド上に《セイクリッド》と名のついたエクシーズモ
ンスターが特殊召喚された時、デッキからカードを1枚ドロウする
ことができるんだ」

エクシーズ！？そう言えばアイツの場のモンスターは両方ともレベ
ルが4だ！

「まさかエクシーズ召喚をしてくるつもりな「まあ今はエクシーズ
しないんだけどね」ってしないのかよっ！？」

じゃあ何のために説明したんだよっ！紛らわしいな！

「いや、わざわざエクシーズモンスターを呼ばずともズババナイト
の攻撃力なら僕の場のモンスターで倒せるから」

そうだった！やべえじゃんオレッツ！

「バトルフェイズ。セイクリッド・ポルクスでズババナイトに攻撃

「さらにセイクリッド・カウストで相手プレイヤーにダイレクトアタック！」

「ズババあつ！うわあああああああああつ！！」

遊馬LP4000 2100

「遊馬！大丈夫！？」

「くっ……へへっ、まだまだいけるぜ！」

心配そうに駆け寄る小鳥にそう応えて跳ね起きる。勝負はまだ始まったばかりだ！

「まだ僕のターンは終わりじゃないよ。僕はセイクリッド・カウストのモンスター効果を発動。このカードの効果によって1ターンに2度までフィールド上の《セイクリッド》と名のついたモンスター1体のレベルを1つ変えることができる。僕はセイクリッド・ポルクスとセイクリッド・カウストのレベルを1つずつ上昇させる！」

セイクリッド・ポルクス 星4 星5

セイクリッド・カウスト 星4 星5

なんのためにレベルを……ってそうか！？さっき永続魔法を発動したのもこのためか！

「レベル5となったセイクリッド・ポルクスとセイクリッド・カウストでオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！」

2体のモンスターが光に溶け、上空に浮かぶセイクリッドの紋章に吸い込まれて巨大な魔法陣を形成していく。

「エクシーズ召喚！汝、我が刃！輝け、セイクリッド・プレアデス
！！」

星々の加護をその身に受け純白と黄金の輝きを放つ鎧を纏った騎士が星空を背景に舞い降り立つ。小さい時父ちゃんと一緒に見た煌めく星空、プレアデス星団を思い起こさせる。

セイクリッド・プレアデス ランク5 ATK/2500 D
EF/1500

「こっつ、攻撃力2500!？」

思わず小鳥と驚きが重なってしまった。

攻撃力2500のモンスターを倒す手段はそうそうないんだ。

「僕はセイクリッドの星痕の効果によってデッキからカードを1枚ドロー！うっんっ、まあいいや。これで僕のターンを終了するよ」

「ねえ遊馬、もう諦めようよ」

相手の強力なモンスターを見た小鳥がそんな弱音を吐く。ただどそれは絶対に認められない話だぜ。

だってそれが…！

「オレは諦めねえ！それがオレのかつとビングだっ！！俺のターン、ドロー！」

つつー？よし、このカードなら！

「オレは手札からガガガマジシャンを攻撃表示で召喚する！」

ガガガマジシャン 星4 ATK/1500 DEF/1000

「遊馬！攻撃力1500じゃ相手モンスターに敵わないよ！」

そんなこと分かってるさっ！

「オレは手札より魔法カード、破天荒な風を発動！このカードは自分フィールド上のモンスター1体の攻撃力、守備力を、次の自分のターンまで1000ポイント上昇させる！」

ガガガマジシャン ATK/1500 DEF/1000
ATK/2500 DEF/2000

「やったあ！これで相手のモンスターと攻撃力が並んだわ！」

「いつけえ！ガガガマジシャン！セイクリッド・プレアデスに攻撃だあ！ガガガマジック！」

ガガガマジシャンが相手のモンスターに飛び掛かり攻撃を加え……
…ようとしたその時。

「なんだっ！？」

セイクリッド・プレアデスの武器が光り、視界が全て見えなくなる。そしてその光がおさまりフィールドが見えるようになる、そこには星光の騎士がただ一人毅然として立っていた。

「うええっ！？どういうことなんだよ！ガガガマジシャンとプレアデスの攻撃力は互角だろ！？その場合は相討ちになるんじゃないのか！？」

「なんで遊馬のモンスターだけが…！？」

ガガガマジシャンはどこに行ったんだ！？

「あ、ごめんね。ガガガマジシャンが攻撃を仕掛けてきた時にセイクリッド・プレアデスのモンスター効果を発動させたのさ。プレアデスは1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事でフィールド上に存在するカード1枚を選択して持ち主の手札に戻すことができるんだ。そしてこの効果は相手のターンでも発動する事ができるのさ」

「そんなっ！？マジかよ…！？」

確かにガガガマジシャンはオレの手札に帰ってきていた。でもオレはこのターン既にモンスターを召喚してしまっている。通常召喚は1ターンに1度だけ。新たに場にモンスターを出す事ができない！どうすればいいんだよオレ！

「こういう時はリバーズカードを伏せたりして対処するんだよ少年」
頭を抱えたオレの様子を見兼ねてそうアドバイスしてくる。

そうだ！手札にはまだこの畏カードがあるじゃないか！

「オレは畏カードを1枚伏せてターンエンドだ！！」

俺が伏せたのは畏カード、バトル・ブレイク。このカードは相手モンスターの攻撃宣言時にそのモンスター1体を破壊して、バトルフェイズを終了させるカード。

これで何とか凌げるといいけど……ってなんかアイツが呆れた様子で此方を見ている。

あり？オレなんかミスしたのか？

「リバーズカードには魔法と畏の2種類があるんだよ。わざわざ声に出して宣言しちゃ駄目さ。相手に自分の情報をやってどうするんだ」

あゝっ！！そうだったっ！！

「ちよつと遊馬〜！！何やってるのよ！！」

ぐう…、ちよつと忘れてただけだろっ！

「僕のターン、ドロ〜。そしてセイクリッド・プレアデスのモンスター効果を発動。エクシーズ素材を1つ取り除き、君のリバーズカードを手札に戻してもらおうかな」

「げっ！？そうだった！プレアデスの効果を忘れてたあゝっ！！」

プレアデスがその手に持つ武器をオレのリバーズカードに狙いを定

め、その力を振りバトル・ブレイクが手札に戻される。

「まさかとは思ったけど本当に忘れていたのか……。その反応だと僕のモンスターへの攻撃をトリガーに発動する攻撃反応型トラップかな？手札に伏せられるカードがあつたならばブラフでもいいから何か伏せるべきだつたね。君が伏せたカードがプレアデスのモンスター効果にチェーンして発動できるカードだつたならばそれで良かったんだけど」

「それを早く言ってくれよっ！」

「一応僕は君の対戦相手なんだけどな……」

あつ……。

「まあ終わりにしようか。僕はセイクリッド・プレアデスで相手プレイヤーにダイレクトアタック！」

星の騎士から放たれた極光の一撃が襲いかかる。

「うわぁあああああああああああああつ！！！」

遊馬LP 2100 0

「ちくしょおおおお！また負けたあああああつ！！なんで勝てないんだ……！」

「今回は相手のライフポイントを1も削れなかったね」

「言うなっ！そんな日もあるんだよ！」

最近鉄男にだって少しはダメージを与えられるようになったのに！今のデュエルでは相手のモンスター1体すら倒せなかったなんてちよっぴりへこむぜ…。

いや、こんなところで弱気になっちゃいけない！

「くそお！もう一回！もう一回かつとビングだオレ！次こそはアンタに勝つてやる！」

「いや、自惚れているつもりはないんだけど今のままの君じゃ僕には勝てないと思うよ…？」

「そつよ遊馬。ボロボロに負けてたじゃない！」

「嫌だ！オレは絶対に諦めない！諦めたら人の心は死んじゃうんだよ！！だからオレはかつとビングするんだ！」

かつとビングは父ちゃんの大切な教えだ。物事を後ろ向きに考えるつまらない世界から冒険とロマンに溢れた世界へ行くためにはチャレンジする精神、かつとビングし続ける事。

目標へ向かってチャレンジする。それがいつもオレの心を奮い立たせてくれる。

「せめて鉄男君に勝てないとこのお兄さんには勝てそうにない気がするけど…。遊馬はその鉄男君にだって今38連敗中ですよ」

「ちつがーう！37連敗だ！」

「遊馬…それ大して変わらないわよ…」

「いや、大違いだ！だって38戦目にはオレが勝つかもしれないだろ？」

諦めずに全力でチャレンジし続けねばきつと鉄男にだって勝てる時が来るさ！

手を太陽にかざしていつかそれを掴んで見せると意気込みを新たに
する。

そんなオレの様子をアイツはクスクス笑って見ていた。

「わっ、笑うなよ！アンタもオレの事馬鹿にするのか！？」

「あつ、いや失敬。決して君の事を馬鹿にしたわけじゃないんだよ。ただ僕の友人に君によく似た奴が居てね。それでつい君とそいつを被せて笑ってしまったんだ」

オレによく似た奴？そんな奴がいるのか？

もしかしてそいつもかつとビングの精神を持っているのかもしれない
い！

そいつとならいい友達になれそうだぜ！

「友人さんの事を悪く言うつもりはないんですけど、こんなおバカに似た人がいるなんてちょっと信じられないなあ」

「おい、それはどーゆー意味だよ小鳥！オレがバカみたいだと言っているように聞こえるぞ！」

「いや、はっきり言ってるし…」

あり…？

「まあ君と違うところはそいつはデュエルがもの凄く強いってところだな」

「確かに遊馬はすごく弱いですからね…」

ちくしょう！確かにオレは弱さ！今はな！絶対すぐに強くなってるさ！

「でもその人とオレが似ているってことはオレもそのうちすっげー強くなるって証明にならないか！？その人もかっつとビングしてるんだろ！？」

「ならないよ証明になんて…」

やっぱりかっつとビングし続けていけばいつかは強くなれるんだ！しかし期待に胸膨らますオレにこんな言葉が降ってきた。

「今のままじゃちよつと無理かな。ああ君のかっつとビングの精神がダメだと言っているわけじゃないよ？むしろ諦めずにチャレンジするその姿勢は尊重すべきだし、これからも大事にするといい」

えつと…じゃあなんで今のままじゃ無理なんだよ？

「僕は会ったばかりで君のことをほとんど知らないけど、おそらく君は努力の方向音痴だろ？」

「「努力の方向音痴…？」」

「何かを成し遂げようと頑張っているのは確かなんだけど、そのベクトルが変な方向に向いているんだよ。マラソンの選手になりたいのにずっと腕立て伏せして腕の筋肉を鍛えているようなものさ」

うーんと…、つまりどういうことなんだ？

「確かにマラソンの選手になりたいんだったら足腰や体力を重点的に鍛えたほうが良さそうですね」

小鳥はこの人が何を言いたいのか分かったようで顎に手をあて考え込んでいる。

「君はデュエルで挑戦し続ける努力はしているけど、デュエルモンスターズ自体を知ろうという努力を怠っているんじゃないかな？」

そんなことは……ない……と思う。

「さっきの会話から察するに君はもうそれなりにデュエル経験があるんだろ？それなのに初歩的なルールミスやプレイングミスが目立ちすぎだよ」

「今回はちょっとうっかりしていただけさ！上手く行く時だって…あるんだ…ぜ…？」

あるよな？オレ？

「見栄を張らないの！しょっちゅうミスして鉄男君に怒られている

でしょ！」

そうでした…。

「最低限デュエルのルールと自分のデッキのカードくらいはしっかり覚えようよ。そんな基本的なところすらおさえていない状態で誰かに勝つつもりでいるなら、それは人によっては侮辱だと捉えられることもあるんだよ？」

「オレは相手の事を侮辱したりなんかしないさ！」

オレはただ諦めないで挑戦しているだけなんだ！
相手の事を馬鹿にしたりなんかはしていない。

「これは君の意図とは関係ないから問題なのさ。受け手がどう取るかの問題なんだよ。分かり易くするために例を過剰にするけど、例えば血反吐を吐くまでトレーニングを重ねているボクサーがいるでしょう。そんな人の前にボクシングのルールすら満足に知らない素人が現れて、そのボクサーにいきなり試合を挑んで絶対勝ってやると宣言したら言われた当人はどう思うかな？どう転んでもいい感情は湧かないだろう？言った方は良くて呆れられるだけさ」

それはそうかもしれないけど…。

「それにこのままだと君のカード達も可哀想だ」

「カードが可哀想…？」

「君のために戦っているのに、その君のつまらないミスで倒されていくモンスター達の気持ちを考えた事があるかい？」

倒されていくモンスターの気持ち…。

その言葉でさっきの鉄男とのデュエルが思い返される。オレがすっかりモンスターの効果を把握していれば…オレがトラップカードを忘れていなければ…彼らはやらなかったかもしれない。

「じゅうだ…、いや名前じゃ分からないか。さっき話に出た僕の友人は自分のために戦ってくれるモンスター達を仲間と呼んで大切にしているよ。彼らを最大限活躍させるためにはどうすればいいか。それを常に考えてデュエルしている。デュエルは一人でするものじゃない、仲間たちと力を合わせて戦うんだってね」

「仲間……」

「あるいは力を絆と言い換えてもいい」

自然とデッキのカード達を眺める。

いつもオレのために戦ってくれるモンスター達。

オレは一度でもこいつ等の事を考えてやったことがあっただろうか…。

「カードに対する意識が変えられたならデュエルの世界もガラリと変わるさ。その視点が得られれば君なら一足飛びに強くなれると思うよ。無論それなりの努力は必要だけどね」

世界が変わる。

それを聞いてなんだが胸が高鳴るのを感じた。

オレがかつとビングをし続ける理由もまさにそれが見たいからだ。そこに行きたいからだ。

父ちゃんも言っていた冒険とロマンが溢れる希望の世界。もしかしたらその友達とやらも父ちゃんと同じような世界が見えているのかもしれない。

オレもそういう人間になりたい。いや、いつか絶対なってやるんだ！

うおおおおおおお！なんか燃えてきたああああああああっ
！！！！

「オレ、もっとこいつ等のことを大切にするよ。自分一人で突っ走るんじゃなくて、こいつらと一緒に戦ってみる！ということで早速デュエルしようぜ！」

「結局そうなるのか……」

「もう、遊馬ったら！まずすべき事はデュエルの基本ルールと自分のデッキのカードをしっかりと覚えることだっって言われたでしょ！」

「だってさ！あんな話を聞かされたらワクワクがとまんねえだろ！？今すぐに試してみたいんだ、オレとモンスターの絆ってやつを！」

今ならいつもより上手くデュエルできる自信みたいなものがあるんだ。

「焦ったっていい事はないよ。急がば回れって言葉を聞いたことないかな？何事もまずは基礎が大切なのさ。それをきちんと学ぶだけで今より遥かに強くなれるはずだよ」

「ううゝ基礎勉強かあゝオレそういうの覚えるの苦手なんだよなあ。実際にデュエルしてたほうが強くなれるんじゃないのか？何事も実践が大事ってね！」

基礎が大事ってことはなんとなくわかるんだけど、頭より体を使っただ方がオレには合っている気がするんだ。今までそうして来たんだし。

「まあその考えも正しいんだけどね。だけど君はまだ実践で鍛える段階に移行するのは少し早いな。やっぱり最低限の知識は必要だよ」

「でも今まで何回もデュエルできたんだぜ？そりゃあちよつとミスする事はあつただけどさ」

ずっと負け続けただけどそれなりに成長はしているんじゃないかと思う。

「ううん、どうも君は根本的に基礎基本の力を甘くみているようだね。口で言っても理解できなさそうだしどうしたものか……」

そう言つてこの人は少し考える様子を見せ、何かを思いついたのか拳で掌をポンと打つ。

「それじゃあ1つ勝負してみないかい？」

「勝負…？」「」

「その小鳥ちゃんとやらはデュエル自体は未経験なんだよね？」

「えっ？あ、はい。遊馬のデュエルは良く見ているんですけど自分でやった事はないです」

小鳥はよくオレのデュエルを見ているけどそういえば一度もデュエルをしようとしなかったな。こんなに面白いものなんてないのにもつたいない！

「明日から僕が君にデュエルの伊呂波いろはを教えるから、三日後に遊馬君とデュエルしてもらおう。デュエルの基本を押さえるだけでどれだけ強くなれるかそれで分かるだろうさ」

「ええ〜っ！？私が！？遊馬とデュエル〜っ！？」

おいおい、正気かよ。そんなもん勝負にすらならないぜ。

「いくらなんでも小鳥には負けられないよ！こいつは初心者も初心者なんだぜ？」

しかし勝負を提案したこの人は自信満々な様子だ。その証拠にこんな事を言っただけだ。

「もし君が小鳥ちゃんに勝ったら僕のエクシーズモンスターを1枚あげるよ」

「ホントかっ！？やったぜ！オレまだ持ってないんだエクシーズ！」

ラッキー！小鳥に勝つだけでエクシーズモンスターをくれるなんて！おっしゃ、この勝負もらったぜっ！これでオレにも初のエクシーズモンスターが！

「ちょっと私はまだやるって言ってないよお！私には何の得もないもん！」

「小鳥ちゃんが勝った場合は彼になんでも1つ言う事を聞かせる事ができる権利っていうのはどうかな？」

「ええ〜っ！？遊馬が…私の言う事をなんでも……ゴクリッ……」

「オレはそれで構わないぜ！小鳥に負けるわけねーしな！」

なんだか小鳥の顔が真っ赤になってわたわた慌てているけどどうしたんだらう？

「それでどうかな？小鳥ちゃんの方は協力します！やります！やらせてください！！」……色好い返事で何より」

いきなり周りがちょっと引くくらいのやる気を出した小鳥。

なんだかいつもの小鳥らしくないけど本当にどうしたんだらう？

あっ！わかったぞ！小鳥もついにデュエルの楽しさに気付いたんだなっ！！

へへっ、刑事さん顔負けの推理力を見せてしまったぜ。

「あっ、でも私カードなんて持ってないんですけど……」

「それに関しては心配しなくていいよ。初めから僕のカードを貸すつもりだったからね。それでもそれなりに持っているんだ」

そう言ってキャリーバッグを指さす。

その中にカード入っていたのか。旅行用の荷物が詰めてあるのかと思っていた。

「へへ〜んっ！例えカードが揃ったってそれを使う人がダメなら意味ないんだぜ？それがデュエルってもんなんだ！素人がホイホイ勝てるほど甘くはないぜ小鳥！」

「正論だけど君がそれを言うかね…」

「遊馬にだけは言われたくないよ！」

何い！？それはどういう意味なんだよ！オレはさっきまでのオレとは違うんだぜ？

オレには沢山の仲間デュエルモンスターがいるんだって気付いたしな。

こいつらと力を合わせて戦えばどんな相手にだって立ち向かっていける！

いつも以上のかつとビングができる気がするんだ！

小鳥にまた明日この時間この場所に来るよう言っであの人はさっさと帰ってしまった。

暗くなる前に宿を見つけないといけないんだとき。オレの家に泊まらないかと誘ったんだけど、悪いからと言って断われた。

家に来てくれたら何度でもデュエルできたのになあ。

いや、姉ちゃんがいるからどの道無理だったのか。

それにしても姉ちゃんはなんでオレにデュエルするなっていうんだ

ろうか…。

むう、早くデュエルしたいのはやまやまだけど約束は3日後かあ…。

よし、それまでにデッキのカードの事をしっかり覚えよう！

何てったってオレの大事な仲間達だしな！

オレとモンスターの絆の力をあの人に見せてやるんだ！

それでもう一回デュエルしてもらおう。次こそはオレが勝ってやる！

よおしっ！かっつとピングだぜオレ　　っ！！

「あっ、そういえばあの人の名前聞くの忘れてた……」

番外編 現実発異界経由分岐世界行？（後書き）

初めはGXとZEXALの小説どっち書こうか迷っていた経緯があります。ZEXAL書いてたら彰は遊馬のお兄さんのなポジションになっていたのかな。

セイクリッド・カウストさんはDUEL TERMINAL - 破滅の邪龍 ウロボロス！！-で出る新規カードを先取り。このカードの登場でポルクスとグレディの値が少々上がったように。

とりあえず鑑賞用にオシリスを手に入れました。イラストアドが半端ないですね。

番外編 現実発異界経由分岐世界行（前書き）

書いていたらいつの間にか2万字オーバーしていたので2分割することになった。続きはなるべく早く、年内にあげられるように頑張ります。

番外編 現実発異界経由分岐世界行

小鳥side

「それじゃあ私は師匠のところに行くからここで。また明日ね遊馬」
学校からの帰り道。私はいつもは遊馬と下校しているんだけど、今日は普段と少し違うところでお別れを告げる。昨日も同じ用事があったので別れていたの、遊馬も覚えていたのか軽く頷いて返事をしてくれる。

「ああ。精々ルールくらいはちゃんと覚えてこいよ！勝負は明日なんだからな！」

「分かってるよ。遊馬もちゃんと覚えてきてよね」

「だあ〜っ！だからオレはあの時は偶々忘れてただけだって言っただろ!？」

「それじゃ忘れないように注意してね！」

お前はオレの保護者かあっ！と叫ぶ遊馬をその場に残し、私は先日師匠と会った広場へと足を運ぶ。待ち合わせ場所はその広場の隅に設置されているカフェテリア。主に学校帰りの学生が談笑目的のたまり場として利用することが多く、学生たちの間ではそこそこ人気があるお店だ。

何故私がそこへ行かなければならなかったのか、その原因は2日前の出来事が原因なの。

なんだかよく解らないうちに（実際は勝った時の賞品やくそくに釣られてだけど）遊馬とデュエルで勝負することになってしまい、初心者も初心者の私はとりあえず師匠にデュエルとはなんたるかを教えてもらうことになったんだ。遊馬も一緒に行こうよって誘ったんだけど対戦相手の情けは受けないとかなんとか意地を張って断られちゃった。まったく、遊馬は変なところで頑固なんだから。

まあ、いいわ。その間にうーんと強くなって遊馬を驚かしてやるんだから！…というのはついでで勝った時の約束のために頑張るといのが本音だったりする。

えへへ…、勝ったら何をお願いしようかなあ。

一緒に買い物？映画？遊園地に行くのもいいかな。

キヤー！なんだかデートの予定みたいで恥ずかしい…／／

「やあ、今日は小鳥ちゃん。なんだかすつごくにやけているけど何か良い事でもあったのかな？」

「えっ！？あああああっ！？すつ、すみません、今日はです。べべ別に勝負に勝ったら遊馬とどこに行こうかだなんて…：…考えていませんよ…？」

妄想の世界に浸っていた私に声をかけて現実に引き戻したのは先日遊馬とデュエルしたあの高校生くらいの男の人。

あっ、さっきから私が言っていた師匠っていうのはこの人の事なの。今の私はデュエルモンスターズのことを教わっている立場だからそ

う呼ばせてもらっているんだ。名前も教えてもらったけど今はもっぱら師匠と呼んでいる。教え方も上手いしデュエルに関する知識も凄いいつものも私がそう呼称してしまった一因なんだ。

「ああ、そうなんだ…」

突然のことで少し心の声が漏れてしまったけど、あえて聞かなかつた事にしてくれるらしい。うう…、逆にこっちのほうが恥ずかしいかもしれない。

そんな私の心象を悟ったのか師匠は少し申し訳なさそうな顔をしながら、何気なく椅子を引いて座るように促し話題の転換点を作ってくれる。こういうちょっとした気配りが年上の男性なんだなあと思うところで、遊馬にも見習ってもらいたいところでもある。

いや、やっぱり遊馬には無理かな…、というか全然想像できないよ。想像できないし似合うとも思えない。遊馬は遊馬でいいのかもしれない。

「よし、それじゃ基本的なカードの種類や使用方法については昨日やったから今日は少し広義的な内容の話をしようかな。これはデュエルモンスターズに限った話ではないのだけれど、その事を意識しながらプレイすると勝率が目に見えて変わるだろうと思う話だね。まあプレイング云々の話じゃなくて心構えの類だけど」

「はい！よろしくお願いします」

昨日は覚える事が多くて大変だったんだよね。一概に魔法カードや罠カードといっても色々種類があつて発動できるタイミングが違ったりするんだもん。遊馬のデュエルをいつも見学していなかったら

もつと苦労していたと思う。覚えようと意識しなくても人の脳とい
うのは働いているものなんだなあ実感したよ。

「小鳥ちゃんはアドバンテージって言葉を聞いたことがあるかい？」

「アドバンテージ……って確か優位とか有利とかそういう意味でし
たっけ？」

私の確認に対して師匠は軽く頷き説明を始める。

「カードゲームにおいてアドバンテージがあるということは総合的
な数値的優位に立つことを意味するんだ。つまりは相手より多くア
ドバンテージを稼いでいけばそれだけ勝利に近づくと同義となる。
これにも色々種類があるんだけど、初心者がまず頭に入れるべきア
ドバンテージはとりあえず3つ。手札の優位性を意味するハンド・
アドバンテージ、フィールド上の優位性を意味するボード・アドバ
ンテージ、そしてライフによる優位性、ライフ・アドバンテージだ」

師匠は指を一本ずつ立ててそれぞれを強調する。

「えっと、ライフ・アドバンテージはお互いのライフポイントの差
の優劣って意味ですよ？相手よりライフポイントが多ければ多い
ほど良いっていうことですか…？」

とりあえずピンときたライフについての予想を述べる。

「そうだね。ライフについてはその認識で概ねあっているから説明
を省こう。特に特筆すべきものでもないし。残りを1つずつ処理し
ていこうか。ハンド・アドバンテージとはプレイングによって発生
するお互いのプレイヤーの手札の枚数差による優劣のことをいう。」

カードゲームというのは基本的に手札が多ければ多いほど優位に立
てるのさ。その枚数だけ手札に可能性が眠っているということに他
ならないからね。まあどれだけ手札を持っていてもそれが使えない
カードだったら意味がないけど」

なるほど…可能性か…。

なんだか遊馬が好きそうな話かもしれない。

「そしてボード・アドバンテージはフィールド上に存在するカード、
つまりはモンスターゾーンと魔法・罠ゾーンの合計枚数の差による
優劣の事をいう。戦において相手より多くの兵士を従えていたり、
罠を沢山仕掛けていたりする方が有利なのは歴史も証明している純
然たる事実さ」

これもまた質が悪ければそれほど効果的ではないけどねと言って締
める。

確かに味方が多かつたり守りが堅い方が安心できるのは当たり前
の事だ。決闘^{デュエル}というくらいなんだからこのゲームの根本は戦。戦いは
数が多い方が有利なのは誰もが知っている一種の真理。

「ハンド・アドバンテージとボード・アドバンテージは両方合わせ
てカード・アドバンテージと呼ぶんだけど、デュエルをする上では
このカード・アドバンテージを最優先に考えて動くのがいいとされ
ているんだ。ライフ・アドバンテージよりね」

ふ〜ん…なるほど…って、えっ!?

「ちょ、ちょっと待ってください！デュエルってライフポイントが
なくなれば負けちゃうんですよね？だったらそっちの方を優先する

べきじゃないんですか!？」

だってそうだよね?いくら多くのカードがあっても命が無く^{ライフ}なってしまうたら何の意味もないんじゃないのかな?...? だったら相手より沢山のライフポイントがあつたほうがいいと思うんだけど...

「その考え方も頗る正しい。正しいけどそれはデュエルの一面を見ているに過ぎないんだ。どう説明すれば分かり易いものか... そうだなあ...、それじゃあ小鳥ちゃんは下級、つまりはレベル4以下でアタッカーと分類されるモンスターの攻撃力の合格点は一般的どのくらいだと思う?」

えっ!??

うん...、まだカードのことは詳しく知らないし、遊馬がいつも使っているガガマジシャンやガンバラナイトの攻撃力を基準にすればいいのかな...

「良く分らないですけど1500ポイントくらいですか...?」

「ブブー、はずれです。正解は1900ポイント。次点で1800ポイントかな」

「ええ...っ!?!? そんなに高いんですかあ!?!」

「まあ無論これは個々人によって多少なり差異があるんだけどそれほど大した誤差はない。大半の人はそのくらいを考えていると認識している」

でもちよっと待って、遊馬のモンスターにそんなに攻撃力が高いモ

ンスターなんていたかなあ。

「下級でも攻撃力2000ポイントを超えるモンスターもいるんだよ。もつともそのラインを超えると大抵のモンスターは何らかのデメリットが付随するのが普通だけだね。ライフポイントを払えないと攻撃できないとか、攻撃したら守備表示になってしまうとかまあ色々ね」

そして優秀な効果を持ちかつ高攻撃力を維持している層というのが1800から1900ラインのモンスターなのさ。師匠はそう付け加える

「じゃあ遊馬がいつも使っているモンスターたちはそれに全然満たないってことなんですか？」

「うーん、数値だけでみたらそうだね。攻撃力が多少低くても効果が優秀なら問題ない場合もあるから一概には言えないけど。彼の場合というかこの世界ほとんどの人に当てはまることなのだけど、個々人のカードプールが圧倒的に足りていないんだ。採用したいカードがあってもそれを持っていなければ劣っていても他のカードで代用するしかない。自分の構想したデッキが組めないのはなんとも歯痒いものだよ」

なるほど、カードもタダじゃない。

カードによってはその眼で見ることすら難しいものもあるって聞かし。

そういえば遊馬もお小遣を貯めてコツコツ集めているって言ってたっけ。

でもその言い方はなんだか師匠はこの世界の人じゃないみたいだに聞

こえてしまつような…。

「付け加えるならば遊馬君の使っているモンスター達は本来ただ殴るためだけに使うようなモンスターじゃないからそれも仕方ないことなのさ。今の彼の戦い方は彼のデッキ本来の戦い方じゃないんだ」

本来の戦い方じゃない…？それってどういうことなんだろう。

「僕とデュエルする前に他の少年と遊馬君がデュエルしているところを見ていたから彼のデッキ内容は少しだけ分かった。その時に確認できたのはガガガマジシャンにカゲトカゲ、ゴゴゴゴーレムにゴブリンドバーク、それにフルエルフだったかな。これらを見るにおそらく彼のデッキはエクシーズ召喚をコンセプトに構築されていると推測できるのさ」

「えっ！？エクシーズ召喚を…ですか？」

でも遊馬はエクシーズモンスターなんて持っていないって言ってなかったっけ…あつ、なるほど！だから…。

「だからこそあのデッキは本来の力を出せていない。それがまた彼の勝ち星を拾うチャンスを阻害している。あのデッキ本来の動かし方はモンスターを魔法や罫でサポートし、すばやくエクシーズ召喚に繋げること。下級モンスターの打点の低さはエクシーズモンスターで補う事を想定しているんだ。ゆえに下級モンスターの打点が多少低くとも問題はない…はずだったんだ」

はずだった…。

遊馬はその肝心のエクシードモンスターを持っていないから、単純にデッキがパワー不足ってことなのね。そういえばあのデッキは元々遊馬のお父さんのデッキだったんだっけ。

「ちよつと脇道に逸れ過ぎたね。話を元に戻そう。何故ライフ・アドバンテージよりカード・アドバンテージを優先するのか。先ほどの説明通り、下級モンスターでもアツカーに分類されるモンスター達は大抵攻撃力1800ポイントを超えてくる。上級モンスターになれば2000ポイントオーバーは堅い。そしてプレイヤーの初期ライフポイントはたったの4000ポイントだ。これが何を意味するか分かるかな？」

「それじゃ相手モンスターの直接攻撃を2、3回受けただけでデュエルに負けちゃうってことですか？」

「イエス。つまりは現在のライフポイントで勝っている事よりも相手のライフポイントを削る体制が整っている事の方が勝利に直結するってことさ。何せ相手に攻撃をたった数回通すだけでいいんだ。極論を言えばライフポイントなんて1だけでも残っていればデュエルには負けない。しかし自分の使用できるカードがあまりにも少ない場合、それはそのまま敗北へと繋がる事が圧倒的に多い。兵糧が沢山あつて籠城策を取っても使える兵士がいなければいずれは攻め落とされるのは自明の理。ゆえにライフよりもカード・アドバンテージを重視するプレイヤーが多いのさ」

それにだ……。そういつて師匠は話を続ける。

「僕が元いた場所ではプレイヤーの各ライフポイントは8000が基本だった。こちらの2倍さ。それですらたった1ターンでも隙を見せればあつという間に全てのライフを刈り取られる事も決して少

なくなかったよ」

「えっ！？8000ものライフポイントをたった1ターンですかつ！？」

信じられない！遊馬なんて未だ4000ポイントのライフすら減らしたことはないのに…。

「まあ基本8000ものライフがあったから余計僕はライフ・アドバンテージを軽視しているのかもしれないね。4000ポイントならもう少しライフに気を配る必要もありそうだけど、それでもまだ優勢順位は覆らないかな」

一瞬でも隙を見せたら4000のライフポイントなんてないも同然。それが師匠が見ているデュエルの世界なんだと思うと改めて見えているものが私とは違うんだなと思う。

「だからデュエルするときにはライフポイントの残値に気を配るよりは、相手より多くのカード・アドバンテージを取ろうと考えて動く方に比重を置いた方が、勝利に近づくってわけなのさ」

なるほどなあ。全部を理解するのはまだ無理だけど、なんとなくデュエルに対する今までの視点が変わった気がする。

やっぱり強い人はいろんな事を考えているんだなと素直に感心する一方で、デュエルの世界チャンピオンを目指す遊馬は果たしてこんな人たちに勝つ事ができるようになるのだろうかと思わずにはいれなかった。

~~~~~

「そういうえばさつきアドバンテージ説明の時とりあえず3つと書いていましたけど他にもそんな考え方があるってことですか？」

ふとそう思ったのは師匠と一緒に私のデッキを試しに使ってみながら、基本的な動き方の確認をしている時だ。師匠はデッキを作っている時はアドバイス程度しかしてくれず、ほとんど私が選んだカードだったから不安だったんだけどなんとか形にはなつたみたいで良かった。

「ああ、興味があるのかな？それじゃ少しばかり触れてみようか。他に有名なのは墓地アドバンテージと情報アドバンテージかな。後者の方はプレイヤーのプレイング技術や知識、つまりはプレイヤーの技量が完全に物を言うから今の小鳥ちゃんにはあまり必要がないかもしれないけど、前者の墓地アドバンテージについてはなるべく早いうちに認識すべき事柄だね」

墓地アドバンテージ？

さつきと同じような感じで考えると墓地に存在するカードの優位さって意味だけど…。

「墓地にモンスターがいることがなんで有利に働くんですか？」

墓地って言うくらいだからやられちゃったモンスター達がいくところだよな？

墓地にカードが多いってことはそれだけ相手に倒されたってことじ

やないのかな。

「デュエルモンスターのカードは墓地に干渉するカードが多いんだ。それは墓地のカードが多ければ多いほど有利だと言い換えることもできる。墓地にあることで真価を発揮するカードもあるくらいさ。デッキの内容によつてはこの墓地アドバンテージを他の何より重視する人も少なくない」

うーん。難しくて良く分からなくなってきちゃった。

「墓地干渉の最たる例が死者蘇生の魔法カードだろう。このカードなら小鳥ちゃんも知っているんじゃないかな。墓地からの特殊召喚なら例え上級モンスターであろうとリリースは不要という大きなメリットがある。わざと上級モンスターを墓地に落としてから他のカードの効果で釣り上げるというのも立派な戦術のひとつだね」

死者蘇生は確か遊馬も使っていたカードだ。やられちゃったモンスターを復活させるカードっていう認識しかしていなかったけど、なるほどそういう使い方もあるんだ。

「墓地にあること自体が望ましいものは基本的にモンスターカードが多い。ネクロ・ガードナーは墓地にあるこのカードを除外することで相手モンスターの攻撃を無効にできるし、墮天使マリーは墓地にあることで自分のスタンバイフェイズ時にライフを回復する効果を持っている」

1枚1枚を実際に見せながら説明してくれる。

はあ、モンスターにも色々な効果を持ったカードが多いんだなあ。

「何も墓地に送ったカードだけが効力を発揮するわけじゃない。墓

地にモンスターがいること自体がメリットになるカードも沢山存在するんだ。墓地にモンスターが5体以上いればそれらをデッキに回収しつつ2枚ドロワーできる魔法カード貪欲な壺が使えるし、特定のモンスターが墓地にいたことが召喚のトリガーになっているカードもある」

そう言っただけで師匠が私に見せたのは1枚のカード。

「振りの剣と盾を携えた騎士の格好をしたモンスター。カオスソルジャー - 開闢の使者 - だなんていかにも強そうな名前をしている。」

「これは初代決闘王者も切り札の一つとして使っていたモンスターでね。通常召喚できず、墓地の光属性と闇属性モンスターを1体ずつ除外した場合のみ手札から特殊召喚できる。これも墓地を意識して構築、プレイングしないといけない類のカードだね」

特殊召喚って確かアドバンス召喚と違ってリリースなしでも召喚できるけど召喚条件が定められた召喚方法だったわけ。何気なくそのモンスターのステータスを見て愕然とする。

「こ、攻撃力3000!?!」

「最上級モンスターが生贄もなしにポンと出てくるんだ。相手からしたら堪ったもんじゃない。さらにこのカードは戦闘で相手モンスターを破壊した場合、もう一度だけ続けて攻撃できる効果と1ターンに1度、攻撃を放棄することでフィールドのモンスターを1体除外できる能力も持っている」

3000ポイントもの攻撃力を持ったモンスターの2回攻撃!?!それに例えそのカードが倒せないモンスターが相手でも、もう一つの

効果で対処できるなんて…！

流石に初代の決闘王者が使ってただけのことはあるってことね。というかそんなカードを持つている師匠ももしかしてすごい人なんじゃないのかなという疑念も湧いてくる。

「召喚に成功したらほとんどゲームエンドまで持っていくまさに切り札。他にも墓地に闇属性モンスターがびったり3体存在するときのみ特殊召喚できる強力な攻撃力と効果を備えたモンスターなんかもいる。ちよつと墓地を弄るだけでそんな化け物が出てくるなら、墓地にモンスターを貯めること自体がアドバンテージになるっていうのも頷けるだろう？」

はあ、デュエルつてのは奥が深いんだなあとしみじみと思う。この話を聞くまで墓地なんてやられてしまったモンスターがいるところくらいの認識しかなかったし。

そんな風に私がうんうん頷いている横で師匠はぶつぶつと何か呟いている。

曰くボチヤミサンタイはダムドを呼び出す悪魔の呪文。

曰くサモプリサモプリキャットベルンベルンを想起させる並び。

「なんですか？そのボチヤミサンタイとかサモプリサモプリって」

「駄目だ！その言葉を迂闊に口にはいけない！それは滅びの呪文なんだ！エターナルフォースブリザードやバルスと同じくらい危険なんだぞ！」

「うっ、うめんなさい…」



何故だかよく分からないけど突如怒声をあげ、ガタガタ震え始めた  
師匠にとりあえず謝っておく。あの師匠がここまで怯えるだなんっ  
てきつと禁忌に近い言葉なんだろう。

「はあく、なんだが聞けば聞くほど奥深いものなんですなデュエル  
つて…。本当に初心者の私が勝てるのかなあ…」

正直この勝負を受けた事を少し後悔し始めている自分がいる。デュ  
エルのことが知れば知るほどさらに分からない事が増えるんだもん。  
相手が遊馬だからといってそう簡単に勝てるとは思えない。

そんな私の弱音に対して師匠はこんな話をしてくれた。

「面白い小話を聞かせてあげようか。少し時を遡るけどちょっと昔  
に全米チャンピオンとして名を轟かせ、不敗伝説を打ち立てたとあ  
るデュエリストがいたんだ。一流のカードプロフェッサーとして数  
々の大会の賞金を掻っ攫い、ついに付いた二つ名は山賊を意味する  
バンドット。名実共に全米一の実力者さ。そんな順風満帆な彼があ  
る時一人のデュエリストの前に大敗を喫した」

その方面の知識は疎いので、チャンピオンになっただくらいなのだか  
らその人はすごく強い人なんだろうなと漠然と思う。でも山賊なん  
てちよっぴり怖いな…。そんなすごい人を倒したデュエリストさん  
もきつと有名な人なのだろう。

「驚く勿れ、全米チャンピオンを打ち破った者はその日初めてデュ  
エルしたド素人の少年さ。当時彼はおそらく小鳥ちゃんより年下だ  
ったんじゃないかな」

「ええ〜っ！？初心者がチャンピオンに勝っちゃったんですかっ！？」

信じられない！

こんなに複雑な遊戯を前に初挑戦でチャンピオンを負かしてしまうなんて！

しかも私より年下の人かあ…、世の中にはやっぱり天才と呼ばれる人がいるんだなあ…。

「その逸話はある程度深くデュエルに関わっている人なら皆知っているくらい有名なことでね。何せその現場に居合わせたデュエルモンスターズの生みの親の発言『トムの勝ちデース』という言葉はデュエル史に残る名言として幅広い層に認定されているほどだ。僕の地元ではみんなして彼のようなデュエリストになりたくてデュエルを始めた奴ばかりさ。デュエル界のカリスマといって差し支えない！」

「すごいなあ、そんな人がいるなんてっ！今度遊馬にも教えてあげよう！」

「きつと遊馬のことだから自分だってその人みたいになるんだって暴走するんだろうな。」

名も知らぬカリスマデュエリストの事を想像して感心している私の様子を、横で口元を隠しながら笑っている師匠に気付かなかったことを後悔するのはまだ先の事だった。

「お前はオレの保護者かあっ！」

オレのことをまるで子供扱いする発言を残して広場の方へ向って行った小鳥の背中に向かって叫ぶ。

全くアイツはオレをなんだと思っているんだ。昔からやれハンカチは持ったかとか、やれ宿題はやったかとか母ちゃんみたいな小言を言うのはそろそろ勘弁してほしいぜ。

溜息を吐きながら家への帰り道を歩く。

今日も小鳥はあの人のところについてデュエルの勉強なので、帰りは一人だ。

別に一人だからどうってことはないけど今オレはある問題を抱えている。場合によっては生死に関わるほどの大事なんだ。

ぐうぐ。

「うう……腹へったあ……。弁当を忘れちまうなんてやっちゃまったぜ……」

空腹で今にも倒れそうなんだ。今日は5時間目で授業が終わってくれたけど体育があったから余計にお腹がすいてしまった。こんなことならあんなに張り切らなきゃ良かった。

お昼休みには小鳥におかずを少し分けて貰ったけど、あんなもんじゃない全然足りなかった。アイツは小食も小食だから、弁当の量もすごく少ない。多分オレの食べる量の半分もないんじゃないかねえのかって思うくらいだ。それでもアイツからしたら十分な量なんだってさ。

購買部に行き行って手もあつたんだけど今のオレの残金はたったの39円。

お金の貸し借りは姉ちゃんに禁止されてるし為す術なし。

トホホ…希望もなにもあつたもんじゃねーよ…。

「家に帰るまで我慢するしかないのかあ…ああ腹へつた…」

昼飯を食ってないせいで力も出せず、トボトボと家までの近道の公園を横切る。公園にはまだ小学校にもいけない年齢の子どもが遊び回っている。そしてそんな子どもをベンチの方から優しく見守る母親達の姿が目に入る。

母ちゃん…か…。

そういやオレがあのからいの時、同じように母ちゃんや父ちゃんと公園に連れられてもらったっけ…。姉ちゃんはすでに小学校に通っていたから一緒には来れず、オレばかりずるいつて騒いでばかりいたな。

父ちゃんと母ちゃんが行方不明になってからもうかなりの時間が経ってしまった。それなのに未だ手がかりの一つもない。昔は捜査の人たちもよく家に来て過程報告をしていたのに最近はめつきり来なくなつた。周りの人達の中にはもう二人が帰ってこないんじゃないかと思っている人もいる。

でもオレは絶対に二人が帰ってくるって信じている。

姉ちゃんが記者になったのだったってきつと二人の行方の手がかりとなるものが逸早く手に入り易いからなんじゃないかと思う。父ちゃんや母ちゃんの無事を信じているからこそそうしているんだ。

諦めなければ物事はきつといい方向に向かうんだ。父ちゃんもそう言ってたんだ！

「グジグジするなオレ！かっつとピングだ『ぐう』……腹へったあ  
」……」

くそお、気合い入れ直す時に腹が鳴るなんて。でもそれはさっきから公園の横の移動販売車から漂ってくるメロンパンの匂いのせいなんだよ！いやほらよく言うだろ？腹がへってはかっつとピングできぬつてさ。

買いたいけど値段は一個130円かあ……。

分かっているけど自分の財布の中身を確認してしまう。出るのはお金じゃなくて溜息だ。お小遣いが貰えるのはまだ3日先なんだよなあ……。カード買ったために貯金しなくちゃいけないし……。

そこでふと公園横に設置されている自販機に目がいく。

もしかしたらもしかして……。

一縷の希望を託してお釣り返却口と自販機の下の際間を覗く。

とそこには……埃に塗れているが鈍く光った銀色の……。

「いやったあああああっ！！百円めくっけ！」

今日は小鳥と一緒にいなかった事に感謝だ。アイツがいたら絶対にネコババはだめだっていつて交番行きのコースまっしぐらだったぜ。変なところで頑固だからな小鳥は。

「お姉さん！メロンパン！メロンパン一個くれっ！」

「はい、130円になります。ちょっと熱いから気をつけてね」

超特急で移動販売車に駆け込む。あまりにも必死だったせいかわり子のお姉さんの顔が笑いを堪えているように見えたけど、今はこの腹の虫を抑える事の方が大事だ。

「くうっ！うまそうだぜ！いただきまーすっ！」

公園の仕切りであるレンガブロックに腰掛け、焼きたてのメロンパンにかぶりっこう……としたその時。

じー。

視線を感じて頭を上げてみると、レディーススーツを着た赤毛の小柄なお姉さんが目の前にしゃがみ込んでオレを凝視していた。

じー。

「なっ、なんだよ！このメロンパンはやらないぞ！オレだってすっげえ腹へってるんだからな」

じー。

「だから見るなって！食べづらいじゃねーかよ！」

オレの言葉を聞いちゃいけないのかこの人は凝視するのをやめない。それどころが距離がどんどん近くなってきて、ついには手を伸ばし始める。

「だーっ！あげないって言うてるだろ！？自分で買えよ！」

こんなところでオレの大事な食糧を取られてたまるか！  
必死にメロンパンを掲げあげる。この人は背が小さいからこれが届かないだろう。

しかし彼女の狙いはメロンパンじゃなかったらしく…。

「あっ!?!」

彼女がひょいと奪ったのはオレがいつも首からぶら下げている『皇の鍵』。  
父ちゃんの形見であるオレの大切なお守りを瞬く間に取り上げられた。

「何するんだよお前っ！！それを返せ！返せよ！！」

必死に彼女を捕まえようとするが外見に似合わず身軽なのか軽々かわされる。

いや、違う。何かおかしいぞ！

この人はその場から動いていないのにオレの手が全く届かないという不思議な現象が起きているんだ。

どうなってるんだこれ!?

オレの焦りとは裏腹にこの女の人は『皇の鍵』を目の前にぶら提げしげしげと興味深そう眺めている。彼女が指先でツンツン突いた時『皇の鍵』から変な光が漏れた気がするけど、今はそんなことどうでもいい。取り返さなくちゃ!

「返してくれよ!それはオレの大切なものなんだ!つてうわあっ!」

鍵を奪った犯人は『皇の鍵』を最後に一瞥すると、興味が失せたようにオレに向かってぽいっと投げてきた。

「何するんだよっ!?!落ちて壊れでもしたら大変だっ!あれ?アイツどこ行っただよ?」

『皇の鍵』をなんとかキャッチしその一連の行為に怒ろうとしたんだけど、少し目を離れた隙にあの女の人の姿はそこにはなかった。

いや、でもそんなにすぐに遠くに行けないはずだ!いきなりあんな事されて一発言っただよらないと気が済まないんだよ!

案の定あの女の人は20Mほど先の横断歩道の向かい側にいた。どっただけ足早いんだよ!

そして遠目だけど何やら両手でまあるい物体を口まで運んでいるよっな…。





番外編 現実発異界経由分岐世界行（後書き）

初心者に何を話せばいいのやら迷った末にアドの話をする事になるうとは。だからといって小鳥ちゃんのデッキがガチガチになるわけでもないです。そこに浪漫を詰めます。果たしてこの話の意味はあったのか！というかそうしないと遊馬フルボッコフラグしか立たない諸事情を察してもらえると幸いです。

いくらミレニアムアイで相手の思考を読み取ったとしても、これからドローするカードの采配やそれによる戦術の変化等の不確定要素があるはず。それにも関わらずキースを破ったトムは本当に強いんじゃないか説をいまここに提唱s(ry

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7285v/>

---

現実発異世界方面行

2011年12月29日07時46分発行